

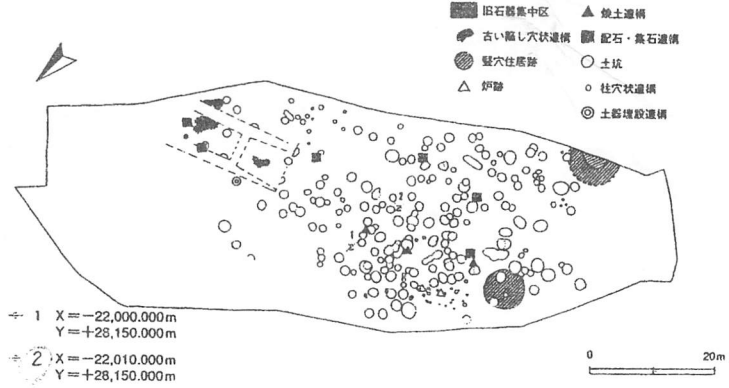
岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第340集

岩手県埋蔵文化財発掘調査略報

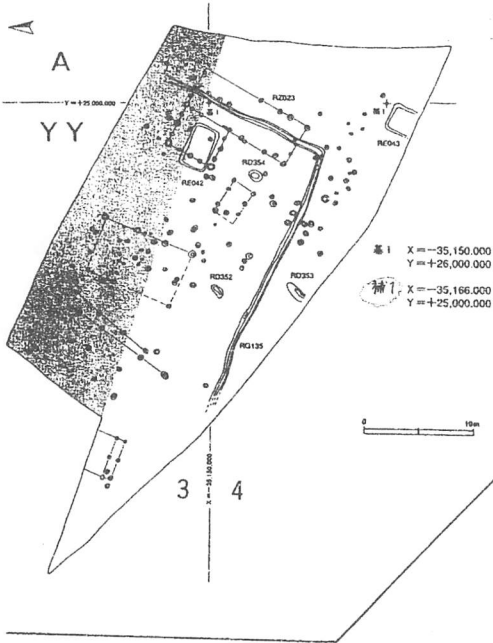
(平成11年度)

(財)岩手県文化振興事業団
埋蔵文化財センター

P 2 2



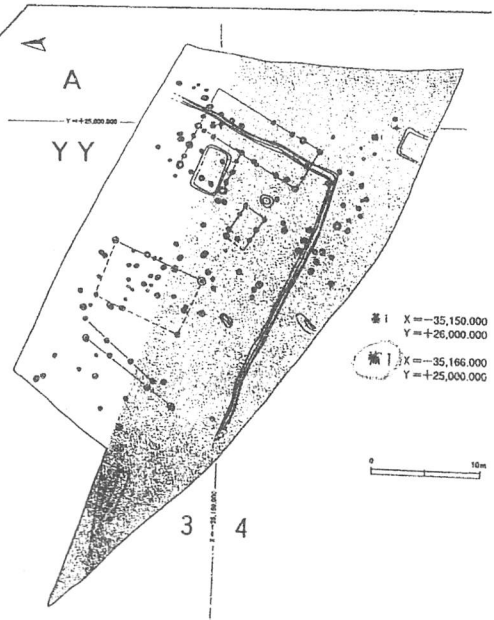
大崎遺跡遺構配置図



P 1 2 8

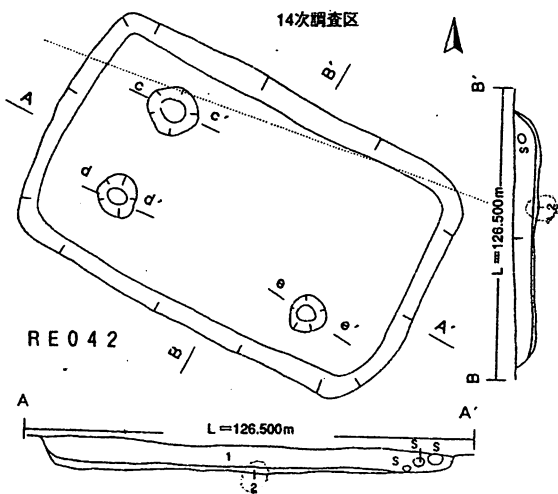
小幡遺跡第13次調査遺構配置図

P 2 3 0



小幡遺跡第14次調査遺構配置図

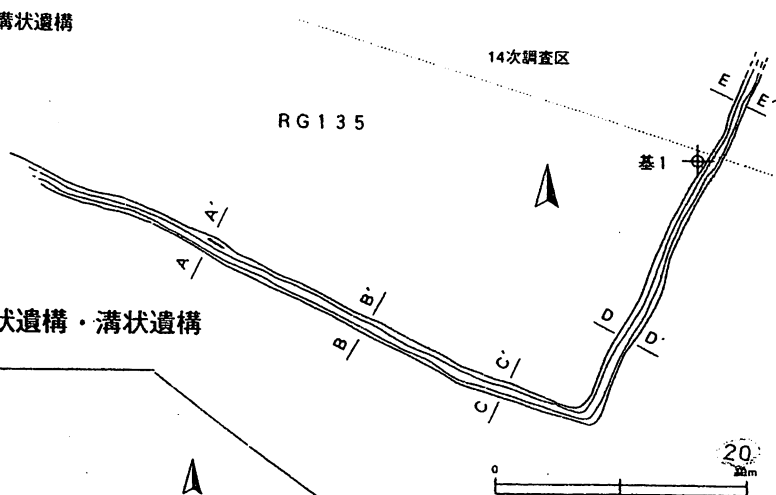
竪穴状遺構



P129

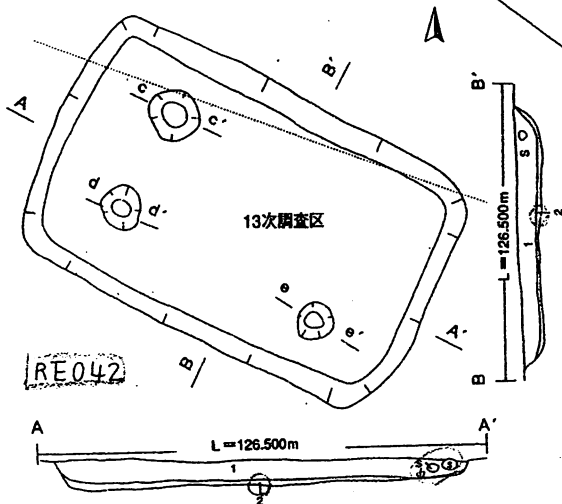
溝状遺構

P131



小幅遺跡第13次調査竪穴状遺構・溝状遺構

竪穴状遺構



P231

小幅遺跡第14次調査竪穴状遺構

岩手県埋蔵文化財発掘調査略報

(平成11年度)

序

岩手県は、埋蔵文化財の宝庫だといわれております。この先人たちが遺した貴重な文化遺産を保護し、後世に伝えていくことは、県民に課せられた責務であります。また一方では、幹線道路網の整備など、社会資本を充実させていくことも行政上の重要な施策であります。このため、埋蔵文化財の保護と地域開発の調和ということも、今日的な課題であります。

こうした見地から、財団法人岩手県文化振興事業団では埋蔵文化財センターの創設以来、岩手県教育委員会文化課による発掘調査事業の調整と指導のもとに、道路建設などに関連してやむを得ず消滅してゆく遺跡についての発掘調査を実施し、発掘調査報告書として記録保存する措置をとってまいりました。今年度は、県内市町村にわたる48遺跡の調査を実施しました。

調査した遺跡の時代は旧石器時代から近世までにわたっております。今年度の調査で注目されたものには、東北地方北部ではこれまでほとんど出土例がなかった5世紀中葉と思われる須恵器の^{はそう}甕と坏が出土した水沢市中半入遺跡があります。当時は、須恵器の生産が国家により統制されていた時代であり、この地方とヤマト王権との関係を示す貴重な資料になると思われます。また、平泉町志羅山遺跡では12世紀としては初めて「カナ文字」墨書資料が出土し、当時の平泉の社会を知る上で重要な役割を果たすと思われます。

この発掘調査略報は、調査報告書の発刊に先立って、今年度に調査された遺跡の調査結果の概要を収録したものであります。本書が研究者のみならず、多くの方々に活用され、埋蔵文化財へのご理解を一層深めていただく一助になれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査を進めるにあたり、委託者をはじめ、地元教育委員会やご教示を賜りました関係各位に対し、衷心より感謝を申し上げます。

平成12年3月

財団法人 岩手県文化振興事業団
理事長 船越昭治

目 次

平成11年度の調査結果について2

I. 建設省関係

- | | |
|-----------------------------|---------------------------|
| (1) 泉屋遺跡第19次調査 (平泉町)5 | (4) 沢田 I 遺跡 (山田町)15 |
| (2) 石持 I 遺跡 (花巻市)9 | (5) 古館遺跡 (釜石市)17 |
| (3) 尿前 II 遺跡 (胆沢町)13 | |

II. 公団・公社関係

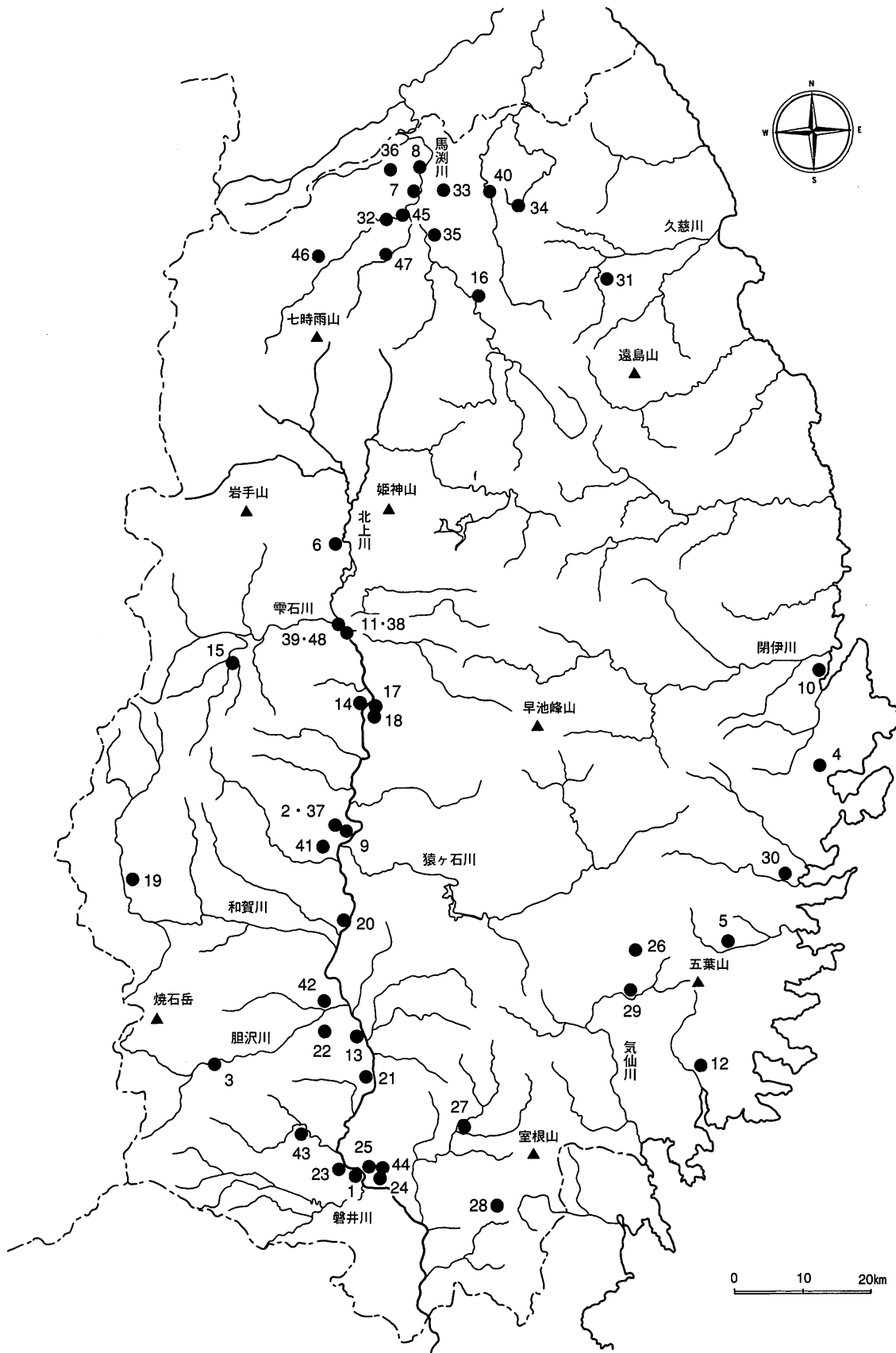
- | | |
|------------------------|-----------------------------|
| (6) 大崎遺跡 (滝沢村)21 | (9) 似内遺跡 (花巻市)29 |
| (7) 上村遺跡 (二戸市)23 | (10) 島田 II 遺跡 (宮古市)33 |
| (8) 米沢遺跡 (二戸市)25 | |

III. 岩手県・市関係

- | | |
|--------------------------------|---------------------------------|
| (11) 台太郎遺跡第22次調査 (盛岡市)41 | (25) 堀切遺跡 (一関市)79 |
| (12) 長谷堂貝塚 (大船渡市)43 | (26) 篠館跡 (遠野市)81 |
| (13) 東館 II 遺跡 (水沢市)45 | (27) 中野台遺跡 (大東町)85 |
| (14) 稲村 II 遺跡 (紫波町)47 | (28) 清田台遺跡 (千厩町)89 |
| (15) 南畑遺跡 (雫石町)49 | (29) 中和田遺跡 (住田町)93 |
| (16) 市部内遺跡 (葛巻町)53 | (30) 沢田 2 遺跡 (釜石市)95 |
| (17) 西長岡長谷田遺跡 (紫波町)55 | (31) 成谷遺跡 (山形村)97 |
| (18) 沼田遺跡 (紫波町)57 | (32) 大向 II 遺跡 (二戸市)99 |
| (19) 清水ヶ野遺跡 (湯田町)59 | (33) 矢神遺跡 (二戸市)103 |
| (20) 中居俵遺跡 (北上市)63 | (34) 宮沢遺跡 (軽米町)105 |
| (21) 栗林遺跡 (水沢市)65 | (35) 上野遺跡 (一戸町)107 |
| (22) 中半入遺跡 (水沢市)67 | (36) 上台遺跡 (二戸市)111 |
| (23) 志羅山遺跡第80次調査 (平泉町)71 | (37) 石持 I 遺跡 (花巻市)115 |
| (24) 清水遺跡 (一関市)75 | (38) 台太郎遺跡第23次調査 (盛岡市)117 |

IV. 本報告

- | | |
|--------------------------------|--------------------------------|
| (39) 小幡遺跡第13次調査 (盛岡市)125 | (44) 羽場城遺跡 (一関市)181 |
| (40) 道地 II 遺跡 (九戸村)137 | (45) 沖野 II 遺跡 (二戸市)191 |
| (41) 谷地遺跡 (花巻市)155 | (46) 長袖 I 遺跡 (浄法寺町)205 |
| (42) 医者屋敷遺跡 (金ヶ崎町)165 | (47) 赤屋敷遺跡 (一戸町)213 |
| (43) 向遺跡 (衣川村)169 | (48) 小幡遺跡第14次調査 (盛岡市)227 |



平成11年度調査遺跡位置図

平成11年度の調査結果について

平成11年度の調査は、当初49遺跡、198,612㎡でスタートしたが、最終的には48遺跡197,626㎡を調査して終了した。遺跡数、面積の減は委託者の計画変更、調査未了による次年度繰越等様々な理由が原因である。当センターの調査遺跡数は年間30件程度で推移してきたが、昨年に引き続き大幅な遺跡増となった。その主な原因は、東北新幹線盛岡・八戸間建設及びこれに伴う環境整備事業、ほ場整備等の農業基盤整備事業、盛岡市盛南開発事業などが本格化したためである。

調査は10市13町4村に及び、検出された遺構の概数は縄文時代住居跡112棟、土坑約600基、陥し穴201基、古代住居跡198棟、中世竪穴住居跡24棟、中世墓坑483基等である。遺物の概数は縄文・弥生土器大コンテナ約528箱、土師器・須恵器237箱、貝類20箱、鉄滓・羽口等43箱の数にのぼっている。

特徴的な遺跡を紹介すると、旧石器時代では滝沢村大崎遺跡（6）で尖頭器、ナイフ形石器を主体とする石器群がブロックから出土した。化学分析等は現在実施中であるが、石器の形態から13,000年前頃のものと推定している。

縄文時代では湯田町清水ヶ野遺跡（19）、雫石町南畑遺跡（15）、大船渡市長谷堂貝塚（12）で大規模な集落跡の一部を調査した。清水ヶ野遺跡は前期の大型長方形住居跡、石器製作跡を伴う遺跡で原石を含む石材は大コンテナ30箱、製品は約2,000点に及んでいる。南畑遺跡は中期最終末期の集落で20棟以上の住居跡と掘立柱建物跡を検出した。長谷堂貝塚では中期、後期、晩期で地点を移して集落が形成されたことが明らかになった。また、中期の竪穴住居跡の埋土に良好な貝層を検出した。二戸市米沢遺跡（8）では、早期の竪穴住居跡1棟が検出された。遺物では一戸町上野遺跡（35）で前期と推定されるイヌ科の動物形土製品が出土した。

弥生時代の遺構は昨年に続いて検出されなかった。遺物については数遺跡で土器片が少量発見された。

古墳時代では昨年に引き続き水沢市中半入遺跡（22）で5～6世紀代の竪穴住居跡約30棟、方形区画の堀跡等が検出された。遺構からは鍛冶に係わる遺物や5世紀の須恵器、黒曜石製石器、石製模造品等が出土している。地理的にも時期的にも日本最北の前方後円墳「角塚古墳」に近く、その関連が注目される。古墳時代の上層からは昨年に続いて、十和田a降下火山灰の上下から平安時代の水田跡が検出された。

奈良・平安時代では盛岡市台太郎遺跡（11、38）で今年度75棟以上の住居跡が検出されており、3年間の調査で250棟以上の住居跡が検出されたこととなる。志波城との関連が深いと推定されるが、直接関連づける遺構・遺物は発見されなかった。二戸市上台遺跡（36）では壁高1 m以上の大型住居跡と小型の住居跡が組み合わさるような遺構が検出された。

奥州藤原氏関連では平泉町志羅山遺跡（23）で当時の街路や井戸跡の遺構のほかにカナ文字で記された木簡や青銅が付着した埴塼などが出土し、都市平泉の資料を蓄積することができた。

中世では昨年に続いて遠野市篠館跡（26）を調査し、16世紀後半の大規模な普請がなされた典型的な山城であることが判明した。また、台太郎遺跡では450基の墓壇と10棟の竪穴建物跡、数棟の掘立柱建物跡が検出された。墓壇に比して住居跡は少なく居住域は他にあるものと推定される。

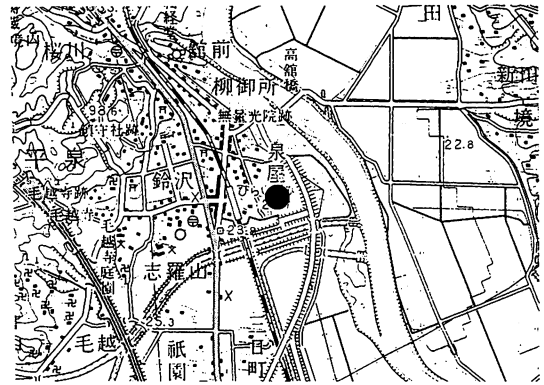
以上、今年度の調査概略について記したが、詳細については次年度以降刊行される本報告書を参考にしていただければ幸いである。なお、今年度も遺構・遺物の少ない10遺跡については、この略報をもって本報告とする。

（調査第一課長 小田野 哲憲）

I. 建設省関係

(1) 泉屋遺跡第19次調査

所在地 西磐井郡平泉町平泉字泉屋31-3ほか
委託者 建設省東北地方建設局岩手工事事務所
事業名 一関遊水地太田川左岸築堤等
発掘調査期間 平成11年4月14日～11月12日
調査対象面積 4,440㎡
発掘調査面積 2,565㎡
遺跡番号・略号 NE76-1079・IY99-19
調査担当者 佐々木 務・吉川 徹・布谷義彦
協力機関 平泉町教育委員会



遺跡位置

1 : 50,000 一関

1. 遺跡の立地

泉屋遺跡はJR東北本線平泉駅の南東に広がり、西に志羅山遺跡・北には伽羅之御所跡に隣接している。今回の第19次調査区は遺跡の南東隅にあたり、平泉駅からは南東に約250mの位置にある。調査区の標高は19～22mほどで、遺跡の南側には太田川が東に流れ、さらにその南側には沖積地が広がっている。現在ほぼまっすぐ東西に流れている太田川だが、昭和40年代の河川改修までは調査区の南東隅付近で大きく北に蛇行し、遺跡の南と東を取り巻くような状況になっていた。

2. 調査の概要

確認されている遺構は縄文時代の土器埋設遺構3基、9～10世紀（平安時代）の竪穴住居跡2棟、掘立柱建物跡3棟、土坑23基、柱穴状土坑約600基、溝跡12条、井戸跡9基、焼土遺構3基などとなっている。溝跡1条と井戸跡1基、焼土遺構1基、土坑1基が12世紀の遺構と考えられる。その他に、調査区東側に、12世紀の遺物からなる遺物包含層、調査区の南西に縄文時代後期末から晩期初めの遺物包含層がある。

<土器埋設遺構> 縄文時代後期末～晩期初頭のものが3基確認されている。いずれも縄文時代の遺物包含層から離れた場所に位置している。

<竪穴住居跡> 9～10世紀のものが2棟確認されている。平面形は隅丸方形だが削平されており、1棟からは床面とカマドの名残と思われる焼土が確認されている。調査区東側の低くなっている場所からこの時期の遺物が出土しており、本来はもっと数があったと思われる。

<掘立柱建物跡> ほぼ確実なもので3棟確認されている。時期は不明である。今後柱穴の配置について検討していくことで増えると思われる。

<土坑> 23基確認されている。時期や性格が不明のものが多いが、12世紀のものとしては、ウリの仲間の種子やチュウギが含まれるトイレ状の土坑が1基ある。

<柱穴状土坑> 約600基検出されている。時期不明のものが多いが、近世以降の陶磁器片が含まれるものや、底に石や石臼が置かれているものがあり、多くが近世のものと考えられる。

<溝跡> 12条検出している。南北に大きく延びる2条の溝跡は近世以降と考えられ、この二つの溝跡には

さまれた範囲に、建物を構成すると思われる柱穴状土坑が多く確認されている。平成8年度の調査区から東西方向に延びる溝跡は他の遺構との関係や出土遺物から12世紀のものと考えられる。

<井戸跡> 9基確認されている。深さはいずれも3.5～3.8mほどで砂礫層まで掘り下げている。現在は水が湧いていないが本来は、水が湧いていた可能性がある。南西にある井戸跡が出土遺物から12世紀の井戸跡と考えられる。この上部からは、10～20cm大の円礫に混じって常滑産や渥美産の国産陶器の破片が多く出土している。この陶器片は使われなくなった井戸跡を一旦埋めた後、沈んでくぼんだ部分に石と一緒に充填したものと推定される。この中に、肩部に横耳のついた常滑産の甕がある。かわらけ等も主に上部から出土している。

<焼土遺構> 3基検出されている。時期は1つが遺物から12世紀のものと考えられる他は不明である。

<遺物包含層> 大きく2時期の遺物包含層が確認されている。1ヶ所は縄文時代後期から晩期の遺物包含層で、調査区南西部の太田川沿いの自然堤防状に高まっている部分を中心に広がっている。厚さ20cm程度で炭化物を多く含み黒褐色を呈している。

別の場所は12世紀の遺物が含まれ、調査区東側の斜面を中心に南北に広がっている。下部に12世紀に形成されたと考えられる部分もあるが、多くの遺物破片は小さく、主に後世の人たちがかかわりなどの12世紀の遺物を含んだ土を削って運んできたために形成されたと考えられる。

3. 出土遺物

12世紀・縄文時代を中心とする遺物が大量に出土している。量的には12世紀の遺物が多くほとんどが遺物包含層から出土している。次いで多いのが縄文時代の遺物で、これも包含層からの遺物が量的には多い。

縄文時代の遺物は後期末から晩期初めを主体とし、遺物包含層からの出土が多い。土偶や石剣も出土している。9～10世紀の遺物は、竪穴住居跡や東側の低くなった部分から土師器の坏・甕、須恵器の甕などが出土している。12世紀の遺物では、国産陶器、かわらけ、中国産陶磁器などが出土し、井戸跡から横耳のついた常滑産の甕やかわらけ、包含層からは青白磁の小壺の蓋が出土している。他に中世から近世以降の陶磁器などが柱穴や表土・攪乱・井戸跡などから出土している。また、近世の井戸跡に投げ込まれる形で元亨四年(1324年)の紀年銘のある板碑が出土している。

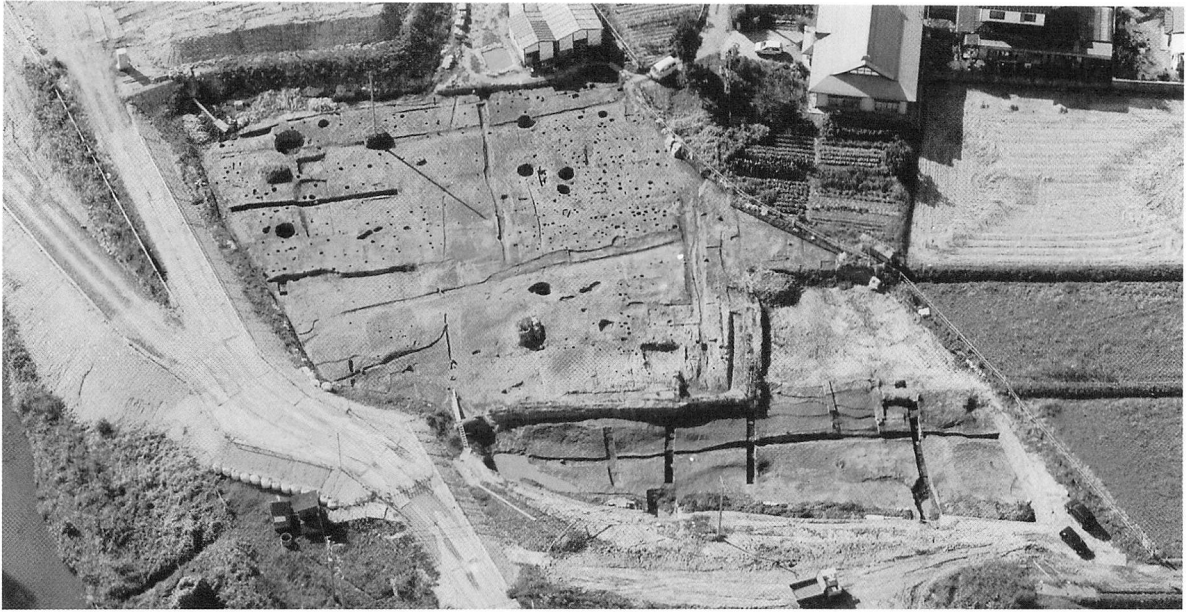
4. まとめ

縄文時代について、住居跡などは確認されていないが、出土遺物などから調査区付近に住居跡があったことが考えられる。また、周囲より一段高い所に密度の高い遺物包含層があることは興味深い。北上川に対して入り江状に入り込む太田川の北岸に立地することから、北上川や太田川から食料などの生活資源を得ていたことが考えられる。

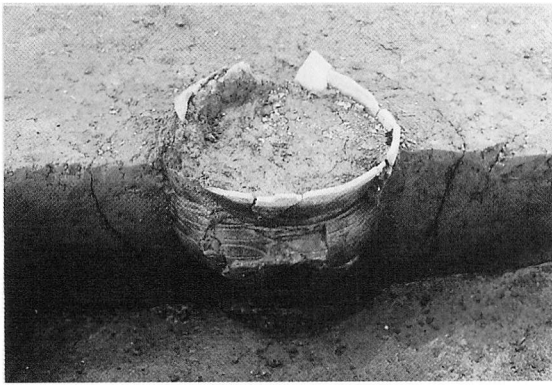
12世紀に関して確認されている遺構は少ないが、少数ながらも当時の遺構が確認されていることから、都市平泉の一部として周辺的ながらもそれなりの機能を持った場所だったと思われる。12世紀以降も遺構や遺物は確認されており、柱穴の多くは近世のものと考えられる。

以上、今回の泉屋遺跡の調査では、縄文時代から現在に至る生活の痕跡が断続的ながらも確認され、この場所が常に生活の場として利用されつづけていたことがわかる。12世紀の平泉はもとよりそれ以前・以後の平泉についての情報が得られたことは、12世紀の平泉を考える上でも重要なことと考えられる。

今年度予定していた範囲内で終了できなかった部分については、来年度の調査となる。



遺跡全景（東から）



土器埋設遺構



土偶出土状況



井戸跡（12C）

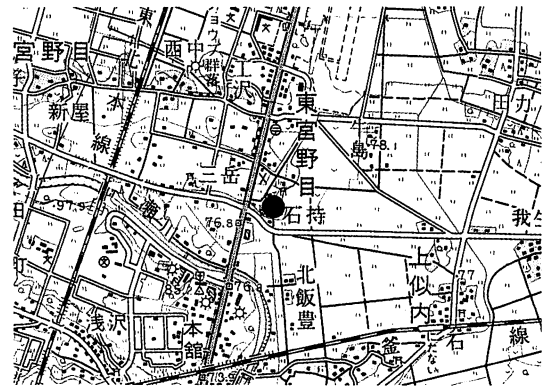


溝跡（12C）

泉屋遺跡第19次調査検出遺構

(2) 石持^{いしもち}I 遺跡

所在地	花巻市東宮野目10—55ほか
委託者	建設省東北地方建設局岩手工事事務所
事業名	一般国道4号花巻東バイパス建設工事
発掘調査期間	平成11年4月14日～平成11年11月10日
調査対象面積	15,380m ²
発掘調査面積	7,380m ²
遺跡番号・略号	ME16—2117・IMI—99
調査担当者	早坂 悟・平澤里香
協力機関	花巻市教育委員会



遺跡位置

1 : 50,000 花巻

1. 遺跡の立地

石持I遺跡は、JR東北本線花巻空港駅南東約2km、国道4号線東宮野目交差点のすぐ東側に位置し、北上川河谷台地の砂礫段丘に立地している。調査区西側は国道を挟んで宅地が広がり、国道沿いを南北の方向に工場・店舗が立ち並んでいる。また、東側は水田地帯であり、東方約2km先に北上川が流れている。遺跡の標高は78m前後で、標高差はほとんどなく、ほぼ平坦である。調査前の状況は、宅地（庭園を含む）及び畑地である。

2. 調査の概要

今年度の調査により検出された遺構は、陥し穴状遺構126基、平安時代の竪穴住居跡12棟、竪穴住居状遺構5棟、土坑11基、方形溝状遺構1基、溝跡15条、柱穴状小土坑586基である。

＜陥し穴状遺構＞ 調査区全体から126基検出した。平面形は、溝状を呈するもの（I型）が121基、楕円形または長方形を呈するもの（II型）が5基である。

I型の規模は、長軸径が1.5～4.0m前後、短軸径は0.2～0.5m前後、深さ0.4～0.9m前後を測る。この中には、12基1組で軸方向をほぼ同じにし列をなしているものがある他、同様に2～3基で1組と思われるものが20組前後ある。

II型の規模は、長軸径が1.3～1.7m前後、短軸径が0.4～1.0m前後、深さ0.6～0.8m前後を測る。底部に、逆茂木痕と思われる掘り込みのあるものが1基ある。

＜竪穴住居跡＞ 12棟の竪穴住居跡は、3棟が重複し、その他は重複を避けるような形で検出された。出土した遺物から9世紀後半から10世紀代に存在していたと考えられる。

平面形は、隅丸方形5棟、隅丸長方形5棟、その他不明なものが2棟である。規模は、1辺の長さが2～3m前後のものが5棟、4～6mのものが5棟、およその床面積は、最小のもので約8m²、最大のもので約32m²であった。この最大規模の竪穴住居跡は集落の中央の微高地に位置している。

カマドが検出された遺構は9棟で、すべて一棟の住居に1基のみ有していた。カマドの位置は南壁に作られたものが3棟、東壁に作られたものが6棟である。東壁に作られたカマドの方向は、全て東南東である。

また、その位置は北東隅寄りにあるものが2棟、ほぼ中央に位置するものが1棟、南東隅寄りにあるものが3棟である。昨年度同様、前者は調査区北側に、後者は南側に集中して存在する。

煙道部は、その作りが確認できたものが2棟で、どちらも刳貫式である。煙道部から煙出部の形態は、一度立ち上がりその後水平になっているものがほとんどで、それらは小ピットを伴っている。カマド袖については、礫を芯材としてだけでなく構築材として使用しているものが数棟あった他、粘土質土にシルト質土を貼り付けたものもある。

貯蔵穴と思われる土坑を有する住居跡は7棟11基で、カマド右脇に位置するもの4棟、右側に2基有するもの1棟、左右両側に1基ずつ計2基有するもの1棟、カマド右側に2基左側に1基有するものが1棟である。

柱穴は、6本と思われるものが1棟、4本柱のものが1棟、4本柱と考えられるがうち数本しか検出されなかったものが4棟である。

<住居状遺構> 堅穴住居ほどの規模を持つがカマドを持たないものを住居状遺構とし、調査区内から5棟検出された。平面形は隅丸方形が2棟、隅丸長方形が1棟、その他不明なものが2棟である。規模は、1辺の長さが、全て3～4mである。堅穴住居跡より比較的掘り込みが浅い。

<土坑> 調査区全域から9基検出された。平面形は円形・楕円形等である。土師器が出土した土坑は主に、堅穴住居周辺に位置している。他の土坑は、出土遺物がなく時期不明のものが多い。

<周溝状遺構> 調査区北端から検出された。平安時代の住居跡と重複しており、本遺構の方が新しい。規模は6.2×7.3mの楕円形を呈する。

<井戸跡> 2基検出されている。開口部は5.3×5.9mの楕円形を呈し、周辺には柱穴が列をなしている。もう1基は本遺構に伴う溝跡の方が標高が高いことからため池である可能性もある。開口部の規模は、2.9×3.5mである。

<溝跡> 合わせて15条検出した。うち1条は平安時代の遺構である可能性があり、調査区の東側を縦断している。その他は、出土遺物から近世以降の遺構である可能性が高い。

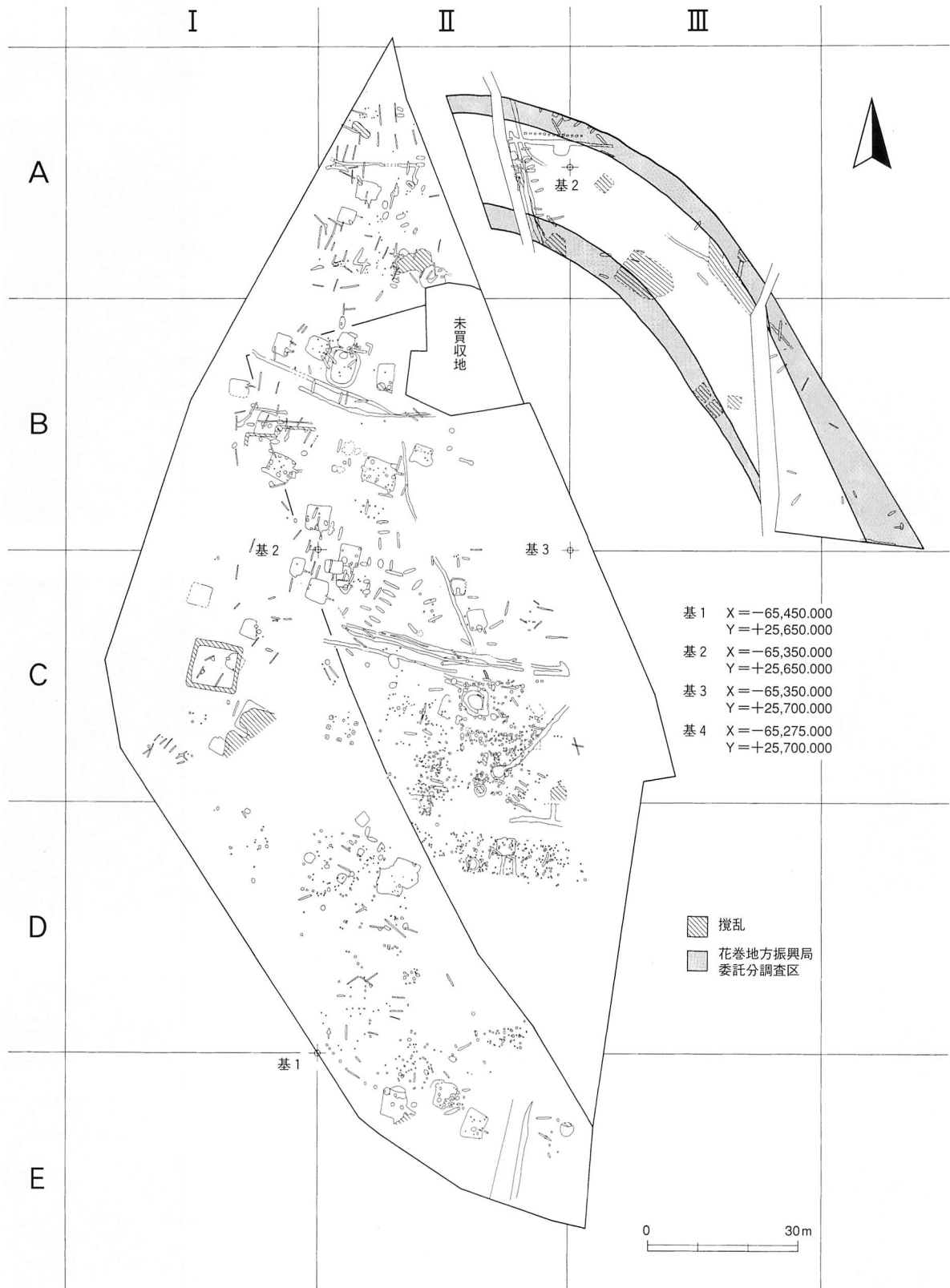
<柱穴状小土坑> 586基検出されている。形状は円形・楕円形を呈し、調査区中央から南側にかけて集中している。前述した井戸跡周辺の柱穴には柱材が数本残存している。調査区南端のものは配列が不規則なものほとんどで、用途及び時期は不明である。

<出土遺物> コンテナ9箱分の土器・土製品、石器・石製品、鉄製品が出土している。土器のうちの9割が平安時代の土師器で、残りが須恵器と縄文土器である。土師器の器種は、主に坏・甕であり、その他小型の鉢、耳皿が出土している。いわゆる赤焼き土器の占める割合が多い。須恵器は、13棟の住居跡、住居状遺構から出土しており、器種は坏・甕・大甕である。土製品は、土錘が1点出土している。

石器類は、石鏃2点のほか石棒等が出土している。鉄製品は、1棟の堅穴住居跡から刀子が5点出土した。

3. まとめ

今回の発掘調査の結果、石持I遺跡は、縄文時代には狩り場として利用され、平安時代（9世紀後半～10世紀）には集落跡が存在していたことが確認された。特に、陥し穴の遺構数は昨年度と合わせて291基となり縄文時代にはこの地が、地形的に動物を捕獲するために都合の良い土地であったことを示している。平安時代の堅穴住居跡については、その形態・出土土器から、集落が存在していた時期を2つに分けることができると考えられる。今後、近年調査した同時期の周辺遺跡との比較も加えて本遺跡の全体像を明らかにしていきたい。



石持 I 遺跡遺構配置図



遺跡遠景



平安時代の竪穴住居跡



カマド全景



周溝状遺構

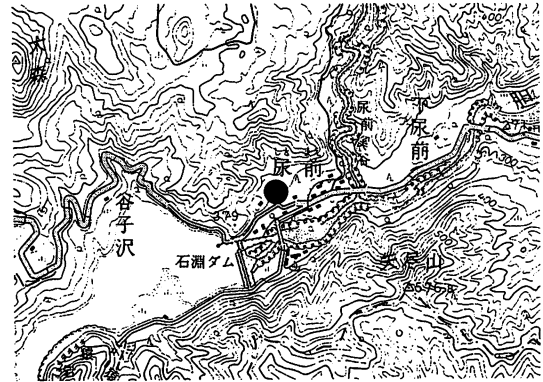


陥し穴状遺構群

石持 I 遺跡検出遺構

(3) 尿前^{しとまえ}Ⅱ遺跡

所在地 胆沢郡胆沢町若柳字尿前9番地
委託者 建設省東北地方建設局
胆沢ダム工事事務所
事業名 胆沢ダム建設
発掘調査期間 平成11年6月8日～10月29日
調査対象面積 7,500㎡
発掘調査面積 7,500㎡
遺跡番号・略号 NE21-2236・SMⅡ-99
調査担当者 小原真一・布谷義彦
協力機関 胆沢町教育委員会



遺跡位置

1 : 50,000 焼石岳

1. 遺跡の立地

尿前Ⅱ遺跡は、胆沢町役場の西約14kmに位置する。遺跡は、胆沢川左岸の崖錐上に立地し、標高は330～350mで、現河床面からの比高は約60m位である。現況は山林及び原野である。

2. 調査の概要

今回の調査で検出された遺構は、住居跡8棟、土坑24基（内フラスコ4基）、土器埋設遺構1基、焼土遺構2基、溝跡3条である。

<竪穴住居跡> 調査区中央から6棟、斜面上部から2棟の全部で8棟検出された。8棟は、規模から長径が3.7～5.3mの住居と、2.2～3mの住居の大小2つに分けられる。住居の平面形は、楕円形あるいは円形で、最も大きい住居は、拡張して建て替えている。炉には、石囲炉、地床炉がある。

<土坑> 24基検出された。断面形から、フラスコ形、ピーカー形あるいは逆台形、浅皿形の3通りに分類される。

<土器埋設遺構> 1基検出された。埋設土器は底部のみであったが、焼土を伴っているため、炉の可能性はある。

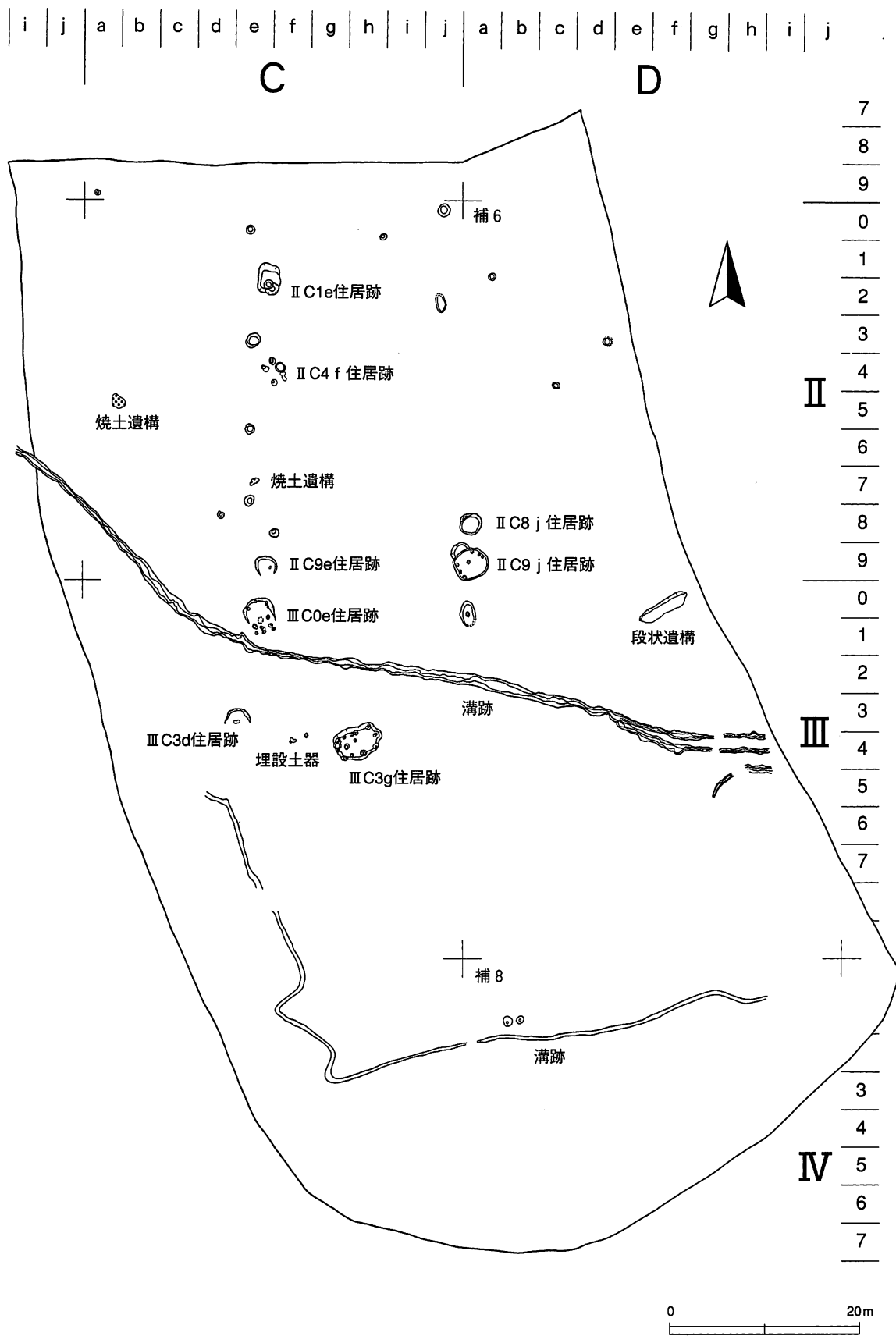
<焼土遺構> 2基検出された。ⅡC4f焼土は周囲に柱穴状の土坑があり、住居跡の炉の可能性はある。

<溝跡> 3条検出され、調査区中央部と南端を横切る。

<出土遺物> 出土した土器は、コンテナ7箱で縄文時代後期のものが多く、石器はコンテナ1箱で、主なものとしては石鏃、石匙、石篋といった剥片石器や磨製石斧、円盤状石製品、石棒、磨石、凹石、敲石といった礫石器も出土している。

3. まとめ

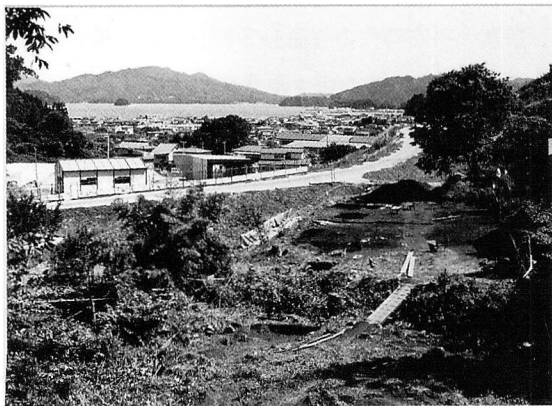
今回の調査で、竪穴住居跡、土坑、土器埋設遺構等が検出され、出土した土器の時代から、本遺跡（尿前Ⅱ遺跡B地区）は、縄文時代後期の集落跡であることがわかった。



尿前Ⅱ遺跡B地区遺構配置図



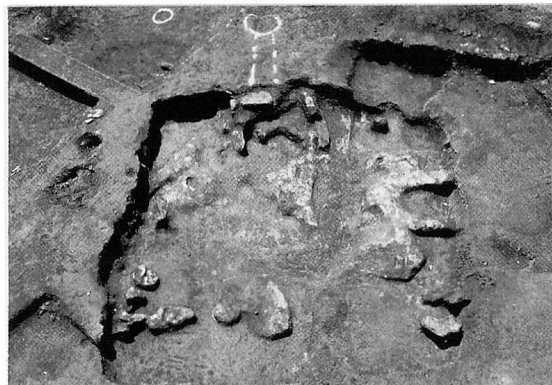
沢田 I 遺跡遺構配置図



調査区遠景（北西から）



調査区全景（東上空から）



古代の焼失住居跡（北東から）



古代の大形住居跡と縄文前期住居跡

沢田 I 遺跡検出遺構

(5) 古館遺跡

所在地 釜石市甲子町第7地割29-2
委託者 建設省東北地方建設局三陸国道工事事務所
事業名 仙人峠道路工事
発掘調査期間 平成11年8月17日～平成11年11月2日
調査対象面積 4,300㎡
発掘調査面積 4,050㎡
遺跡番号・略号 MG70-1175・FD-99
調査担当者 松尾芳幸・晴山雅光
協力機関 釜石市教育委員会



遺跡位置 1:50,000 釜石

1. 遺跡の立地

古館遺跡は、JR釜石線洞泉駅東約1.5km、国道283号線沿い北側に位置し、甲子川左岸の河岸段丘上の緩斜面に立地している。付近は、北側より流入する小河川が小角礫を運びながら傾斜面に堆積を繰り返している。遺跡の標高は94m前後である。以前は水田や畑に使われていたようであるが、調査前の現況は、一部畑地のほかはほとんどが草地である。周辺には縄文時代の遺跡が西0.7kmに洞泉遺跡、東約1.5kmに坪内遺跡、同約4kmに野田遺跡等がある。

2. 調査の概要

調査範囲を西区・中区・東区の3つに分けたが、西区と東区は、戦後の水田造成時の削平・盛土によって傾斜地が平坦地に改変されており、西区の削平部分からは、遺構が確認できなかった。

検出した遺構は、土坑14基、柱穴状土坑234基である。

<土坑> 全部で14基検出したが、その多くが西区南側に集中している。平面形は楕円形もあるが円形を基調とするものが多い。断面形は皿形が多いが、中にはピーカー形や浅鉢状もある。規模は一様ではなく、開口部の長径が83～189cm、深さが16～105cmとなっている。遺構の時期は、一部であるが出土した土器片から縄文時代中期～晩期と考えられる。

<柱穴状土坑> 調査範囲の中区から81基、東区から153基の計234基が検出された。開口部は多くが円形を基調とする。長径は30cm前後が多い。深さは中区で20cm前後が多く、東区で20～30cmが多い。また、東区には北側を中心に深く、壁・床とも礫でしっかり敷きつめられたものもある。遺構の時期は断定できないが、一部配列から近世の掘立柱建物の柱跡ではないかと思われるものも見られる。

<出土遺物> 縄文土器片が大コンテナ1箱、石器10点、陶磁器片少量等である。

3. まとめ

今回の調査で、住居跡は見つからなかったものの、出土した遺構・遺物から本遺跡付近には縄文時代から人が生活していた痕跡があることをうかがい知ることができた。全体的にはまだ不明な点が多いが、次年度も調査を継続する予定なので、さらに詳細な結果が得られ、そこから遺跡の全容が明かにされていくものと思われる。



調査風景



5号土坑



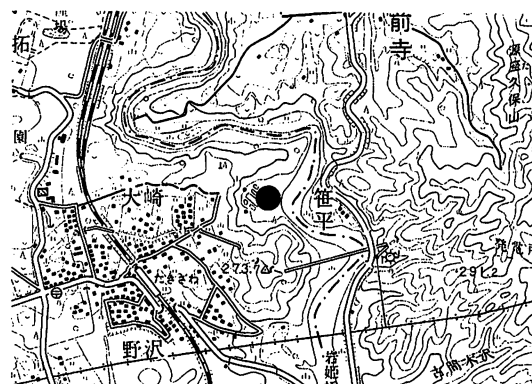
柱穴状土坑群（調査区中区北側）

古館遺跡遺構配置図・検出遺構等

Ⅱ. 公団・公社関係

(6) 大崎遺跡

所在地 滝沢村滝沢字大崎42番7ほか
委託者 日本鉄道建設公団盛岡支社
事業名 東北新幹線盛岡八戸間鉄道建設工事
発掘調査期間 平成11年5月17日～9月17日
調査対象面積 2,960㎡
発掘調査面積 2,960㎡
遺跡番号・略号 KE77-1001・OS-99
調査担当者 晴山雅光・松尾芳幸
協力機関 滝沢村教育委員会



遺跡位置

1 : 50,000 盛岡

1. 遺跡の立地

JR東北本線・滝沢駅の北東、約1.5kmに位置し、東方には、蛇行し南流する北上川が眼下に広がる。

2. 調査の概要

検出された遺構は、縄文時代後期から晩期の竪穴住居跡が3棟、焼土遺構が3基、炉跡が2基、土坑が205基、陥し穴状遺構が8基（内、5基は縄文時代後期より古い）、配石・集石遺構が6基、土器埋設遺構が1基、柱穴状土坑が28基である。また、後期旧石器時代の石器が2ヵ所から、集中して検出された。

＜旧石器の集中区＞ 索道や、縄文時代の遺構による攪乱と思われる地点より出土した石器30点を除き、頂上部の集中区からチップも含め48点、南緩斜面の集中区より20点、秋田駒ヶ岳・分れ火山灰層の下位から、渋民火山灰層の上位と思われる地層より、出土している。

＜竪穴住居跡＞ 掘り込み面から、床・壁面とも全体が確認できた住居跡は、調査区南西に位置する1棟だけである。

その他は、調査区外に延びる南東隅の2棟で、重複がみられる。

＜土坑＞ 検出・精査した土坑205基には、フラスコ状のものや、浅い皿状のものもみられるが、平面形のほとんどは、直径80～120cmの円形を呈している。

土坑は調査区全面に広がるが、南西部から北東部にかけて集中してみられる。

＜陥し穴状遺構＞ 平面形が長楕円形の陥し穴状遺構が3基、円形で筒状に掘り込まれたものが2基、柳沢パミスと思われる火山灰層の下から検出された小型で楕円、筒状に掘り込まれたものが3基である。

＜配石・集石遺構＞ 配石・集石遺構は、表土層直下で検出され、中には、石皿や、磨石、凹石などの礫石器を含んでいる。

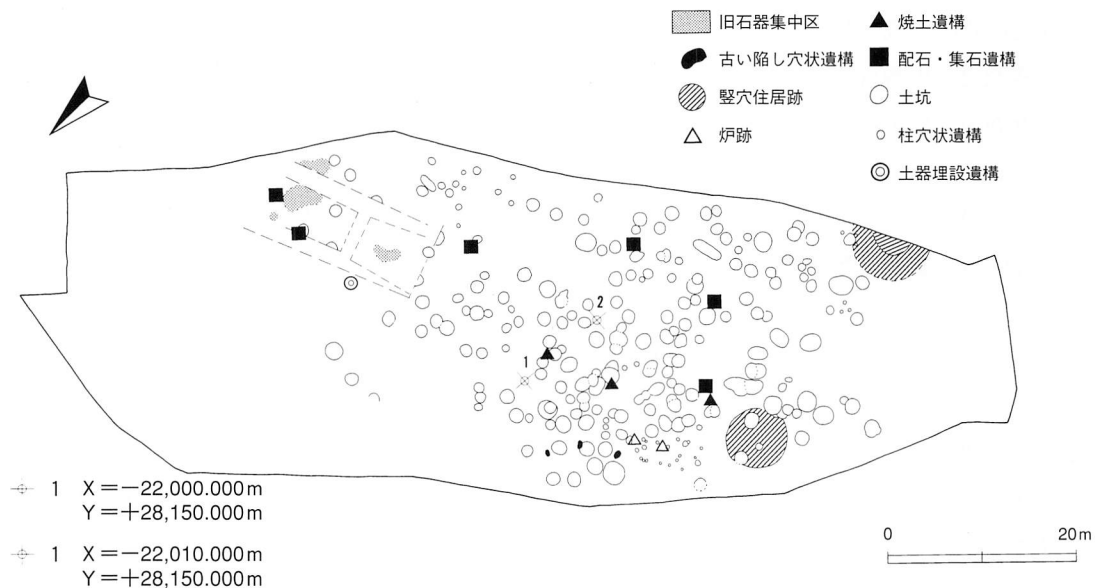
＜土器埋設遺構＞ 縄文時代後期中葉頃の波状口縁をもつ磨消縄文の深鉢を埋設したものである。頂上部からやや西に傾斜した位置に正位・斜面に垂直に埋設されている。

＜出土遺物＞ 調査区より出土した遺物は、ナイフ形石器・搔器・彫器・石刃などや、チップも含めて後期旧石器が100点弱と、縄文時代後期から晩期の時期の土器片が大コンテナで約5箱、磨石や凹石などの礫石

器が大コンテナで約6箱の他、石匙などの剥片石器がわずかに出土している。

3. まとめ

大崎遺跡は、北上川の貫通丘陵にあたり、後期旧石器時代、縄文時代後期から晩期、平安時代にわたる複合遺跡であることが確認された。



大崎遺跡遺構配置図



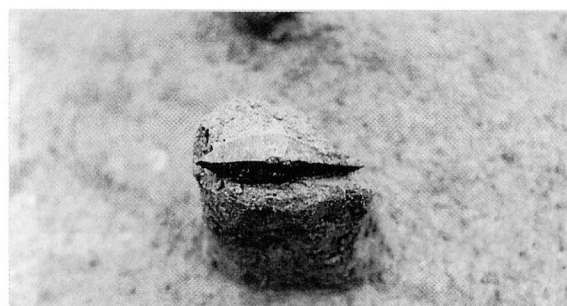
竪穴住居跡（縄文時代後～晩期）



焼土・配石遺構



フラスコ状土坑壁面の石器出土状況

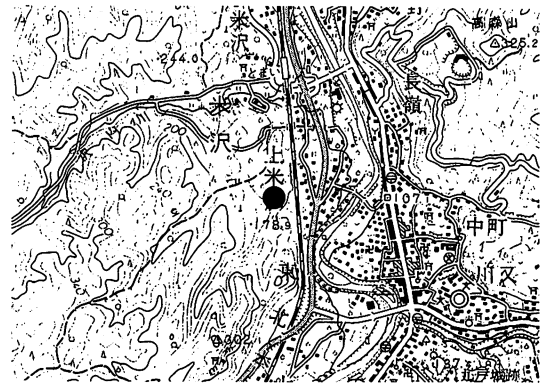


出土状況（尖頭器）

大崎遺跡検出遺構・遺物出土状況

(7) 上村遺跡

所在地 二戸市米沢字上村138番ほか
委託者 日本鉄道建設公団盛岡支社
事業名 東北新幹線盛岡八戸間建設工事
発掘調査期間 平成11年4月13日～6月28日
調査対象面積 2,871m²
遺跡番号・略号 I E 99-2391・UM-99
調査担当者 前田 稔・星 雅之
協力機関 二戸市教育委員会



遺跡位置

1 : 50,000 一戸

1. 遺跡の立地

上村遺跡は、JR東北本線斗米駅の南方約0.8kmに位置している。遺跡は馬淵川の西岸の米沢段丘面に載っている。今年度の調査区は、遺跡の西部・山裾の区域で、標高113～120m、調査区南西端から調査区内西端を回って北東端に流れている沢が形成する扇状地的地形である。現況は果樹園であるが、以前は水田として利用されていた。平成9年度調査区は本調査区の東続きである。

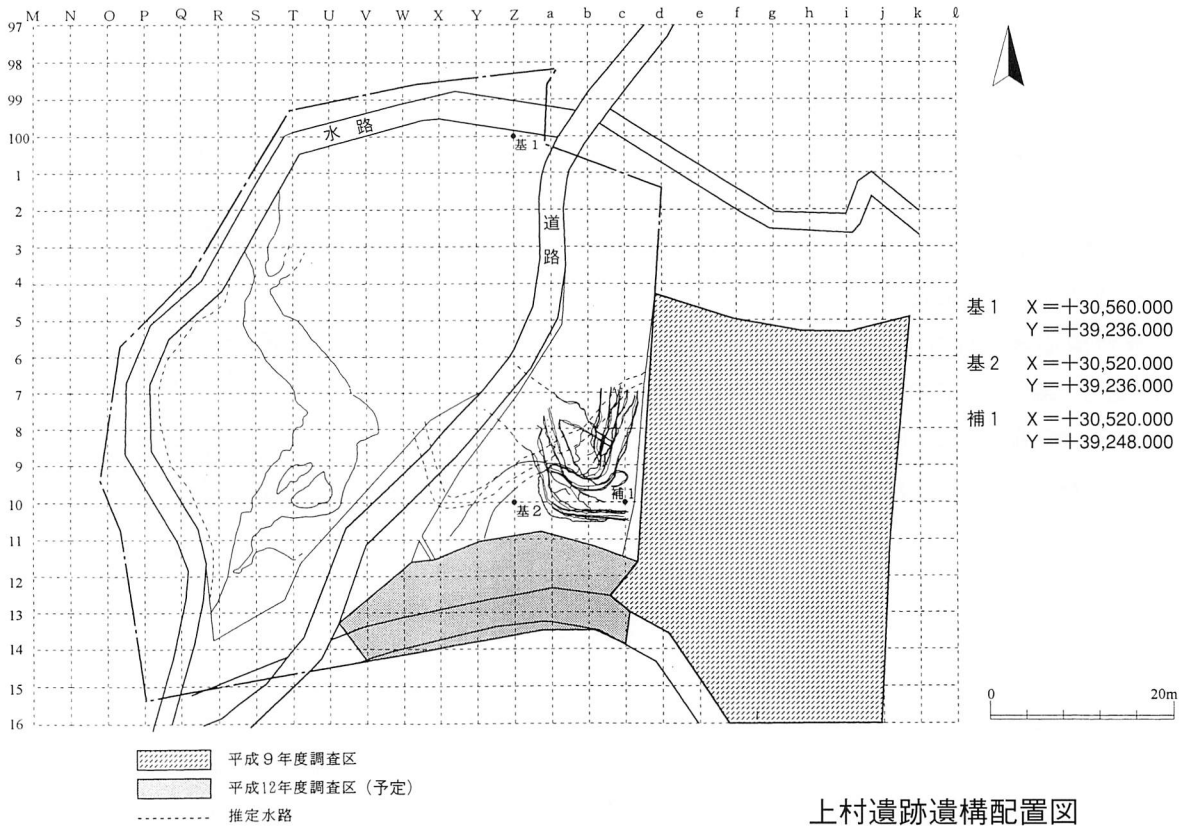
2. 調査の概要

遺構は、調査区のほぼ全面にわたり旧河道・旧洪水による浸食を受けており、検出されなかった。旧河道跡及び洪水跡は、現在調査区内の西端を流れる沢の旧流路部分と旧流路が増水したおりに発生した洪水跡であると思われる。旧河道および付随する洪水の発生時期について詳細な時期は不明であるが、表土・耕作土よりは下位で、十和田a火山灰混入層よりは上位で検出されることから、水田造成時より古く、十和田a火山灰降下時期よりは新しい。

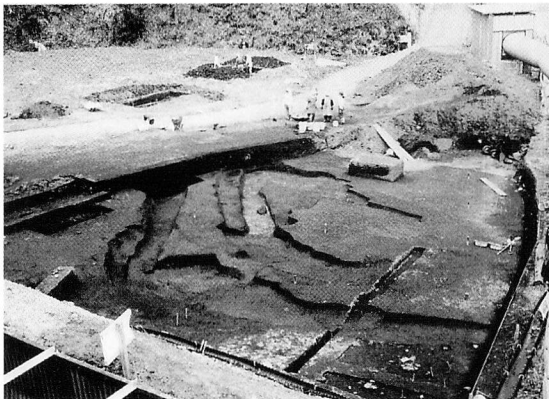
<出土遺物> 今回の調査で出土した遺物は、土器大コンテナ15箱、土製品5点、石器100点、石製品20点である。土器は、縄文時代前期・中期・後期・晩期及び弥生時代初頭のもので出土している。縄文時代前期前葉の土器が最も多く、縄文時代晩期後葉の土器が続く。土製品は、円盤状土製品4点と土偶であり、その土偶は「髪結い土偶」と呼ばれるもので、縄文時代晩期末葉のものとして推定される。石器は、石鏃・石槍・石匙などの剥片石器と磨製石斧・石錘・石皿・磨石・凹石などの礫石器に大別され、礫石器が多い。石製品は、石棒・軽石製品などが出土している。

3. まとめ

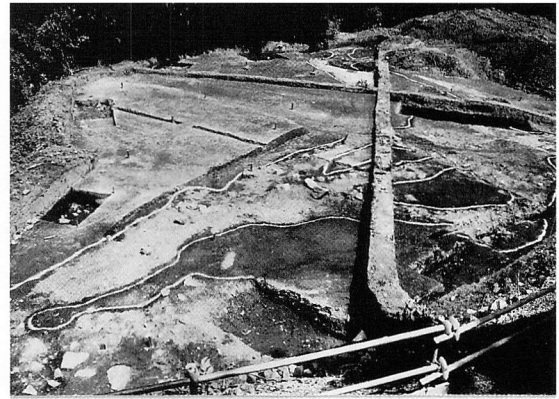
今回の調査により、平成9年度に検出した溝跡が旧河道跡であることが明らかとなった。また平成9年度の調査区では縄文時代の竪穴住居跡25棟・竪穴状遺構5基、土坑47基等が検出されており、本調査区においても旧流路の浸食により遺構は検出されなかったものの当該期の集落が存在した可能性は高い。あわせて河道跡・洪水跡より縄文時代から弥生時代の土器が多数検出されたことから、本調査区より上流に位置する段丘に、集落が存在した可能性も示唆される。



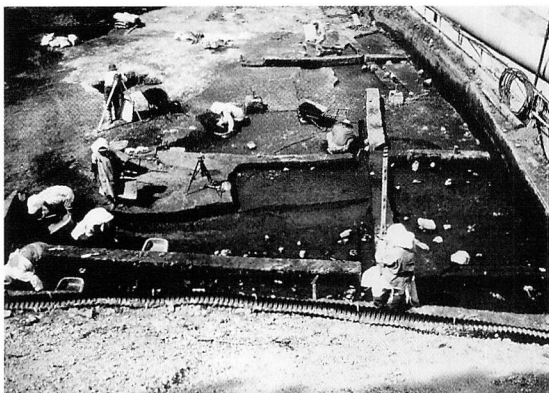
上村遺跡遺構配置図



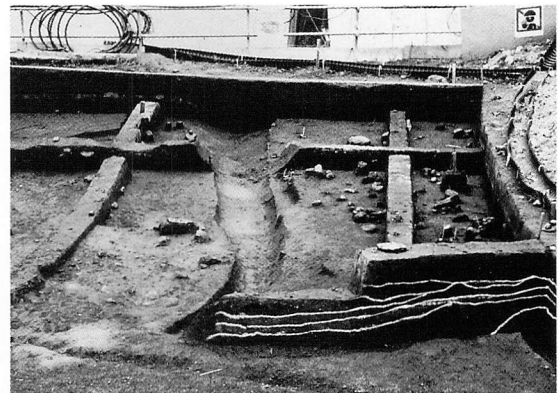
調査区東側洪水跡 (南東から)



調査区西側旧河道跡 (南から)



調査区東側遺物包含層精査風景 (南から)

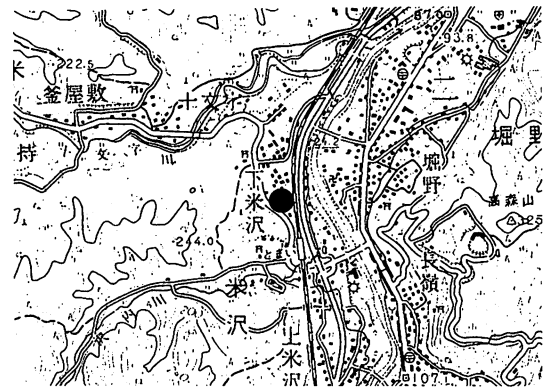


調査区東側遺物包含層 (西から)

上村遺跡検出状況

(8) 米 沢 遺 跡

所在地 二戸市米沢字下平85-3ほか
委託者 日本鉄道建設公団盛岡支社
事業名 東北新幹線盛岡八戸間建設工事
発掘調査期間 平成11年4月15日～11月12日
調査対象面積 12,280m²
発掘調査面積 12,280m²
遺跡番号・略号 I E 99-0390・MZ-99
調査担当者 工藤 徹・鈴木 聡・北田 勲
藤原賢徳
協力機関 二戸市教育委員会



遺跡位置

1 : 50,000 一戸

1. 遺跡の立地

米沢遺跡は二戸市役所の北西約2.1km、JR東北本線斗米駅から北へ100m地点に位置する。市内を北流する馬淵川左岸に形成された河岸段丘上(米沢段丘)に立地しており、遺跡の標高は104～106mで、東方約300mの馬淵川との比高は約25mを測る。遺跡の南方約350m地点には沢内川が流れており、約400m東流して馬淵川に合流する。遺跡の現況は、畑地・宅地である。本遺跡の周辺には、長瀬遺跡群、家の上遺跡、沢内遺跡、沢内B遺跡、荒谷遺跡、荒谷B遺跡等の多くの遺跡があり、いずれも同位段丘上に立地する。

2. 調査の概要

今回の発掘調査は平成10年度からの継続調査である。調査区は概ね南北に細長く延びているが、北部では遺構は確認されず、遺物は土器片数点が出土したのみである。遺構・遺物が多く確認されたのは、昨年度の調査区に隣接する南端部から中央部にかけての平坦面である。今回の調査で検出された遺構は、縄文時代の竪穴住居跡1棟、古代の竪穴住居跡(住居状遺構1棟を含む)13棟、陥し穴状遺構6基、土坑類22基、柱穴状ピット132基、炉跡・焼土遺構12基、溝状遺構10条、畝間状遺構2カ所、井戸跡1基である。

<縄文時代の竪穴住居跡> 調査区中央部の平坦面から1棟検出された。検出面は南部浮石層直下で、南部浮石を多量に含む楕円状の褐色土の広がり確認された。規模は5.5×5.0m、壁高は48cmを測る。埋土には南部浮石がレンズ状に厚く堆積している。床面には柱穴と思われる小ピットが4基確認された。住居跡のほぼ中央に薄い赤褐色焼土が広がっているものの、地床炉とする確証は得られなかった。住居内からは貝殻腹縁文を施した土器片9点が出土しており土器の特徴、検出面等から時期は縄文時代早期中葉と推定される。

<古代の竪穴住居跡> 調査区南部から中央部にかけての平坦面で13棟検出された。出土した遺物の特徴から、奈良時代に属するものが10棟、平安時代に属するものが3棟と思われる。奈良時代の住居跡の規模は、一辺が3.5～6m前後、平面形は隅丸方形を呈している。埋土には十和田a降下火山灰がレンズ状またはブロック状に堆積しているものが大半で、床面は南部浮石層上面で固く締まり、壁溝をめぐる住居が7棟ある。柱穴は4本が基本である。住居跡10棟の内1棟は、一辺が8.5m、6本柱の大型住居で、集落の中心的役割を果

たしたものと推定される。カマドは西壁もしくは北西壁の中央部に設置され、袖部の芯材には礫を利用して
いるものが多く見られる。平安時代の住居跡の規模は一辺4～6m前後、平面形は隅丸方形である。床面は南
部浮石層上面で、貯蔵穴をもつものが1棟ある。柱穴は確認できないものが多い。カマドの設置位置は北西
壁中央が1棟、東壁隅が1棟である。古代の住居跡13棟の中で焼失住居と思われるものが4棟あり、床面
には多量の炭化材、焼土が散在している。

<陥し穴状遺構> 6基検出された。いずれも溝状を呈するもので、軸方向は、北西方向が3基、北東方向
が3基である。規模は最大のもので380×88cm、深さ194cm、最小のもので325×59cm、深さ153cmを測る。形
状等から判断しいずれも縄文時代に属すると思われる。

<土坑類> 22基検出された。その中でフラスコ状を呈するものが3基検出された。開口部径108～180cm、
深さ110～143cm前後の規模である。出土遺物はないが、検出面等から時期は縄文時代前期に属すると思われ
る。その他の土坑は規模・形状とも一様ではないが、平面形は円形・楕円形に、断面形は円筒形・皿状・浅
鉢状に大別される。出土遺物は極めて些少である。検出面や周囲の出土遺物等から縄文時代に属するもの14
基、古代に属するもの3基、近世以降と思われるもの2基に分類できるとされる。近世以降と思われる土
坑2基からは寛永通宝が出土しており、形状等から判断し墓塚の可能性が高い。

<柱穴状ピット> 調査区南部から中央部にかけて132基検出された。規模は15～40cm、深さ10～50cm前後、
形状は円形・楕円形を呈する。これらの配列からは住居跡の柱穴とは断定できず、住居の床面となる痕跡も
確認されない。出土遺物もなく、用途・時期についての詳細は不明である。

<炉跡・焼土遺構> 炉跡1基、焼土遺構11基を検出した。炉跡は石囲炉で大小の礫によって構築され、上
面には十和田 a 降下火山灰が堆積している。土師器が出土していることから、近接する平安時代の住居跡と
関連する遺構と考えられる。焼土遺構11基は南部浮石層直下から検出されており、周囲の遺物の特徴や検出
面から縄文時代早期に属するものと思われる。

<溝状遺構> 調査区南部から中央部にかけて10条検出された。その中で16mを越える比較的規模の大きい
ものは4条あり、さらに東西調査区外に延びている。検出面や十和田 a 降下火山灰の堆積状況等から奈良時
代以降のものとして推定される。

<畝間状遺構> 調査区南部の平坦面で畝跡と思われる畝間状の遺構が2カ所確認された。北側の1カ所
については畝間と思われる溝状のプランが3条検出されたのみで不明な点が多い。南側では十和田 a 降下火
山灰を含む直線状の溝が数条確認された。埋土や遺物出土状況等から判断し、時期は奈良時代以降と思われ
る。

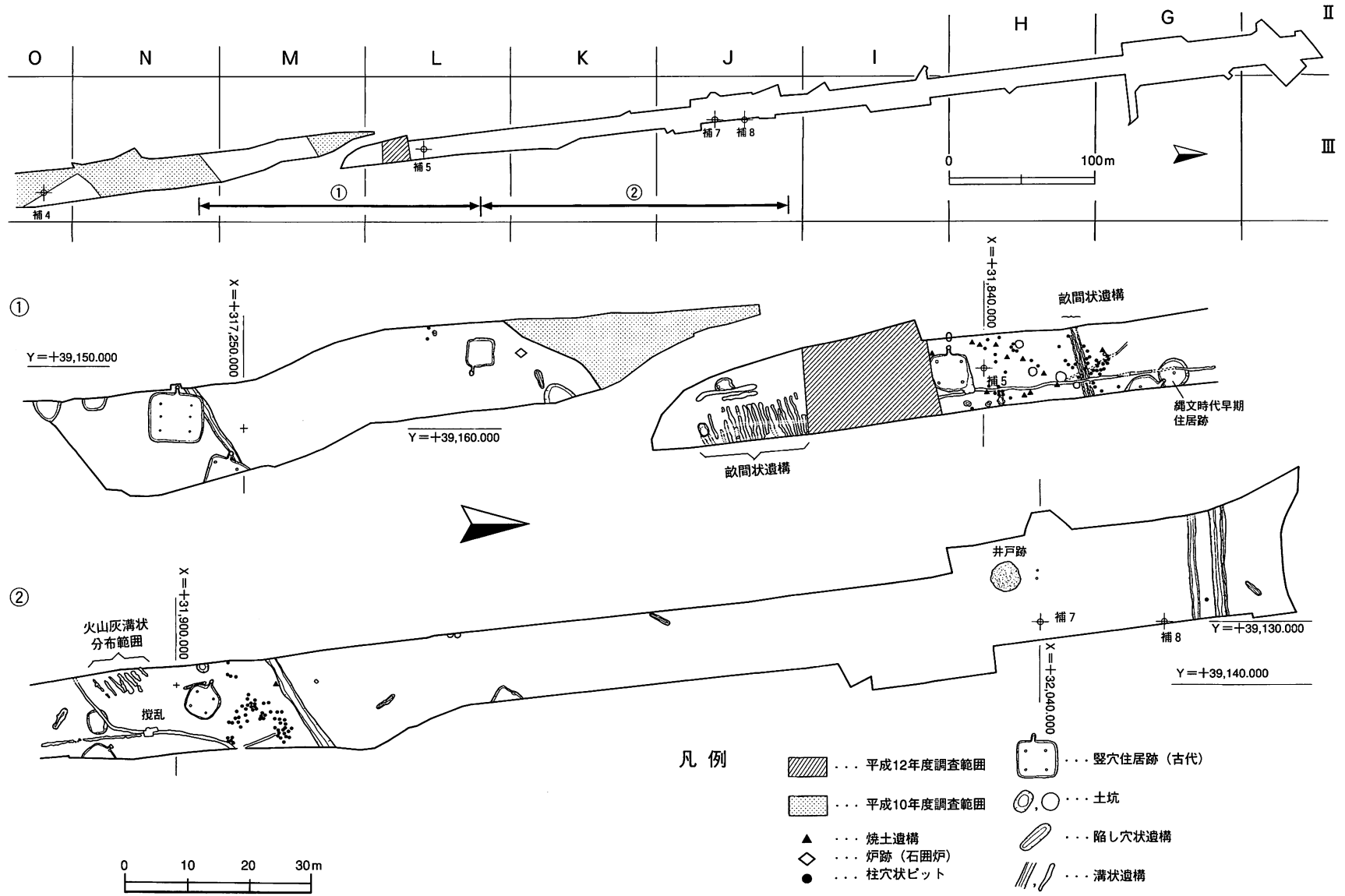
<井戸跡> 調査区中央部北側の平坦面で1基検出された。直径2.3m、深さ2.5mで、10～50cm前後の礫で
井戸枠を構築している。出土遺物は1点で、遺物の特徴や検出状況から判断し近代以降の井戸跡と思われ
る。

<出土遺物> 出土した遺物は大コンテナで23箱である。その内、縄文土器は7箱で、時期は早期から晩期
にわたるが、早期・前期の割合が多い。土師器は10箱出土している。8世紀前半から10世紀初頭と思われ
る甕、坏が住居跡を中心に出土している。石器は6箱で、石鏃・石匙・石篋・磨製石斧・礫石器等があり、石
製品は耳飾り、砥石等5点出土している。その他、土製品は紡錘車1点、円盤状土製品2点、鉄製品は刀子
等10点、銭貨11点、陶磁器片4点、ガラス製小玉3点が出土している。

3. まとめ

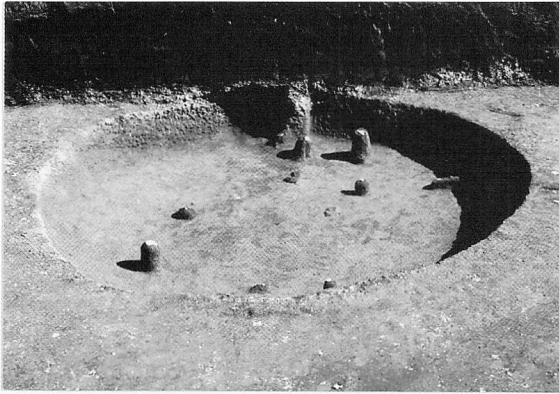
今回の調査により本遺跡が縄文時代、奈良・平安時代の集落跡であることが判明した。また、縄文時代の
一時期には狩り場として利用されていたことも確認された。今後、分析・考察を進め、さらに周辺遺跡との
比較・検討を加えることにより本遺跡の性格・内容をよりいっそう明らかにしていきたい。

米沢遺跡遺構配置図

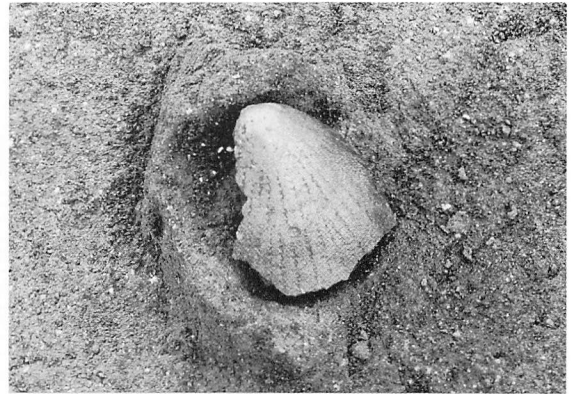




調査区南端～中央部全景（東上空から）



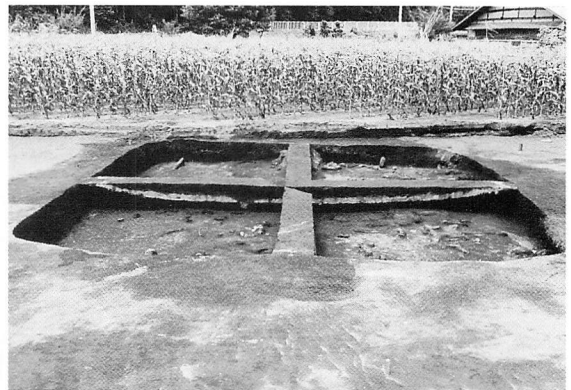
竪穴住居跡（縄文時代早期）



土器出土状況（縄文時代早期）



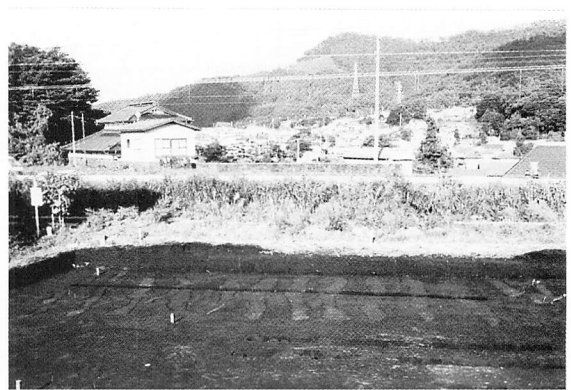
竪穴住居跡（奈良時代）



同左埋土状況（To-a含む）



遺物出土状況

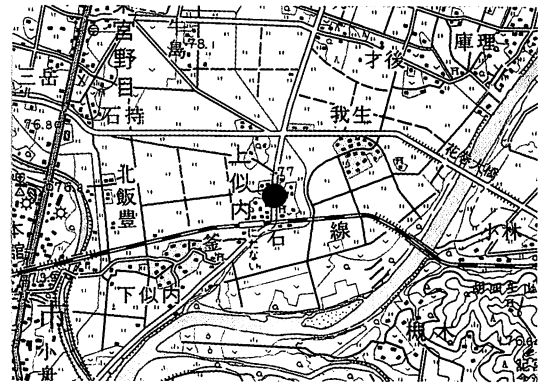


畝間状遺構（検出）

米沢遺跡検出遺構・出土遺物

(9) 似内遺跡

所在地 花巻市上似内10地割66-1ほか
委託者 日本道路公団東北支社北上工事事務所
事業名 東北横断自動車道路建設
発掘調査期間 平成11年4月14日～10月7日
調査対象面積 9,210㎡
発掘調査面積 7,853㎡
遺跡番号・略号 ME16-2299・NN-99
調査担当者 溜 浩二郎・熊谷佳恵
協力機関 花巻市教育委員会



遺跡位置

1 : 50,000 花巻

1. 遺跡の立地

似内遺跡は、JR東北本線花巻駅から北東約3.5kmに位置し、北上川の右岸に形成された河岸段丘上に立地している。周辺より1～2m高い微高地で標高は76m前後である。

遺跡全体の範囲は南北約350×東西約350mで、JR釜石線似内駅の北に広がる現在の上似内集落とほぼ同じである。今回の調査区は遺跡の北側にあたり、現況は宅地及び畑地である。

2. 調査の概要

今回は昨年度からの継続調査で、遺跡の調査としては4回目にあたる。平成4・9年には花巻市教育委員会によって今回の調査区の南側が調査され平安時代の竪穴住居跡などが検出されている。

今回の調査では、平安時代の竪穴住居跡・住居状遺構21棟、土坑27基、陥し穴状遺構38基、焼土遺構14基、溝跡13条、竪穴状遺構1基、柱穴状土坑572基検出された。

＜竪穴住居跡・住居状遺構＞ 道路東側調査区の中央南端部を中心と考えた場合、弧を描く様な形で21棟検出された。うち2棟は調査区外へ続き、1棟は削平を受けているため形状、規模が不明である。他の18棟はいずれも正方形に近い形状をもち、規模は小型のもので2.5×2.5m、大型のものでは5.8×5.8mであるが、一辺3m前後のものの一辺4m前後の規模のものが半々の割合で大半を占める。

調査区外へ続く2棟はカマドの存在を確認出来なかったが、他の18棟はカマドを有し、1棟はカマドがない。カマドを2基有するものは4棟あり、カマドの向きは北が3棟、南が3棟、東が11棟、北と東の両方向に持つものが1棟を数える。設置位置は北向きのものは壁面中央、南・東向きのは壁の中央よりコーナーによる。特に東向きのは壁の中央よりやや南よりであるものがほとんどである。

21棟検出されたうち4棟が住居の拡張を行っている事が確認された。そのうち3棟はカマドを2基有していることから拡張と同時にカマドも作り替えていると考えられる。1棟は拡張した後も同じカマドを利用している。また、焼失した住居が2棟検出されている。

時期は出土遺物などから全て平安時代（9世紀）のものであると考えられる。

＜土坑＞ 27基検出された。形状は円形、楕円形、長方形など様々で、規模についても同様である。最大の

ものは平面形が楕円形を呈し、開口部径2.9×2.6m、深さ45cm、最小のものも楕円形を呈し開口部径0.7×0.8m、深さ14cmである。また、この最小の土坑からは検出面で薄い土器片が数多く出土している。時代の判別ができるものは9基でいずれも出土遺物などから平安時代のものであると考えられる。うち1基からは土師器の坏が2、3枚重なって計9枚出土し、その中の1枚には篋で文字が書かれている。

<陥し穴状遺構> 溝状長楕円形の形状を呈し、38基検出されている。約7割の遺構が東西に軸線を持ち、単独あるいは2～5基の少数単位で検出されている。開口部径約270×50cm、深さ約90cm規模のものが多く、最大で開口部径360×40cm、深さ70cm、最小で開口部径170×35cm、深さ75cmである。遺物は出土していないが形状や検出状況から縄文時代の遺構と考えられる。

<焼土遺構> 14基全てが道路西側調査区の北部で検出された。平面形は円形、8の字形、及び不整形を呈し、1.0～2.2m×0.5～1.0mの規模をもつ。深さ15～38cmで、焼土の厚さは4～14cmを測り、いずれも現地性と考えられる。出土遺物は無く、時代は不明である。

<溝跡> 検出された13条の溝のうち古代の可能性のあるもの2条を除き他は全て近世以降に掘られた溝と考えられる。古代の溝のうち1条は昨年度調査で検出された2条の溝を繋ぐもので南端部で緩やかに湾曲している。上端幅約85cm、深さ約65cmで断面形が逆台形を呈する形状は昨年度調査のものと同様である。もう1条は上端幅約50cm、最深部で約30cm、断面形はU字状を呈し、道路西側調査区の東端を南北に走り調査区外へ延びている。前述の1条とほど近く須恵器片などが出土している。

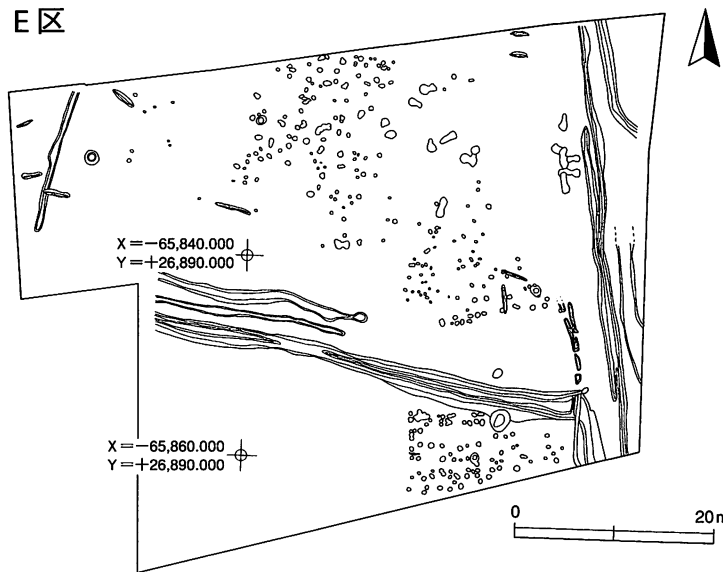
<竪穴状遺構> 道路東側調査区の中央部よりやや東よりに1基検出された。約3.5×7.5mの規模を持ち、形状は長方形である。陥し穴状遺構と切り合い関係にあり、本遺構のほうが新しい。出土遺物などから近世遺構と考えられる。

<柱穴状土坑・掘立柱建物跡> 調査区全体で572基の柱穴状土坑が検出されている。道路西側調査区では北部と南東部に集中し開口部径約30cm規模のものが多く、道路東側調査区では開口部径約40cm規模のものが多く数カ所に分かれる様に検出されている。集中して検出されたのは掘立柱建物跡を何回か建て替えたものであると考えられ、また数カ所に分かれて検出されているものはそれぞれ掘立柱建物跡を形成するものと考えられるが、詳細は検討中である。

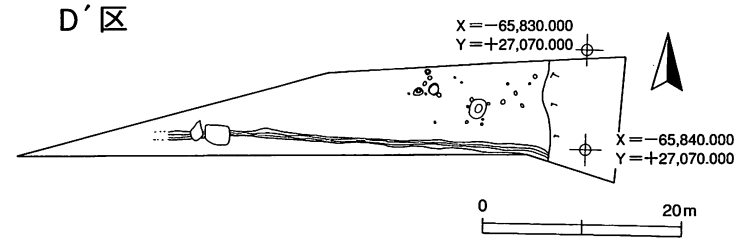
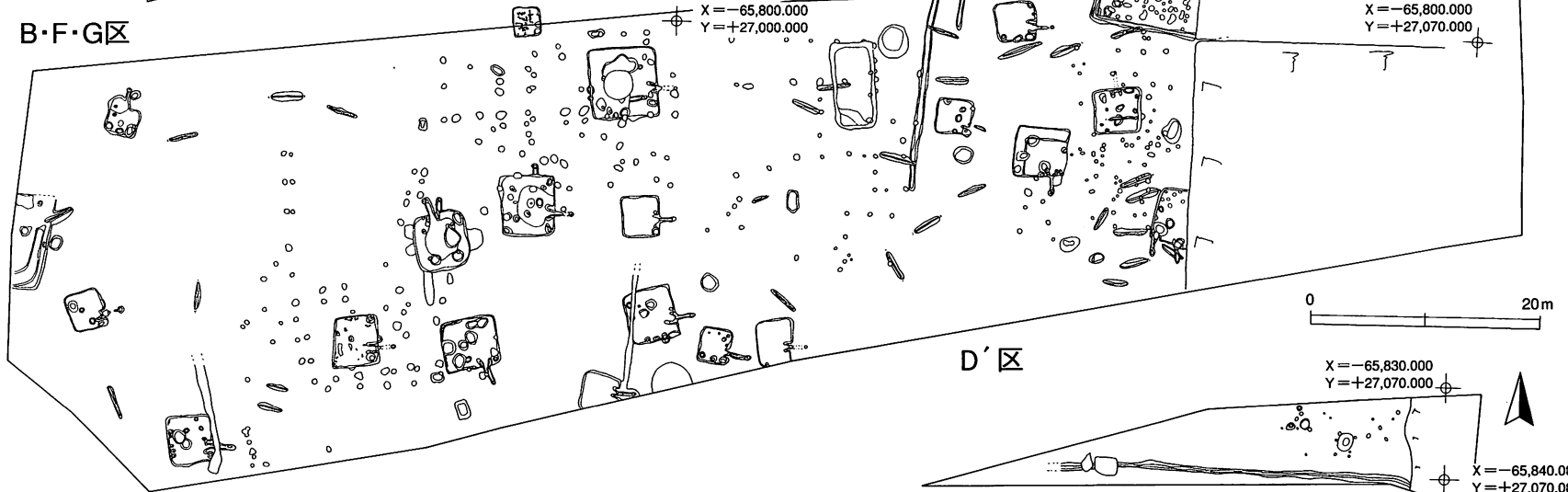
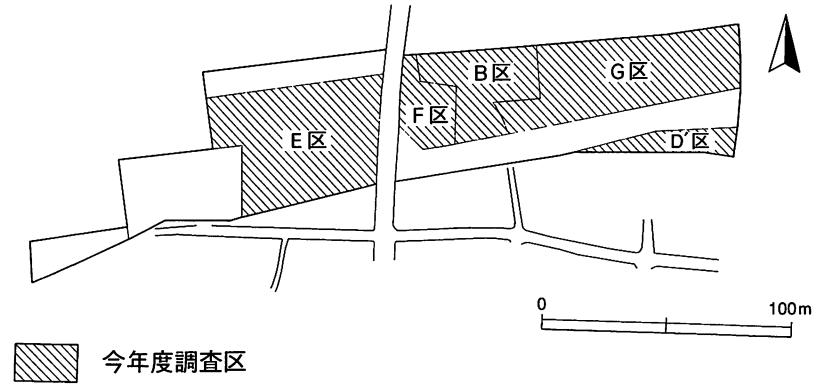
<出土遺物> 平安時代の土師器・須恵器が大コンテナで13箱出土している。昨年と同様須恵器の出土量は比較的多い。土師器坏の篋書き土器、須恵器坏の墨書土器がそれぞれ1点出土している。石器は小コンテナで1箱出土し、砥石が主である。鉄器は雁又鍬や刀子、鎌、釘、紡錘車など約15点、主に住居跡から出土している。また、土錘が紐で繋がれていた様な状態で98点出土し、他に土製品は2点出土している。焼失した竪穴住居跡からは炭化した米、粟、胡桃が出土している。

3. まとめ

4回目にあたる今回の調査で検出された遺構などから似内遺跡は、縄文時代には狩猟場として、平安時代には集落跡として、以来現代まで断続的に生活の場として利用されてきた土地であることがより明らかになった。特に平安時代の集落跡の調査の成果は当時のこの地域の生活の様子の一部をかいま見ることのできる貴重な資料である。昨年度調査で得た成果もふまえた上で今後の検討を深めていきたい。



調査範囲と今年度調査区





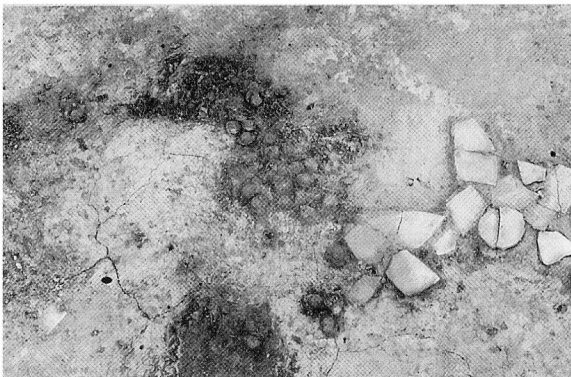
遺跡全景



竪穴住居跡



カマド



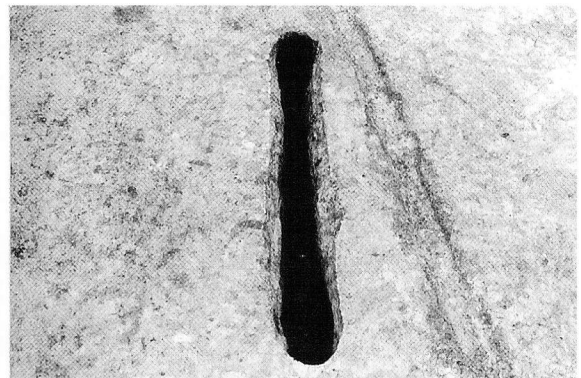
炭化物出土状況



土錘出土状況



篋書き土器出土土坑



陥し穴状遺構

似内遺跡検出遺構・出土遺物

(10) しまだ 島田Ⅱ遺跡

所在地 宮古市大字八木沢第4地割ほか
委託者 岩手県住宅供給公社
事業名 宮古短大地区宅地造成事業
発掘調査期間 平成11年4月19日～11月5日
調査対象面積 30,319m²
発掘調査面積 30,319m²
遺跡番号・略号 LG43-0338・SMDⅡ-99
調査担当者 小山内 透・鎌田 勉
佐藤綾子・小林弘卓
協力機関 宮古市教育委員会
宮古市都市計画課



遺跡位置

1 : 50,000 宮古

1. 遺跡の立地

島田Ⅱ遺跡は、JR山田線宮古駅の南方約2.5km付近に位置し、遺跡の北東部には岩手県立大学宮古短期大学部が接している。遺跡は、山地から枝状に北方向に延びる数本の尾根と、それに挟まれる谷からなり、今年度調査区の標高は16～65mである。調査前の状況は、ほとんどが険しい山林で、一部が道路および休耕田となっている。

遺跡周辺には、中世城館の磯鶏館山遺跡や八木沢古館・新館、尾根続きで本来は本遺跡の一部と考えられる古代集落の島田遺跡、縄文・弥生・古代の複合遺跡である上村貝塚など、かつて調査が行なわれた遺跡も数多い。

2. 調査の概要

島田Ⅱ遺跡においては、平成10年度に当センターが用地内全域にわたり分布調査を行なっている。その際平安時代の竪穴住居跡、製鉄・鍛冶関連箇所等多数の遺構を検出しており、この試掘調査の結果を受け、今年度は遺跡西側部分の発掘調査を行なった。調査対象面積のうち、約3,000m²は工事用道路として削平されている。東端沢部も北側半分が削平を受けており、南側からも遺構は検出されなかった。北端・南端の沢部には試掘トレンチをいれ、遺構がないことを確認している。

検出された遺構は縄文時代の竪穴住居跡6棟、竪穴住居状遺構1棟、古代の竪穴住居跡12棟、竪穴住居状遺構11棟、鍛冶炉跡11基、炭窯32基、中近世の掘立柱建物跡6棟、竪穴住居状遺構1棟、時期不明の炭窯2基、土坑類69基、焼土遺構2基、柱穴200基、溝跡および道路状遺構13条である。

〈竪穴住居跡・竪穴住居状遺構〉 縄文時代の竪穴住居跡6棟はすべて調査区東側の沢部で検出されている。いずれも遺構北側部分は削平を受け壁の残存状況は良くないが、平面形は楕円形ないし円形を呈すると考えられ、規模は推定値で3.4×3.0m前後を測る。検出された6棟のうち、3棟が石囲炉、1棟が地床炉をもつ。竪穴住居状遺構も同じく東側沢部で検出されており、住居跡に近接している。平面形は円形を呈し、

規模は推定値で3.0×2.9mを測る。竪穴住居跡・竪穴住居状遺構とも柱穴は検出されなかった。

古代の竪穴住居跡12棟はすべて調査区中央の尾根に位置し、南側の標高55m以上のところに集中している。規模は一辺3.5～4m前後のものが多く、平面形は方形および隅丸方形を呈する。内1棟は一辺6m前後の大型住居跡であり、埋土に大量の廃棄焼土と炭化材を含むことから焼失住居と考えられる。貼床は一部のみ施されているものも含めると半数の住居で確認されている。床面で柱穴が検出されたのは3棟のみで、そのほかの住居では確認できなかった。カマドは東西南北どの壁につくものもあり、付設位置について規則性は認められないが、それぞれ斜面の高い側に設置される傾向がある。本体部は粘土で構築されたものと、芯材に石を使用しているものがあり、なかには支脚石を囲むように袖石の抜き取り痕が並んでいるものもあった。煙道は大部分が刳り貫き式である。斜面に位置する住居跡では下方に竪穴掘削時の排土の広がり確認できるものもあった。

竪穴住居状遺構も竪穴住居同様、大部分が中央尾根部の南側から検出されている。規模は一辺3～4m程で、尾根頂部に位置するものは隅丸方形を呈するが、斜面にあるものは谷側が崩落しており平面形は不明である。床面で焼土が確認されているものもあり、鍛冶関連の工房跡の可能性も考えられる。東端尾根部から検出した1棟は出土遺物から中世のものと考えられる。これらも柱穴は確認されていない。

<掘立柱建物跡> 調査区北西端周辺は人為的に整地されたものと考えられ、この場所から掘立柱建物跡が6棟検出されている。遺構は重複しており、数回にわたり建て替えがなされた可能性がある。遺構全体を検出できたのは2棟で、東西棟を示す。うち桁行5間×梁行3間の建物跡の柱穴埋土中からは北宋銭（ビタ銭）が出土しており、中世の遺構と考えられる。ほか4棟はいずれも調査区外にかかることから、規模等詳細は不明である。

<鍛冶炉跡> 鍛冶炉は沢部から11基検出した。特に西側沢部は調査区のなかで最も大きな規模の鍛冶関連工房があった場所であり、原料鉄を精錬するための精錬鍛冶炉と、精錬した鉄から鉄製品を製作するための鍛錬鍛冶炉が存在していたと考えられる。精錬鍛冶炉は沢の斜面上に位置しており、1.5×1.1mの楕円形を呈し、断面は椀形である。斜面下方には、廃棄された多量の鉄滓や炉壁、羽口が散在しており、炉壁は藁のような植物繊維を混ぜた粘土で構築されている。鍛錬鍛冶炉は、大きなものは径120cmを測る円形の炉で、周囲からは鍛錬の際に生じた鍛造剥片が見ついている。精錬鍛冶炉の炉下部には、防湿や高温を保つための地下施設があった。周辺にはこれに関連する作業場や土坑、柱穴が検出されている。

<炭窯> 炭窯は尾根・沢部あわせて34基検出されている。平面形は細長い楕円形または円形を呈し、前者は形態から古代のもの、後者はそれ以降のものと考えられる。壁はほぼ垂直に立ち上がるものと外反するものとの2種類がある。遺構の底面および壁面が火熱を受け赤褐色変化を示しており、また埋土中に多量の炭化物を含むことから、今回検出されたのは簡便な伏せ焼き窯と考えられる。また平面形が細長い楕円形の遺構は尾根部に、円形の遺構は沢部に集中している。平面形や構築場所によって木炭の用途が異なる可能性があり、特に調査区西側沢部の重複する炭窯群は、鉄製品を作るための燃料を供給するための遺構と考えることができる。

<土坑> 土坑は69基検出されている。調査区全域から見つかっており、大半は径1m以下の不整形、断面は深さ20cm以下の椀形を呈する。いずれも出土遺物がほとんどないため、時期・性格等は不明である。このうち西側沢部で検出された土坑については、鉄滓や炉壁を人為的に廃棄したものがあり、具体的用途については不明だが、精錬鍛冶作業に関係する遺構であると考えられる。

<溝跡・道路状遺構> 溝跡・道路状遺構は調査区全域からあわせて13条検出されている。いずれも出土遺

物がほとんどないため時期の特定はできないが、調査区西側の尾根部から埋没谷にかけて、全長34m・幅0.3～1mの道路状遺構が1条検出されており、尾根部の炭窯と沢部の鍛冶炉とを行き来した道路とも考えられる。さらに、これに直行するかたちで西側沢部から鍛冶炉付近に向かって延びる道路状の溝跡が2条検出されており、これら3条は一連の道路であった可能性もある。また中央尾根部でも、尾根頂部の平坦面をつなぐ斜面で、幅50cm前後の道路状の溝跡が2条検出されている。

<柱穴状土坑> 柱穴状土坑はおもに調査区北西端、西側沢部で検出されている。平面形は円形または楕円形を呈するものが多く、深さは10～50cmを測るものが多い。北西端部の数十基は建物跡を構成するが、他は出土遺物もなく、時期・用途等詳細は不明である。

<出土遺物> 今回の調査で出土したのは縄文時代の土器・石器、古代の土師器・須恵器・石製品（砥石・金床石）・羽口・炉壁・鉄製品・鉄滓、中～近世の陶磁器・鉄製品・古銭である。

縄文土器は、竪穴住居内から地文のみの深鉢の破片が数点出土している。他は遺構外から小コンテナ1箱程の出土である。また、石器では石鏃・石匙が遺構外から数点出土している。

古代の遺物は土師器・須恵器が大コンテナ5箱、羽口が大コンテナ4箱、砥石・金床石が中コンテナ1箱、炉壁が大コンテナ5箱、鉄製品が約80点、鉄滓が大コンテナ33箱出土し、土器のほとんどは竪穴住居跡から、羽口、炉壁、鉄製品、鉄滓などは鍛冶炉の集中する西側沢部からと、遺構と関連した分布を示している。土器は土師器の甕・坏が大半を占め、鉄製品は鉄鏃・釘・用途不明のものがある。鉄鏃は西側沢部の炭窯埋土中から出土しており、その形状から平安時代のものであると考えられる。鉄釘はすべて角釘で、西側沢部から出土したものはこの場所で製作されたものである可能性がある。鉄滓も大半が西側沢部から出土しており、精錬鍛冶の際生じた流出滓と炉内滓とがある。炉内滓のなかには、炉の形状を示す椀形滓が含まれる。また鍛錬鍛冶の際の鉄塊系遺物や鍛造剥片等も出土している。

中近世の遺物は江戸時代後半の伊万里・唐津・大堀相馬・瀬戸産の陶磁器や陶胎染付の椀、陶器の播鉢等の破片、鉄鍋が調査区西側で若干出土している。このうち鉄鍋は形状と遺跡の性質からみて古代末～中世のものであると考えられる。古銭は、北宋銭（ビタ銭）が出土している。

3. まとめ

今回の調査では、前年度の試掘結果から予想されたとおり、古代の竪穴住居群と製鉄関連遺構として鍛冶炉・炭窯等が多数検出され、本遺跡が鉄の生産や製品加工を生業とした古代の集落であることが明らかになった。今年度調査区は、やや遺構・遺物が希薄な地域であったが、来年度以降に調査を行なう予定の東側調査区は試掘調査により遺構・遺物が濃密な分布状況を示していることが確認されており、今後の調査によって本地区の過去の鉄生産に関する一大集落の様相が明らかになるものと考えられる。



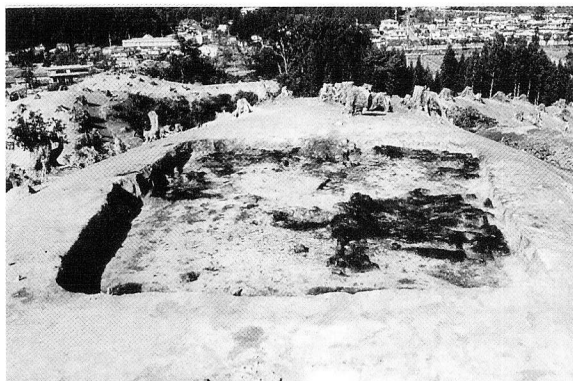
調査区全景（北から）



調査区中央尾根部（北から）



調査区西側沢部（南東から）



焼失住居（南から）



鉄鏟出土状況



坏出土状況



坏出土状況

島田Ⅱ遺跡検出遺構・遺物出土状況

II
1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 16 17 18 19 20

III

IV

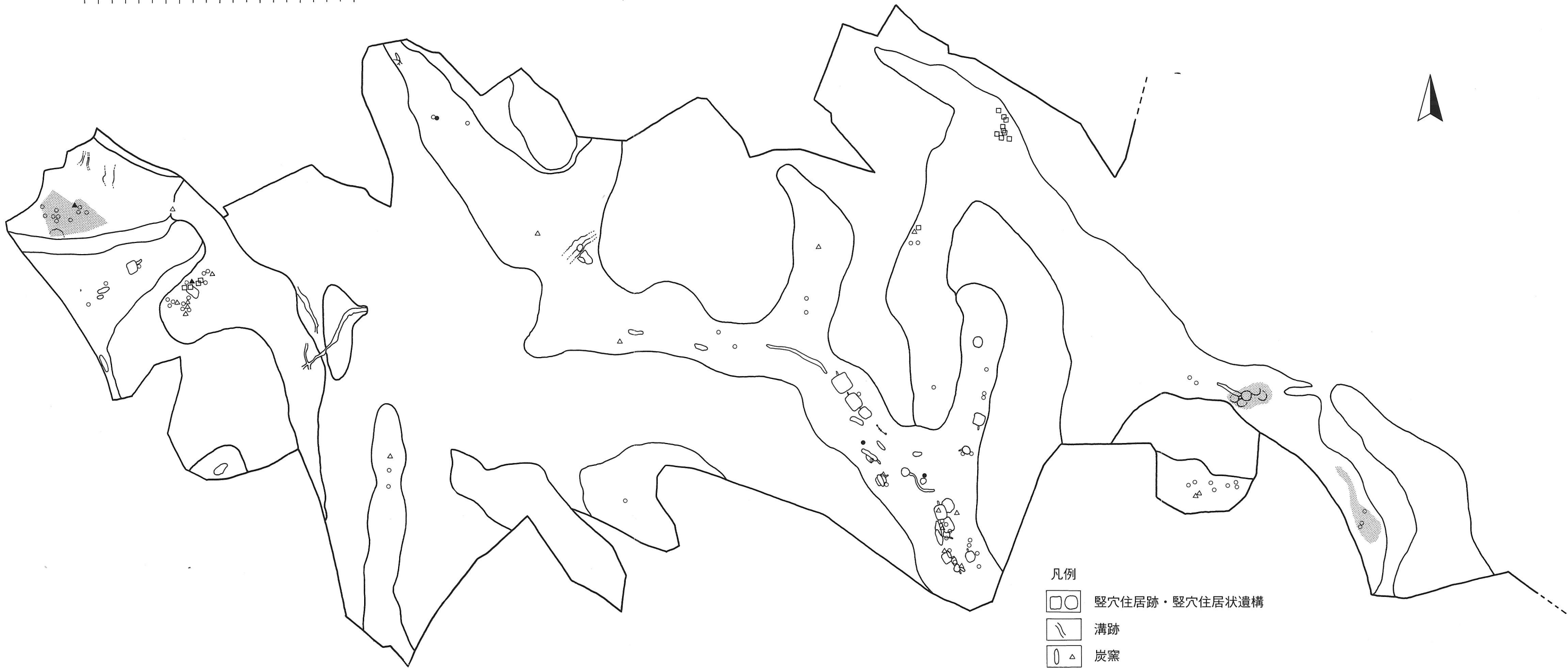
V

VI

a
b
c
d
e
f
g
h
i
j
k
l
m
n
o
p
q
r
s
t

D

E



- 凡例
- 竪穴住居跡・竪穴住居状遺構
 - 〰 溝跡
 - △ 炭窯
 - 鉄生産関連の炉
 - 土坑
 - 焼土
 - ▲ 上記以外の遺構
 - 柱穴状土坑が検出された範囲

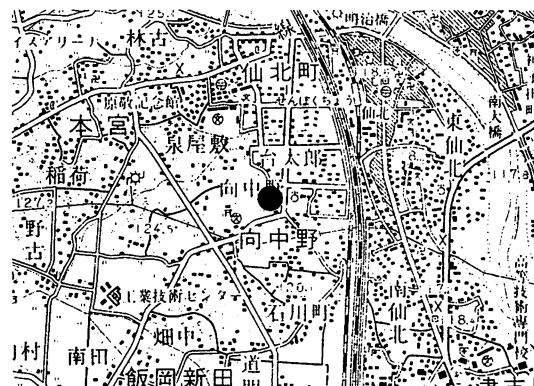
0 50m
1 : 1500

鳥田Ⅱ遺跡遺構配置図

Ⅲ. 岩手県・市関係

(11) 台太郎遺跡第22次調査

所在地 盛岡市向中野字向中野39-1ほか
委託者 岩手県警察本部
事業名 盛岡東警察署警察官待機宿舎新築工事
発掘調査期間 平成11年9月1日～11月2日
調査対象面積 2,500㎡
発掘調査面積 2,500㎡
遺跡番号・略号 LE16-2269・ODT-99-22
調査担当者 菅原靖男・半澤武彦
協力機関 盛岡市教育委員会



遺跡位置

1 : 50,000 盛岡

1. 遺跡の立地

本遺跡はJR東北本線仙北町駅の南西側約900mに位置し、雫石川右岸の河岸段丘面上に立地している。標高は121m前後で、現況は宅地である。本遺跡の北西側約100mには平成10年度調査の第18次調査区が、また隣接地には今年度調査の第23次調査区が広がっている。

2. 調査の概要

検出された遺構は竪穴住居跡1棟、掘立柱建物跡1棟、土坑9基、陥し穴1基、堀跡1条、溝跡9条、柱穴状土坑62基である。

＜竪穴住居跡＞ 幅約3.5mの隅丸方形を呈していると思われるものが1棟検出された。カマドは調査区外（北方向）にあると思われる。土師器と南側壁面中央より羽口が出土している。

＜掘立柱建物跡＞ 調査区南側に一部分が検出されたが、規模は小さく遺物も出土していないため時代は不明である。

＜土坑＞ 最大のもは長径約2.3m、短径約1.9mの楕円形で焼土と土師器片が出土しているが性格は不明である。また、墓塚と思われる2基のうち1基からは「開元通宝」1枚が出土している。

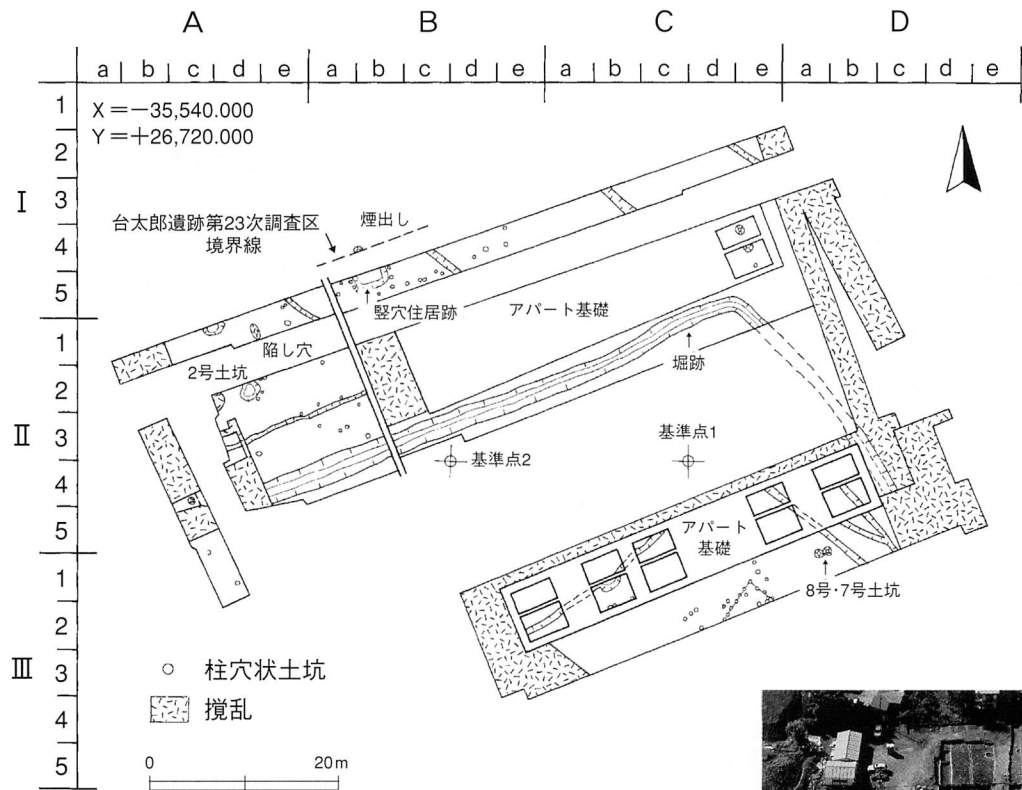
＜陥し穴状遺構＞ 開口部の長軸が約1.5m、短軸が約40cmの長楕円の溝状のものが1基検出された。

＜堀跡＞ 西側と南側が調査区外へ延びており規模の全容は不明である。今回確認された長さは東西方向に約55m、東端で南東方向に向きを変え、約21m伸びている。幅約3m、深さ約70cmで平坦な底をしており埋土内から土師器、須恵器、陶磁器片が出土している。

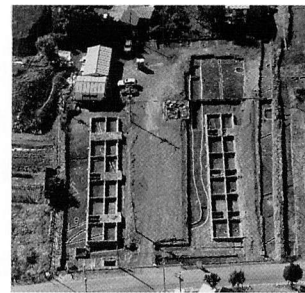
＜溝跡＞ 南北方向7条、東西方向が2条ある。幅は20～50cmで土師器片が数点出土している。

＜出土遺物＞ 土師器（坏と甕の一部）を中心に須恵器片数点、陶磁器片1点、羽口、古銭3枚（寛永通宝2枚、開元通宝1枚）が小コンテナ1箱出土している。

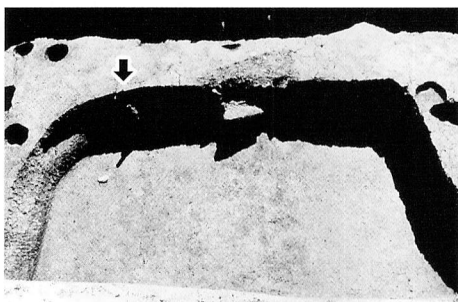
＜まとめ＞ 主に奈良時代を中心とした遺構と遺物が出土しているが、一部の遺構が調査区外に延びていたり、多くの攪乱を受けているために全容は不明である。遺構・遺物とも少なく、隣接する台太郎遺跡や今後調査される周辺の遺跡との比較・検討によって本遺跡の性格が明らかになるものと思われる。



台太郎遺跡第22次調査遺構配置図



調査区全景（東から）



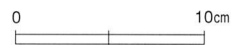
縦穴住居跡（北から）



掘跡東端（東から）



羽口（縦穴住居跡矢印地点より出土）



8号土坑出土
「開元通宝」



調査区東側埋土
「寛永通宝」



台太郎遺跡第22次調査検出遺構・出土遺物

(12) ^{はせんどう}長谷堂貝塚

所在地 大船渡市猪川町字中井沢78番地2ほか
委託者 岩手県大船渡地方振興局土木部
事業名 県営長谷堂住宅代替事業
発掘調査期間 平成11年7月1日～10月29日
調査対象面積 2,800㎡
発掘調査面積 2,800㎡
遺跡番号・略号 NF39-1151・HSD-99
調査担当者 阿部勝則・平めぐみ
協力機関 大船渡市教育委員会



遺跡位置

1 : 50,000 盛

1. 遺跡の立地

長谷堂貝塚はJR大船渡線盛駅の北東約1.2kmに位置し、西側を南流する立根川と南側を西流する中井川に挟まれた大船渡丘陵上に立地する。標高は26～29m、現況は宅地である。

2. 遺跡の概要

今回の調査は平成8・9年に引き続きアパート代替事業に伴うもので、今年度は前回調査区の東側2,710㎡と北側90㎡を調査した。検出された遺構は縄文時代中期～晩期の竪穴住居跡20棟、竪穴住居状遺構1棟、掘立柱建物跡4棟、土坑95基、焼土遺構16基、配石遺構6基、墓塚1基、土器埋設遺構6基である。

＜竪穴住居跡＞ 調査区の北東側で石囲炉や複式炉を伴う縄文時代中期の竪穴住居跡を16棟、南側で地床炉を伴う後期の竪穴住居跡を1棟、西側と南側で石囲炉を伴う晩期の竪穴住居跡を3棟検出した。

＜土坑＞ 調査区全体に亘って95基検出した。特に南側に集中し、後期のものと思われる円形基調の土坑70基余りを重複して検出した。中期のフラスコ形土坑は調査区の北東側で検出している。

＜埋設土器＞ 6基検出した。その中で北東部で検出した1基は器高16cm、口径12cmの深鉢にアスファルトが詰まり、正立で埋設されていた。その他にも土器中に獣骨と思われるものが入っているものもある。

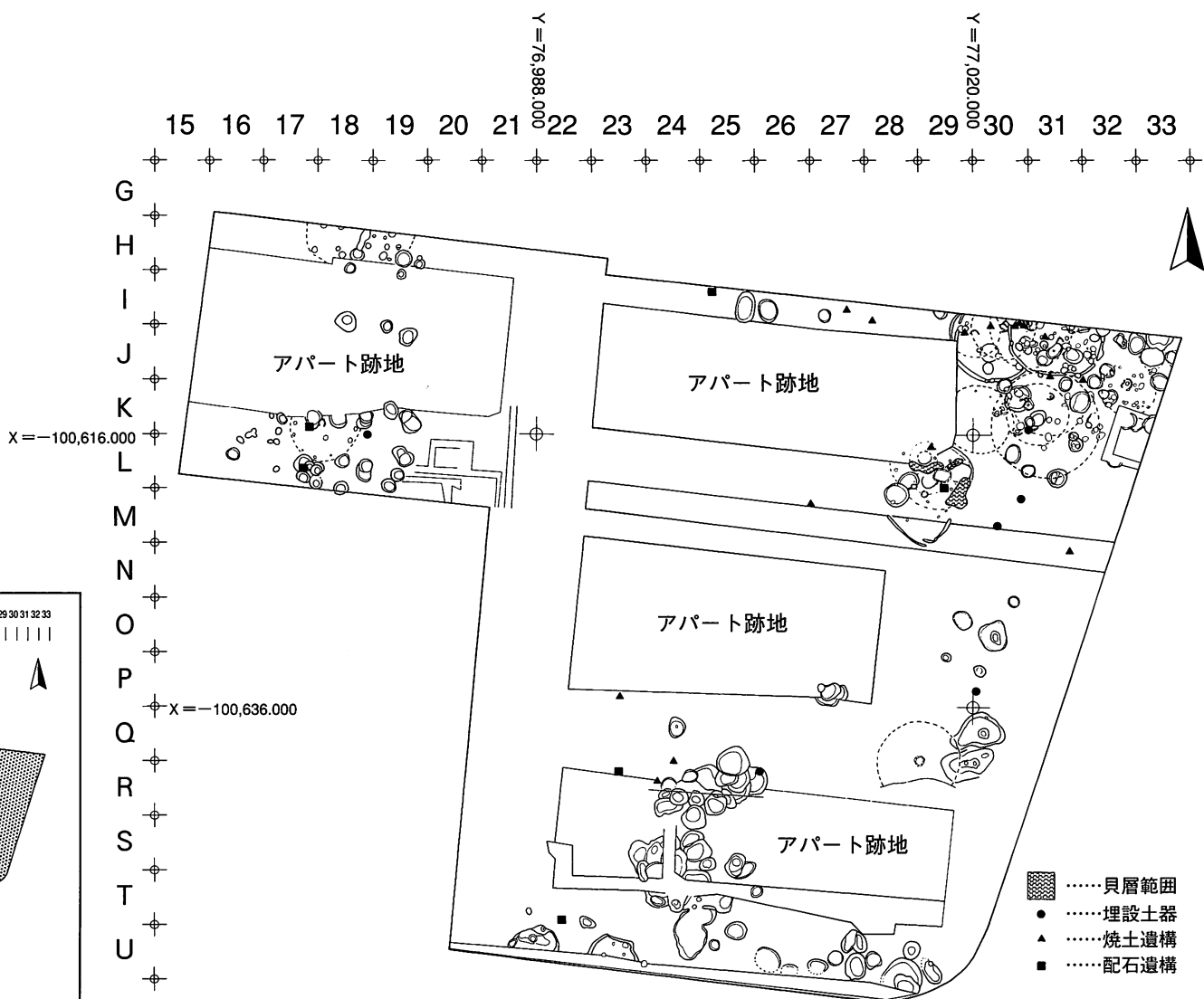
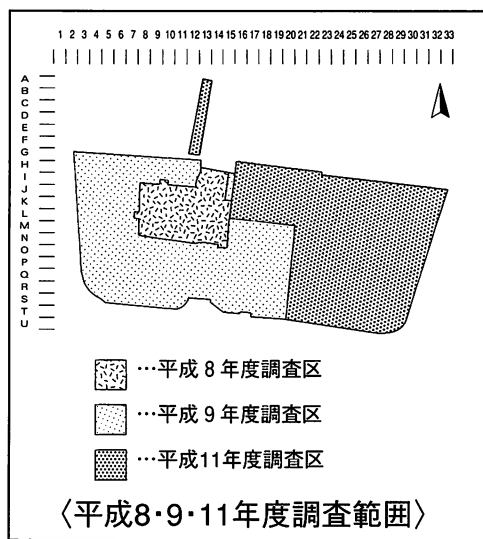
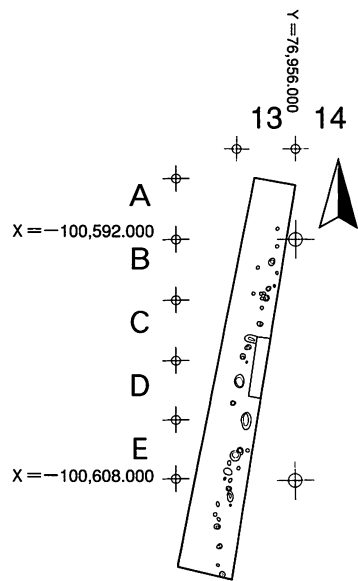
＜掘立柱建物跡＞ 調査区西側で柱あたりを伴う柱穴を20基検出した。規模・形状は開口部径が約100×120cm、深さ約100cm程の円形または楕円形を呈している。方1間の4本柱の建物を4棟把握している。

＜出土遺物＞ 縄文土器・石器は調査区全体で大コンテナ140箱、貝・獣骨は遺構内より大コンテナ20箱出土した。縄文土器は中期の土器を中心に後期、晩期のものがある。貝はアサリが主体、獣骨はシカやイノシシが主体である。時期は中期である。その他に黒曜石の剥片、琥珀、アスファルト、貯蔵剥片なども出土している。

3. まとめ

今回の調査で縄文時代中期から晩期の居住域の一端が確認された。遺構の占地は中期が調査区東側、後期が調査区南側、晩期が調査区西側に偏るようで、居住域の変遷が見られる。中期の集落については、その南西端を今回調査したもので、集落の範囲は、さらに北東側に広がるものと推定される。アスファルト、琥珀、黒曜石などの出土遺物は、など長谷堂貝塚と他地域との交易を考える上で貴重な資料を追加することができた。

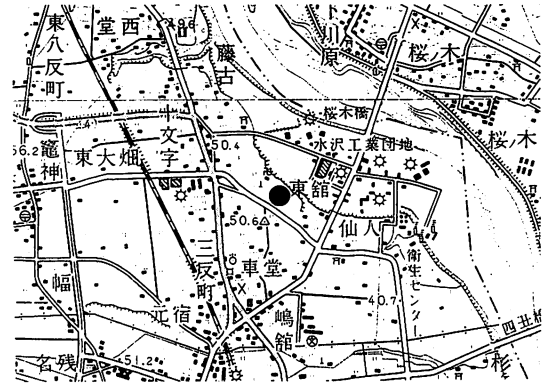
長谷堂貝塚遺構配置図



0 1 : 500 10m

(13) ^{ひがしだて}東館Ⅱ遺跡

所在地	水沢市佐倉河字東館地内
委託者	岩手県農政畜産課
事業名	家畜保健衛生所建設
発掘調査期間	平成11年4月9日～6月28日
調査対象面積	1,340㎡
発掘調査面積	1,340㎡
遺跡番号・路号	NE16-0315・HDⅡ-99
調査担当者	朝倉雄大・吉田 充
協力機関	水沢市教育委員会



遺跡位置

1 : 50,000 水沢・北上

1. 遺跡の立地

東館Ⅱ遺跡はJR東北本線水沢駅の北北東約3km付近に位置し、胆沢川により形成された胆沢扇状地における水沢高位段丘の末端に立地する。遺跡の東約1.5kmには北上川が南流している。遺構検出面の標高は49m前後である。

2. 調査の概要

検出された遺構は、竪穴住居跡9棟、竪穴状遺構2棟、円形周溝1条、土坑25基、溝跡5条、溝状遺構2条、堀1条、塀跡1条、掘立柱建物跡多数、柱穴列5条、集石遺構2基、柱穴764基である。

〈竪穴住居跡〉 調査区全体で9棟が検出された。時期は奈良時代中～平安時代に属するものと思われる。

〈円形周溝〉 平面形は馬蹄形に近い形状を呈し、3.8×3.6mの規模を持つ。時期は平安時代と思われる。

〈土坑〉 平安時代に属するものなど全体で25基検出された。平面形は円形が多い傾向にある。

〈溝跡・溝状遺構〉 大小合わせて7条検出された。中世が1条の他は、詳細な時期は検討中である。

〈堀跡〉 調査区の北西隅で検出された。断面形はV字状を呈し、規模は上幅約265cm、深さ約100cmである。

〈塀跡〉 断続的にはあるが検出長は約18mあり、布堀り部分に規則的な柱穴の配列を伴っている。

〈掘立柱建物跡〉 柱穴が764基検出されており、建物が多数存在していたものと思われる。堀跡及び塀跡との関連性を踏まえ、プランの検討および年代の検討を進めていく必要がある。

〈その他〉 柱穴列5条、集石遺構2基が検出された。集石遺構は比較的新しい時期のものと思われる。

〈出土遺物〉 土器は大コンテナ9箱分が出土している。大部分は奈良時代中頃～平安時代前半の土師器と須恵器である。陶磁器では明産染付磁器、常滑産や瀬戸・美濃産陶器等が、石器・石製品では石鏃、紡錘車、砥石、石包丁の未製品と思われるもの等が出土している。その他、鋳型、炉壁、埴埴（取瓶）など鋳物関連と思われる遺物も大コンテナ1箱強出土している。

3. まとめ

本遺跡は、古代及び中世を主体とした遺跡であることが分かった。特に中世については、掘立柱建物跡及び堀跡、塀跡、出土遺物から城館の様相の一端を窺い知ることができた。今後周辺遺跡との比較検討及び出



東館Ⅱ遺跡遺構配置図



SI 1 住居跡



SI 2 住居跡



SI 7 住居跡遺物出土状況



円形周溝



SB 1 掘立柱建物跡

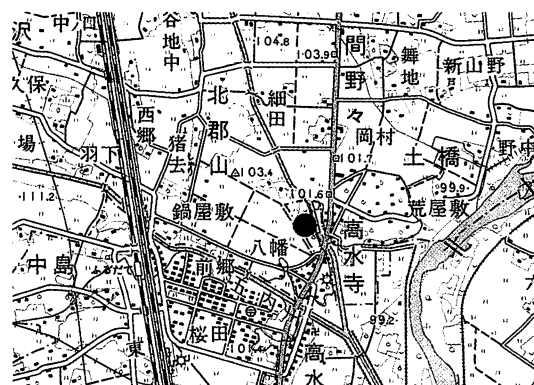


掘跡断面

東館Ⅱ遺跡検出遺構・出土遺物

(14) ^{いなむら} 稲村Ⅱ遺跡

所在地 紫波郡紫波町高水寺稲村32-4ほか
委託者 岩手県盛岡地方振興局土木部
事業名 岩崎川河川改修
発掘調査期間 平成11年5月20日～7月15日
調査対象面積 800㎡
発掘調査面積 800㎡
遺跡番号・略号 LE57-1039・IMⅡ-99
調査担当者 濱田 宏・小野寺正之
協力機関 紫波町教育委員会



遺跡位置

1 : 50,000 日誌

1. 遺跡の立地

稲村Ⅱ遺跡は、J R東北本線古館駅の東北東約1.5km付近、国道4号線三枚橋の西側に位置する。遺跡は、岩崎川と五内川に挟まれた場所にあつて、岩崎川沿いの自然堤防状の微高地に立地している。標高は100.3～100.5mと、調査区全域が平坦地となっている。調査前の状況は宅地である。

2. 調査の概要

今年度の調査は、平成8年・9年に続く3回目の調査で、本事業における発掘調査は今回ですべて終了した。3カ年の総調査面積は、8,780㎡である。

検出された遺構は、縄文時代の陥し穴状遺構16基、奈良時代の竪穴住居跡5棟、住居跡とほぼ同時期と思われる墓壇1基、時期不明の土坑3基・焼土遺構1基である。

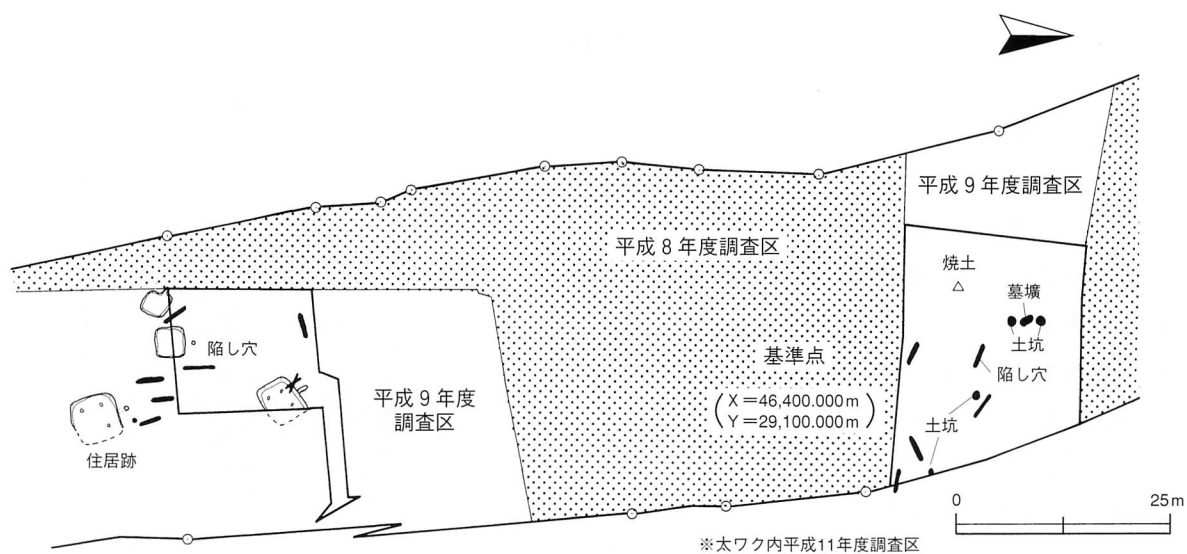
＜陥し穴状遺構＞ 今年度の調査では、底面中央に逆茂木痕を1個有する円形のもので2基確認された。それ以外の14基はいずれも溝状を呈する陥し穴である。前者の規模は直径80cm、深さ70cm、後者は長さ2.5～3.5m、深さ0.8～1.2mほどである。

＜竪穴住居跡＞ 5棟のうち1棟は、平成9年の調査時に精査途中となっていたもので、今回は新たに4棟検出された。いずれも、過去の調査例と同様、奈良時代（8世紀代）と思われる時期の住居跡である。規模は、一辺が4～5m前後ですべてカマドを伴うが、その設置される方向は西・北西・北壁のいずれかである。これらに重複関係は認められない。

＜墓壇＞ 長軸1.35m、短軸0.8m、深さ60cmの長楕円形で、土師器甕の破片を数点伴っている。主軸方向は、南北方向から約20°西に振れている。時期は、出土遺物から奈良時代（8世紀代）と考えている。

＜土坑・焼土遺構＞ いずれも時期不明のものである。遺物は出土していない。

＜出土遺物＞ 中コンテナ3箱の非ロクロ土師器と砥石4点、鉄製品では刀子・釘類が8点、土製品は勾玉・土玉・ミニチュア・紡錘車があわせて10点出土している。これらは、ほとんどが遺構内から見つかったものである。



稲村Ⅱ遺跡遺構配置図

3. まとめ

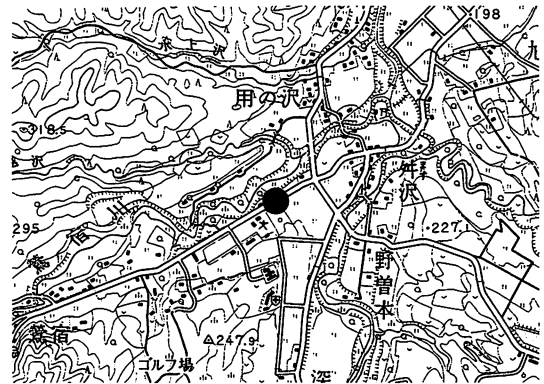
3カ年にわたる調査によって、この稲村Ⅱ遺跡は縄文時代には狩り場、奈良時代には「徳丹城」創建直前期の大集落であったことが明らかになった。今後さらに詳細な検討を加え、特に「徳丹城」との関連や出土した遺物から、他地域の集落との交流などについて明らかにしたいと思う。



稲村Ⅱ遺跡調査区全景

(15) ^{みなみ}南 ^{はた}畑 遺 跡

所在地 岩手郡雫石町南畑字南柘沢ほか
委託者 岩手県盛岡地方振興局土木部
事業名 一般県道盛岡鶯宿温泉線雫石町
鶯宿地区道路改良工事
発掘調査期間 平成11年4月7日～6月9日
調査対象面積 1,500㎡
発掘調査面積 650㎡
遺跡番号・路号 LE32-0148・MH-99
調査担当者 佐藤淳一・高木 晃
協力機関 雫石町教育委員会



遺跡位置 1:50,000 鶯宿

1. 遺跡の立地

南畑遺跡はJR田沢湖線雫石駅の南西約5.5km、鶯宿温泉の北東約2.5km、鶯宿川沿いの河岸段丘面に位置する。遺跡付近は標高約200mの平坦面となっており、北西側に40m程で鶯宿川に落ち込む段丘崖となる。発掘調査以前の状況は水田、宅地並びに原野であった。

2. 調査の概要

県道の両脇が調査区である。道路南側で約3×300m、北側は2×300mという細長い範囲となる。まず調査区内に4×2mのトレンチを計31カ所設定し、試掘調査を行った。その結果、調査区の中央部付近で遺構・遺物の存在を確認したため、中央部付近の約60mにわたる範囲を全面調査区として設定し、調査を進めた。なお、遺跡の北端と南端では全く遺構・遺物が確認されなかったため、全面調査は実施していない。

検出された遺構は、竪穴住居跡20棟、土坑46基、柱穴状ピット28基、掘立柱建物跡1棟、配石遺構2基、炉跡1基、溝跡1条である。調査区の幅が狭いことに加えて、切り合い・重複が多く、完全なプランを検出できた住居跡は少ない。遺構の時期は、出土遺物から判断していずれも縄文時代中期末葉と思われる。

＜竪穴住居跡＞ 平面形は円形または楕円形を呈し、規模は最大のもので径7～8m程度、最小のもので径2.5～3m程度である。検出された20棟のうち、半数の10棟において土器埋設炉を確認している。これらの中には1つの住居内に複数の炉を持つものや、埋設土器の周囲に円形に石を組んだいわゆる石囲土器埋設炉が見られる。また、2個体の土器を埋設している炉もあり、1つを正立させもう1つは斜めにした組み合わせが3基確認されている。また、埋設土器の内面には、2次焼成による焼けはじけを顕著に見ることができる。

＜土坑＞ 検出された46基のうち、半数近くの21基がフラスコ状土坑である。規模は径1.5～2m、深さ60～80cmのものがほとんどで、竪穴住居を切って掘られるものが多い。そのほかには、円筒状の土坑も見られ、フラスコ状土坑と同様に貯蔵穴としての機能を主とするものがある。また、楕円形を呈し土壇墓と推測されるものも道路北側で3基検出されている。

＜掘立柱建物跡＞ 1棟検出されている。調査区内では柱穴4基で構成される1間×1間の建物であるが、

調査区外に延びる可能性もある。各柱穴を結ぶと3×2.8mの長方形プランとなる。掘り方は、径約60～80cm、深さは80～90cmであり、柱痕跡から推定できる柱材の径は20～30cmである。住居跡を切って掘られる柱穴が多く、一段階新しい遺構と考えられる。いずれの柱穴の埋土からも同時期の土器片が出土している。そのほか、プランは成立しないものの、柱穴が多数見られることから、掘立柱建物が複数棟存在していた可能性が高い。

<配石遺構> 2基検出されている。ともに竪穴住居跡の上部埋土中より検出された。1号配石遺構下部には住居跡のほか、切りあった土坑も確認されている。2号配石遺構は径3mの半円状で、立石を伴い環状列石に類似する。ただし直下に竪穴住居跡が位置し、壁のプランと列石のプランが一致することから、住居の壁面に設置した石列の可能性もある。

<炉跡> 1基検出されている。フラスコ状土坑埋土上部にて埋石と隣接して埋設土器があり、現地性焼土を伴う。竪穴住居の炉の可能性もあるが、壁の立ち上がりや柱穴は確認できない。

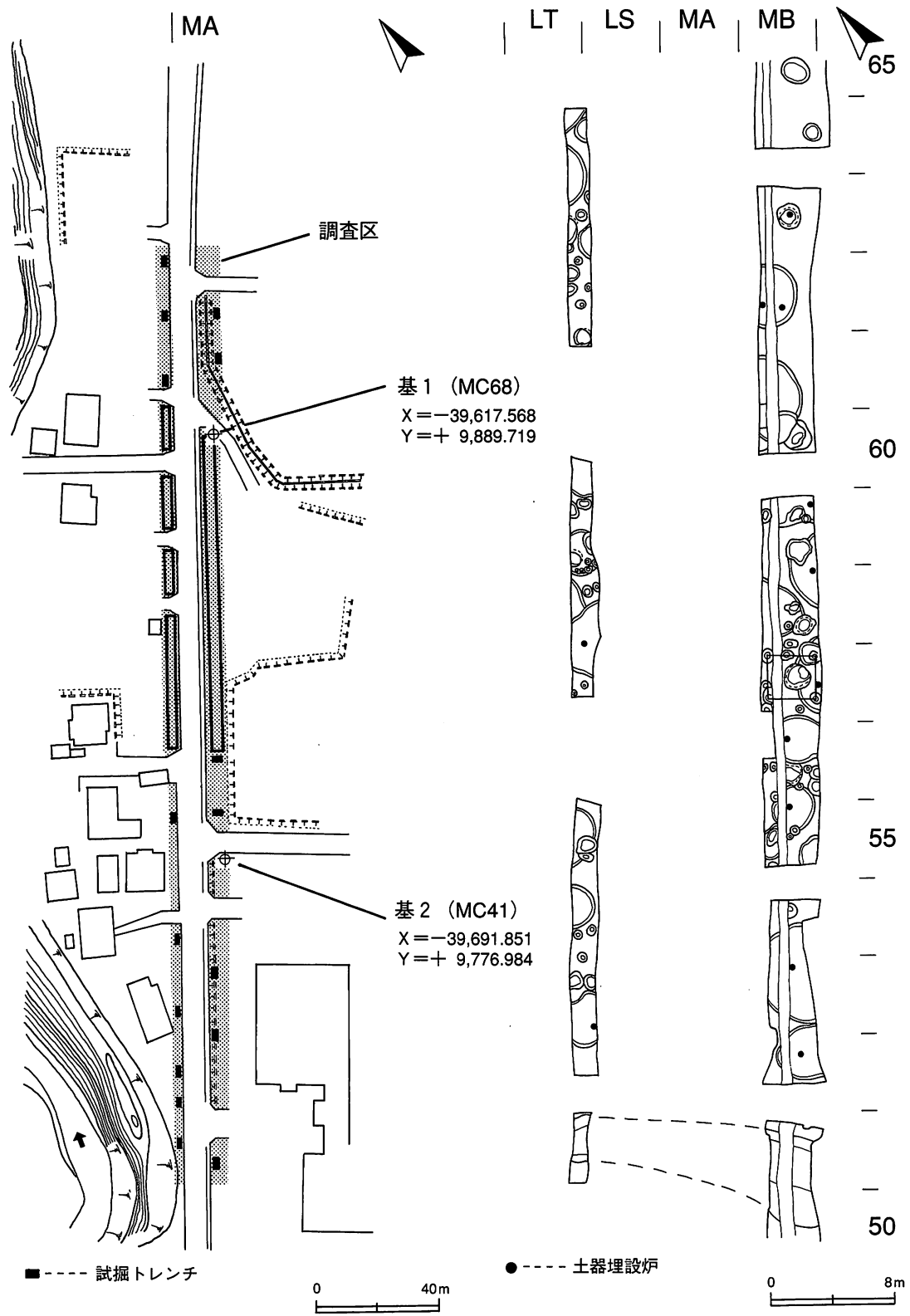
<溝跡> 道路の両側で溝跡（凹地状地形）を検出しており、道路を横断する一連の溝であると判断した。上端の幅は5～3m、下端の幅は広いところで2.5～2mとなっており、深さは最大80cmである。道路南側（MBグリッド区）では自然地形の凹地で特に手を加えられた痕跡は確認できない。北側（LTグリッド区）は一段深く掘削された状態であり、埋土上部には生出火山灰の堆積が見られる。この溝は遺構の集中する範囲の南縁にあり、これより南西側には遺物・遺構は見られないことから、居住域の境界として機能していたと考えられる。埋土下部からは土器片をはじめとする多くの遺物が出土している。

<出土遺物> 大コンテナ換算で土器は23箱、石器は22箱、その他（土製品、石製品等）約1箱の出土である。土器に関してはその文様ならびに形態等から、出土した全てが縄文時代中期末大木10式の後半段階に属する。石器に関しては磨石、凹石などの礫石器が約500点、剥片石器は約500点のうちフレイクがほとんどで、石鏃や石匙などの定形剥片石器は数十点と1割に満たない。土製品については円盤状土製品約50点、土偶2点、ミニチュア土器約20点がそれぞれ出土している。また、石製品では石棒4点、円盤状石製品2点、有孔円盤状石製品1点が出土している。

3. まとめ

今回の調査で確認された遺物は、その全てが縄文時代中期末葉の時期に該当するものであり、他の時期の遺構・遺物は含まれていないと判断した。したがって南畑遺跡は、今回の調査区に限って述べるならば縄文時代中期末葉の一時期に営まれた集落跡であると考えられる。遺構・遺物の出土した場所は調査区の中央部付近、延長約60mの範囲に集中しており、この南西側に隣接する溝跡によって境界が形成されている。このように、当時の居住範囲の外縁をなすと思われるラインが、わずかながらも明確になったことは、この時期の集落を考える上で重要であるといえる。また、遺構の切り合い・重複が比較的多いことから、短期間に当該地域において、幾度かにわたり、住居の建て替えや土坑の造り替えが行われたことも推測される。遺物に関しては、土器はその形や文様から、縄文時代中期末から後期へと変遷を遂げる過渡期にあたる様相が見られる。また石器は磨石、凹石などの礫石器類が非常に多い反面、剥片石器については石鏃や石匙などの定形剥片石器はごくわずかである。

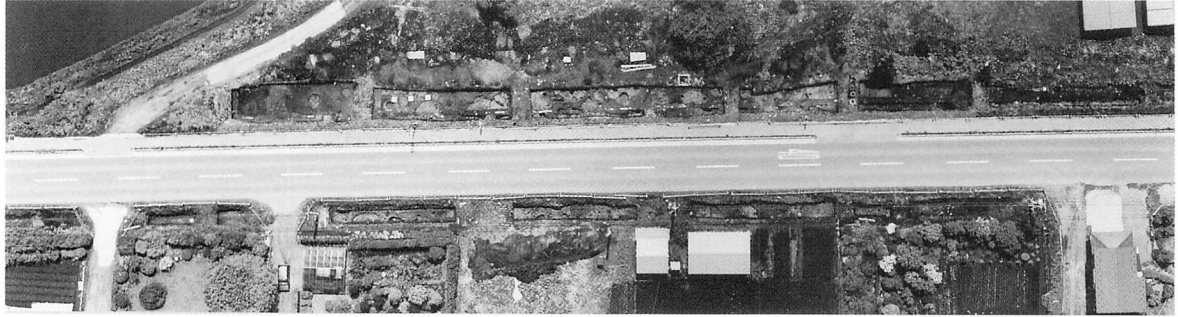
雫石川流域を含む北上川上流域においては、縄文中期末集落の調査事例が多いことから、他の遺跡との比較検討が今後の課題である。



調査区全体図

全面調査区遺構配置図

南畑遺跡調査区遺構配置図



調査区近景



遺物出土状況



土器埋設炉



フラスコ状土坑断面



竪穴住居跡

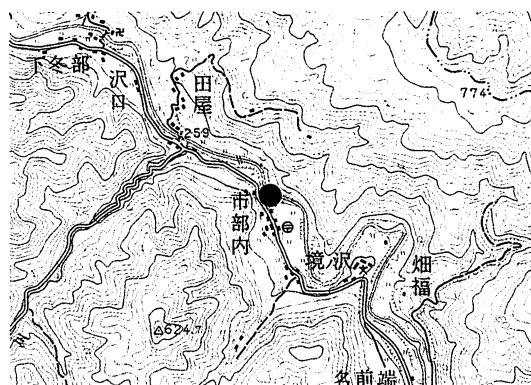


調査区の状況（中央に掘立柱建物跡）

南畑遺跡検出遺構

(16) ^{いちべない}市部内遺跡

所在地 岩手郡葛巻町田部字市部内30-1ほか
委託者 岩手県盛岡地方振興局土木部
事業名 県道一戸葛巻線市部内地区改良事業
発掘調査期間 平成11年6月1日～8月15日
調査対象面積 2,500㎡
発掘調査面積 2,500㎡
遺跡番号・略号 J F 52-1213・I B N-99
調査担当者 中田 迪・鳥居達人
協力機関 葛巻町教育委員会



遺跡位置

1 : 50,000 葛巻

1. 遺跡の立地

市部内遺跡は葛巻町内最北部に位置し、葛巻町田代地内の国道281号と一戸町小鳥谷地内の国道4号を結ぶ県道のほぼ中間に位置し、馬淵川の左岸の段丘上に立地しており、遺跡西側山麓から続く緩斜面の湧水を囲むように遺跡が広がっている。

川との比高は約10mである。

2. 調査の概要

遺跡は県道を含む旧宅地部分であり、調査区は、道路に沿ってほぼ南北に細長く続いている。北側から南側に向かいⅠ区、Ⅱ区、Ⅲ区、Ⅳ区、Ⅴ区と調査区を分けた。

Ⅰ区には遺構は検出されなかった。Ⅱ区では遺構遺物が多く確認された。Ⅲ～Ⅴ区は遺構が少なかった。

今回の調査で検出した遺構は、竪穴住居跡11棟、土坑類8基、埋設土器4基で時期は後晩期に限定される。

<竪穴住居跡> 調査区のⅡ区に集中して検出された。1号住居と13号住居は一部調査区外へ続いており全容は明らかでない。平面形はほぼ円形であると思われる。それぞれの住居は重複して検出された。

<土坑> 8基検出した。うち1基はフラスコ状土坑である。

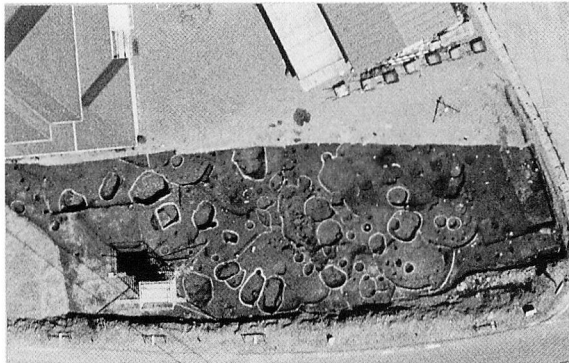
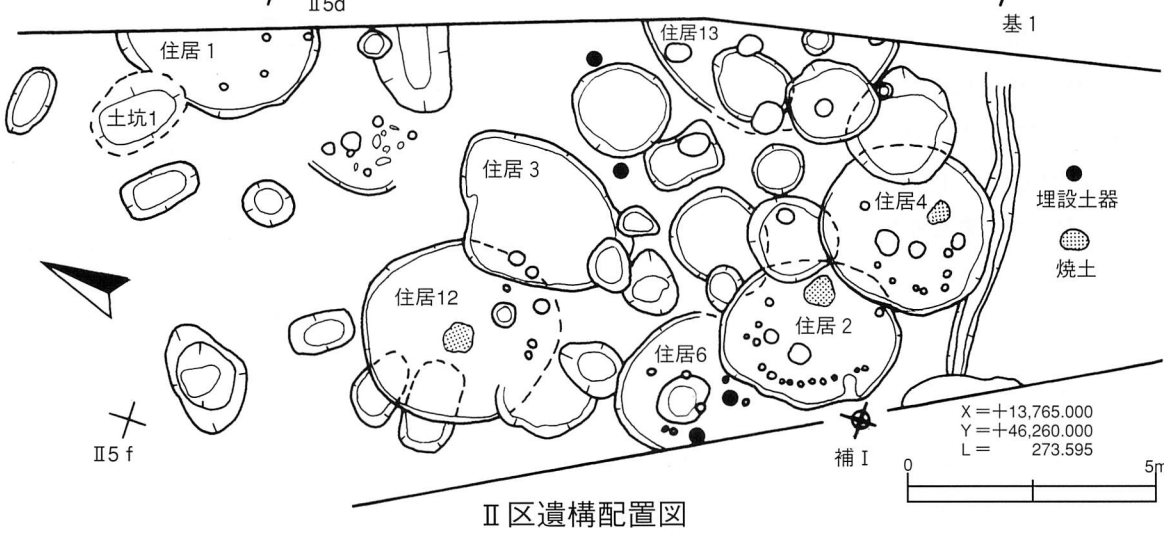
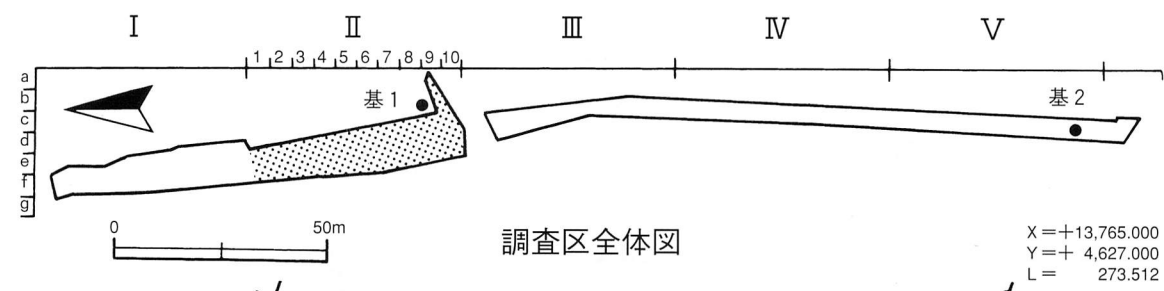
<埋設土器> 4基検出した。

<出土遺物> 縄文土器類大コンテナ箱20個、石器類コンテナ箱約5箱が出土した。石器は磨製石斧、磨石、凹石、石鏃、石匙などである。

3. まとめ

縄文時代後期末葉から晩期中葉の集落跡で住居跡や土坑が重複して検出された。

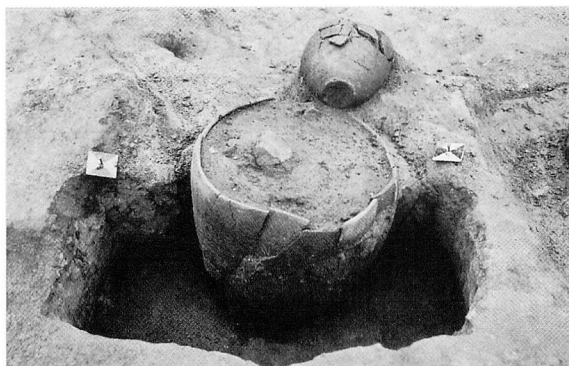
遺物は、縄文時代前期から弥生時代までであるが、遺構に伴出するものは縄文時代後期から晩期中葉のものが多い。検出遺構の配置は調査区のⅡ区とした北よりに集中している。一部は現在の県道の下にも続き、西側にも集落が広がっているようである。



II区全景



竪穴住居跡



埋設土器出土状況

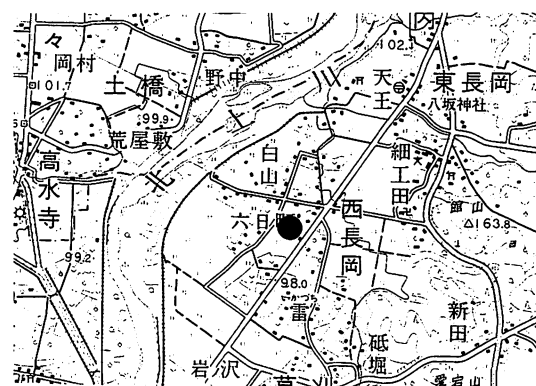


土坑

市部内遺跡検出遺構

(17) ^{にしながおかはせだ}西長岡長谷田遺跡

所在地 紫波郡紫波町西長岡長谷田39-1ほか
委託者 岩手県盛岡地方振興局
盛岡農村整備事務所
事業名 圃場整備事業長岡地区
発掘調査期間 平成11年7月16日～9月15日
調査対象面積 1,400m²
発掘調査面積 1,400m²
遺跡番号・略号 L E57-1360・NNH-99
調査担当者 中村直美・丸山浩治
協力機関 紫波町教育委員会



遺跡位置

1 : 50,000 日誌

1. 遺跡の立地

西長岡長谷田遺跡はJR東北本線古館駅から東方約3.1kmに位置し、南流する北上川の左岸に形成された河岸段丘上に立地する。遺跡の南東側には館山、愛宕山、五ッ森山等の小規模な丘陵が南一北に連なって位置し、その間には緩やかな谷地形が形成されている。調査区は北上川と南東側の丘陵に挟まれた微高地上にあり、標高は約98m、現況は水田及び一部畑地である。南西550mには沼田遺跡がある。

2. 調査の概要

検出した遺構は、平安時代の竪穴住居跡6棟、土坑1基である。出土遺物には土器（縄文晩期～弥生後期数点）、土師器、須恵器、土製品（土錘）等がある。調査区は造成工事の際の削平・攪乱の影響を20～70cm程受けており、遺構・遺物とも僅少であった南西側はこの影響によるものと考えられる。

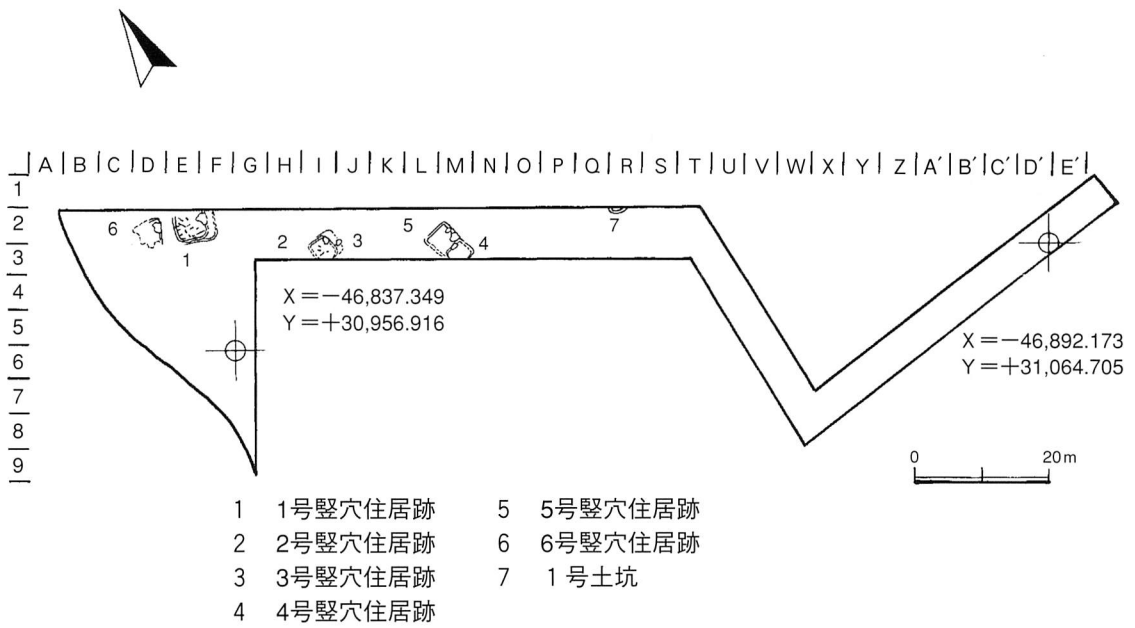
<竪穴住居跡> 調査区西側で6棟の竪穴住居跡を確認した。そのうち4棟は重複している。平面形は隅丸方形を基調とするもの5棟、攪乱を受け形状を把握できないもの1棟である。全般的に残存状態は不良で、カマドの方向が明確に確認できたものは1棟のみである。煙道の構造が確認できたものはない。

<土坑> 調査区中央部で1基検出した。北半部が調査区域外にかかっているため、全体の形状は不明であるが、残存部から推定して円形を基調としたプランを呈すると思われる。遺物が出土しておらず詳細は不明であるが、埋土から判断して平安時代の遺構であると思われる。

<出土遺物> 出土遺物は各竪穴住居跡から破片で出土しているが、耕作土中からも多く出土した。ロクロ成形の土師器甕、底部縁辺に再調整がなされた土師器杯・高台付杯、須恵器杯・甕・壺類が混在して出土している。時期は9世紀後半代～10世紀代のものと推測される。

3. まとめ

遺跡の地形は昭和30年代に行われた水田造成の際に改変されている。遺構は全て攪乱を比較的受けない北西側から検出されたが、残存状態は不良である。遺跡は出土した遺物等により9世紀後半～10世紀代に営まれた平安時代の集落跡の一部であることが明らかとなった。調査区のトレンチ断面からは酸化鉄の集積層が複数確認され、北上川の氾濫による水害を幾度も被った痕跡が認められた。



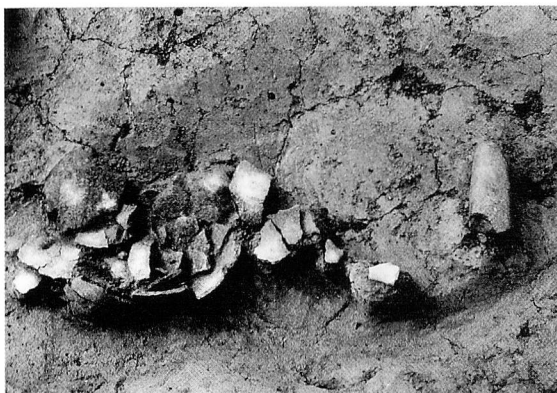
西長岡長谷田遺跡遺構配置図



竖穴住居跡



竖穴住居跡断面



遺物出土状況

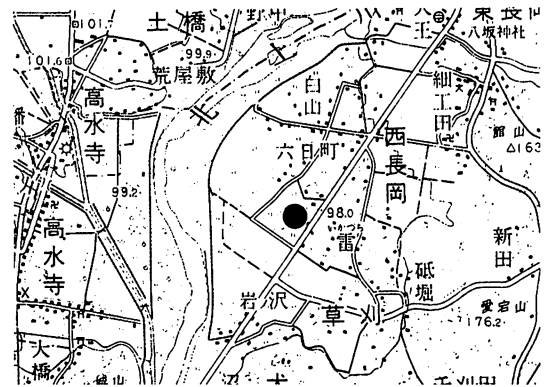


土坑

西長岡長谷田遺跡検出遺構

(18) 沼田遺跡

所在地 紫波郡紫波町犬吠森字沼田24ほか
委託者 岩手県盛岡地方振興局
盛岡農村整備事務所
事業名 圃場整備事業長岡地区
発掘調査期間 平成11年9月16日～10月25日
調査対象面積 900m²
発掘調査面積 900m²
遺跡番号・路号 L E 57-2272・NT-99
調査担当者 中村直美・丸山浩治
協力機関 紫波町教育委員会



遺跡位置

1 : 50,000 日誌

1. 遺跡の立地

沼田遺跡はJR東北本線古館駅から東方約2.8kmに位置し、南流する北上川の左岸に形成された河岸段丘上に立地する。遺跡の南東側には館山、愛宕山、五ッ森山等の小規模な丘陵が南—北に連なって位置し、その間には緩やかな谷地形が形成されている。調査区は北上川と南東側の丘陵に挟まれた微高地上にあり、標高は約97.5m、現況は畑地及び水田である。北東550mには西長岡長谷田遺跡がある。

2. 調査の概要

検出した遺構は奈良時代の竪穴住居跡6棟、土坑6基である。出土遺物には土師器、須恵器、礫石器(凹石・磨石)がある。調査区では以前、長芋・ゴボウの栽培が行われており、根による攪乱を受けている。

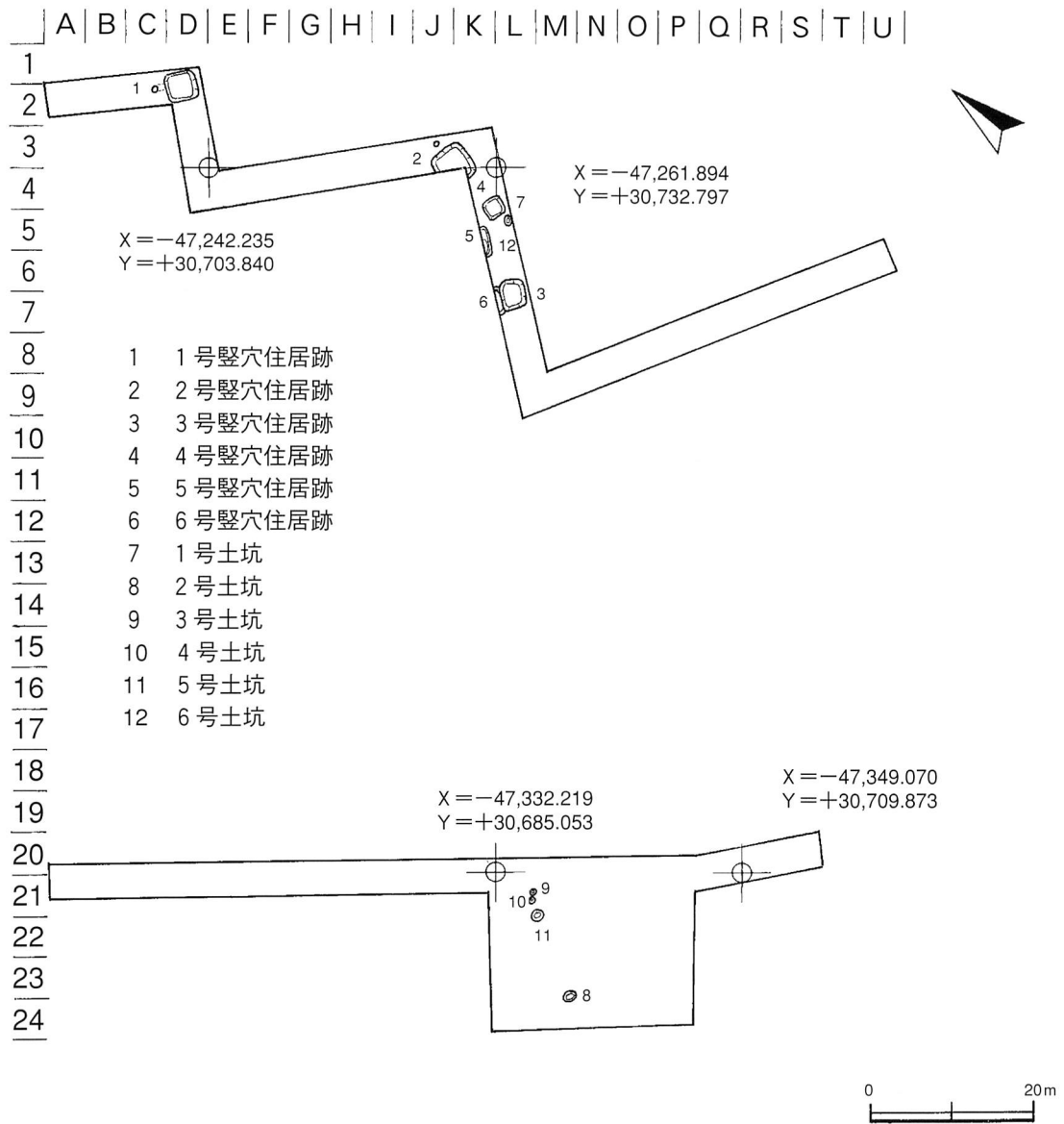
<竪穴住居跡> 調査区北側で6棟の竪穴住居跡を確認した。平面形は隅丸方形を基調とするもの3棟、攪乱を受けたり調査区域外にかかる為形状を把握できないもの3棟である。削平により全般的に残存状態は不良で、カマドの方向が明確に確認できたもの3棟、うち煙道の構造が確認できたものは1棟のみであった。

<土坑> 調査区南側を中心として6基検出した。形状は円形～楕円形基調で、底面全体に淡い焼土が形成されるものや、炭化材が検出されるものがある。時期を決定付けるような遺物が出土しておらず詳細は不明であるが、埋土から判断して古代の遺構であると思われる。

<出土遺物> 出土遺物は各竪穴住居跡から破片で出土しているが、耕作土中からも多く出土した。器種は土師器甕、土師器坏等であるが、ロクロ成形のものはない。また、竪穴住居跡床面より礫石器が少量出土している。時期は遺物の特徴から、8世紀代のものと推測される。

3. まとめ

遺跡の地形は昭和30年代に行われた水田造成の際に改変されている。竪穴住居跡は調査区北側、土坑は調査区南側で多く検出される傾向が認められた。調査区の南東を結んだエリアは遺構・遺物共確認されなかったが、これは自然堤防の凹地上にあたり、この影響を受けているためと思われる。遺跡は出土した遺物等により8世紀代に営まれた奈良時代の集落跡の一部であることが明らかとなった。トレンチの断面観察から、水成堆積砂礫層の大きなうねりが確認され、北上川の氾濫による水害を幾度も被った痕跡が認められた。



沼田遺跡遺構配置図



豎穴住居跡

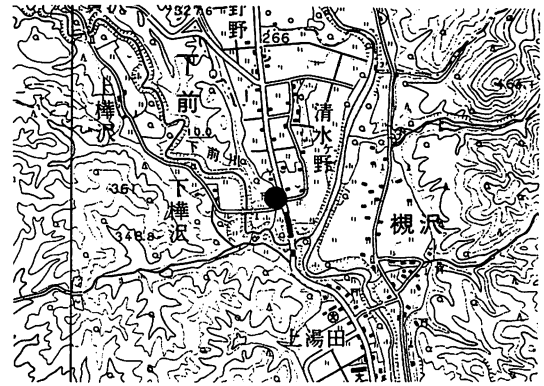


豎穴住居跡

沼田遺跡検出遺構

(19) ^{しみずがの}清水ヶ野遺跡

所在地 和賀郡湯田町湯本第18地割
委託者 岩手県北上地方振興局土木部
事業名 主要地方道盛岡横手線
新交流ネットワーク整備事業
発掘調査期間 平成11年4月13日～8月17日
調査対象面積 1,200㎡
発掘調査面積 1,200㎡
遺跡番号・略号 MD38-2212・SMN-99
調査担当者 千葉正彦・本多準一郎
協力機関 湯田町教育委員会



遺跡位置 1:50,000 六郷・新町

1. 遺跡の立地

清水ヶ野遺跡はJR北上線ほととゆだ駅の北西約5km、和賀川右岸の河岸段丘上に所在している。遺跡は沢内村境に程近い湯田町北部、和賀川と下前川によって形成された舌状の段丘南端に広がっている。調査区は中位段丘高位置面に載り、北緯39°21′30″、東経140°45′40″付近に位置しており、主要地方道盛岡横手線西側に隣接する南北約160m・東西約1～17mの範囲である。標高は海拔263～264m、和賀川との比高差は約20mで、現況は山林および宅地である。便宜上、調査区を3分割し、南から順にA～C区と呼称している。

2. 調査の概要

検出された遺構は、縄文時代の竪穴住居跡5棟・土坑33基・焼土遺構6基・土器埋設遺構3基、および時期不明の掘立柱建物跡1棟である。

<竪穴住居跡> B区で1棟、C区で4棟を検出した。B・C区ともに調査区が狭隘なため、全体の平面形・規模を把握できた住居跡はない。形態および出土遺物等から判断すると、所属時期は概ね縄文時代前期末葉と推測される。但し、C区26aグリッドで検出した石囲炉を有する1棟については、所属時期の検討を要する。検出された5棟中3棟（B区1棟・C区2棟）については、大形の竪穴住居跡である可能性がある。C区27aおよび29aグリッド付近で検出した2棟は、東側が調査区外に伸びており、西端部分を確認したのみであるが、いずれも東西に長軸線をもつ長形状の平面形を呈すると推測される。検出部分の規模は、それぞれ東西3.8m以上×南北5.2m、東西3.2m以上×南北3.5mを測る。2棟ともに、壁際には深さ15～35cmの壁溝が巡り、推定長軸線を挟んで対になるように主柱穴が配置され、推定長軸線上に地床炉が設置されている。2棟の埋土から多量の遺物が出土しており、住居廃絶後の凹地に土器・石器類を集中廃棄した様相が窺える。かかる2棟が同時期存在したものは不明であるが、埋土からの出土土器はいずれも大木6式の範疇に収まるものでそれほど時期差なく、2棟が並列気味に配置されていた可能性が高いと思われる。また、B区20a～24aグリッドで検出された住居跡も確認部分で東西1.8m以上・南北15.8m以上を測り、床面には

地床炉と思われる焼土が認められる。この竪穴住居跡もまた、C区の2棟とは軸線の異なる、南北に長軸線をもつ大形住居跡と推測される。

<土坑> 検出層位・出土遺物および埋土の様相等から判断すると、殆どが縄文時代に属すると思われる。円形または楕円形の平面形を呈するものが主体を占めている。具体的な用途については不明である。土坑はA区南側の4a・b・c～6bグリッド付近の約125㎡の範囲で、20基の土坑群が東西方向へ伸びる帯状に隣接・重複した状態で密に分布している。土坑群のうち最大のものは、楕円形状の平面形を呈し、開口部3.0×2.0m・深さ1.0mを測り、副穴4基を伴っており、埋土下位からは珧状耳飾り1点が出土している。また、この土坑を含む数基の埋土中位には、大礫が落ち込んでいる。かかる状況から、これらの土坑群には墓壙と推測されるものも含まれるが、確証を欠いている。

<焼土遺構> A区で5基、C区で1基を検出した。平面形は不整な楕円形を呈している。何れも遺物を伴っていないが、検出層位および周辺の出土遺物から判断して、縄文時代に属すると思われる。

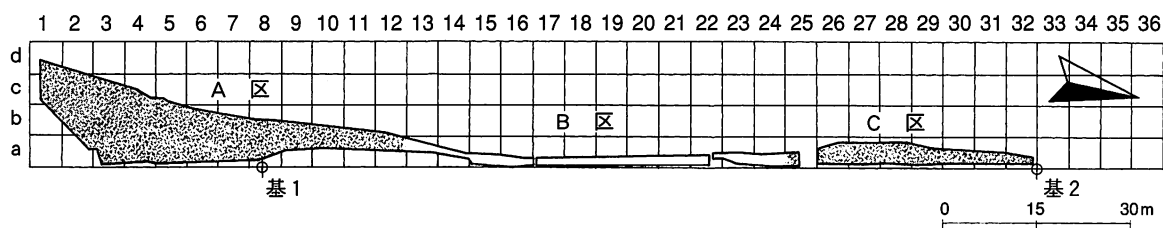
<土器埋設遺構> B区で1基、C区で2基を検出した。埋設形態は正立2基、倒立1基である。掘り方埋土および土器内からの出土遺物はない。構築時期は縄文時代前期末葉と推定される。

<掘立柱建物跡> 南北に軸線をもつ細長い建物跡1棟を検出した。梁行1間×棟行5間、東側に張り出し部が付随する。伴出遺物はなく、所属時期は不明である。

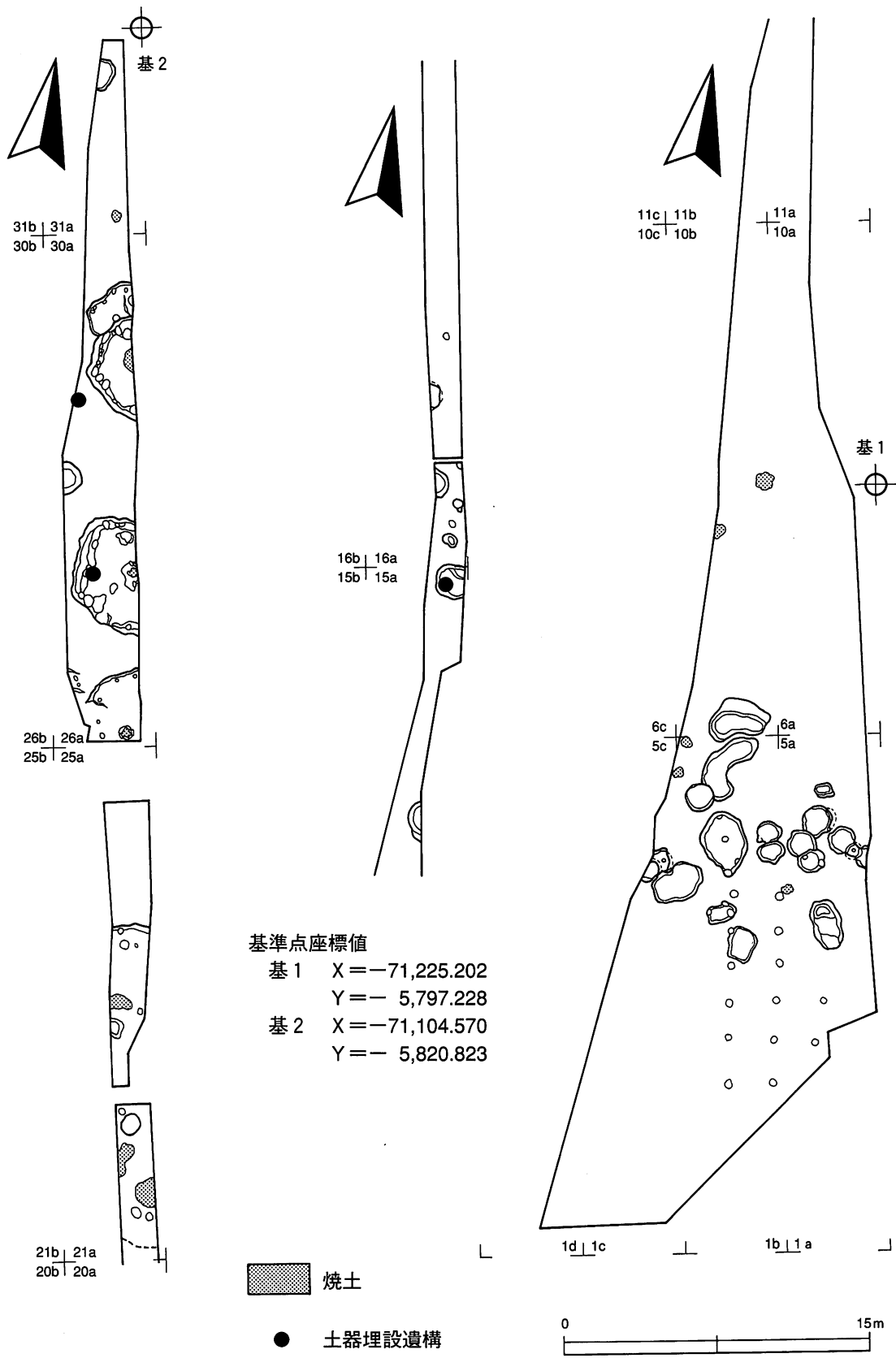
<出土遺物> 出土遺物の総量は、42×32×30cm規格のコンテナで約85箱である。遺物の内訳概数は土器50箱、石器類約2,600点、土製品3点、石製品40点、金属製品6点である。金属製品（寛永通寶・焼鏝等）を除くと、遺物の殆どが縄文時代に属する。出土土器は縄文時代前期後葉～中期初頭（大木5～7a式）と思われるものが出土したが、主体を占めているのは前期末葉（大木6式）に比定される土器群である。石器類では、石錘が340点と大きな割合を占める。また、多量の剥片・石核が出土している。一方、用途不明の土製品や、燕尾形石製品・珧状耳飾り・石棒等の石製品も出土している。

3. まとめ

今回の調査によって、調査区北部～中央部で縄文時代前期を主体とする竪穴住居群、調査区中央部・南部では土坑群が確認されたことから、本遺跡が縄文時代前期の集落跡であることが判明した。遺構の分布状況からは、19a～20aグリッド付近を境として、概ね北側に竪穴住居群・南側には土坑群が配置される様相が窺われ、集落の場の使い分けが存在していた可能性が考えられる。また、今回の調査では多量の剥片・石核類が出土している。石器製作に関連する遺構は確認できなかったが、本遺跡が石器製作過程に何らかの関連性をもつ場だった可能性がある。



清水ヶ野遺跡グリッド配置図



清水ヶ野遺跡遺構配置図



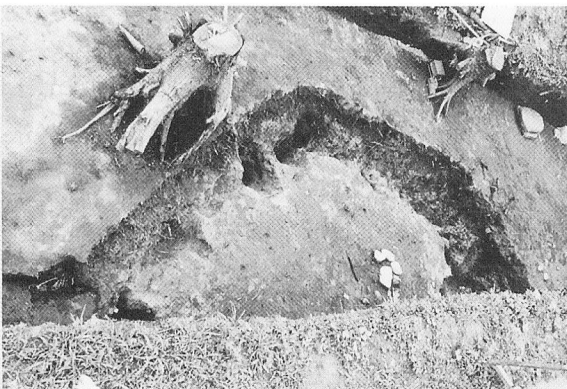
調査区全景（写真右が北）



竪穴住居跡（C区）



同左・遺物出土状況



竪穴住居跡（C区）



土器埋設遺構（B区）



土坑群（A区）



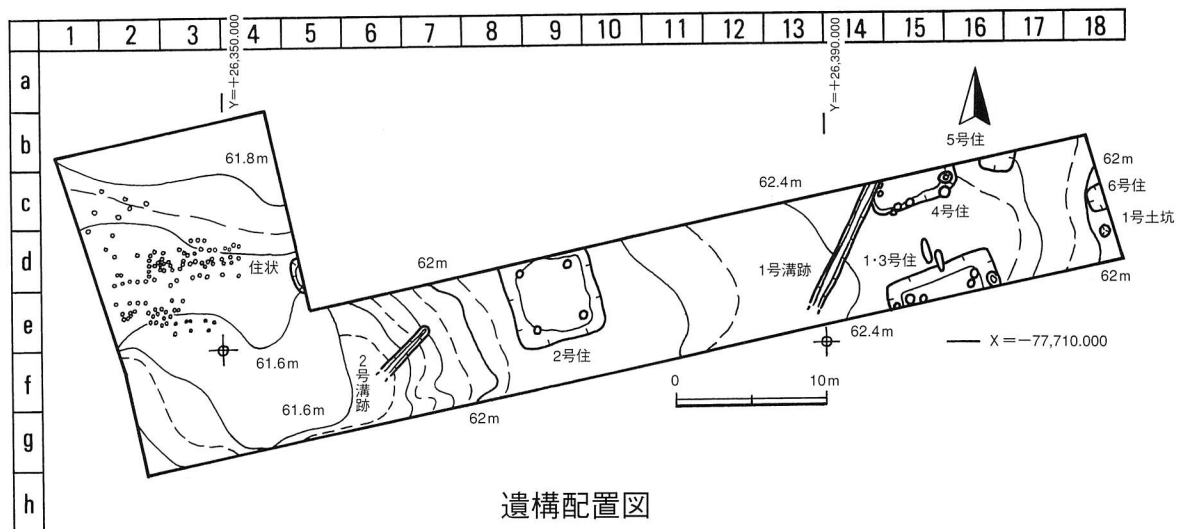
玦状耳飾り出土状況

清水ヶ野遺跡検出遺構・出土遺物

斜している。遺物は出土していない。

<出土遺物> 調査区西側は凹地を呈し、縄文中期と見られる土器片を、東側は西側より約1m高く、竪穴住居跡に伴って土師器や須恵器を出土する。

3. まとめ 本遺跡の周辺には奈良時代～平安時代にかけての遺跡が存在するが、本遺跡も同じ時期に営まれた集落跡と見られる。一部縄文時代の土器片も集中して出土する範囲もあり、その時期の集落跡が隣接している可能性もある。



遺構配置図



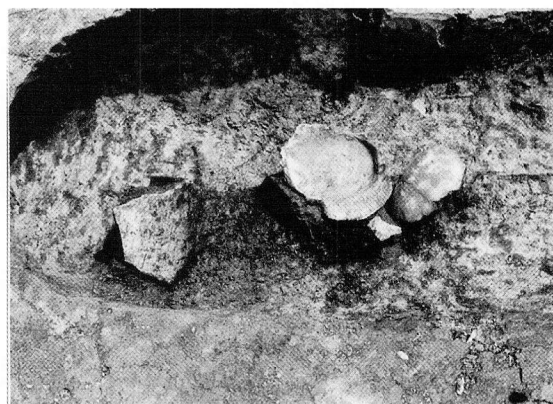
調査区全景



第1・3号竪穴住居跡



第一号溝跡

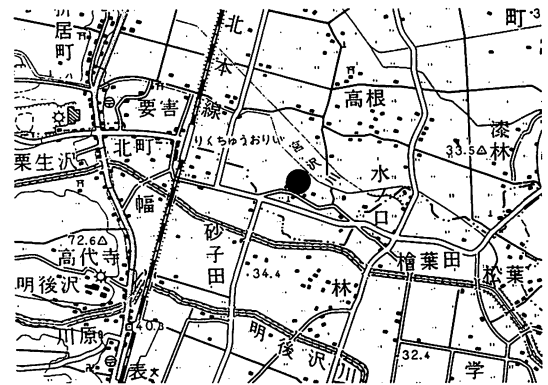


竪穴住居跡出土遺物

中居俵Ⅱ遺跡調査区全景・検出遺構・出土遺物

(21) 栗林遺跡

所在地 水沢市真城字八反町39他
委託者 岩手県水沢地方振興局
水沢農村整備事務所
事業名 担い手育成基盤整備事業
真城地区（圃場整備）
発掘調査期間 平成11年4月8日～6月7日
調査対象面積 1,600m²
発掘調査面積 1,600m²
遺跡番号・略号 NE36-2315・KB-99
調査担当者 半澤武彦・菅原靖男
協力機関 水沢市・前沢町教育委員会



遺跡位置 1:50,000 水沢

1. 遺跡の立地

栗林遺跡は、JR東北本線陸中折居駅の東約0.7kmに位置し、胆沢扇状地扇端部と、遺跡の東約2kmを南流する北上川が形成した河岸段丘面とにより複合して形成された微高地上にあり、標高は35m前後を示している。一帯は、周辺部を含め高低差がほとんど見られない平坦地であるが、調査区は若干の盛土が成されており、現況は休耕田またはそれを転用した畑地で、南端付近を水沢市と前沢町の境界線が通る。

調査区と接する西側には、中世末期から続いているとされる鈴木家の豪壮な屋敷地が広がっている。

2. 調査の概要

検出された遺構・出土遺物は、掘立柱建物跡や平安時代のものと推定される土坑や井戸跡、時代がそれぞれ異なる溝跡等が検出され、出土遺物は土坑からの須恵器片を主体として土師器片や陶磁器片、羽口及び鉄滓、旧水田跡からの蹄鉄等が挙げられるが、後年の耕作等による削平を受けた箇所が随所に見られる。

<掘立柱建物跡> 現在確認できているもので、調査区北端に計2棟検出されている。中央部にも柱穴及び柱穴状土坑が検出されているが錯綜しており、今後棟数が増えることも考えられる。

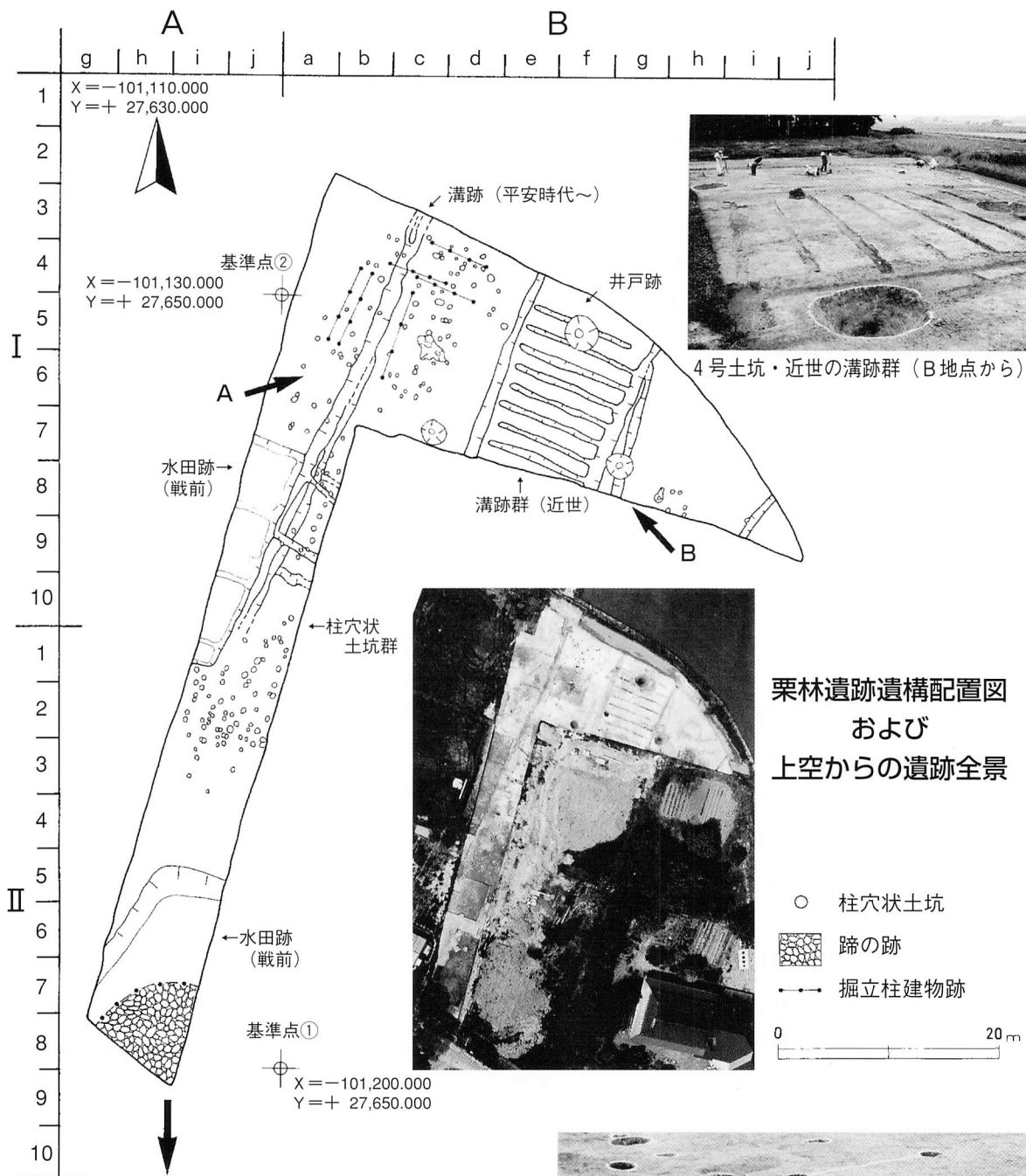
<土坑> 大小合わせて4基検出されているが、調査期間後半に追加された調査区から、不定形で規模の大きな土坑が現れ、一部溶解ガラス化した箇所がある羽口片や鉄滓、完形に近い土師器の坏や大型で厚みを持った須恵器片が出土している。

<井戸跡> 追加された調査区から、径約3m・深さ2.2mのほぼ円形をした井戸跡が検出された。底部付近はグライ化していたものの、井戸枠の跡らしきものは確認できなかった。なお、井戸跡上部の縁辺部から漆塗り椀の一部が出土している。

<溝跡> 南北の太い溝群は埋土等から平安時代のもの、規則的な北東の溝群は近世のものと推定される。

3. まとめ

遺跡は平安時代のものが中心であるが、中央と南端からは戦前の水田跡が見つかっており、錯綜し削平を受けた箇所が多い。井戸の規模や大型の須恵器等から、当時居住していた者の勢力を垣間見る思いがする。



蹄の跡 (戦前までの水田跡から検出)

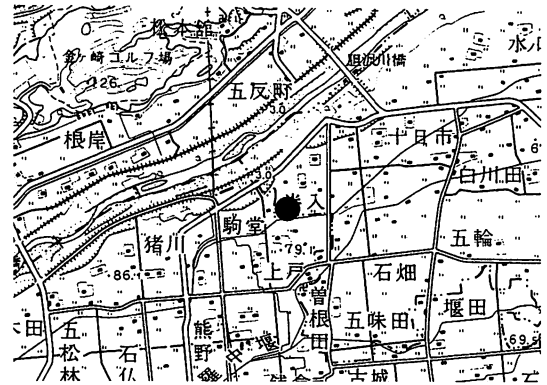


掘立柱建物跡と実測風景 (A地点から)

栗林遺跡全景

(22) なかはんにゅう 中半入遺跡

所在地 岩手県水沢市佐倉河字中半入ほか
委託者 水沢農村整備事務所
事業名 担い手育成基盤整備事業東田地区
発掘調査期間 平成11年6月7日～11月8日
調査対象面積 本調査1,410㎡ 範囲確認24,693㎡
発掘調査面積 本調査1,410㎡ 範囲確認 1,376㎡
遺跡番号・略号 NE15-0282・NHN-99
調査担当者 高木 晃・佐藤淳一・濱田 宏
本多準一郎
協力機関 水沢市教育委員会



遺跡位置 1:50,000 水沢

1. 遺跡の立地

中半入遺跡はJR東北本線水沢駅の北西約6kmに位置し、奥羽山脈から東流する胆沢川が形成した胆沢扇状地の北端、水沢段丘低位面に立地している。調査区の標高はおよそ75～78mの範囲で、現地形は西から東に向かい徐々に低くなる。なお、日本最北の前方後円墳として知られる角塚古墳は遺跡の南南東約2kmの位置にある。

2. 調査の概要

今回の事業に関わる調査は平成10年度から継続して行っている。調査対象範囲を1～6区に区分しており、昨年度は2～6区を調査した。その結果、4～6世紀を主体とする大規模な古墳時代集落、8世紀のいわゆる末期古墳、10世紀初頭の水田跡などが確認された。今年度は1区を対象とし、道路・用排水予定地の本調査、新規造成水田予定地の範囲確認調査を実施した。検出された遺構、遺物の概要を各時期毎に以下に記す。

<縄文～弥生時代> 縄文晩期、弥生前期、同後期の遺物が少量出土する。遺構は未確認である。

<古墳時代中期後半～後期> 中央部で方形区画を呈する濠跡を確認したほか、竪穴住居跡は本調査、範囲確認合わせて34棟を検出した。濠跡は調査範囲の制約で東西南北の各コーナー付近が判明したのみだが、全体では推定35m四方の正方形に近い形状となる。濠の幅は3～4m程度、深さ1.5～1.8mほどで断面が逆台形を呈する。また、濠の内側にはこれと平行して布掘りを伴う柱穴列が確認された。濠の出土遺物より区画の構築時期は5世紀後半と考えられる。区画内部では6棟の住居跡を検出したが、同時期の遺構は特定できない。

本調査区で精査を実施した住居跡は19棟である。内訳は5世紀後半～6世紀初頭が15棟、7世紀代が4棟となる。前者の規模は1辺4～7m程で半数近くにカマドと貯蔵穴を確認した。うち1棟は床面中央に地床炉を持ち、壁際に径30cm程の浅い方形ピットが複数設置されている。炉の周囲には数百点の黒曜石剥片が散乱し、分布域を変えて黒曜石製スクレイパー、鍛冶滓、炉壁片が集まる。工房的な遺構と考えられるが、地床炉、方形ピットの性格は不明である。

5～6世紀代遺構の上層では7層水田跡と称した埋没水田を確認した。西端では砂層に被覆された田面が残存する。他は上位層の攪乱を受けるが、耕作土は全域に広がる。3m程の小区画型水田で昨年度検出した

6区水田跡と一連のものと考えられる。年代は被覆層中の出土遺物より古墳時代後期の可能性が高い。

濠跡、住居跡内などからの出土遺物としては、土師器大コンテナ換算30箱、初期須恵器、琥珀製玉類、ガラス玉、石製模造品（有孔円盤）、黒曜石製石器群、鉄滓、馬歯などがある。

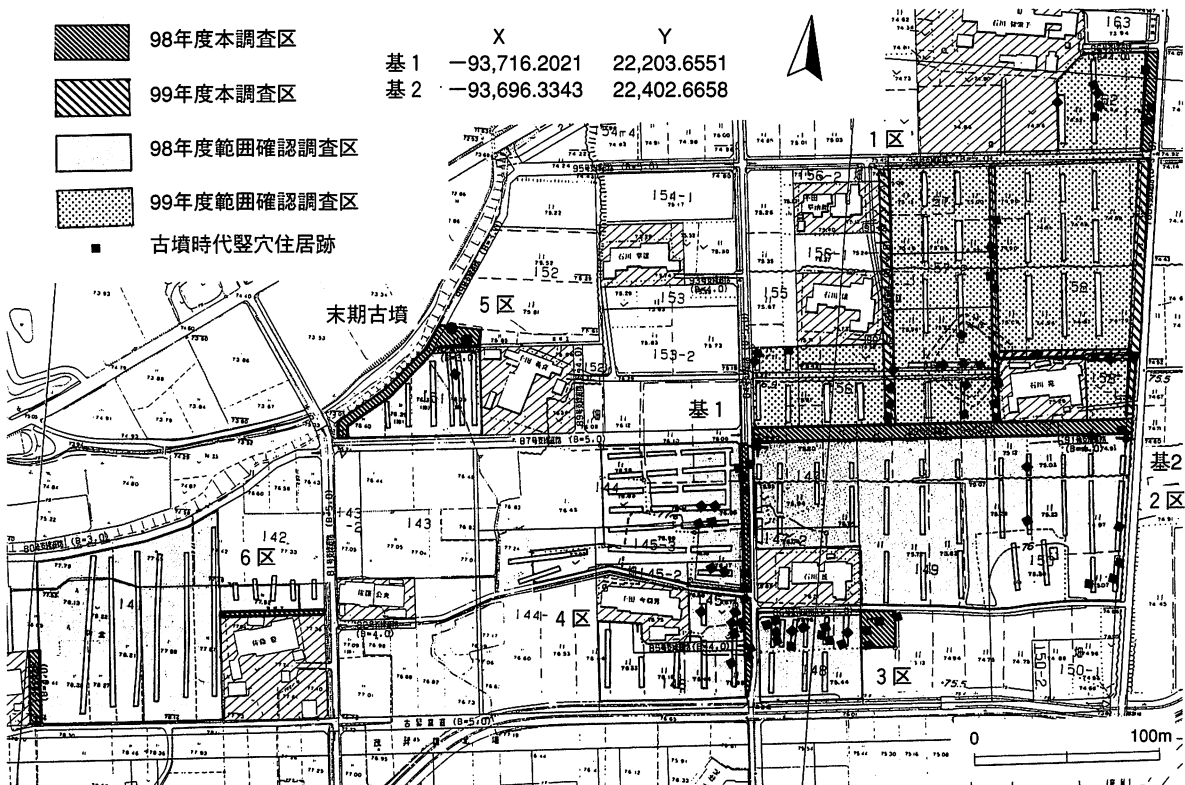
<平安時代> 調査区の南半では10世紀初頭の十和田a火山灰層に被覆された水田面（6層水田跡）を確認した。田面検出面積は約800㎡である。畦畔の基調方向は南西～北東が主となる。田面には人の足跡と見られる凹みが多数散在しており、一部に牛馬の足跡も含む。また北西側では幅3～4m程の水路を検出した。方向は南西～北東方向で、底面には杭列が残り多数の流木が残存する。

火山灰上位の水田跡（4層水田跡）は南西部、南東部で洪水堆積層に被覆されて田面が残存する。田面検出面積は約500㎡である。畦畔方向は6層水田跡と同様に南西～北東となる。一部は下位の火山灰層を除去して耕作されており、復旧作業の可能性がある。年代は上層の堆積土中出土遺物より10世紀代と判断した。

3. まとめ

昨年度の成果と合わせ古墳時代前期～後期にかけて継続的に営まれた集落の状況が判明した。竪穴住居跡は合計100棟余りを数える。特に5世紀後半段階では遺構数が増加し中央部に濠と柵列による方形区画が作られている。区画内の状況は不明な点が多くいわゆる首長居館とは断定できないが、ほぼ同時期の角塚古墳との関連は非常に高いものと考えられる。また出土遺物では須恵器、琥珀等の交易品や皮革加工に関わる多量の黒曜石製石器群、鉄滓・炉壁の出土など、流通や生産の拠点としての位置づけが可能である。

水田遺構は3面を確認した。7層水田は小区画が卓越し古墳時代後期の全国的な傾向に合致する。6層水田では水路状遺構を検出した。恐らく基幹水路の一部ではないかと思われる。ただし、調査範囲の制約や連続耕作による田面の攪乱等で、各水田跡の全体状況は必ずしも明確ではない。なお古墳時代中期集落に伴う水田域は未確認だが、隣接する地域に展開していたものと思われる。



中半入遺跡全体図



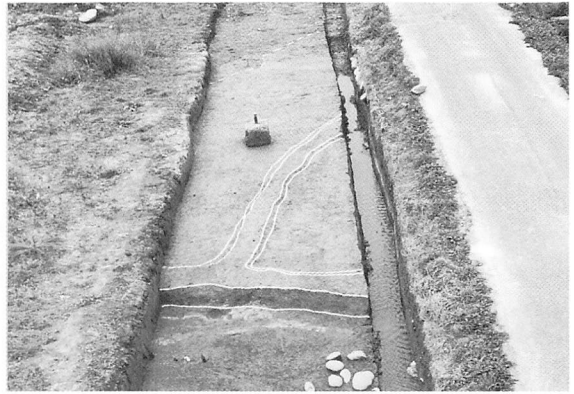
中半入遺跡 1 区 古墳時代遺構配置図



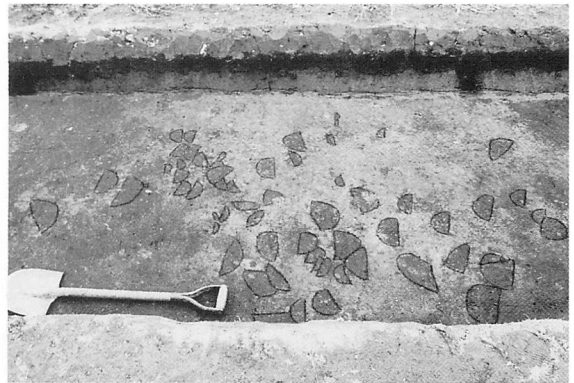
中半入遺跡 '99年度調査区全景



6層水田跡



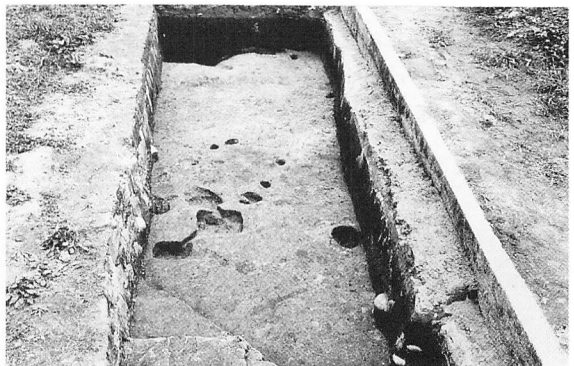
4層水田跡



7層水田跡下面耕作痕



濠跡



住居跡（工房）



5C代住居跡遺物出土状況

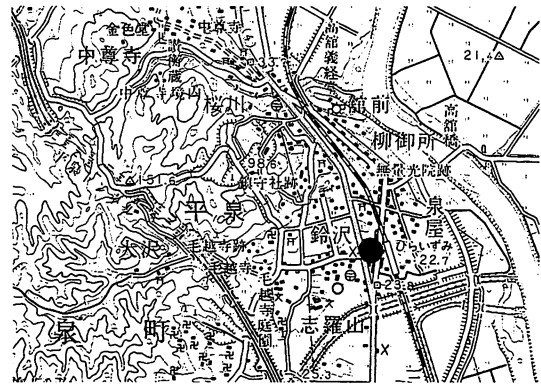


7C代住居跡カマド

中半入遺跡検出遺構

(23) 志羅山遺跡第80次調査

所在地 西磐井郡平泉町平泉字志羅山6-2他
委託者 岩手県一関地方振興局土木部
事業名 都市計画街道路毛越寺線
発掘調査期間 平成11年4月9日～8月4日
調査対象面積 766m²
発掘調査面積 766m²
遺跡番号・略号 NE-76-1088・SY-99-80
調査担当者 酒井宗孝・安藤由紀夫
協力機関 平泉町教育委員会



遺跡位置

1 : 50,000 一関

1. 遺跡の立地

志羅山遺跡は平泉町市街地の南部に位置し、総面積は約18万9千m²に及ぶ。遺跡の立地する地形は標高24～23mの洪積段丘面で、その大部分が宅地である。今回の調査区は、県道毛越寺・巖美溪線の東端部北側で、旧地表面は緩やかに東に傾斜している。

2. 調査の概要

志羅山遺跡はこれまでに太田川築堤事業、国道4号整備事業、毛越寺街路整備事業及び個人住宅建築等に伴い、町教育委員会と当埋蔵文化財センターによって79回の調査が行われ、東に隣接する泉屋遺跡(今年度第19次)と共に奥州藤原時代の「都市平泉」を考察する上で貴重な資料を多数提供している。

今回の調査で検出された遺構は竪穴住居跡1棟、道路跡1条、溝跡7条、土坑10基、井戸跡4基、埋納遺構3基、柱穴141個等である。竪穴住居跡と土坑1基、溝跡2条の他は、12世紀代の遺構である。なお、調査区東側は小規模な沢地形となっており、この部分には遺物包含層が形成されていた。

<竪穴住居跡> 道路跡内の南東部から検出された。南東隅部分と煙道・煙出し部を東側道路側溝に、床面中央部を土坑に切られている。上端部での規模は3.5×3.9m、深さ約50cmの長方形を呈し、軸方向は東から約10°北に傾く。壁に沿って幅25～45cm、深さ10cmの小溝が巡るが、検出位置や埋土の状況から推定して道路側溝を挟んで検出された溝に続く可能性が高く、所謂「外延溝」の形態を持つものと考えられる。なお、住居跡では埋土の下部に、溝跡では上部に十和田a降下火山灰の堆積が見られた。出土遺物から9世紀代の遺構と考えられる。

<道路跡> 平成9年度の第66次調査で確認された遺構で、今次調査の成果を合わせた確認部の総延長は約300mとなる。南端部は太田川北岸をほぼ東西に走る大溝に接続し、ここから約200mは真北方向に向かい、以北100mでは約11～18°東に傾く。調査区以北は未確認であるが、この角度で北に延長すると無量光院の東辺に接する方角である。東西に側溝を伴い、西側側溝は幅0.55～1.3m、深さ3～60cm、底面の比高は約20cmで南側が深くなっている。東側側溝は幅1.3～2m、深さ70～90cm、南北の比高は約65cmである。いずれも埋土の状態から少なくとも1回の掘り返し(改築)が行われていることが確認された。2条の溝に挟まれた

部分が道路面で、溝の改築前の段階では幅(溝中央部までの距離)は約10mで平行しているが、改築後は南半部が9~8.5mと狭くなっている。路面の断面形は中央部がやや高く東西に向かって僅かに下がる緩い蒲鉾形を呈する。また、南半部ではいくぶん砂質の土によって整地(舗装)が行われており、改築前の古い溝を覆うほか、前述の住居跡の埋土上部はこの整地土層から構成されている。

<溝跡> 道路側溝のほかに7条検出された。東端部で発見された溝は、現在の県道中尊寺線と平行していることや、周辺から寛永通寶が出土したことなどから近世奥州街道に伴う側溝の可能性はある。なお、前述の「外延溝」を除く5条は、出土遺物や重複関係から12世紀の遺構である。これらの内調査区南西隅から検出されたものは、上部を道路跡に伴う整地層土によって埋められていた。方向は道路跡と直行しており、この道路跡に先行する道路側溝または、町割のための区画溝の可能性はある。

<土坑> 用途が推定できるものはないが、開口部直径1.6m、深さ1.2mの比較的規模の大きな1基は井戸の可能性はある。なお、道路跡内から検出された1基は、出土遺物から平安時代の遺構と考えられる。

<井戸跡> いずれも素掘りの井戸で、開口部直径2.2~1.3m、深さ2~2.6mと小規模である。

<柱穴> 周辺部のこれまでの調査では、道路跡の西側には建物跡を構成するような柱穴群が検出されているが、東側では希薄になる傾向が窺われる。今回の調査区でもこの傾向が確認され、中央南側で一部集中する区域があるものの、そのほかの部分では疎らな分布である。なお、道路跡中央南側で検出された4基は、小規模な橋脚(木道)の可能性はある。

<埋納遺構> 埴塙と漆器碗を地中に埋め込んだものを埋納遺構とした。埴塙は完形品を正位に2個重ねた状態のものと、柱穴状小土坑に大型破片を埋めたものがある。漆器碗は柱穴状土坑の底面から完形品が検出された。いずれも出土状態が人為的であるため、何らかの儀礼等に係わる遺構と考えられる。なお、中国製青磁碗の大型破片が出土した柱穴状の小土坑もあり、これらも同類の遺構の可能性はある。

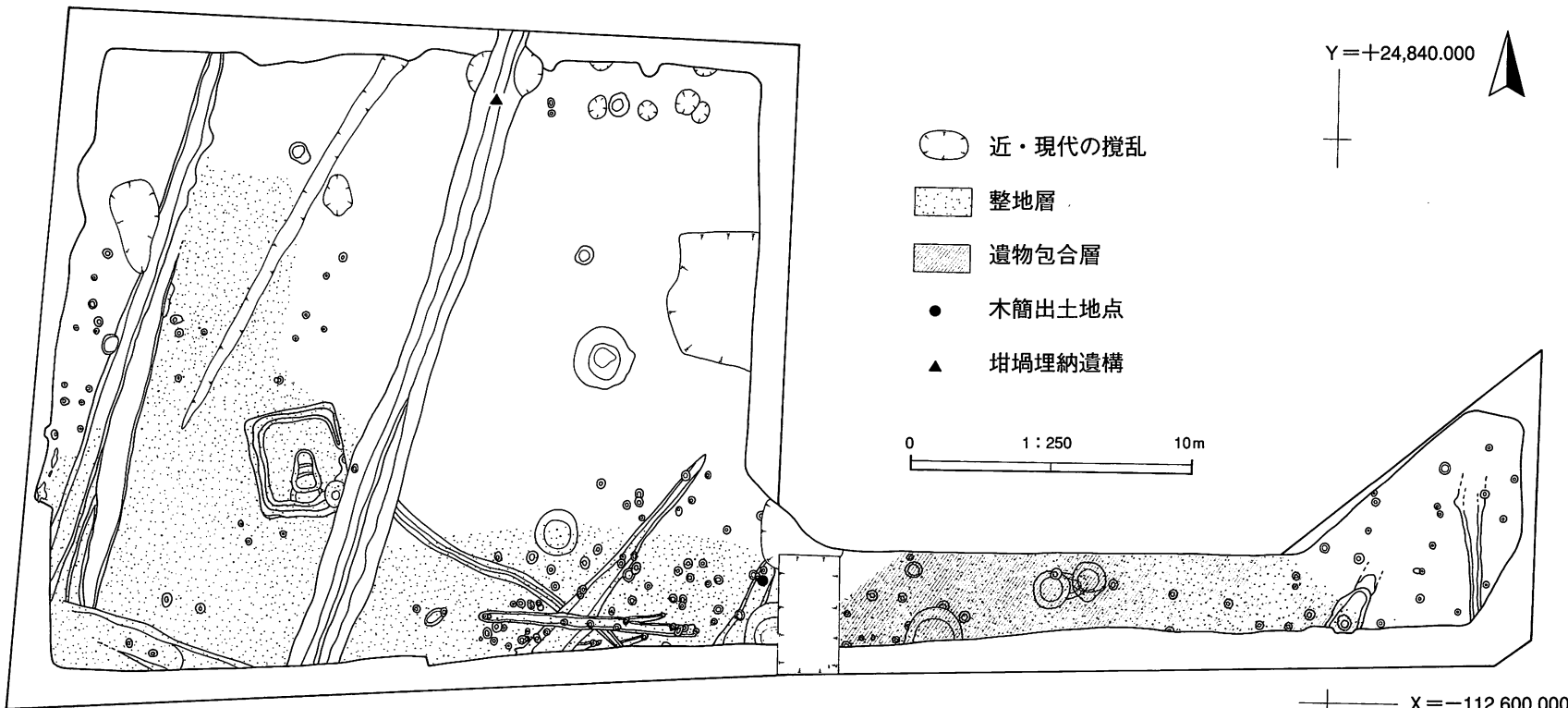
<遺物包含層> 調査区東側は沢状の窪地になっており、約50m²が12世紀の遺物包含層となっていた。南側に緩く下がる斜面で、土器・陶磁器のほか埴塙や羽口、鉾滓(多くは銅滓)及び木炭等の鋳物関連遺物が出土した。特に鋳造関連遺物が多く出土しており、埴塙埋納遺構の存在からも周辺部(北側)には工房跡の存在が予想される。包含層は最大60cmの層厚を持ち、層中には数層の整地層が確認された。

<出土遺物> 遺構内外及び包含層から土器・陶磁器、木器・木製品、土製品、石器・石製品、金属器が出土している。土器・陶磁器には土師器、須恵器、かわらけ、国産陶器、中国産磁器がある。かわらけにはてづくね製とロクロ製があり、出土量はてづくねが卓越する。国産陶器には渥美産、常滑産、須恵器系があり、量的には渥美産がいくぶん多い。中国産磁器は少ないが白磁・青磁の碗、青白磁の合子が出土している。木器・木製品には用途が不明なものも多いが、主に道路側溝と井戸跡から人形の首(形代)、笹塔婆、折敷や曲げ物の底板、刃物類の柄、火きり弓などが出土している。なお、道路跡東側側溝からは良好な文字資料2点が得られた。1点は折敷の底板に漢字が墨書されたもので、「一 二 三? 四?」と読める。もう1点は「トヤカサキノニヨウホウキヤウ(ノ)イシヲ(ハ) ケチエンニモタセタマフヘシ イツカノ ヒヨリシウハチニチニウツ(ニ)シタマフナリ」の片仮名五十五文字が墨書された木簡である。内容は現在検討中であるが「結縁を行うに当たって、礫石経を持ってきてほしい」との依頼文の可能性はある。

3. まとめ

今回の調査区は766m²と狭いものであったが、道路跡東側で発見された鋳造関係の遺構・遺物は、藤原氏時代の都市計画を考察する上で貴重な資料の追加となった。また、文字資料の検討は当時の宗教的生活の様子を解明する一助となるものである。

志羅山遺跡第80次調査区遺構配置図





調査区全景



竪穴住居跡



木簡出土状況



道路跡

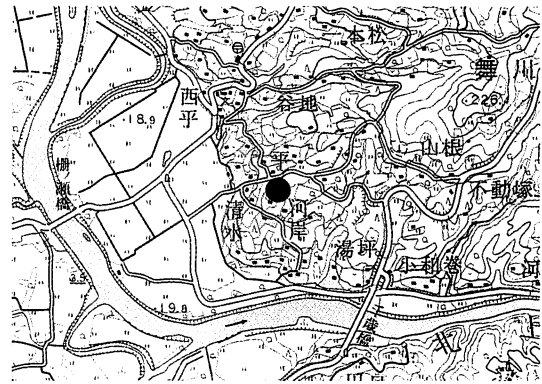


罎埇埋納遺構

志羅山遺跡第80次検出遺構・出土遺物

(24) 清水遺跡

所在地 一関市舞川字河岸122-1ほか
委託者 岩手県一関地方振興局土木部
事業名 一般県道薄衣舞川線建設
発掘調査期間 平成11年4月15日～11月12日
調査対象面積 7,938㎡
発掘調査面積 10,873㎡
遺跡番号・略号 NE87-1199・SZ-99
調査担当者 村上拓・江藤敦
協力機関 一関市教育委員会



遺跡位置

1 : 50,000 一関

1. 遺跡の立地

清水遺跡はJR一関駅の北東約4.7km、同山目駅の東北東約3.8kmに位置し、狐禅寺狭窄部に臨む北上川左岸、北上山地西縁の山麓緩斜面上に立地する。北上川に向かって美しく裾を延ばす観音山を北に眺め、西の眼下には曲流する北上川の両脇に沖積平野が広がる。平野をとりまく磐井丘陵の奥には遠く奥羽山脈の山々が連なり、目前に展開するダイナミックな地形のパノラマはまさに天然の展望台に立った感を抱かせる。調査区は10年度に柱穴群が検出されたC3区との南隣接区をC4区とし、今も湧水に富む沢跡を挟んで別の尾根となるさらに南側の区域をD1・D2区とした。調査前は主に畑地・山林として利用されていた。

2. 調査の概要

清水遺跡の調査は平成10年度より計16,000㎡の範囲を対象として開始され、10年度には8,062㎡を終了した。

今年度は未了分7,938㎡を対象に調査を再開したが、調査の過程で遺構の分布が当初予定した区域よりも南方に広がることが判明し、この部分を拡張して計10,873㎡の調査を行った。その結果、2ヶ年の総調査面積は18,935㎡となった。

10年度調査では、調査区北端部の谷に形成された縄文時代中期末葉～後期初頭の「捨て場」が検出され、廃棄土層と自然堆積層が幾重にも重なる良好な状態で大コンテナ500箱余（7ト弱）の土器が出土した。また、捨て場の縁辺に沿って形成された大規模な帯状焼土遺構も特徴的であった。一方、調査区中央部の緩斜面上では方形・円形の掘立柱建物を構成すると目される柱穴が多数検出され、この隣接区域を対象とする11年度調査では、集落構造のより詳細な把握が期待された。以下、11年度調査の成果についてその概要を記す。

<検出遺構・出土遺物> 11年度調査で検出された遺構は、縄文時代に属するものとして、柱穴約400基、竪穴住居跡5棟、住居状遺構1棟、土坑30基、土器埋設遺構2基、陥し穴状遺構1基、平安時代の竪穴住居跡1棟、近世墓壇6基、時期不明のものとして、鍛冶炉状遺構1基、周溝状遺構4条である。遺物は縄文時代中期末～後期初頭の土器（門前式前後・約30箱）を中心に、石鏃・石斧・敲磨器類等の石器（2箱）、平安時代の住居跡から土師器坏・土師器甕・須恵器片（1箱）が出土した。遺物量が圧倒的であった10年度調査に対し、今年度は集落の中心部となる居住域の遺構精査が主な内容となった。

<半截木柱痕をもつ大形円形建物跡> 10年度調査区（C3区）とC4区との境界部で、直径約13mの環状柱穴列が検出された。柱穴の多くは直径1m前後で、他の建物と比して極端に大きい。特筆すべきは柱穴内部に検出された半月～三日月形を呈する柱痕跡である。木質部の残存するものは無かったが、柱痕跡から推定される柱材径は大きいもので50cmを超え、裁断面（弦面）が環の外側を向く傾向が認められる。類似遺構としては石川県金沢市新保本町チカモリ遺跡・同県能都町真脇遺跡（縄文時代後期末葉～晩期初頭・環径約5～8m）など北陸地方の例が著名で、その上部構造について覆屋の有無が論点となっている。本遺跡の当該遺構について調査担当者としては、①溝状の掘りくぼみが対になる出入口状施設を西側にもつこと、②柱底部に礎石をもつこと、③掘り方底面より柱底を浮かせ柱頭部をそろえた可能性がある柱穴が含まれること、などから「建物跡」と考えたい。柱穴および建物全体の規模が他のそれよりも大きく、また、周囲の別の建物跡と重複することなく同位置に数度の建て替えが行われていることなどから、集落内において一般住居とは性格を異にするシンボリックな存在だったと推定される。いずれ、前掲の北陸地方の例とは時期・規模も異なり軽々には同列視できないが、類似点を手がかりにより詳細な検討が必要となろう。

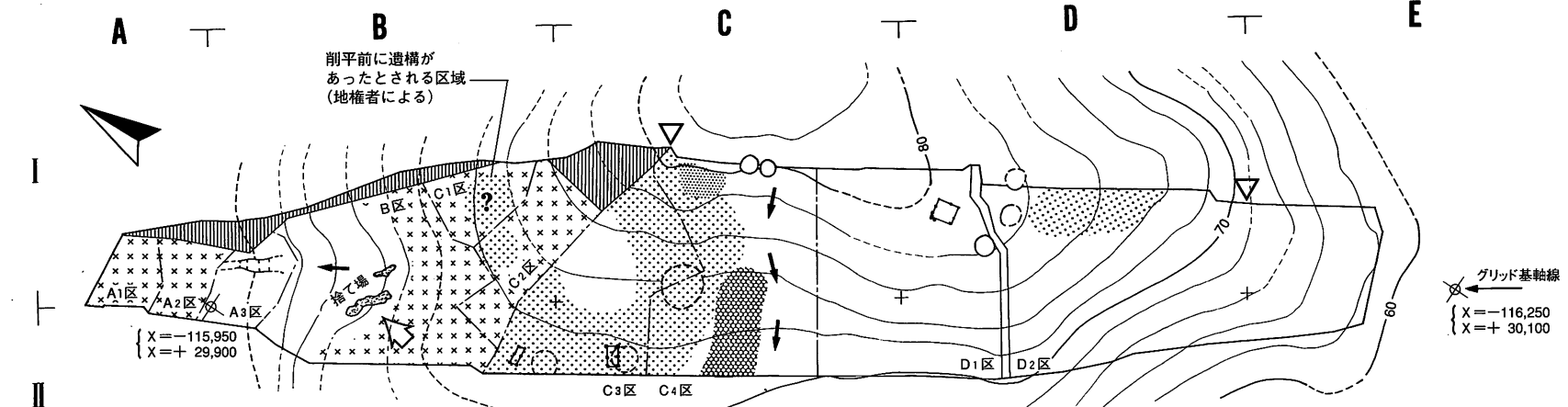
<竪穴住居跡> 調査区内で最も高い区域にあたるC4区東縁部とD1・D2区東縁部で計5棟検出された。このうちC4区の2棟は径4m前後の円形を呈し、互いに近接している。柱穴・炉は検出されず、床面はやや凹凸が激しい。掘り方は中央部を残してドーナツ形に深くなっているが、結果的には掘り残された中央部の高さを基準に床土が貼られている。壁際に沿って幅20～30cmの段をもつらしいが、全体的には確認できなかった。埋土からは縄文土器片が出土するものの、明らかな共伴遺物は特定できない。

一方、D1・D2区の3棟は尾根頂部縁辺の同一等高線上に弧状に並んで検出された。D2区の1棟は大半が調査区外に延び全体像は不明であるが、他の2棟は径6mの円形を呈し、床面中央から南側壁面に向かって2つ以上の燃焼部が連結した炉をもつ。複式炉に似るが前庭部は確認できず、住居規模のわりに小さい印象を持つ。柱穴はD2区の1棟で南壁沿いに部分的に確認されたほかは検出できなかった。D2区の2棟は壁際に周溝をもち、うち1棟は周溝内に壁柱穴らしい小ピットが並ぶ。形態や遺物から縄文時代中期末葉～後期初頭に属するものと思われる。これらC4・D1・D2区の竪穴住居跡は、斜面下方に展開する柱穴群とは分布域を異にしており、その意味するところは今後の検討課題である。

<住居状遺構・土坑> 住居状遺構としたものは、大形円形建物跡の東隣に位置する径2.3m・深さ60cmの大形土坑である。平坦な床面をもち、埋土の中位には炭化物層がほぼ全面に堆積している。周囲に検出された柱穴が同遺構に伴うとすれば覆屋が想定され、繊維の明瞭な炭化物層は焼失時のものと解釈できるかもしれない。類似する遺構は他になく、大形円形建物跡に付随して集落の一面を占める特殊な存在といえようか。このほか、C4区の斜面上部には人為堆積の楕円形土坑、大形円形建物跡の南側にはC4・D1区境界の沢跡に沿って自然堆積の円形土坑がまとまって分布している。前者は墓坑、後者は貯蔵穴の性格が想定される。

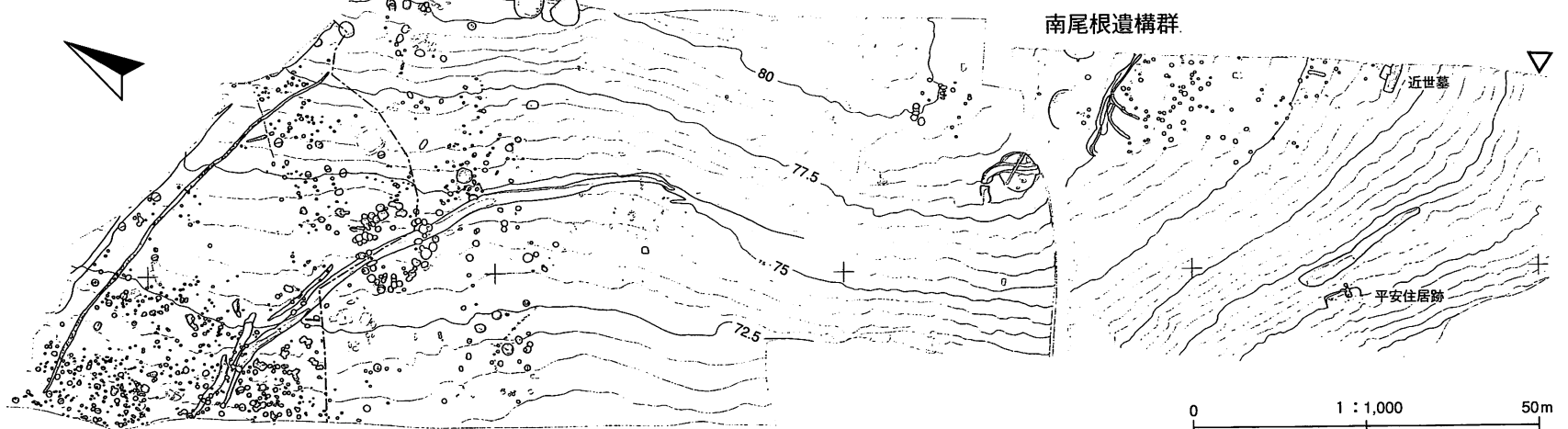
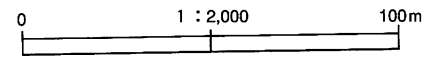
<まとめ> 2ヶ年の調査により、清水遺跡は縄文時代中期末葉～後期初頭の集落であることが判明した。遺跡は調査区中央を横断する沢を挟んで南北2つの尾根に分けられる。傾斜が緩やかな北尾根上（C1～4区）には、方・円形の掘立柱建物群とそれに付随する諸施設が弧状（環状？）に展開するらしく、一方、南尾根（D1・D2区）では細長い頂部緩斜面に竪穴住居が弧状に配置されている。南北の尾根は東側調査区外で一つになって遺物が表採できる高位面へと連続し、また北尾根西側調査区外の緩斜面上にも遺構の広がりが予想されることから、遺跡の全体像及び両尾根の関係を知るには将来の調査を待たねばならない。いずれにせよ、遺跡を完全に横断する調査区から多量の各種遺物とそれを用いた人々の生活痕跡が広がりをもって確認されたことは、該期の生活様式を総合的に理解する上で重要かつ貴重な資料を提示するものといえよう。

清水遺跡調査区・遺構配置図

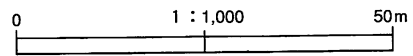


- 平成10年度調査区：A1～C3区
 平成11年度調査区：C4～D2区
- 円形建物跡
 - 方形建物跡
 - 竪穴住居跡
 - 柱穴群
 - 円形土坑群 (貯蔵穴?)
 - 楕円形土坑 土器埋設土坑 (墓塚?)
 - 带状焼土遺構
 - 調査不能区域
 - 被削平範囲
 - ↓ 沢跡
 - ↑ 捨て場廃棄方向

調査区と遺構分布状況



主要部の遺構配置図

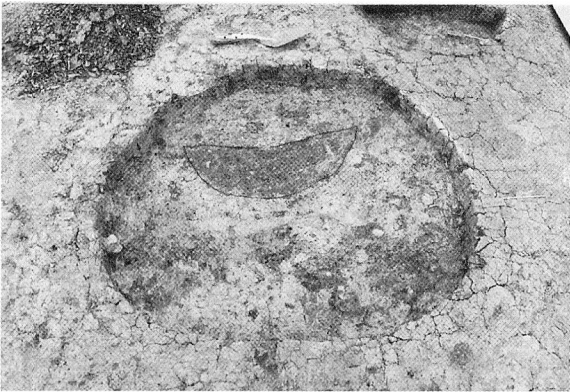




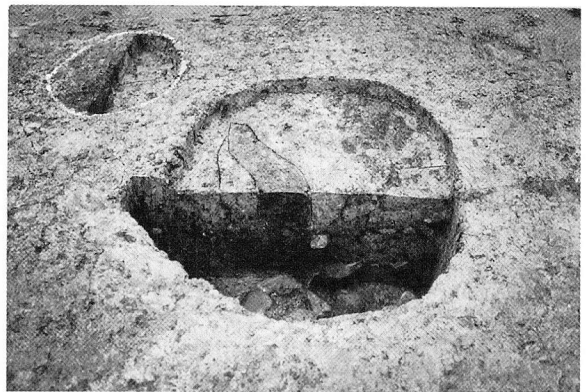
大形円形建物跡（西から）



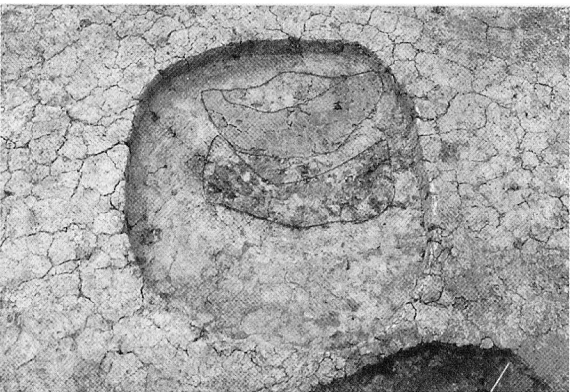
同左 出入口状施設



半截木柱痕（C4区p112）



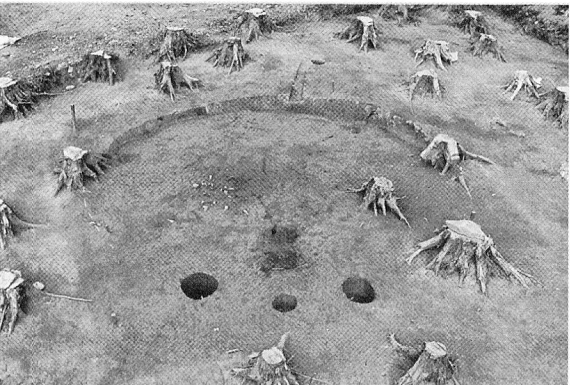
同左 断面



半截木柱痕（C4区p125）



同左 断面



竪穴住居跡（D2区）

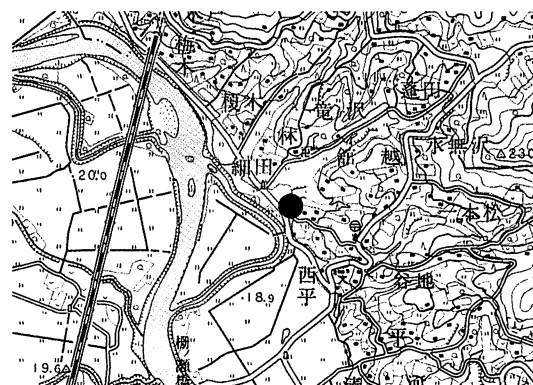


同左 炉

清水遺跡検出遺構

(25) 堀切遺跡

所在地 一関市舞川字堀切7番地6ほか
委託者 岩手県一関地方振興局
一関地方農業整備事務所
事業名 担い手育成基盤整備事業
発掘調査期間 平成11年10月1日～11月5日
調査対象面積 1,000m²
発掘調査面積 1,000m²
遺跡番号・略号 NE87-0182・HK-99
調査担当者 小野寺正之・佐藤淳一
協力機関 一関市教育委員会



遺跡位置 1:50,000 一関

1. 遺跡の立地

堀切遺跡は、JR東北本線一関駅から北北東に約5.1km、北上川左岸に形成発達した河岸段丘上に立地している。調査区の標高は約21mで、調査前の状況は水田であった。

2. 遺跡の概要

検出された遺構は、竪穴住居跡3棟、掘立柱建物跡1棟、土坑1基、溝跡4条、柱穴約50基である。調査区の多くが、道路や水田造成等によって削平・攪乱を受けている。また、調査区全体に暗渠が入っていた。

<竪穴住居跡> 3棟を検出。1号住居は一辺が約2.5mの方形で、中央部から西に溝が伸び、床面近くから炭が出土している。2号住居は明確なプランを検出できず、検出した焼土・周溝から一辺が約5mの方形と推定した。3号住居は一辺が約5mの方形、南側が調査区外のため北側のみ検出した。中央部から焼土が検出されている。時期的には1号住居は縄文時代前期、2・3号住居は平安時代（9世紀頃）に属すると思われる。

<掘立柱建物跡> 1棟を検出。平面は長方形で、棟方向は北北東～南南西。規模は3間×1間、桁の柱間は約2.2m、梁の柱間は約4.2mである。一部は2号住居と重複しており、時期等の検討が必要。

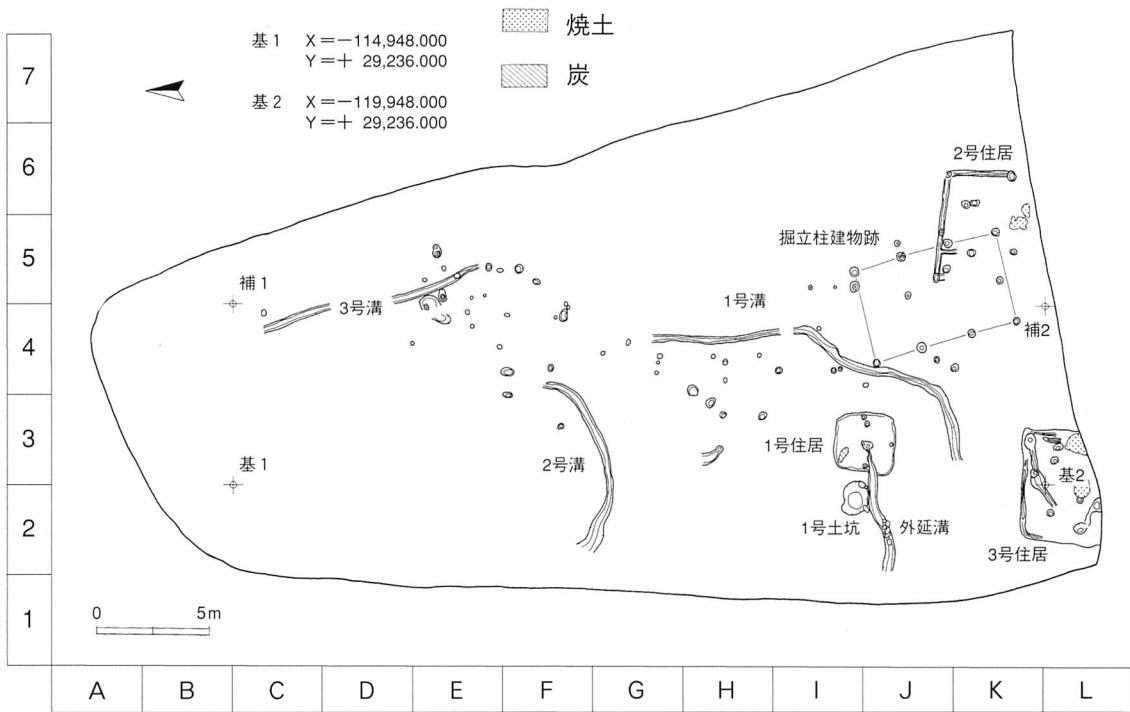
<土坑> 1基を検出。長径約1.5m、短径約1.0m、深さ約0.2mの楕円形をしている。1号住居から延びる溝に隣接しているが、埋土内の遺物は縄文時代前期のものであり、その時期の土坑である可能性が高い。

<溝跡> 1号住居に伴うものも含め4条を検出した。1号溝は暗渠、3号溝は水田造成で一部が削平を受けている。2号溝内から土師器や石鏃が出土している。いずれの溝も時期・性格については不明である。

<出土遺物> 住居跡及びその周辺にはほぼ集中し、土師器と須恵器が主である。土師器では、J4区の柱穴内埋土下部から完形の坏が1点、須恵器では、2号住居から底面に「申」の文字が刻まれている坏が1点出土している。石器は剥片石器（石匙等）、礫石器（敲石・凹石等）等、合わせて20点が出土している。

3. まとめ

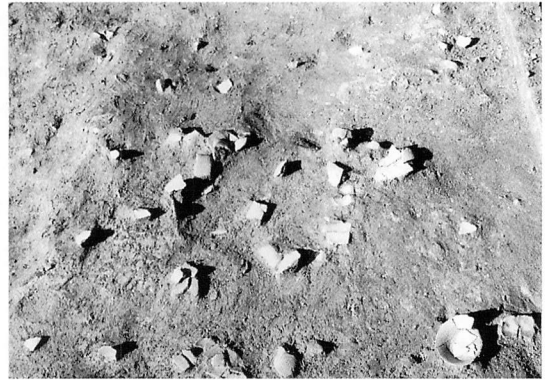
調査によって、堀切遺跡は縄文前期から平安時代にかけての集落であることが確認できた。今後は出土遺物に詳細な検討を加え、本遺跡の性格を明らかにしていきたい。



堀切遺跡遺構配置図



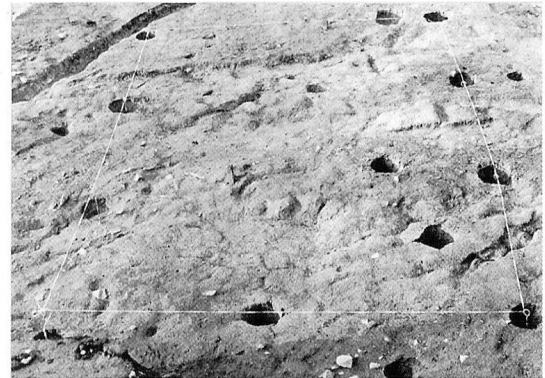
遺跡全景



遺物出土状況



1号住居



掘立柱遺物跡

堀切遺跡検出遺構・出土遺物

(26) 篠 館 跡

所在地 遠野市上郷町細越第16地割字赤羽根
94番地6ほか

委託者 岩手県遠野地方振興局土木部

事業名 一般国道283号線“仙人峠道路”
改築事業

発掘調査期間 平成11年4月15日～11月5日

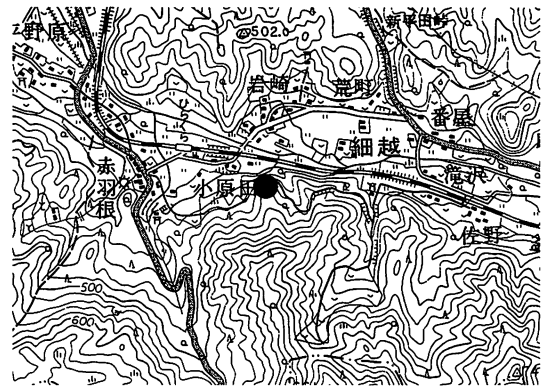
調査対象面積 7,750㎡

発掘調査面積 7,750㎡

遺跡番号・略号 MF76-0298・SND-99

調査担当者 小笠原健一郎・北田 勲・藤原賢徳

協力機関 遠野市教育委員会



遺跡位置 1:50,000 遠野

1. 遺跡の立地

本遺跡は、JR釜石線平倉駅の東南東約800mに位置し、仙人峠から西流し猿ヶ石川に注ぐ早瀬川の左岸に張り出す尾根上に立地している。遺跡の北側は断崖を呈し、南側を急峻な山体、東西を谷と沢で挟まれた自然の要害を利用して築城されている。遺跡の現況は山林である。周辺には、刃金館、瓜ヶ森館跡等の多くの中世城館がある。

2. 調査の概要

今回の調査で検出した遺構は、堀跡5条、土塁4基、曲輪18カ所、竪穴住居跡1棟、集石1基、石積2基切岸13カ所、土坑28基、柱穴列5基、焼土遺構12基である。平成10年・11年度、2ヶ年の調査終了面積は19,300㎡である。

調査区のほぼ全面にわたって削平と盛り土による普請が施されており、自然地形はほとんど残されていないことが調査により明らかになった。また、改築の痕跡も数カ所で検出された。

<堀跡> 調査区の頂上部南側尾根に堀切続きの竪堀3条、東側斜面に2条を検出した。すべて空堀である。東斜面と西側の4条は、埋められ帯曲輪に改築されている。

<土 塁> 堀切続きの竪堀と東斜面の堀の外側に4基を検出した。

<曲 輪> 尾根上の曲輪は削平により階段状に築かれており、それらを囲む帯曲輪は盛り土により構築されている。これまで、18ヶ所を検出している。

<切 岸> 13ヶ所を検出している。削平と盛り土により防御性を高めており、主郭は四方を平均傾斜角約40°の切岸で囲まれている。傾斜角度は、最大で約50°に達する。

<竪穴住居跡> 主郭南東の曲輪整地層下から1棟検出された。地山を掘り込んで構築されており、規模は長軸6.6×短軸5.2m。埋土から鉄製品、砥石、国産陶器等が出土している。

<焼土遺構> 12基を検出した。主郭南側の曲輪や東西の帯曲輪では、改築や整地の際に動かされたと思われる現地性でない焼土塊が焼土遺構周辺から多数検出された。

<柱穴列> 主郭等の曲輪から5基検出され、一基は、櫓台跡の可能性も考えられる。

<石 積> 主郭西側で長さ7.6m、幅0.7m、高さ0.7mにわたって検出された。初期の平場構築の際の土留め目的のものと考えられるが、石垣のような飼石、裏込め石はない。

<集 石> 主郭と北側断崖に面する曲輪から2基を検出した。いずれも不整形で地山の自然石が用いられている。主郭の集積は土留め、他の一基は投石用のものと考えられる。

<土 坑> 28基を検出した。内24基は、柱穴状土坑で出土遺物はない。

4. 出土遺物

今回の調査では中国産の染付・青磁・白磁や瀬戸・美濃系陶器、ロクロ成形のかわらけ、他に漆塗りの椀、小札、鉄鍋片、鉄鏃、銭貨、石製品（石臼、硯、砥石、石鉢）、羽口等が出土している。青磁は龍泉窯、白磁は15C～16C、国産陶器は大窯I期のものが多い。

5. まとめ

篠館は、阿曾沼氏時代（1189～1600）の城館とされているが、歴史的資料は「鱒沢左馬之助広勝の一族の関口某の居りし」という『上閉伊郡志』（1913）の記載のみでその他は不明である。

出土した遺物から15～16世紀を中心とした館跡と考えられるが、実効掘幅等の遺構の規模から館の最終的な形態は16世紀後半のものと考えられる。堀から続く西側の帯曲輪では二～三期に渡る改築の痕跡が検出され、大規模な築城の普請・作事と改築を実行した館主と領民との関係や、戦国末期の混乱した社会状況と本遺跡とのかかわり知る上でも重要な手がかりになると考えられる。

遺物の総量から日常生活を想定することは難しく、合戦等の非常時や国境防備の番城として使用された館跡と考えられる。



調査区全景



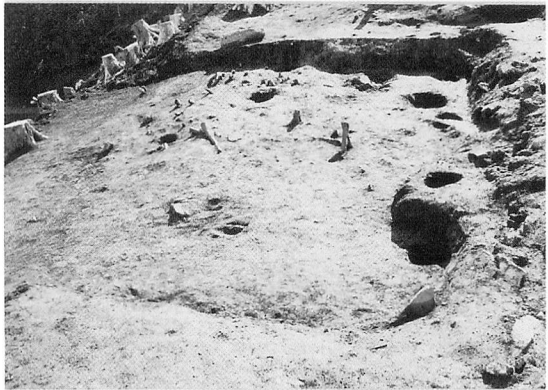
調査区東側



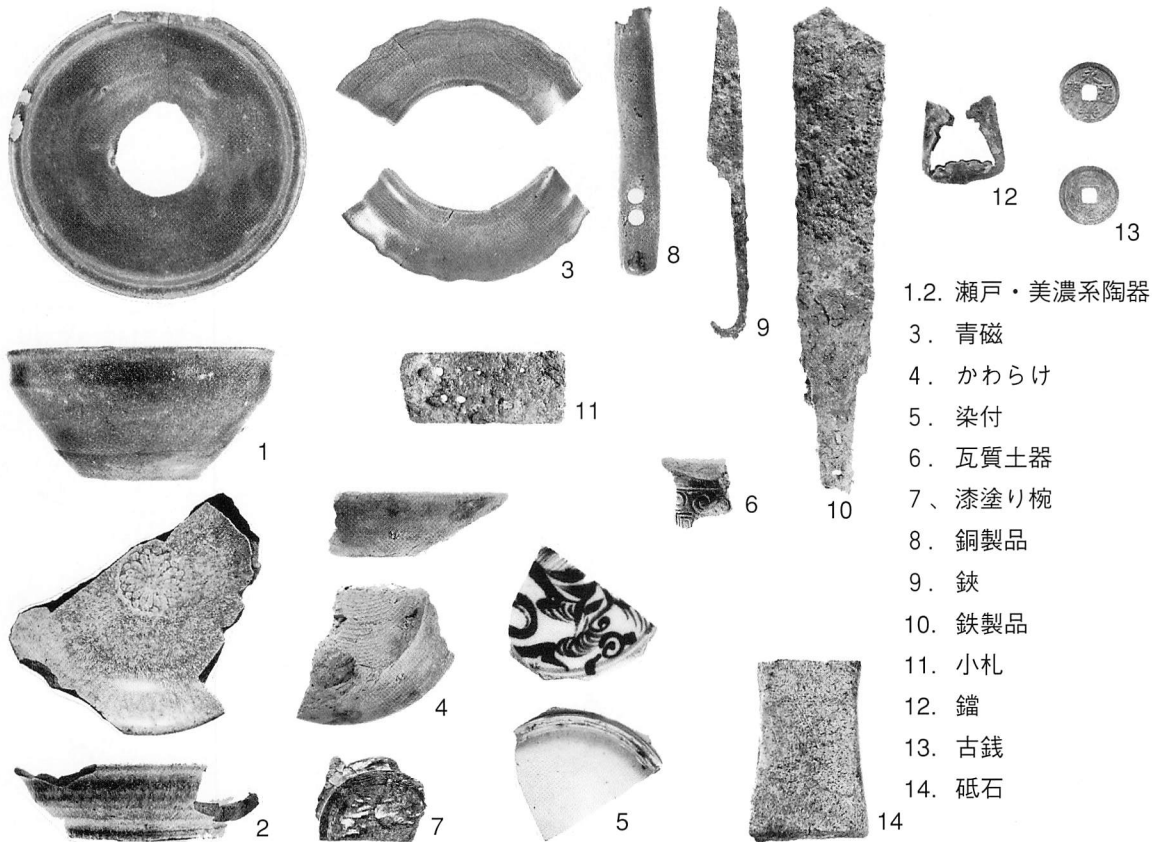
5号堀・土塁断面



石積



1号竪穴住居跡



- 1.2. 瀬戸・美濃系陶器
- 3. 青磁
- 4. かわらけ
- 5. 染付
- 6. 瓦質土器
- 7. 漆塗り椀
- 8. 銅製品
- 9. 鋏
- 10. 鉄製品
- 11. 小札
- 12. 鐘
- 13. 古銭
- 14. 砥石

篠館跡検出遺構・出土遺物

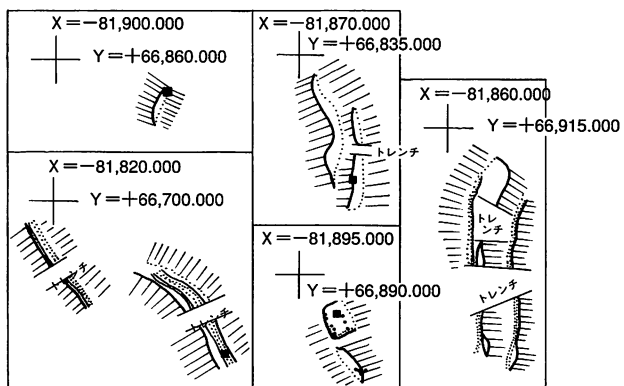
Y = +66,690.000
X = -81,740.000

Y = +67,020.000
X = -81,750.000

Y = +66,690.000
X = -81,850.000

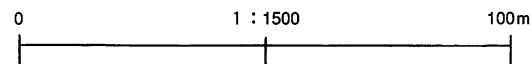
Y = +67,020.000
X = -81,860.000

篠館跡遺構配置図



鉄道防備林

- 焼土
- ◆ 石積
- 99年度検出集石
- 98年度検出集石



(27) ^{なかのだい}中野台遺跡

所在地 東磐井郡大東町猿沢字
中野台78-1ほか

委託者 岩手県千厩地方振興局土木部

事業名 関の上地区雪国生活支援道路
環境整備事業

発掘調査期間 平成11年4月13日～7月1日

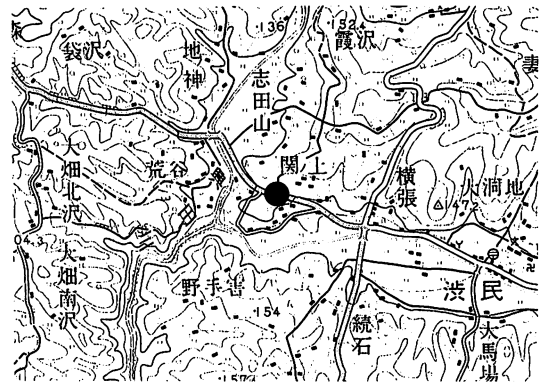
調査対象面積 4,662m²

発掘調査面積 3,811m²

遺跡番号・略号 NF60-0265 NND-99

調査担当者 木戸口俊子・小原広幸

協力機関 大東町教育委員会



遺跡位置 1:50,000 陸中平原

1. 遺跡の立地

中野台遺跡は、大東町大原地区を横断する砂鉄川と町内北側を流れる興田川との合流地点の河岸段丘上に立地しており、JR大船渡線摺沢駅から北に約3km、国道343号を挟んで両側に位置している。大東町には、高山がなく起伏量が100～200mの低い山地や丘陵地からなり、遺跡も101m前後の標高である。調査区は、興田川の段丘にかかり砂鉄川を南においた台地上に位置する中野台遺跡と字名によって分けられた下洪民遺跡に跨る。西側には大東町教育委員会により調査された中野台遺跡（H7）や下洪民遺跡（H9）がある。

2. 調査の概要

調査区は、国道を挟んで南北に細長いため、任意的に1区～9区とし、区毎に調査を進めた。その結果、遺構の検出地点及び遺物の出土地点は3区と8区に偏っている。検出された遺構は、竪穴住居跡が1棟、住居状遺構が5棟、土坑が32基、集石2基、石列1条、溝8条、焼土2基、柱穴状ピット33基、採掘坑5カ所、墓塚2基である。1区、4区～6区からは、遺構が検出されず、出土遺物も大変少ない。また、9区の大部分を占める東側についても柱穴状ピットを数基数えるのみである。

出土遺物のうち土器は大コンテナで1.5箱、石器については12点だけで剥片も少ない。

<竪穴住居跡> 3区の南側から1棟検出されている。周辺の土坑と重複しているが、検出状況から土坑よりも古い。規模は径3m10cmで壁高は約40cm、炉は石囲炉であり、扁平な礫7個を1辺約50cmの方形に組んで使用している。焼土はあまり厚くない。住居に伴う柱穴は見つかっていない。遺物は完形品ではないが、一括して2個体分の深鉢が出土している。時期は縄文時代中期中頃と思われる。

<住居状遺構> 5棟検出されているが、いずれも8区の検出である。4棟は楕円形もしくは円形を呈しており、遺構内及び周辺から縄文時代中期の土器が出土していることから、同時期の遺構と思われる。規模は2～2.8mほどの径を持ち、壁高は15cm前後である。1棟については、平面形が方形を呈しており、先の住居状遺構とは埋土や床面などに多少の違いがみられ、平安時代に作られた可能性がある。検出できた規模は

1 辺が 2 m70cm で壁高は 10～15cm である。調査区外に延びており、検出内でのカマドは確認できなかった。

<土坑> 検出数 32 基中、8 区から 22 基検出され最も集中している。竪穴住居跡の周辺から検出されている土坑以外はいずれも浅い。最大で径 2 m、深さは 1 m30cm である。ただし遺物は小破片のみである。

<集石> 8 区から 2 基検出されている。そのうち 1 基は検出状況が良好であった。10～30cm 程度の円礫が 80cm×150cm の楕円形に集中してあり、徐々に掘り下げていくとやや広めの掘り込みがみられた。円礫を取り除き精査を進めたが埋土からは何も出土しなかった。長径 160cm、短径 120cm、深さ約 30cm のやや楕円形で掘り上がった。

<石列> 3 区から検出された。10～20cm ほどの礫が幅 50cm 前後に集中し、長さ 18m ほど続いて検出された。一部攪乱も受けているが、60～70cm の幅の掘り込みが認められ深さは 15cm 程度である。遺物は縄文土器の破片が数片出土しているが、遺構の時期の決定には至らない。

<溝> 7 区と 8 区から検出されている。8 区の 1 条はもっとも規模が大きく、幅 80～100cm、深さ 20cm 前後、検出された長さは 6 m である。それ以外は、検出された長さの違いはあるが、幅 35～50cm、深さ 5～20cm と規模は小さい。遺構内からの出土遺物は土器片のみである。

<焼土> 3 区北側から検出された。90～150cm ほどの不整形で他の遺構は伴わずに検出された。焼土中から土器片が出土しているが、磨滅がひどく時期など判別しにくい。

<柱穴状ピット> 全部で 33 基検出されているが、掘立柱建物跡になるようなつながりはみられなかった。土坑同様 8 区からの検出がもっとも多かった。

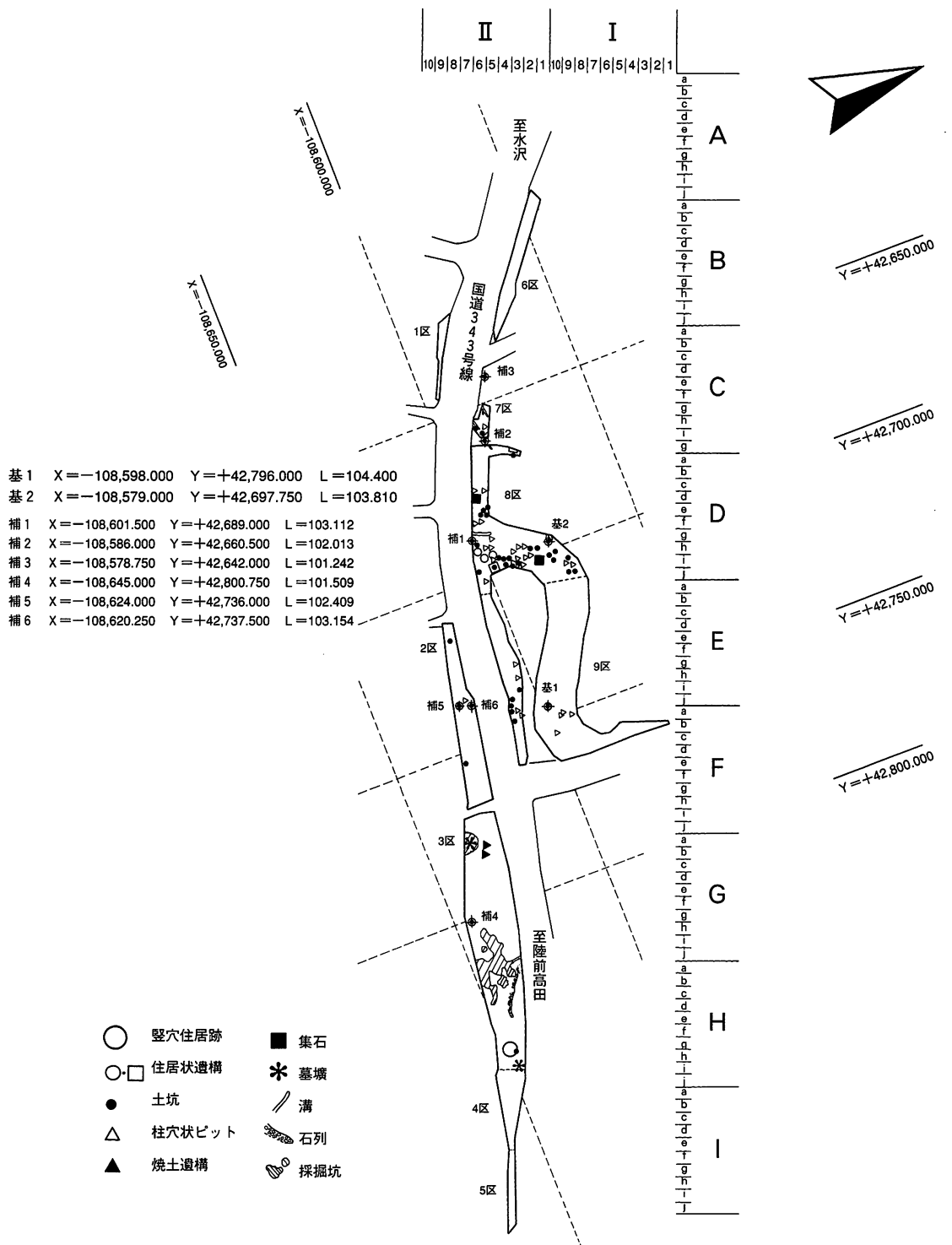
<採掘坑跡> 5 カ所確認したが、実際は土中で重複や同じ遺構になる可能性も高く、明確な遺構数は数えられない。町教委で調査された中野台遺跡でも同じような遺構が 3 基検出されている。周辺の渋民字横張地内をはじめとする近世の砂金掘の遺構が確認されていることから、同報告書では近世の砂金掘坑としている。本遺構も同様のものと思われる。

<墓壇> 3 区から近世の墓壇 2 基が検出されている。1 基は人墓でもう 1 基は馬墓である。人墓の方は、採掘坑を利用して方形に掘られており、埋土上部から下部に掘り進むに従って鎌の刃、鋏とみられる鉄製品に付着した古銭、漆器片、歯の順に出土した。半分以上が調査区外のため全容は不明である。

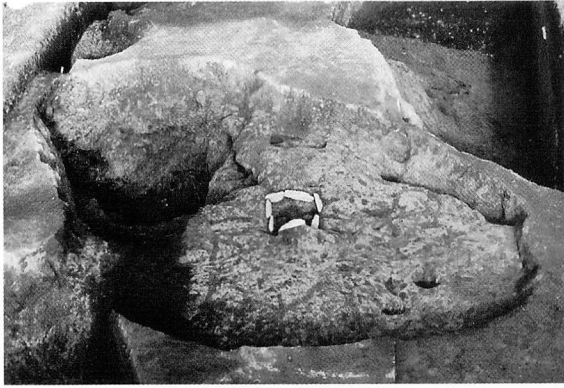
<出土遺物> 出土した遺物は大変少ない。土器は竪穴住居跡が検出された 3 区の南側と土坑等が最も多く検出された 8 区に集中して出土している。時期としては縄文時代中期中葉が中心である。その他植物繊維の混入が認められる縄文時代前期初頭の土器や土師器の破片も数片出土している。石器は石鏃 7 点、石匙 1 点、磨製石斧 1 点、磨石 2 点、搔器 1 点の 12 点のみである。

3. まとめ

町教委で調査された中野台遺跡では、縄文時代早期～晩期にかけての遺物が出土したが、集落の密度が高くなるのは土器の出土状況から縄文時代中期の後葉～末葉にかけてであり、その隣接する下渋民遺跡でも同時期の住居跡が検出されている。中野台遺跡の西側に位置する下渋民地区の遺物散布地では、縄文時代中期前葉～中葉にかけた土器が表採されるようであり、大木 7 b 式～8 b 式にかけての集落跡が推定されている。本調査では、先の 2 調査では出土量も大変少なかった縄文時代中期中葉の土器が中心に出土している。今回はこの時期の住居跡を 1 棟しか検出できなかったが、先の調査区に先行する集落がこの住居跡の周辺に広がっているというさらに高い可能性を示したものと思われる。



中野台遺跡遺構配置図



豎穴住居跡



土坑



集石



集石断面



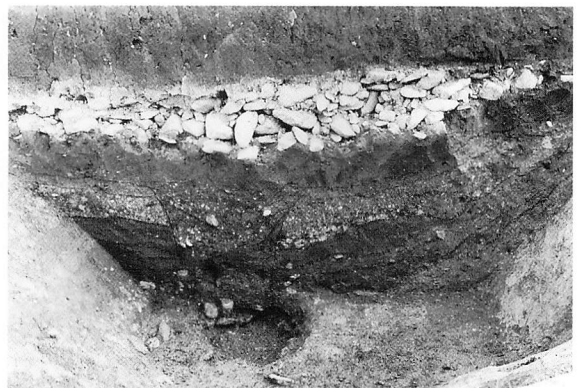
石列



住居状遺構



採掘坑（墓壇）検出状況

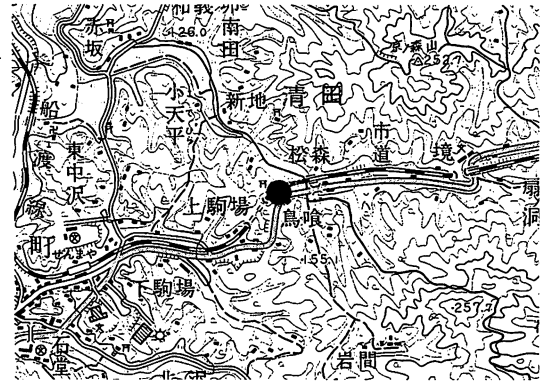


採掘坑（墓壇）断面

中野台遺跡検出遺構

(28) 清田台遺跡

所在地 東磐井郡千厩町清田字台2の3ほか
委託者 岩手県千厩地方振興局千厩農村整備事務所
事業名 ふるさと農道緊急整備事業要害地区
発掘調査期間 平成11年7月1日～11月9日
調査対象面積 2,918㎡
発掘調査面積 2,338㎡
遺跡番号・略号 NF91-1291・KTD-99
調査担当者 木戸口俊子・小原広幸
協力機関 千厩町教育委員会



遺跡位置

1:50,000 千厩

1. 遺跡の立地

千厩町中央部にあるJR大船渡線千厩駅から東へ約1.5km先にあり、大船渡線と国道284号が最も接近する地点の両側が調査区である。周辺に高山はなく標高200～100m未満の丘陵地で、遺跡の東側を北上して2km先の千厩川に合流する支流金田川右岸の緩斜面上に立地する。遺跡の標高は112～120mである。現状は、線路と国道によって分けられた北側は畑地と田地、南側は牧草地である。

2. 調査の概要

北側調査区と南側調査区に分けて調査をした。遺構は両区から検出されたが、遺構内出土土器を除く遺物の出土は調査面積の広い北側調査区が顕著である。その北側調査区は、遺構や遺物を含む層が当初の予想を上回り一部次年度に調査が継続される。

南側調査区の遺構の検出状況を見ると、南端と中央部分に遺構が確認されない。南端部分は元々旧気仙沼街道の通っていたところで近世初期にはすでに壊されていたものと思われる。中央部分についても住居跡の隣接する状態で土坑が検出されているが、いずれも半分ほどすでになく全体像は不明である。急傾斜部分には炉石として使用されたような礫が数個以上確認でき、遺構は中央部分に延びて住居跡もあった可能性がある。現在は削平され遺構・遺物ともに検出されない。

北側調査区はほぼ中央に東西に横断する旧沢があり、東側にある金田川に向かって流れているようである。現在もグライ化したままであり、その上面を現水田の水路が通る。その沢に数カ所トレンチを入れて遺構・遺物の確認をしたが、昭和20年前後の土留め用の杭跡や倉庫跡以外なく遺物もほとんど出土しない。

今年度検出された遺構は、竪穴住居跡が12棟、住居状遺構が1棟、土坑が11基、炉が3基、焼土が16基、埋設土器が2基である。

遺物は大型コンテナで85箱出土している。

<竪穴住居跡> 12棟のうち、北側調査区が7棟、南側調査区が5棟である。時期は、縄文時代中期初頭から中期後葉までで、南側調査区の南端に検出された住居が最も古い。ほとんど石囲炉を持つ住居であるが、他遺構との重複や既に削平されているもの、調査区域外に延びるなど遺構の平面が明確に残るものは少な

い。

最も古い住居跡は地床炉を持つ2つの住居跡に挟まれた状態で検出されている。石囲炉を持ち径3m60cmほどの円形を呈し、縄文時代中期初頭と見られる深鉢の土器と小型の土器が床面直上から出土している。調査区外に遺構が延びている住居跡は、床面に炭化材があり焼失住居と考えられるが、炭化材の出土状況から板敷きであった可能性が高い。検出部分から径5mほどの円形の住居と推定でき、住居内からは石刀や石皿、石皿には炭化した編み物が付着していた。縄文時代中期中頃の深鉢土器が出土している。

北側調査区から検出された竪穴住居跡はいずれも検出状況が良好とは言えず、壁や床が明確ではないものが多い。南側の線路際では石囲炉を伴う3棟の住居跡が重複しており、複式炉を持つ住居を2棟の住居が壊す状態で作られている。3棟とも住居の上部は攪乱を受けており、壁は数cmしか残っていない。遺物は時期を確認できるほどのものは出土していないが、周辺の遺物から縄文時代中期中頃以降と思われる。

<住居状遺構> 北側調査区で1棟検出されている。住居跡の可能性もあるが、炉や柱穴が検出していない。

<土坑> 11基検出されている。竪穴住居跡と同様、削平や調査区域外などで全容のわかるものはない。いずれも浅いものが多いが、うち2基は遺構のほぼ中心に柱穴状ピット1基を伴い、フラスコ状土坑の底面が残ったものとも考えられる。

<炉> 石囲炉3基が検出されている。本来住居跡になると思われるが、壁、柱穴状ピットなど確認できなかった。

<焼土> 16基検出されている。1基を除いて北側調査区に集中する。住居跡周辺にあり、また柱穴状ピットも多く検出されているため、地床炉を伴う住居跡になる可能性もある。

<埋設土器> 北側調査区で2基検出している。どちらも倒立状態で埋設されているが、胴下部から底部までは欠損している。時期は縄文時代中期中頃のものである。土器内土中から小骨片が見つかった。

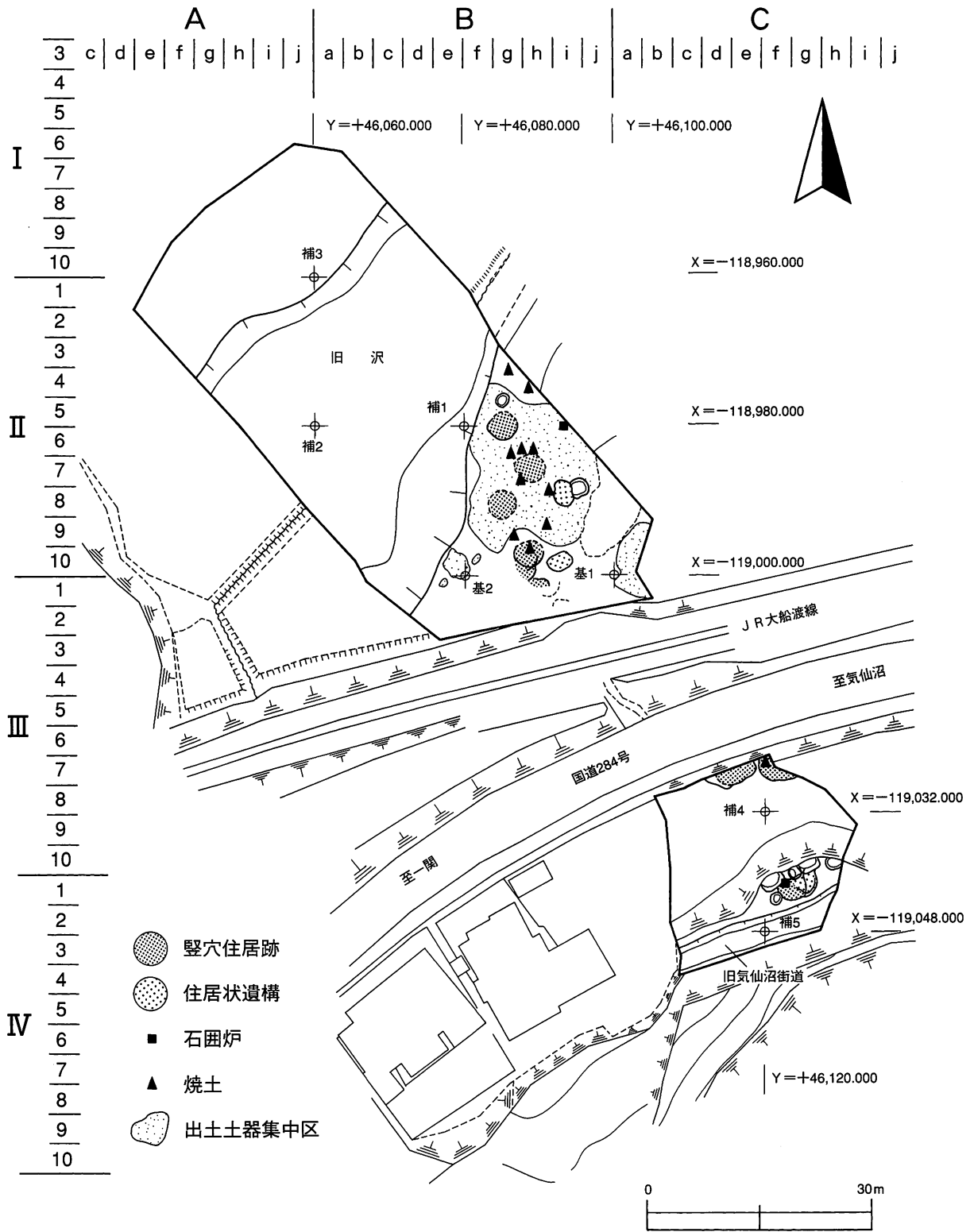
<柱穴状ピット> 北側調査区からの検出である。数十基検出したが、住居跡に伴う柱穴の可能性が高い。

<遺物> 今年度は大コンテナ約85箱出土している。今回出土した分の大半が北側調査区から出土している。土器の時期としては、縄文時代中期初頭～縄文時代晩期前半まで見られ、縄文時代中期前半が特に多い。土製品は円盤状土製品、耳栓、垂飾品、斧形土製品、スタンプ型土製品、土偶など約40点出土している。

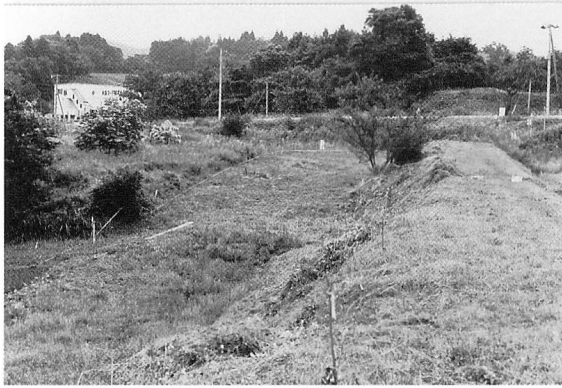
石器は約1,800点出土している。4割強が石鏃であり、全体的に小振りの石鏃で無茎のものが多い。次に搔・削器類、磨石、石錐、石匙などの順に多い。砥石も3点見つかった。石製品は約20点出土している。石棒、石刀のほか、薄く磨かれ穿孔された垂飾品と見られる石製品が目立つ。

3. まとめ

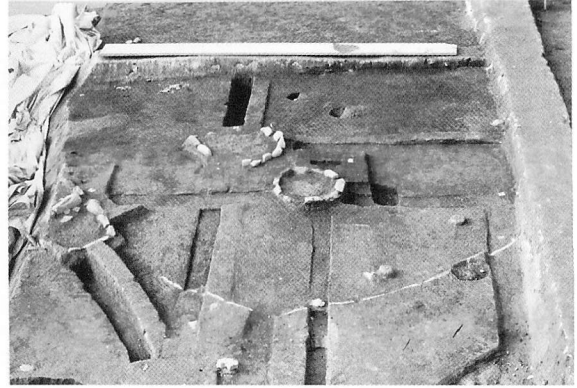
現在、清田台遺跡は道路と線路によって2つに分断されているが、開通前には金田川に向かって続く緩斜面上に遺跡は乗っており、旧沢部分は低い湿田となっていたらしい。街道部分以外は当時の地形とさほど変化はなかったのかもしれない。緩斜面は調査対象部分の南東側にやや広がりを持って続いており、さらに遺構の検出や遺物の出土が見込まれる。今回は遺構の検出部分が少ないにも関わらず遺物出土量は多く、また長期間にわたってこの地で生活を営んでいたことがわかる。土器の出土状況は、土器捨て場としては量が少なく、集落跡としては多いと思われる。そのため、時期毎にこの土地の利用の仕方が違ったと思われる。どの時期にどのような利用の仕方をしたか、今後の調査も含めて検討していきたい。



清田台遺跡遺構配置図



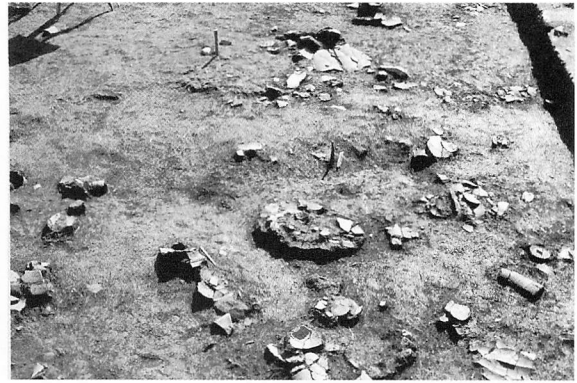
調査前風景



北側調査区竪穴住居跡



埋設土器



遺物出土状況



南側調査区竪穴住居跡①



竪穴住居跡②

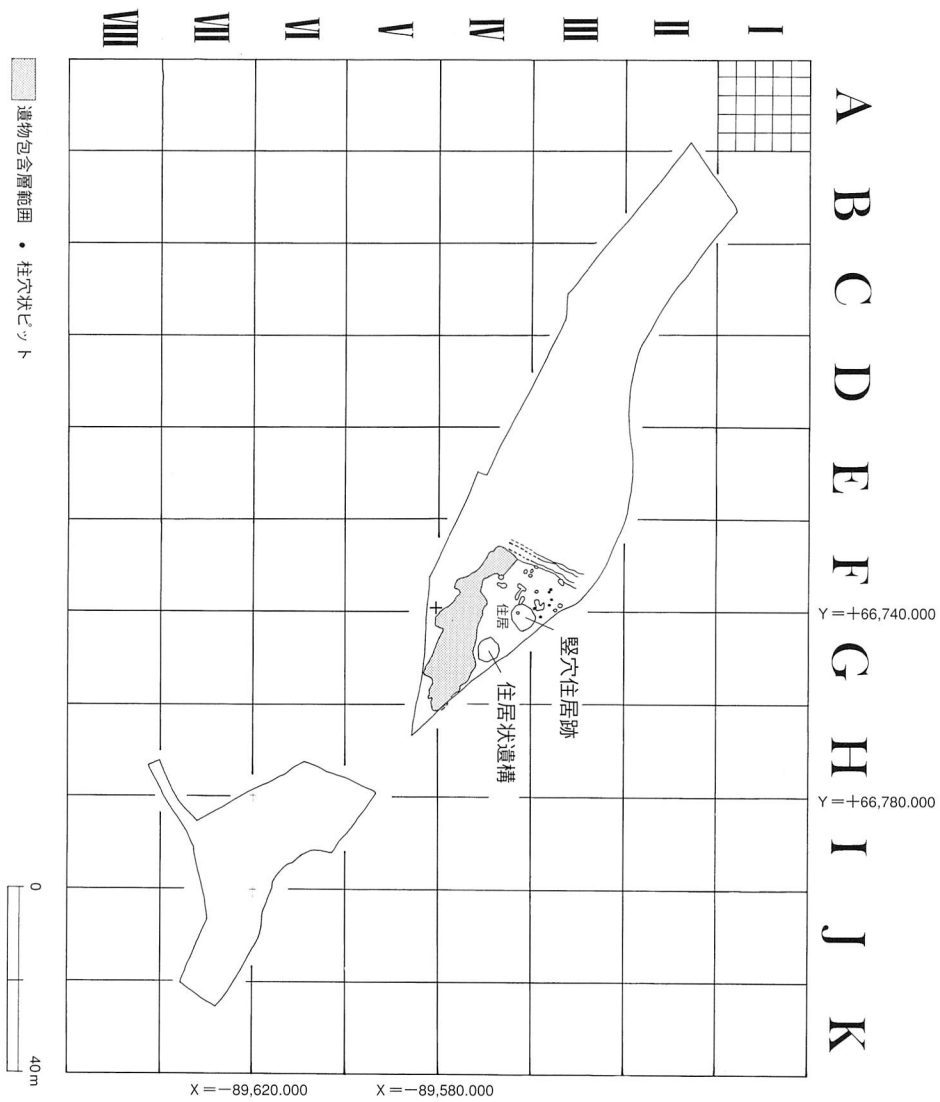


竪穴住居跡③



竪穴住居跡②炭化材検出状況

清田台遺跡検出遺構・出土遺物



遺跡全景 (遺物包含層・竪穴住居跡等)

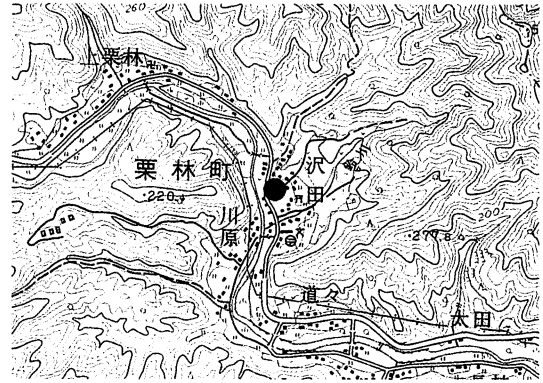


竪穴住居跡 (縄文時代)

中和田遺跡遺構配置図・検出遺構

(30) 沢田^{さわだ} 2 遺跡

所在地 釜石市栗林町第15地割41-30ほか
委託者 岩手県釜石地方振興局土木部
事業名 主要地方道釜石遠野線改築工事
発掘調査期間 平成11年8月17日～10月29日
調査対象面積 1,460㎡
発掘調査面積 1,460㎡
遺跡番号・略号 MG31-2270 SD2-99
調査担当者 鳥居達人・中田 迪
協力機関 釜石教育委員会



遺跡位置

1 : 50,000 大槓

1. 遺跡の立地

沢田2遺跡はJR山田線鶴住居駅の北東約5kmに位置し、鶴住居川左岸の段丘上の扇状地に立地する。遺跡の範囲は、2つの尾根に囲まれた地域全体に及ぶものと推定される。今回の調査は段丘の西端部の発掘で、標高は50m前後、最も高い北側の急斜面では56mほどあり、現況は北側斜面はりんご畑、その他は水田で以前は畑として利用されていた。遺跡の基本層序は調査区が南北に長いので、土地利用等の違いからか地点によって表土から基盤層までの間に堆積する土壌が異なり、北側急斜面には灰白色火山灰層が存在する。

2. 調査の概要

＜堅穴住居跡および堅穴住居状遺構＞ 柱穴の配列や炉の痕跡を確認したものと、床施設が不明瞭なものの2種類ある。堅穴住居跡と思われる2棟のうち1棟は平面形は径4～6m程のだ円形であると思われ、またもう1棟は平面径4～6mほどの隅の丸い長方形で2棟とも床面に壁柱穴の痕跡がある。堅穴住居状とした3棟は住居跡に掘り込んで入るものの柱穴が定かでないもので、これらは前期前葉の住居跡と思われる。

＜土坑＞ 調査区南側で11基が検出された。その中で、10～30cmほどの数個の河原石を埋められていたものが1基あり、その下から前期前葉の土器が出土していることから、墓塚の可能性もある。

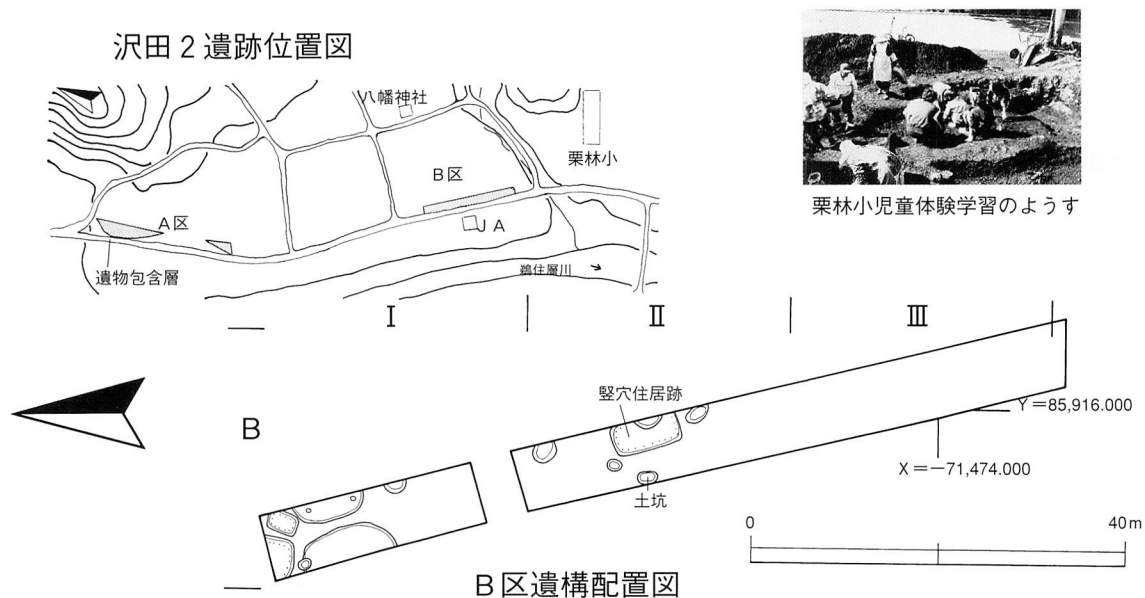
＜遺物包含層＞ 調査面積はおおよそ200㎡で、その深さは最大2mに及ぶ。ここで出土する土器は縄文時代早期から前期全般と幅が広く、遺構の確認された区域出土土器よりも新しい土器が中心となる。東側の住居跡の遺物が流れ込んだか、あるいは意図的に捨てられた可能性もある。

3. 出土遺物

土器は大コンテナ約15箱が出土している。そのほとんどが遺物包含層の出土である。これらの土器は縄文早期から前期全体のものがあり、特に「大木3・4・5式」に属すると思われるものが多い。繊維を含む土器や貝殻文を持つ土器も出土した。石器類は中コンテナで1箱分の出土である。擦石・石鏃・石匙・尖頭器・搔器などがある。中でも石匙が多く26点出土し、尖頭器は1点、石鏃は8点と少ない。石製品では石製の装飾品・耳飾りなどが出土している。その他では円盤型の土製品がある。

4. まとめ

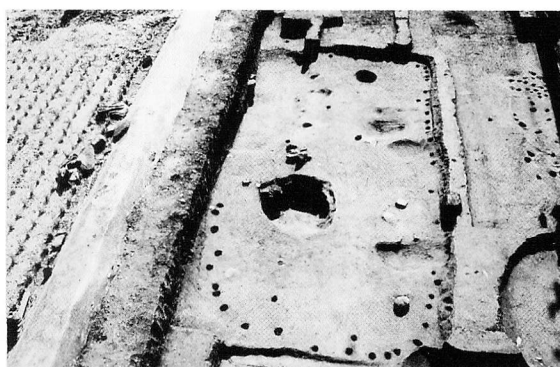
今回の調査において縄文時代前期前葉以前に、鶴住居川の中流区域で人々が生活していた痕跡を確認することができた。調査区より出土した土器は縄文時代早期前葉から前期全般と隔たる事なく続き、また以前の釜石市の分布調査により東側の標高の高い地区からは中期から後期の土器片が採集されている。この考古学的に貴重な当遺跡の発掘調査は平成12年度も継続され、その成果が期待される。



調査区全景



A区包含層土器出土状況



B区竪穴住居跡

沢田 2 遺跡検出遺構

(31) 成谷遺跡

所在地 九戸郡山形村大字川井第2地割
字外山38-2

委託者 岩手県久慈地方振興局土木部

事業名 緊急地方道路整備

発掘調査期間 平成11年9月1日～11月11日

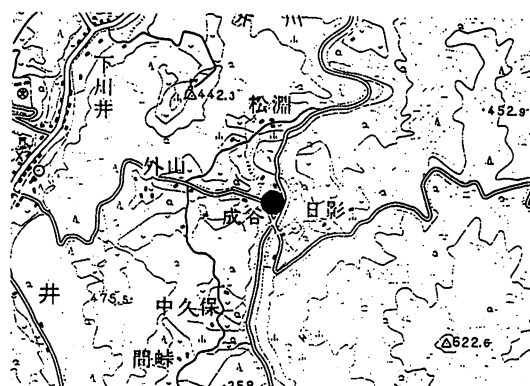
調査対象面積 2,240㎡

発掘調査面積 2,240㎡

遺跡番号・略号 J F 46-1066・NY-99

調査担当者 佐々木進悦・菊池貴広

協力機関 山形村教育委員会



遺跡位置

1 : 50,000 関

1. 遺跡の立地

成谷遺跡は、山形村役場より東へ約1.5kmに位置し、遠別川の左岸に形成された標高約260mの河岸段丘上に立地している。調査区の現況は蕎麦畑である。本遺跡より北へ約1.5kmには、旧石器が出土した早坂平遺跡がある。

2. 調査の概要

調査区北側は砂礫層になっており、遺構の大半は中央部から南側にかけての調査区から検出されている。検出された遺構は縄文時代後期の竪穴住居跡が4棟、竪穴状遺構が1基、平安時代の竪穴住居跡が5棟、土坑9基、集石状遺構1基、炭窯1基である。

<竪穴住居跡> 縄文時代後期の住居跡が4棟検出された。大きさは直径が3～4mと推定される。耕作等の削平により住居の壁を確認できるものは少ない。ただ、いずれにも石囲炉が確認された。

平安時代の住居跡は5棟検出された。いずれも形状は方形である。大きさは、ほぼ1辺が4～5mの範囲に入る。その中には、住居内の焼土や炭化材の散乱状態から何らかの原因で火災にあったとみられる焼失住居が2棟検出されている。また、カマドのつくりかえにより住居内でカマド跡が3ヶ所確認された住居もあった。

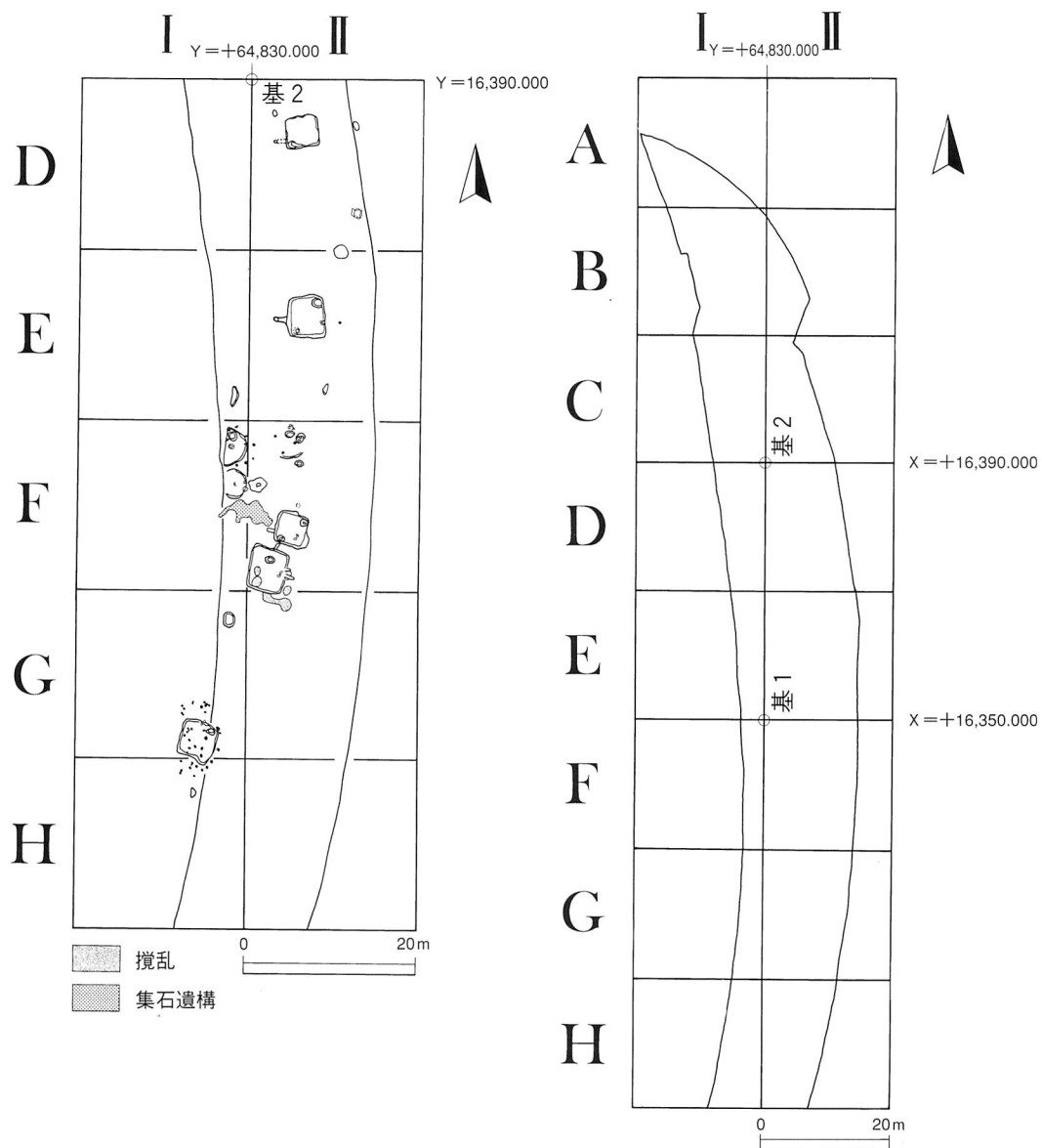
<炭窯> 埋土に焼土と炭を伴い、形状は楕円形と推定される。焼土面から土師器片が出土していることから平安時代に属すると思われる。

<集石状遺構> 大小約60個の石で構成されており東西に約5m程のびる。時代時期、性格は不明である。

<出土遺物> 今回の調査では縄文時代早期の土器と後期の土器、石器も約100点出土している。土師器などを含めると全体で大コンテナ約2.5箱になる。

3. まとめ

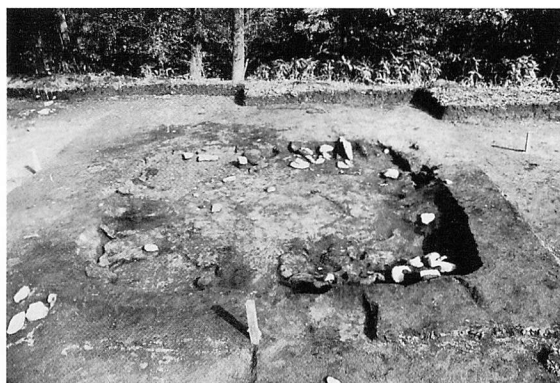
今回の調査で成谷遺跡が縄文時代後期と平安時代の集落を主体とする遺跡であることが確認された。今後、周辺の遺跡との比較検討により本遺跡の性格を明らかにしていきたい。



成谷遺跡遺構配置図



遺跡全景

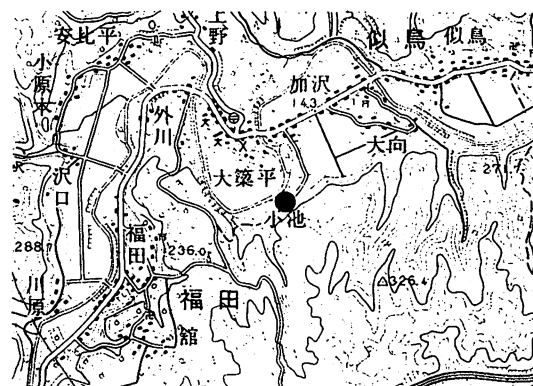


平安時代の竪穴住居跡

成谷遺跡遺構配置図・遺構写真

(32) ^{おおむかい}大向Ⅱ遺跡

所在地 二戸市似鳥字田中坪13-1ほか
委託者 岩手県二戸市地方振興局土木部
事業名 主要地方道二戸安代線
発掘調査期間 平成11年6月16日～8月31日
調査対象面積 1,965㎡
発掘調査面積 1,965㎡
遺跡番号・略号 N J F 18-1149・OMⅡ-99
調査担当者 菊池貴広・佐々木進悦
協力機関 二戸市教育委員会



遺跡位置

1 : 50,000 浄法寺

1 遺跡の立地

本遺跡は、JR東北本線二戸駅から南西方向に約6kmに位置し、安比川右岸に形成された河岸段丘上に立地する。遺跡の標高は、約145mである。安比川のとの比高は、約5mである。

2 調査の概要

(縄文時代)

<土坑> 中礫浮石層面で2基検出された。出土遺物がないため詳細は不明。

(奈良時代)

<竪穴住居跡> 1棟検出された。規模は、4.2～4.3m。平面形は隅丸方形を呈し、カマドは西向きである。煙道は割貫式と思われる。床は貼床をしている。

(平安時代)

<竪穴住居跡> 4棟検出された。うち2基は、耕作時の削平・調査区外にかかる遺構で、規模は不明である。残りの2基の規模は約6.0～6.2mの範囲に入る。平面形は共に隅丸方形を呈し、カマドは東向きである。煙道は、石組で構成される掘込式である。床は貼床をしている。

<住居状遺構> 1棟検出された。耕作時による削平が著しい。3辺の壁と思われる立ち上がりが確認された。貼床をしている。

<土坑> 2基検出された。内1基は底面に焼土を伴う。

<焼土遺構> 1基検出された。規模は約0.4×0.5m平面形は楕円形を呈する。

<畑復旧溝跡> 約80条検出された。十和田a火山灰をブロック状・粒状に含む。規模は長さ約1～6m・幅は15～40cmの範囲に入る。方位は南北方向である。火山灰の降下・泥流等により、畑が埋まった状態を復旧するために、何度かの復旧活動を行った結果残った溝跡と考えられる。

<掘立柱建物跡> 1棟検出された。間取りは2間×3間で東西方向に並ぶ。柱穴埋土から甕の土師器片が出土しており、古代に属する可能性があると思われる。

(時代時期不明)

<柱穴列> 長方形の建物を構成する柱穴と思われる。小屋等の小規模な建物跡と考えられる。

4. 出土遺物

土師器・須恵器の土器片が大コンテナで約3箱出土している。ほとんどが住居内からの出土である。また、縄文土器が約50片・石器が約20片程出土している。縄文土器の時代は、早期・前期・中期・晩期である。石器は、剥片石器がほとんどであるが、定型石器では石匙が1点が出土している。

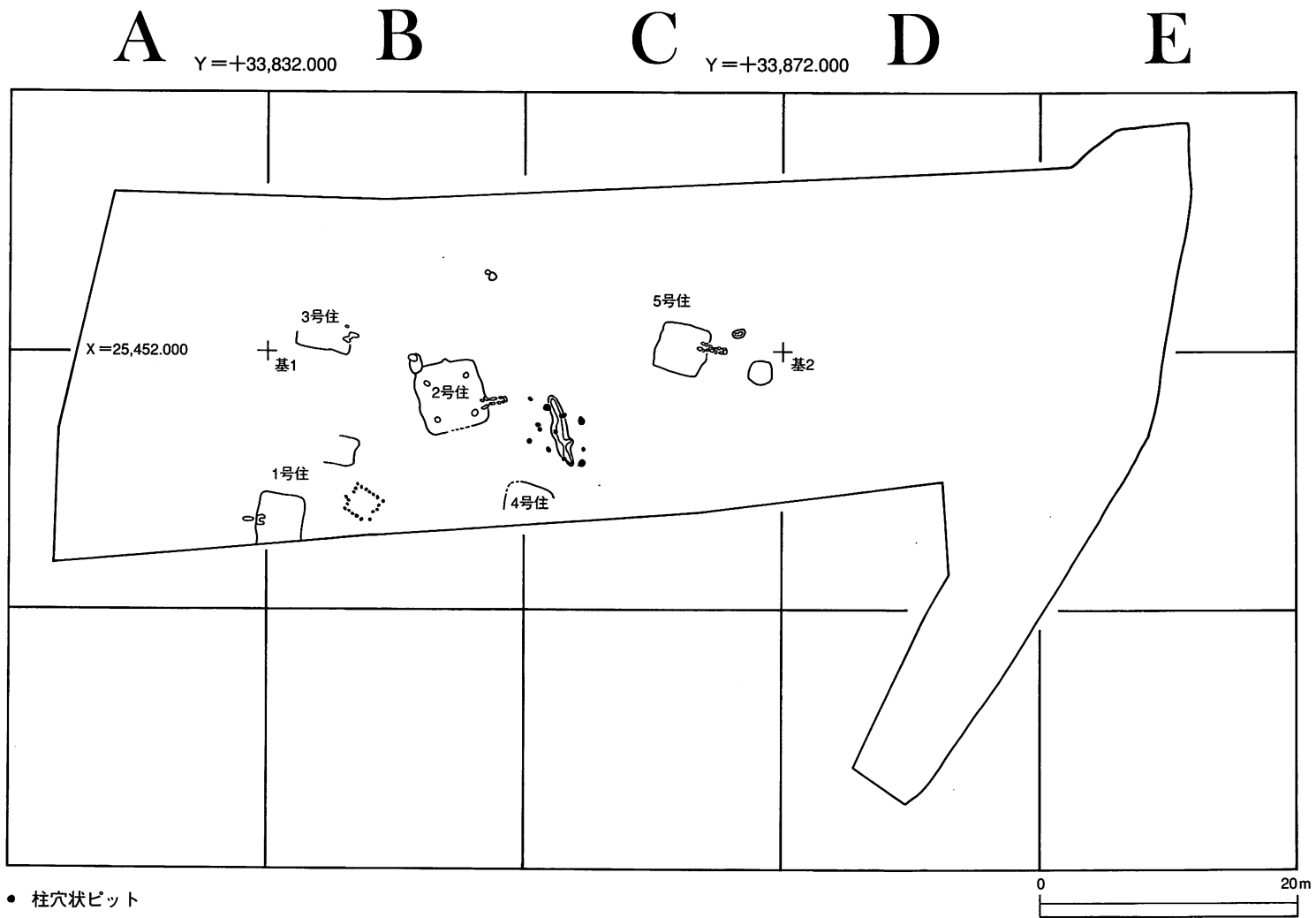
5. まとめ

今回の調査で平安時代の当地域の集落跡の様相が明らかになった。畑復旧溝跡の検出で平安時代の人々の生業に関連する資料を提供できた。竪穴住居跡が確認されたが、畑を耕していた人々が居住していたかどうかは、今後の検討課題である。他の検出された遺構と考え合わせて、本遺跡の性格を明らかにしたいと考えている。



大向Ⅱ遺跡・畑復旧溝跡平面図

大向Ⅱ遺跡遺構配置図





1号竪穴住居跡（奈良時代）



2号竪穴住居跡（平安時代）



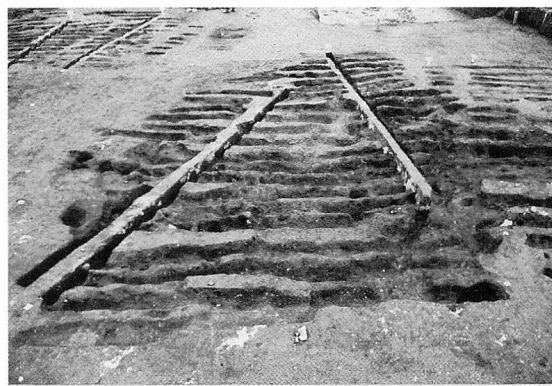
2号竪穴住居跡カマド近景



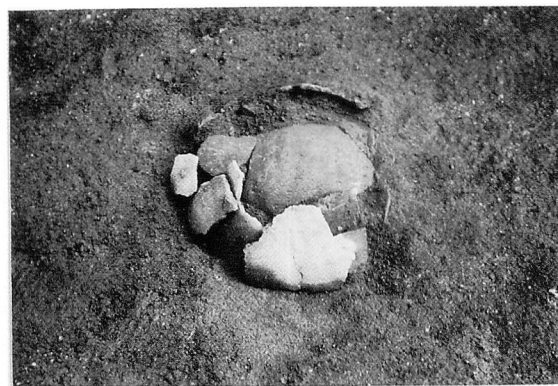
5号竪穴住居跡（平安時代）



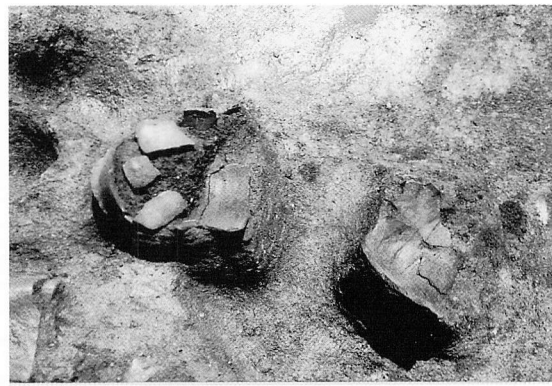
5号竪穴住居跡カマド近景



畑復旧溝跡（平安時代）



遺物出土状況

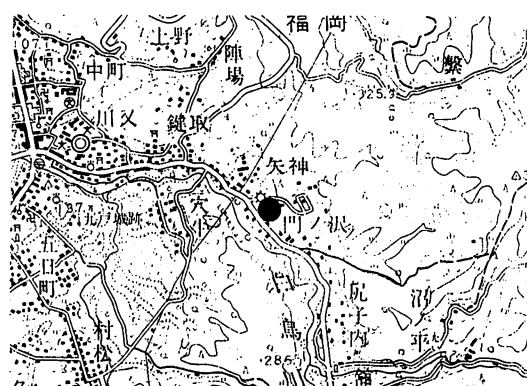


遺物出土状況

大向Ⅱ遺跡検出遺構

(33) 矢^{がみ}神遺跡

所在地 二戸市福岡字矢神128-10ほか
委託者 岩手県二戸地方振興局土木部
事業名 緊急地方道整備事業川又地区
発掘調査期間 平成11年4月6日～5月31日
調査対象面積 1,465㎡
発掘調査面積 1,465㎡
遺跡番号・略号 J F 00-2114 Y G-99
調査担当者 鳥居達人・中田 迪
協力機関 二戸市教育委員会



遺跡位置

1:50,000 一戸

1. 遺跡の立地

矢神遺跡は馬淵川の支流にあたる北東流する白鳥川の北側に広がる河岸段丘上に位置する。遺跡のある北側はなだらかな丘陵が続くが、南側は小起伏山地が存在し、急斜面を形成する。その自然の要害を利用した九戸城跡が遺跡の西側にある。

調査区は北側河岸段丘の末端に位置し、白鳥川に急激に落ち込むところにある。現況は住宅地や畑地で、宅地の造成のために厚く盛り土を施している区域がある。また上下水道の施設が深く埋められているところ、道路造成のために地山面まで削られているところなどがあり、近代以降の攪乱が進んでいる観がある。

2. 調査の概要

<縄文時代の竪穴住居跡・炉跡・土坑> 検出された住居跡3棟のうち1棟の規模・形状は長軸4mほどの正円か隅丸の長方形を呈すると思われ、ほぼ中心部に炉をもつ。炉は半分ほど破壊されていたが、円形の石囲い炉で、時期は出土遺物から縄文時代後期前葉と思われる。1基検出された炉跡は石囲い炉と埋設土器をもつ複式炉であった可能性が高い。6基検出された土坑のうち、埋土やその切り合い関係から明らかに縄文時代のもは3基で、ほかは定かではない。ほかに穴を掘って石を埋め込んでいると思われる小型の土坑も2基検出したが、その用途や性格については定かではない。

<中世の竪穴建物跡> 形状は隅丸の長方形であり、南側に出入り口に伴うかと思われる柱穴を有す。張り出し部分は明確ではないが、中世の末、九戸城時代のものであろうか。

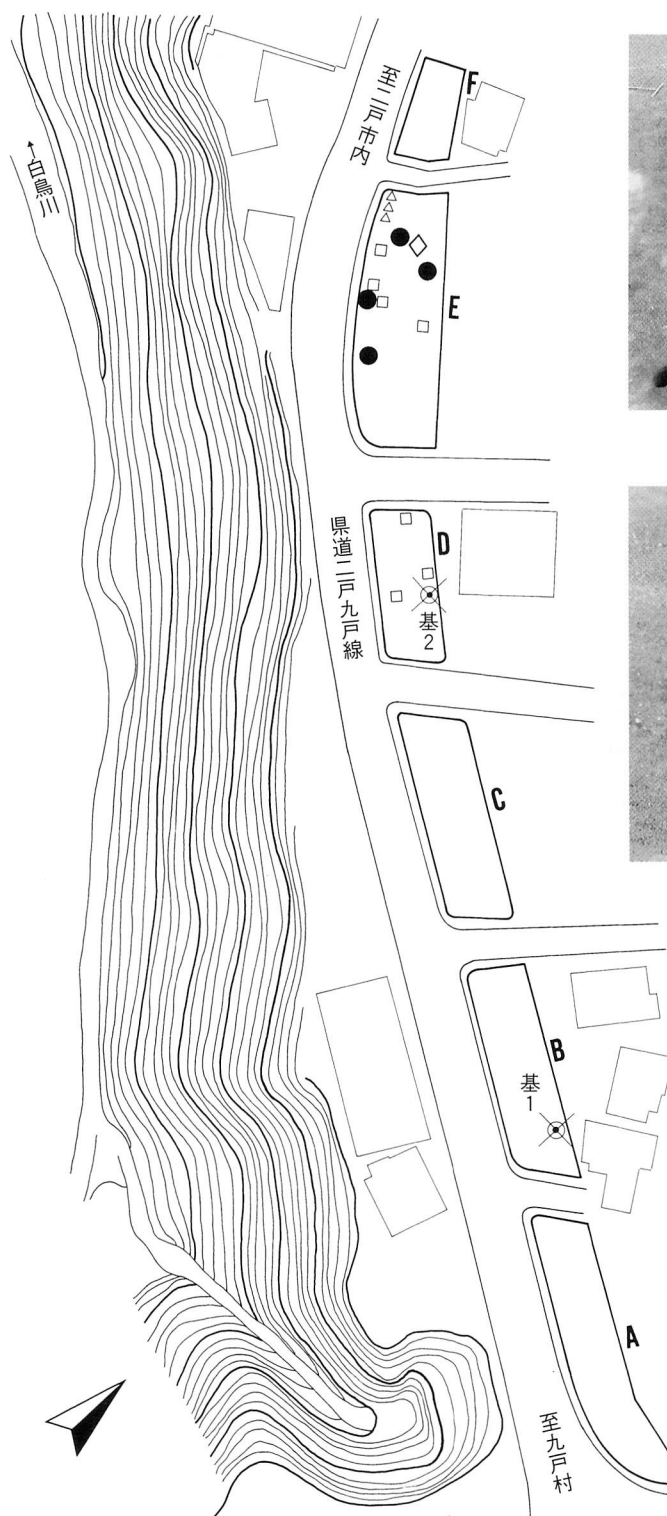
<その他> 時代は不明であるが柱穴が137基検出された。それらはすべて直径20cm程度の小型のものである。円形状に、あるいは掘立柱状に配列が認められるところもある。また、近世から近代のもと思われる墓礫が3基検出されている。

<出土した遺物> 縄文土器は大コンテナで2箱出土している。復元できるものは数は少ないが、後期の土器が中心で、竪穴住居跡の床面から出土したものは後期前葉に当たる十腰内I式と思われる。石器は、石匙ほか20点あまり、土製品では小型てづくね土器が、その他では、近世の墓礫から人骨3体が出土した。

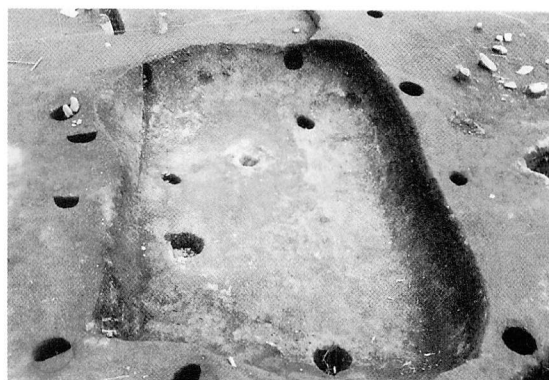
3. まとめ

今回の発掘調査で、当遺跡が縄文時代後期の集落跡である可能性がみえてきた。それらは調査区域の東側斜面に広がるものと推定する。白鳥川流域の縄文時代の人々の暮らしを知る上で、貴重な資料になろう。

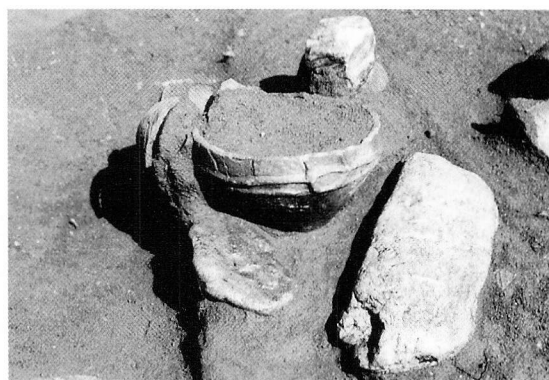
周辺の地形と調査範囲



検出遺構と出土土器



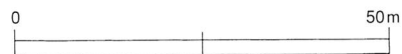
中世の遺構



縄文時代の土器出土状況

- ◇ 中世住居跡
- 縄文住居跡
- 土坑
- △ 墓壇（近世）

基準点1 X=+29,640.000 Y=+41,455.000 L=137.156
 基準点2 X=+29,679.000 Y=+41,392.000 L=133.560



矢神遺跡遺構配置図

(34) 宮沢遺跡

所在地 九戸郡軽米町円子第9地割字茸沢
13-36他

委託者 岩手県二戸地方振興局土木部

事業名 主要地方道戸呂町軽米線

発掘調査期間 平成11年4月12日～6月30日

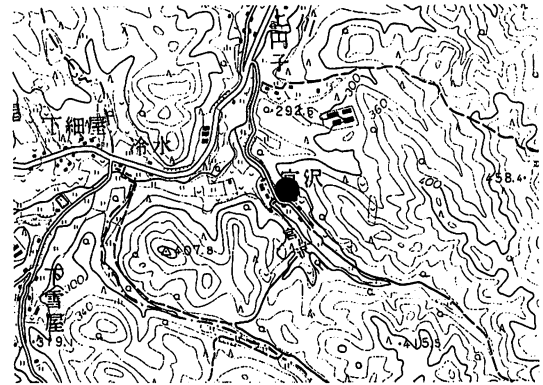
調査対象面積 5,260㎡

発掘調査面積 5,260㎡

遺跡番号・略号 J F 03-2246・MYZ-99

調査担当者 阿部勝則・平めぐみ

協力機関 軽米町教育委員会



遺跡位置 1:50,000 一戸

1. 遺跡の立地

宮沢遺跡は東北縦貫自動車道八戸線九戸インターチェンジの東約6kmに位置し、雪谷川の支流で北流する宮沢川の右岸で南向きの緩斜面に立地する。標高は約280~288m、遺跡の現況は山林と畑地である。

2. 調査の概要

調査区は畑地の造成を受けており、南西部は南部浮石層まで削平されている。検出された遺構は、竪穴住居跡9棟（弥生3棟・奈良1棟・平安5棟）、竪穴住居状遺構1棟、土坑20基、焼土遺構9基、掘立柱建物跡1棟、溝跡1条、炭窯3基である。

<竪穴住居跡> 弥生時代の住居跡は石囲炉を持つもの2棟と地床炉を持つもの1棟である。石囲炉を持つものは削平されているため規模は不明である。地床炉を持つものは4.5×3.5mの規模で楕円形を呈している。奈良時代の住居跡は調査区中央で1棟検出した。1辺3.5mの正方形でカマドは北西を向いている。平安時代の住居跡は調査区北側斜面を中心に5棟検出した。削平のため全容は不明だが、北側の斜面上位にある1棟は1辺6.2mと他に比べて大型で、焼失住居跡であった。カマドは北向きの掘込式である。

<土坑> 調査区全体に亘って20基検出した。平面形は円形または楕円形で、規模は最大で開口部径180×170cm、深さ60cm、最小で開口部径80×80cm、深さ15cmである。

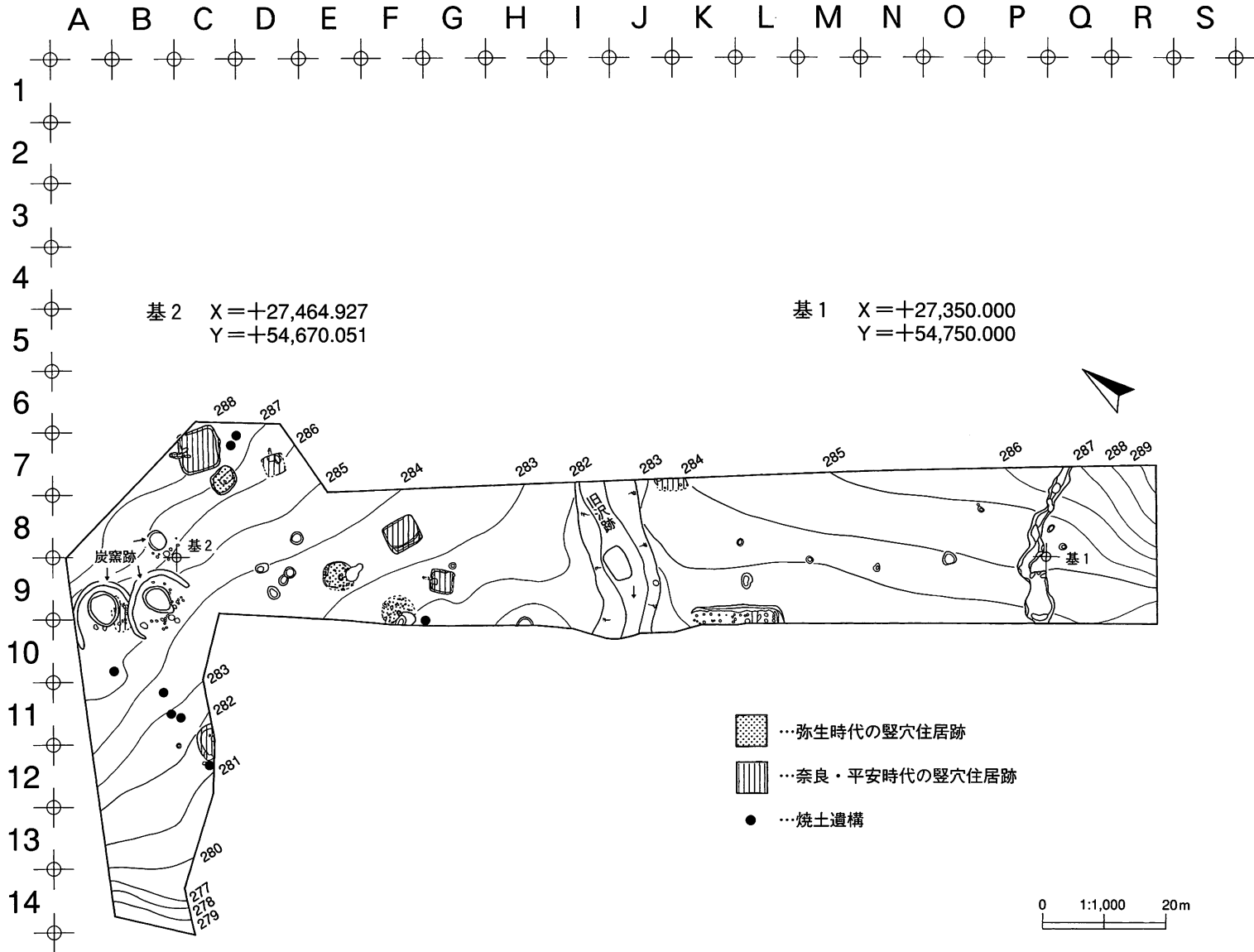
<焼土遺構> 調査区北西側を中心に9基検出した。規模は最大で径70cm、厚さ15cm、形状は円形基調である。

<出土遺物> 縄文土器・弥生土器が中コンテナ1箱、土師器が大コンテナ2箱、その他石器・鉄製品が数点出土した。縄文土器は前期の粗製土器で調査区の南側から出土したが、遺構に伴うものではなかった。弥生土器及び土師器と鉄製品の多くは竪穴住居跡内から出土したものである。

3. まとめ

今回の調査結果から、宮沢遺跡は弥生時代と奈良・平安時代を主体とする複合遺跡であることがわかった。遺構は調査区の北側斜面中腹から上位に多く検出された。しかし、調査区外の斜面下位からも坏や須恵器が採集されており、遺構は斜面全体に亘って存在していた可能性が高い。

竪穴遺跡遺構配置図



(35) 上野遺跡

所在地 二戸郡一戸町一戸字上野172-1 他
委託者 岩手県二戸地方振興局土木部
事業名 都市計画街路上野西法寺線工事
発掘調査期間 平成11年7月13日～12月3日
調査対象面積 6,500㎡
発掘調査面積 6,460㎡
遺跡番号・略号 J F 20-0074・UN-99
調査担当者 安藤由紀夫・酒井宗孝・千葉正彦
協力機関 一戸町教育委員会・二戸市教育委員会



遺跡位置

1 : 50,000 一戸

1. 遺跡の立地

上野遺跡は、JR東北本線一戸駅東方1kmの河岸段丘面(一戸段丘)に立地し、東西に約400m、南北に約150mの範囲を持った、総面積約50,000㎡の広大な遺跡である。今回の調査区は段丘の西端部で、一戸町教育委員会による上野遺跡全体の地域区分では、G地点にあたる。調査区中央部の標高は約170mで、西に張り出す台地になっており、北側と南側は段丘崖となっている。下位段丘である水田面との標高差は20～25m前後である。

2. 調査の概要

上野遺跡は、これまでに一戸バイパス整備事業、個人住宅建築等に伴い、計7回の発掘調査が行われてきた。この結果、縄文時代・弥生時代・奈良時代・平安時代・中世の遺構・遺物が多数発見されている。特に奈良・平安時代の竪穴住居跡数が非常に多く、周辺地域の中心的な集落の跡であったと考えられている。今回の調査で検出された遺構は、竪穴住居跡29棟(縄文時代1棟、奈良時代3棟、平安時代17棟、中世〔住居状遺構含む〕8棟)、柱穴約350基、土坑78基(縄文時代11基、奈良時代～中世67基)、石囲炉2基、円形周溝1基、焼土遺構6基、墓壇1基等である。また、南北の斜面に中世城館に伴う帯曲輪(南3段・北2段)が設けられていることが明らかになった。

＜竪穴住居跡＞ 縄文時代の竪穴住居跡は、出土遺物から晩期中葉の遺構と考えられる。規模は直径約5.5m、平面形はほぼ円形である。他の遺構との重複のため、壁は西側しか残っていなかったが、高いところで約40cmあった。床面の中央付近に炉跡と考えられる焼土が検出されたが、平安時代の土坑と住居に切られており残存状態は良くない。奈良時代の竪穴住居跡3棟は、出土遺物からいずれも8世紀の遺構と考えられる。うち2棟は東側が調査区外にかかる。精査できた部分から判断し、規模・形状は1辺が約3.6～6.4mの隅丸方形を呈すると考えられる。壁はほぼ垂直に近い立ち上がりを持つ。3棟ともカマドは北西壁のほぼ中央に作られている。2棟のカマド煙道部は削貫式で、1棟の煙出部には土師器の甕が逆さに埋め込まれていた。また、袖部の芯材に土師器の甕を用いたものもあった。平安時代の竪穴住居跡は、出土遺物から9・10世紀の遺構と考えられる。そのほとんどは壁面上部を後世(中世か?)に削平されており、貼床部分のみが残存し

ているものも数棟あった。規模は小さいもので1辺が約2.7m、最大のもは約5.2×4.8m、平面形は正方形や長方形である。中世の竪穴住居跡のうち、2棟は1辺約3.4～3.7mの正方形を呈する。四周にはほぼ等間隔で柱穴が巡っており、床面中央で炉跡と思われる焼土が検出された。また、約1.6×2.0・1.7×3.0mの長方形型の小型住居状遺構も2棟あった。規模から判断し、小屋的な使われ方をされたのではないかと考えられる。

<柱穴> 主に調査区中央平坦部の北東側で多数検出された。掘建柱建物の柱穴配置は現在検討中であるが、座標北より西に約20度程傾く柱穴列とそれに直行する柱穴列が複数確認されており、数棟の掘建柱建物及び柵列の存在が予想される。なお、中世の竪穴住居跡は、この柱穴群を取り囲むような配置になっている。

<土坑> 土坑は全部で78基検出された。このうち縄文時代のもと思われるものは11基で、そのうち8基はフラスコ形土坑である。その他の土坑は、遺物が少なく現段階では時期を確定できるものは少ないが、埋土の状態から推定して平安時代～中世の遺構の可能性はある。これらの土坑の平面形は、そのほとんどが円形及び隅丸方形で、壁が垂直に立ち上がる。規模は小さいもので開口部径約0.7m・深さ約0.2m、大きいもので開口部径3.4m・深さ約1.8mのものがある。底部から炭化穀類が出土した土坑が2基あった。

<円形周溝> 調査区中央平坦部の北東隅で1基検出された。外周の長径約3.9m、内周の長径約2.9mで、幅約20～100cmの溝が巡っている。部分的に輪が二重になっているところもあり、作り替えが行われた可能性がある。遺物は出土していないが、周辺部のこれまでの調査事例から、奈良時代の遺構と思われる。

<石囲炉> 調査区中央で約3mの距離を置いて2基検出された。2基とも縄文時代の竪穴住居に伴うものと考えられるが、周囲で柱穴・壁面等は検出されなかった。1基は石を円形に囲っており、焼土内から縄文後期の土器が出土している。1基は二つの円礫と焼土のみ残存しており、フラスコ形土坑を切っている。

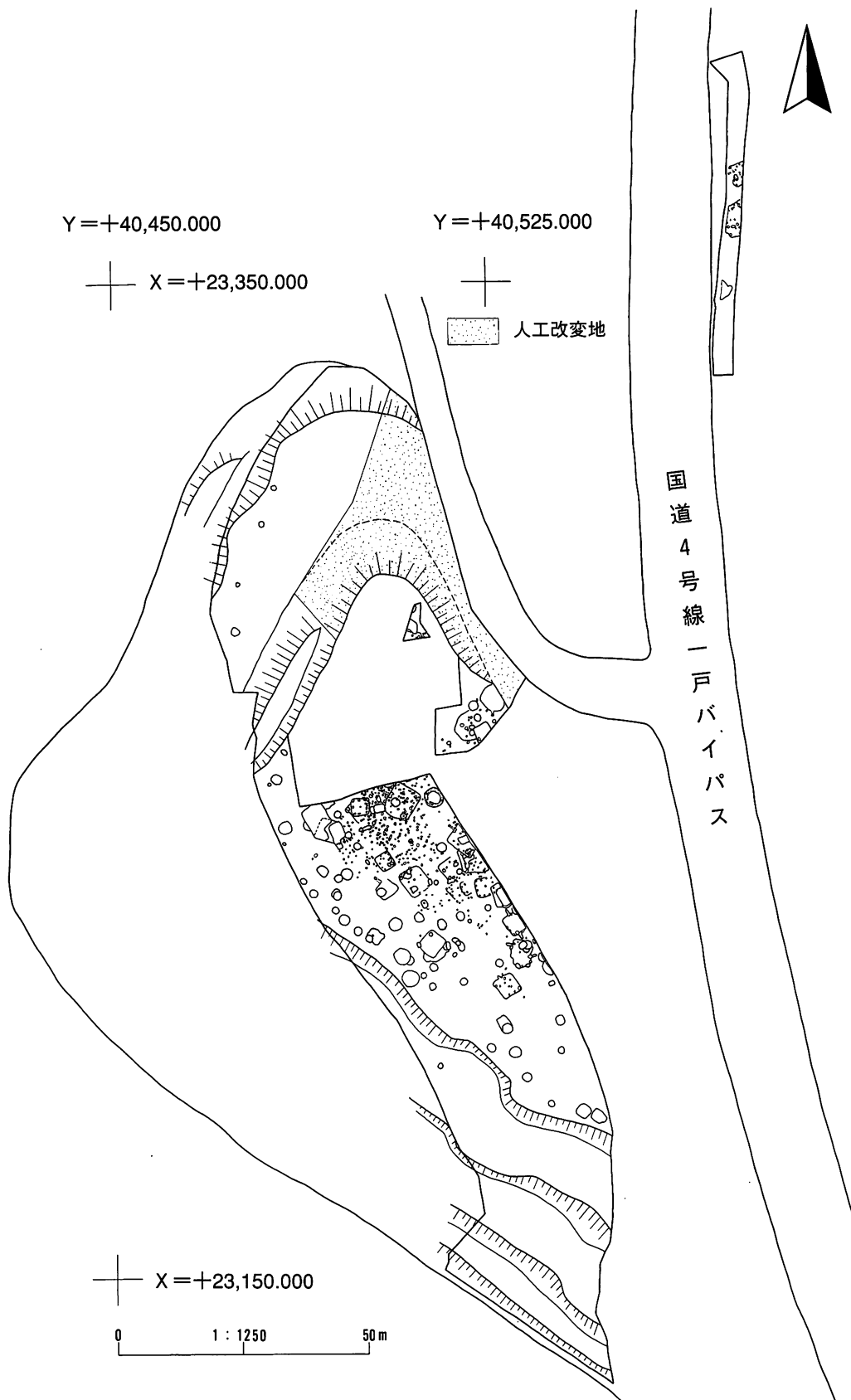
<焼土遺構> 焼土遺構6基のうち、現地性と考えられるものは5基、異地性と考えられるものは1基である。そのうち遺物が出土したのは3基で、それぞれから土師器片等が出土している。

<帯曲輪> 南斜面では3段（部分的には4段）、北斜面では2段、合計5段の帯曲輪が確認された。幅は3～10mで、盛り土によって構築されている。南斜面の3段は表土層が十数cmと薄く、中世段階の地形がほぼそのまま残っていたが、北斜面は上段の一部と中段部分が現代の畑地造成のため改変されている。

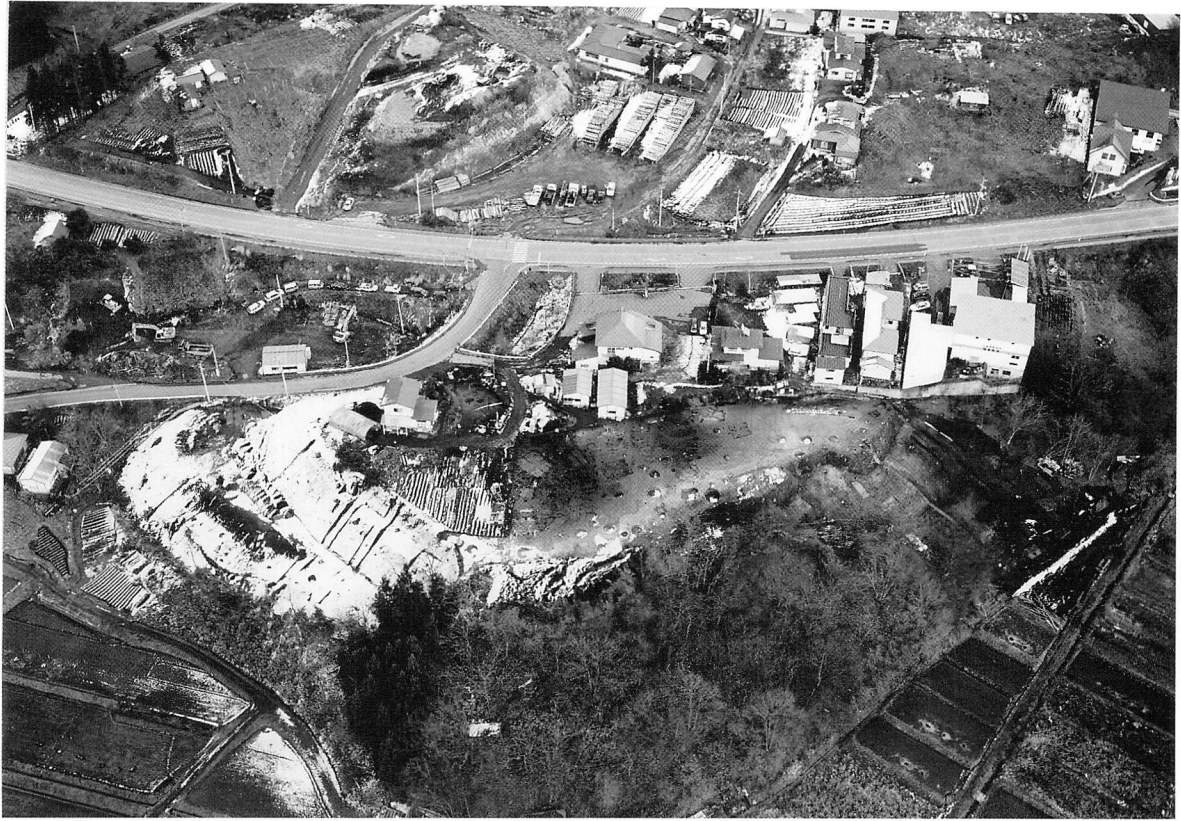
<出土遺物> 遺構内外から土器（縄文・弥生・土師器・須恵器）、陶磁器（中国産磁器・国産陶器）、土製品、石器・石製品、金属製品が出土している。縄文土器は、ほとんど遺構外からの出土で、前期前葉～中葉・後期前葉・晩期中葉期のものがある。弥生土器は、後期末葉のものである。土師器は出土量が最も多く、8～10世紀のものである。須恵器は量が少なかった。中国産磁器は青磁皿の破片が出土している。国産陶器は瀬戸・美濃産の碗破片が出土している。土製品には、縄文時代の垂飾品と奈良時代の土製勾玉・土玉がある。縄文時代のものはいずれも前期前葉～中葉期のもので、このうち1個は動物形の垂飾品である。全体が三角形を呈することや耳が立つことなどからオオカミを模した可能性が高い。石製品では石製円盤と硬玉（翡翠）製勾玉が出土した。金属製品では、鉄製品（刀子・小札・釘等）と銅製品（鍍金具と銭貨）が出土した。銭貨の多くは「大観通寶」「皇宋通寶」「元祐通寶」等の中国銭であるが、いずれも鏹銭である。

3. まとめ

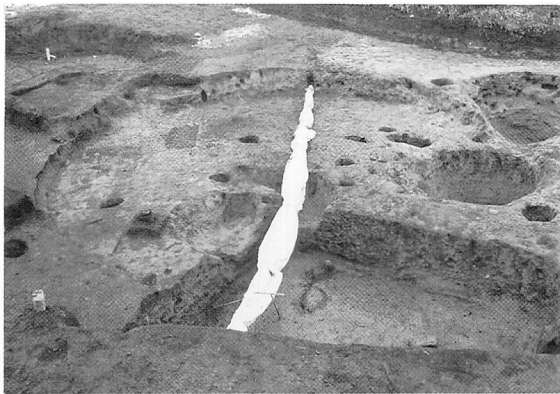
今回の調査で、上野遺跡のG地点は、縄文時代前期から中世（安土・桃山時代）にかけての複合遺跡であることが明らかになった。また、発見された中世の遺構群・遺物から推定して、この地点が一戸城の南側を固める防御施設の機能を持っていたものと考えられる。



上野遺跡遺構配置図



調査区全景



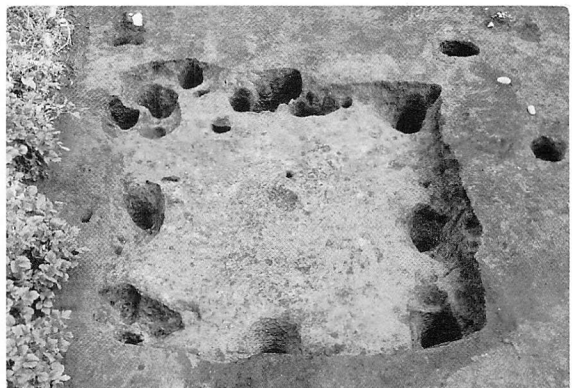
縄文時代の竪穴住居跡



奈良時代の竪穴住居跡



平安時代の竪穴住居跡

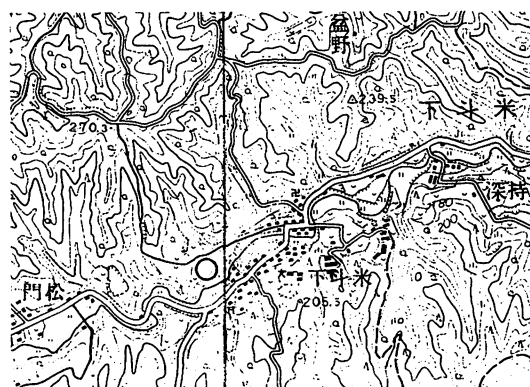


中世の竪穴住居跡

上野遺跡検出遺構

(36) 上台遺跡

所在地 二戸市下斗米寺久保59ほか
委託者 岩手県二戸地方振興局
二戸農村整備事務所
事業名 広域農道整備事業二戸地区
発掘調査期間 平成11年4月12日～7月15日
調査対象面積 4,064m²
発掘調査面積 4,064m²
遺跡番号・略号 I E 98-1332・UD-99
調査担当者 丸山浩治・中村直美
協力機関 二戸市教育委員会



遺跡位置 1:50,000 浄法寺・一戸

1. 遺跡の立地

上台遺跡は、J R東北本線斗米駅の西側約4 kmに位置し、馬淵川の支流で東流する十文字川の左岸に張り出した丘陵の南東側緩斜面上に立地する。遺跡の標高は約145～150m、調査前の状況は畑地である。なお、斜面上方には寺久保遺跡がある。

土層中には、十和田b降下火山灰、中振浮石、南部浮石など十和田系テフラの堆積が見られ、住居跡等の深い落ち込み部分には十和田a降下火山灰が堆積している。但し調査区斜面上位は削平されたらしく、これらの堆積は確認されなかった。

2. 調査の概要

検出遺構は、古代(奈良時代中心)の竪穴住居跡7棟、竪穴住居状遺構3基、方形溝状遺構1基、土坑7基、T₀-aの溝状堆積範囲1ヶ所、縄文時代の陥し穴状遺構1基である。大半の遺構は比較的平坦な斜面下位の南東部から検出された。

<竪穴住居跡> 斜面下方にあたる南東部から7棟検出した。時期は、出土土器から8世紀初～中頃と考えられるものが殆どであるが、2棟は十和田a降下火山灰の堆積状況からこれより新しい時期に比定される。また、5棟は、本体の一部或いはカマド煙道部分が調査区外に及んでいたり、攪乱を受けるなどしているため全容が不明である。各住居跡とも平面形は概ね隅丸方形を呈しており、その規模はカマド構築壁の床面長から大形(約7m・1棟)、中形(4m前後・3棟)、小形(3m前後・3棟)の3種に大別される。カマドは7棟中6棟が北西壁中央部に、1棟のみ南東壁右側に構築されている。この1棟は焼失住居で、規模は中形に属する。カマドの芯材には加工痕の見られる軟質の凝灰岩を使用している例が非常に多く、煙道部は全て削貫式である。柱穴は確認できないものが多く、壁面や竪穴外で検出される場合もある。貼床は6棟で確認された。

大形住居跡からは主柱穴4本の他、壁面に沿って規則的に配置された壁柱穴が18本、カマド前を除く主柱穴間に床溝が3条検出されている。壁面は4壁ともに中央部から棚状に張り出しており、テラス状を呈する。

その幅は45～90cmを測る。また、本遺構の周囲からは、中礫浮石を含む堆積土の広がり極薄くではあるものの確認されており、周堤のような盛土が構築されていた可能性がある。

壁がテラス状に張り出す住居跡はもう1棟（小形に属する）存在し、こちらの張り出し部からは土師器甕が2個体分出土している。

<竪穴住居状遺構> 調査区北半部から3基検出された。全て貼床が構築されている。内、1基は攪乱を受けており、貼床上5cm程度が残存するのみであった。各遺構とも平面形は隅丸方形で、残存状態の良い2基の床面積はそれぞれ3.8㎡、3.2㎡を測る。柱穴が検出されたのは1基のみで、しかも床面ではなく壁面からの検出である。

<方形溝状遺構> 大形住居跡の北東側約10mから検出された。平面形はおよそ「コ」の字状を呈する。検出当初は北西・北東・南東・南西に辺を持つ「口」の字状を呈するかと思われたが、結局北東側から溝は検出されなかった。但し、この部分には現代の耕作痕（トレンチャー）が顕著に入っており、また検出面が中礫浮石を含む軟弱な面であったことから失われた可能性も考えられる。各溝の規模は北西側約4.3m、南西側約8m、南東側約4.2m、幅約0.2～0.4mで、深さは最深部で約0.2mを測る。

溝の底面からは径約15×12cm、深さ約6～10cmを測る小ピットが多数検出された。構築時の工具痕と思われる。大半が溝に対して直行方向に最大径を持っており、同方向に2個並列もしくは鋸歯状に並んでいる場合が多い。

<土坑> 調査区全体から7基検出された。平面形は大半が楕円形で、規模はさまざまである。内、2基には移地性の焼土が顕著に見られ、焼け弾けた土師器片等が多量に出土している。

<To-a溝状堆積範囲> 大形住居跡の北側約2mから検出された。東西約18m、南北約9mの範囲に、十和田a降下火山灰が北西～南東方向に細長く幾条も堆積している。個々の条がはっきりと分かれて均等に存在する訳ではなく、黒褐色土と混ざり合って斑な太い溝状を呈している部分もある。細い溝状を呈する部分の幅は約0.2～0.3mで、条間の幅も同程度を測る。厚さは3cm程度であるが、その下約10cmの間には十和田a降下火山灰がブロック状に混入している。このため畝間状遺構とは考えにくく、また現代の耕作痕もこの付近では確認されていないことからその可能性も低い。現状ではこの範囲の性格が何であるのか不明である。

<陥し穴状遺構> 南東部から1基検出された。検出面は奈良の竪穴住居跡より約0.4～0.5m下である。長軸及び短軸値は、開口部で約4.7×1m、底面で約3.6×0.1mを測り、深さは中央部で約1.5m、短軸断面形は漏斗状を呈する。逆茂木痕はない。

<出土遺物> 奈良時代の遺物には、土師器（8世紀初～中頃主体）大コンテナ約10箱分、須恵器片2点、鉄製品（刀子・小札・釘）4点、石器（砥石・台石・敲打器）7点、植物種子、炭化クルミ、獣骨がある。小札及び植物種子はそれぞれ大形住居跡の床面及び貼床内からの出土である。また動物骨骸は、中形住居跡のカマド内で発見されたものである。縄文時代の遺物には、円筒下層式・大木10式相当の土器片が中コンテナ約半箱分、石器（石鏃・削器・剥片）3点がある。

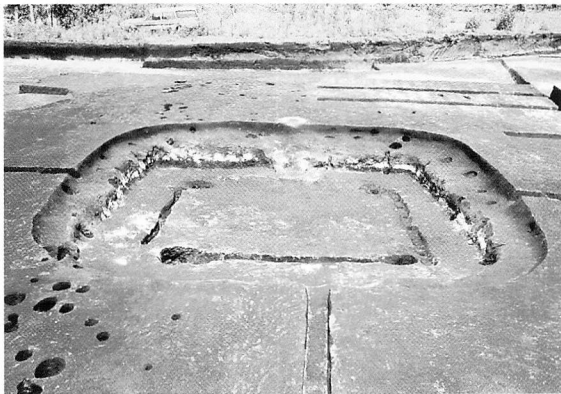
3. まとめ

今回の調査により、本遺跡が奈良時代には集落域として、また縄文時代には狩り場として使用されていたことが確認された。特に大形住居跡はさまざまな住居内施設を有しており、小札等も出土していることからこの付近の中心であった可能性が示唆される。

また、竪穴住居跡4棟、竪穴住居状遺構1基、土坑1基は南東側調査区外へ続いており、同部分は本調査区域より傾斜が緩いことから、本来の遺跡範囲はさらに南東側へ広がるものと思われる。



遺跡全景



竪穴住居跡（大形）



竪穴住居跡（大形）断面



竪穴住居跡（焼失）

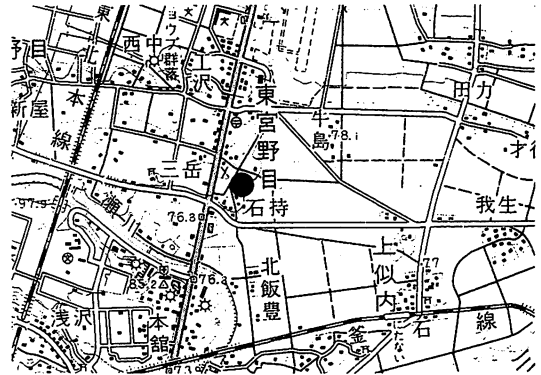


土坑

上台遺跡検出遺構

(37) 石持^{いしもち}I 遺跡

所在地 花巻市東宮野目9地割3番地1ほか
委託者 岩手県花巻地方振興局土木部
事業名 一般県道東和花巻温泉線
発掘調査期間 平成11年8月17日～10月17日
調査対象面積 1,326m²
遺跡番号・略号 ME16-2117・IMI-99
調査担当者 平澤里香
協力機関 花巻市教育委員会



遺跡位置

1 : 50,000 花巻

1. 遺跡の立地

JR東北本線花巻空港駅の南東約2km、国道4号線東宮野目交差点のすぐ東側に位置し、北上川河谷台地の砂礫段丘に立地している。調査区西側は国道4号を挟んで宅地が広がり、国道沿いを南北の方向に工場・店舗が立ち並んでいる。また東側は水田地帯で、東方約2km先に北上川が流れている。遺跡の標高は78m前後ではほぼ平坦である。調査前の状況は、宅地（庭園を含む）及び畑地である。

2. 調査の概要

検出された遺構は平安時代の竪穴住居跡状遺構1棟、陥し穴状遺構20基、溝6条である。調査区内は、宅地の基礎工事・庭園内の植林・畑地の耕作等により、かなり削平を受けている。また、今年度建設省から委託を受けて行なった一般県道東和花巻温泉線工事に伴う緊急発掘調査区域に隣接している。

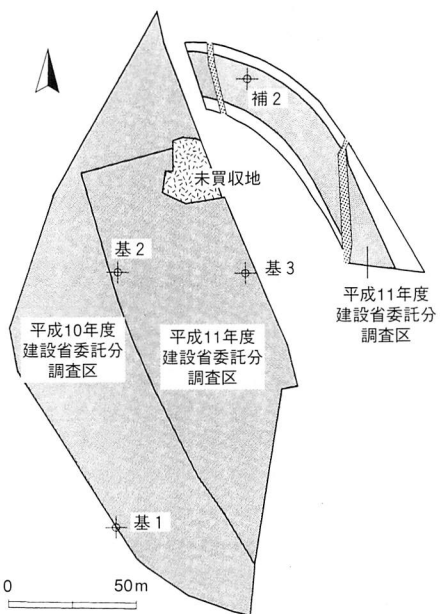
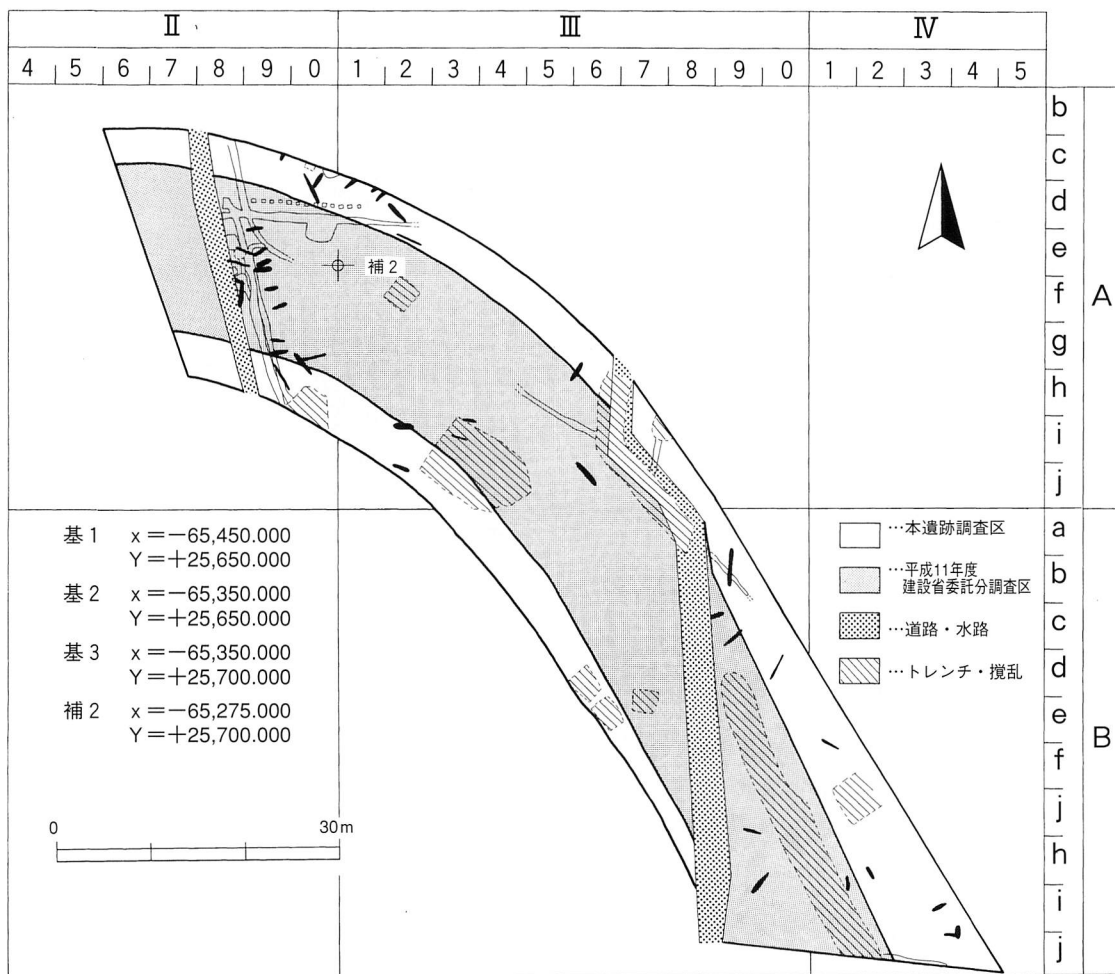
<竪穴住居跡状遺構> 竪穴住居跡状遺構を1棟検出している。平面形は隅丸方形を呈していると思われるが、本年度の調査区内で検出されたのは極一部であり、ほとんどが調査区外にのびているため全容の把握には至らなかった。また埋土から土師器の小破片2点出土している。

<陥し穴状遺構> 調査区全体から20基検出し、平面形は溝状を呈するものがほとんどである。規模は長軸径1.5～4.3m、短軸径0.2～0.5m、深さ0.2～0.8mであった。建設省委託調査分を含めてみると、軸方向をほぼ同じにして並列しているものが数組見受けられる。また埋土からの遺物は確認出来なかった。

<溝状遺構> 調査区内で上端幅0.5～1.0m、下端幅0.2～0.3m、深さ0.1～0.5mのものを約6条検出している。埋土からの検出遺物もなく、重複・攪乱がひどく、用途や時代の特定には至っていない。

3. まとめ

本遺跡は、縄文時代には狩場として、平安時代には集落が存在していたことを想定させる遺構を検出した。今後、建設省からの委託により調査を行った区域の結果も加味しながら検討していきたいと考えている。



調査区遠景（南から）



調査区近景（南から）

石持 I 遺跡調査区・遺構配置図

(38) 台太郎遺跡第23次調査

所在地 盛岡市向中野字向中野16-15他
委託者 盛岡市
事業名 盛岡南新都市計画整備事業
発掘調査期間 平成11年4月16日～11月15日
調査対象面積 27,800m²
発掘調査面積 27,800m²
遺跡番号・略号 LE16-2269・ODT-99-23
調査担当者 杉沢昭太郎・阿部眞澄・北村忠昭
山口俊規・吉田里和・小原眞一
協力機関 盛岡市教育委員会



遺跡位置

1 : 50,000 盛岡

1. 遺跡の立地

本遺跡は、東日本旅客鉄道東北本線仙北町駅の南西約900mに位置し、雫石川南岸の河岸段丘に立地している。標高は120.28～122.12m、北緯39度40分、東経141度8分付近に当たる。調査区の現況は休耕田と畑地で占められ、概ね平坦な地形であるが、その中でも若干の高低差が見られる。遺跡の北側は平成10年度調査の第18次調査区に隣接する。

2. 遺跡の概要

検出された遺構は、竪穴住居跡73棟、掘立柱建物跡9棟、竪穴状遺構16棟、土坑482基、堀跡3条、溝跡61条、焼土29基、円形周溝6基、井戸跡9基等である。

<竪穴住居跡> 奈良時代の竪穴住居跡は35棟検出されている。規模は1辺が3～6m、平面形は隅丸方形、隅丸長方形を呈している。カマドは北壁あるいは東西壁の中央にあり、前者が多くを占める。平安時代の竪穴住居跡は25棟検出されている。規模は、1辺が3～8m前後で、平面形は隅丸方形を呈している。カマドの設置位置は東西南北に散在し、大部分の煙道部は刳貫式である。袖部の芯材に石材や土師器の甕を伏せて使用したり、小形の甕を支脚に転用したものもみられる。中世の竪穴住居跡は13棟、調査区東側南部から多く検出されている。

<掘立柱建物跡> 9棟検出しており、1棟が平安時代、3棟は中世、3棟は近世の掘立柱建物跡である。平安時代の建物跡の規模は、桁行2間×梁行2間、棟方向は東西棟である。直径5～10cmの柱を支える石が柱穴中に多くある。中世の建物跡の規模は、①桁行7間×梁行4間 ②桁行5間以上×梁行5間 ③桁行2間以上×梁行2間以上である。棟方向は、①②が東西棟、③は不明である。柱穴の掘り方は円形を基調とし、直径50cm程である。近世の建物跡は3棟検出されている。そのうち1棟は、母屋桁行7間×梁行3間の南北棟、厩桁行3間×梁行2間半の東西棟の曲家である。

<竪穴状遺構> 規模は1辺が2.5～5mで、平面形は隅丸方形と不定形である。時期は奈良時代以降のもので、カマドはなく、遺物もほとんどみられない。

<土坑> 第23次の調査では、482基もの土坑が検出された。規模は大きいもので3×2.5m、小さいもので0.8×1m、平面形は楕円形・隅丸長方形・円形等である。このうち、調査区東側より検出された隅丸長方形のもの大部分は墓壙とみられ、出土した銭貨から中世と考えられるが、人骨はほとんど残っていない。墓壙は、調査区東側に密集して分布していることから、この場所が大きな墓域であったと言える。

<炉跡> 土坑が多く検出された区域を中心に、18基検出している。平面形は8の字形を呈し、規模は1～4m×0.5～1mである。赤褐色の焼土は、締まりがあり層厚10～30cmを測る。屋外炉と考えられるが、詳細は不明である。炭化物を含むものもある。

<焼土遺構> 11基検出され、規模は径0.5～2.5m、平面形は楕円形と不整形を呈している。焼土の層厚は3～14cmを測る。時期は出土遺物がなく不明である。

<溝跡> 大小合わせて61条検出している。時期は不明なものが多い。規模は上幅が0.2～2m、下幅が0.2～1.5m、深さ5～60cm、長さ2.5～80m前後である。以前の調査から確認されている平安時代の大溝の続きが本年度の調査でも見つかり、北西から南東方向へ170m程、真直ぐ延びている。

<堀跡> 調査区東側を中心に、3条検出された。特筆すべきは、遺跡内にある諏訪神社を囲むように2条（上幅約2m、深さ約1m、一辺の長さが内側で33m、外側で36m）の堀が発見されたことである。時代を特定する遺物は見つからないが、中世頃のものであろうと考えられる。この堀跡と諏訪神社との関係も明確ではないが、当時から堀の内側は特別の場所で、何らかの施設が存在していたと推測される。もう一つの堀としたものは、以前の調査で確認されている中世の環濠の南外側に並行し、東から西方向に延びている。環濠が南側で二重につくられているのか、またはつくりかえを行っていると考えられる。

<円形周溝> 6基検出しているが、竪穴住居跡や柱穴・土坑と重複しており、全容は不明である。確認された規模は、直径2.5×1.6m、溝幅が0.4～1m、深さ20cm、平面形は楕円形状を呈する。

<井戸跡> 9基検出している。開口部は2×1.5mの円形を呈し、深さは2m前後、現在も湧水を確認できるものや、検出面の1.5m下位から井戸枠が出土しているものもある。

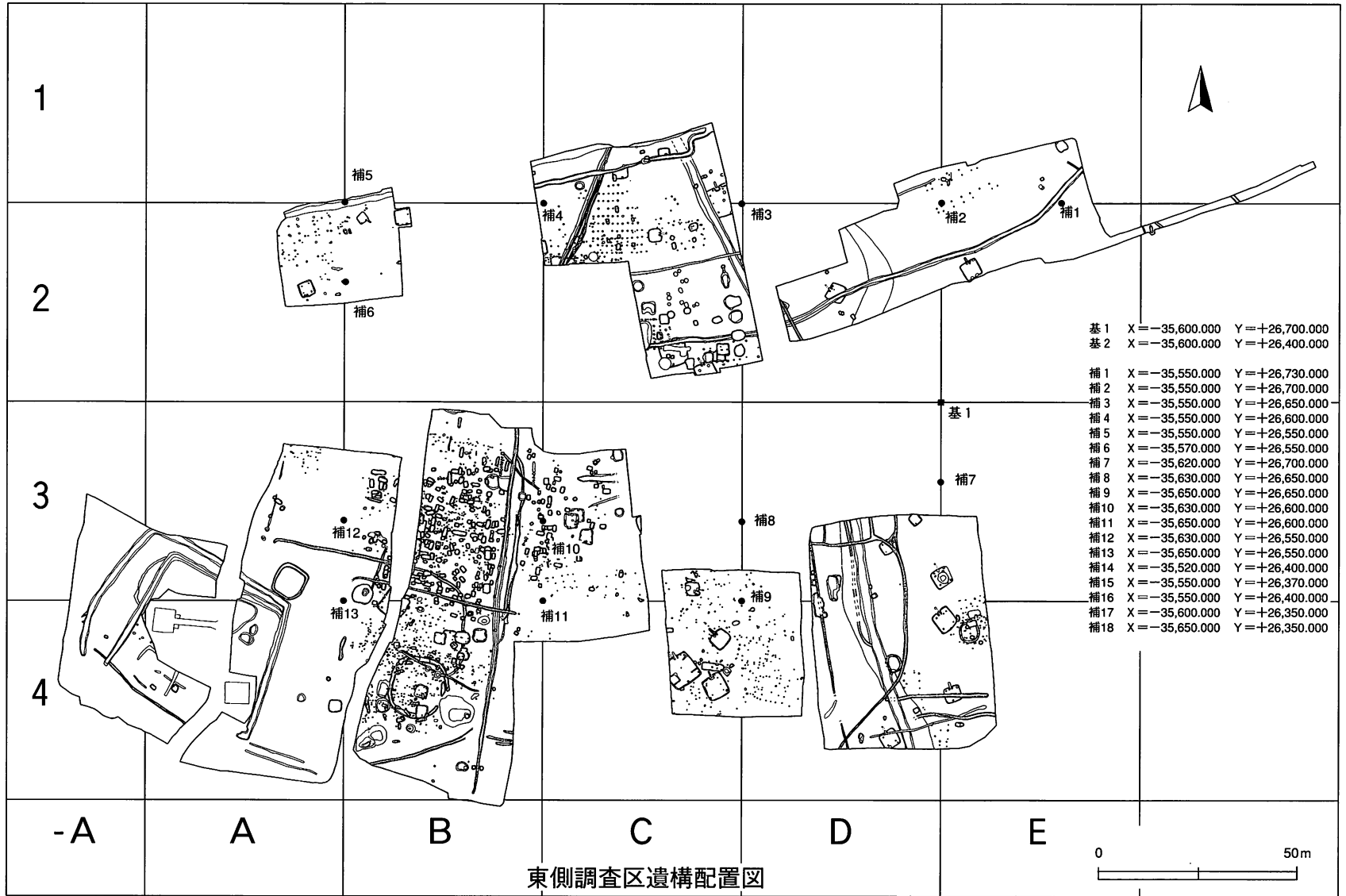
<柱穴状土坑> 規模は径25～50cm前後、平面形は円形・楕円形・不整形・隅丸方形等を呈している。調査区全般から2,500基以上検出しており、建物跡の柱穴や柵列になるかどうか検討中である。

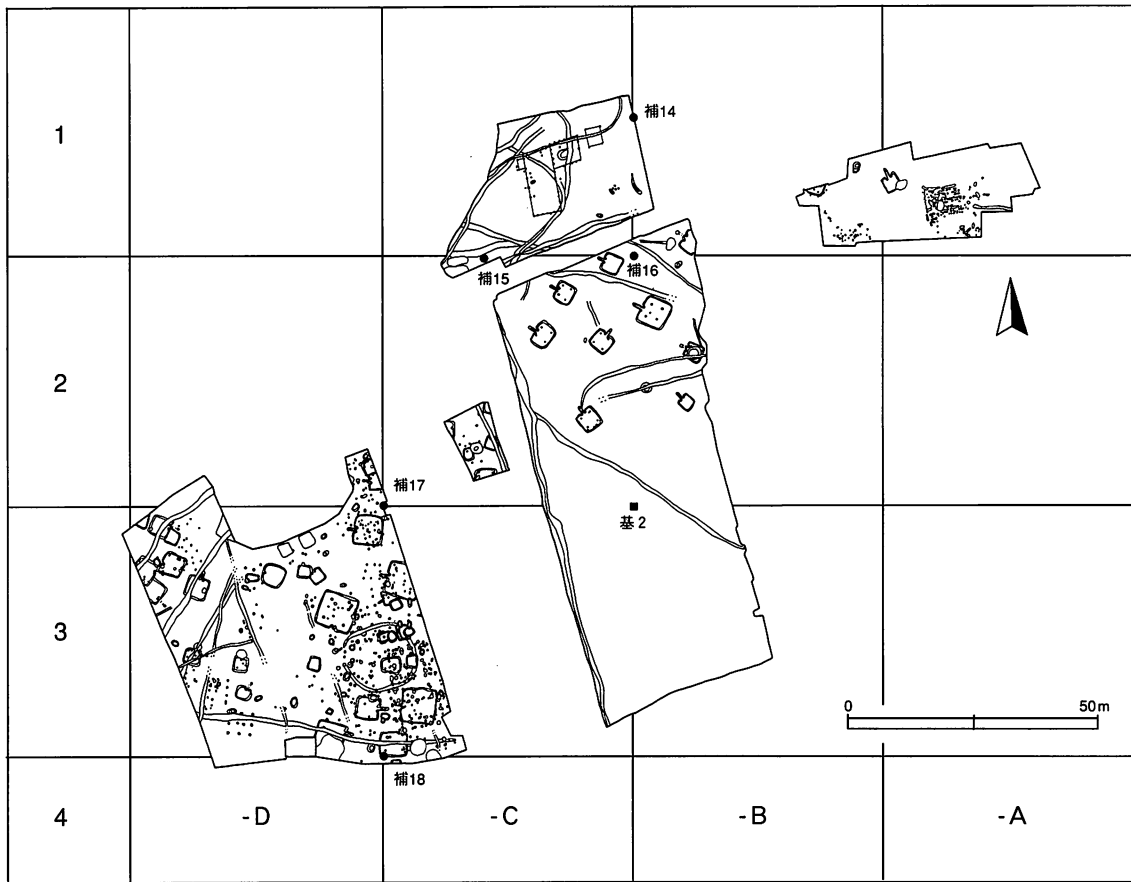
<出土遺物> 縄文時代の遺物は、土器片などが数点出土している。大部分は、奈良・平安時代の土師器と須恵器で占められている。器種は、坏・高台坏・甕・大甕・壺・長頸壺・長胴扁平土器等である。生活用具は、奈良時代の住居跡から土製紡錘車、平安時代の住居跡からは鋏先や鞆の羽口と鉄滓がみついている。中世の墓壙からは、渡来銭（北宋銭）や青磁の破片が、また、近世墓や柱穴からは、陶磁器や銭（寛永通宝）が出土している。

3. まとめ

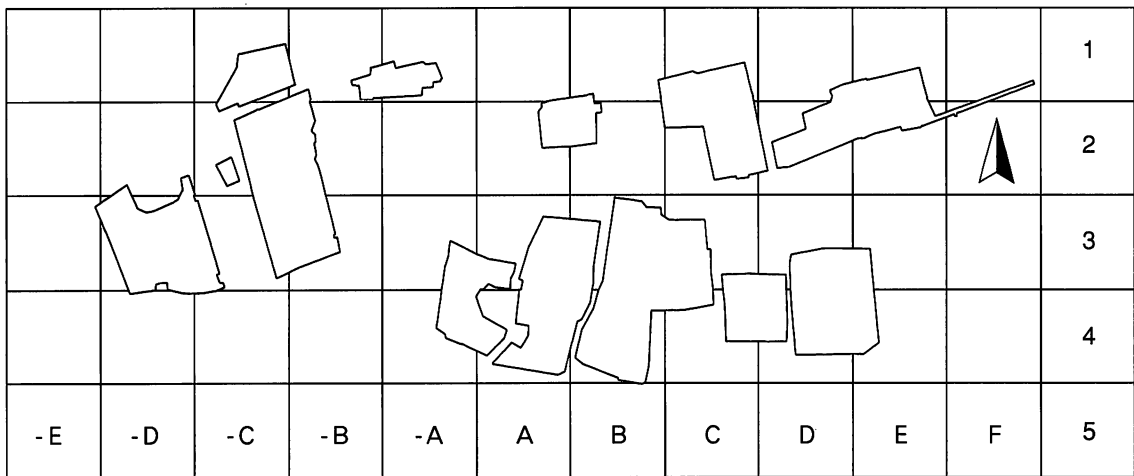
これまでの発掘調査で、台太郎遺跡は奈良～平安時代を中心とした大規模な集落跡であることが明らかになっていたが、今回の調査でも73棟の住居跡が見つかり、昨年度までのものと合計すると250棟以上にものぼる。今後の整理作業や周辺の遺跡調査の結果との比較検討から、奈良時代から平安時代におけるムラの変遷や、遺跡北西約2kmに位置する志波城や周辺遺跡との関係も検証していきたい。また、大規模な墓壙群・堀・建物跡といった中世の遺構についても、考察を深めたい。

台太郎遺跡遺構配置図





西側調査区遺構配置図

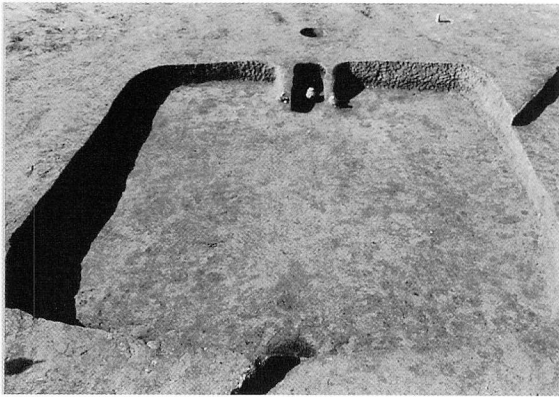


グリッド配置図

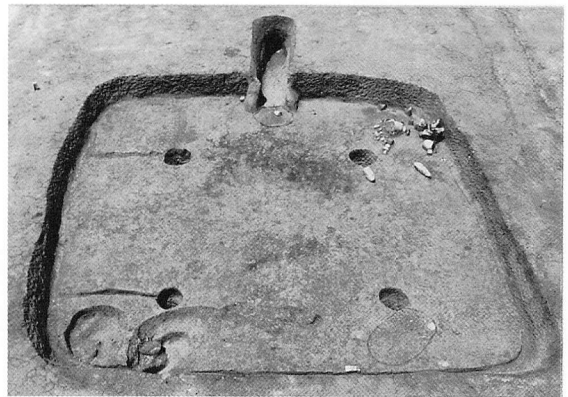
台太郎遺跡遺構配置図



調査区全景



奈良時代の住居跡



奈良時代の住居跡

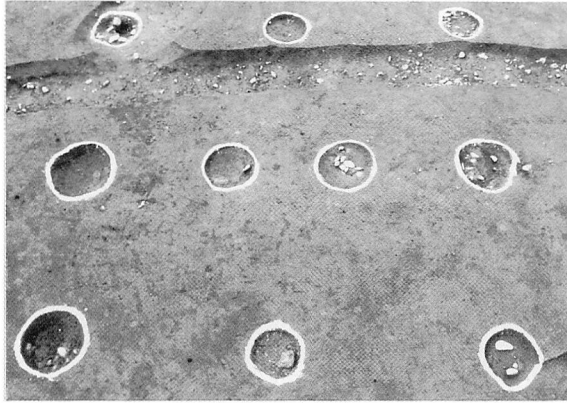


平安時代の住居跡



中世の住居跡

台太郎遺跡検出遺構



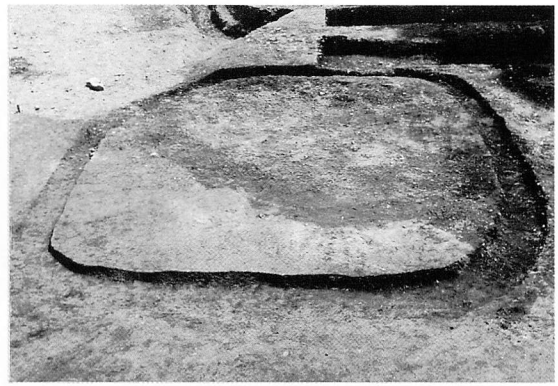
掘立柱建物跡



近世の民家（曲屋）



3Bグリッド墓壇群



円形周溝



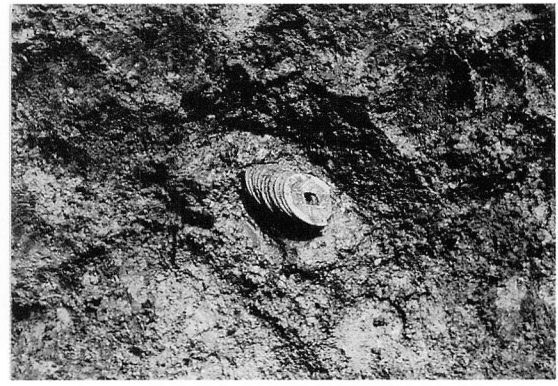
遺物出土状況



遺物出土状況



遺物出土状況（漆器）



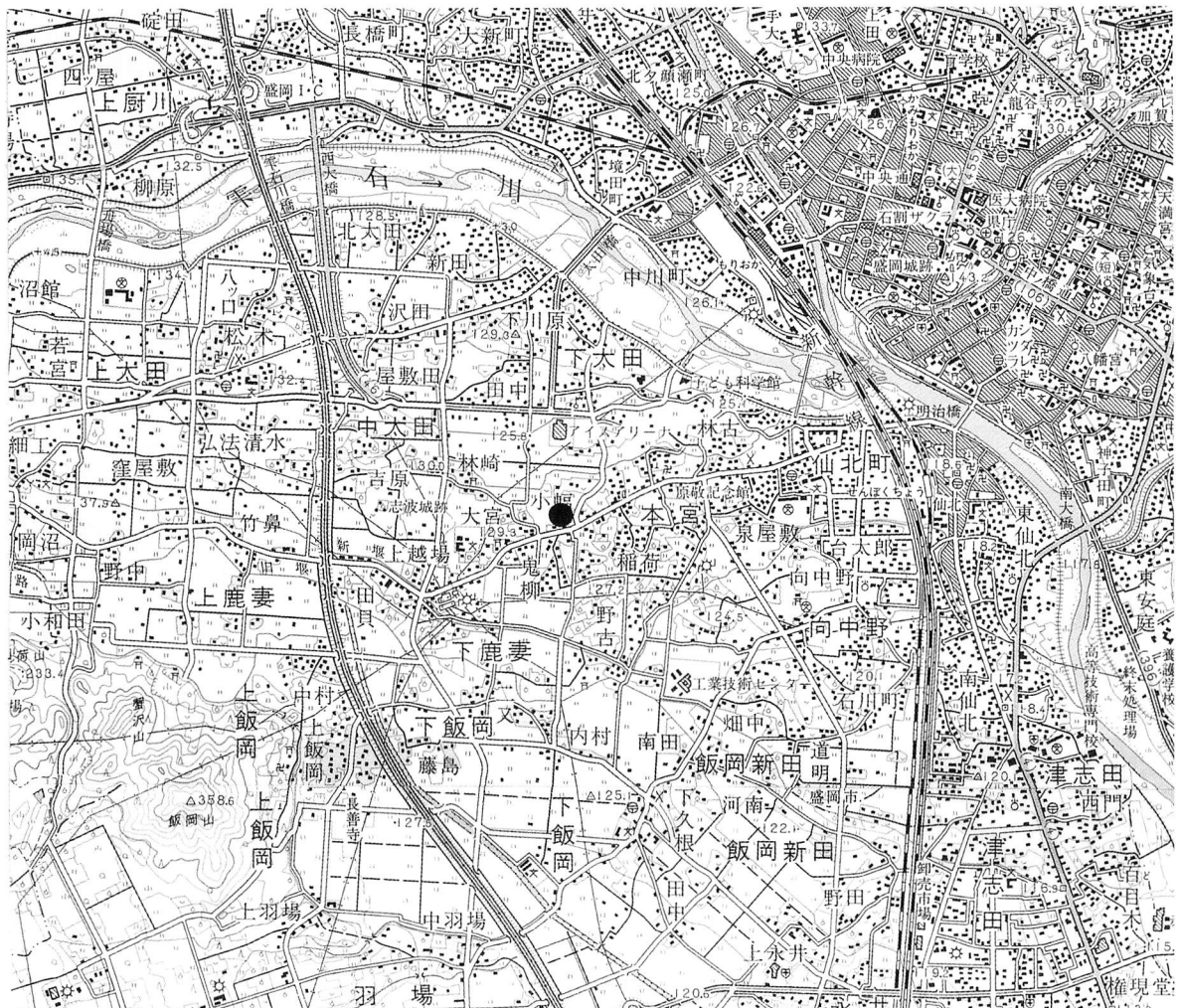
遺物出土状況（北宋銭）

台太郎遺跡検出遺構・遺物

IV. 本 報 告

(39) 小^{こはば}幅遺跡第13次調査

所在地 盛岡市本宮字小^{こはば}幅26-1ほか
委託者 建設省東北地方建設局岩手工事事務所
事業名 一般国道 盛岡西バイパス
発掘調査期間 平成11年4月7日～4月30日
調査対象面積 908m²
発掘調査面積 908m²
遺跡番号・略号 LE16-2009・OKH-99-13
調査担当者 晴山雅光・松尾芳幸
協力機関 盛岡市教育委員会



遺跡位置

1 : 50,000 盛岡市

1. 調査に至る経過

一般国道46号は、盛岡市を起点に奥羽山脈を仙岩トンネルで越え秋田市に至る総延長 113.3km（うち岩手県内33.8km）の主要幹線道路であり、盛岡市で一般国道106号と接続することにより、太平洋と日本海側を結ぶ大動脈の役割を担っている路線である。

しかし、盛岡市街における国道46号には、人家や商店が連担し、近年の自動車交通の増大と車両の大型化に伴い、交通混雑（特に朝夕の通勤、通学ラッシュ時）が著しく、従来から交通の隘路となっていた。

このため、幹線道路としての機能が著しく失われつつあるとともに、交通事故の発生、沿道環境の悪化など問題が生じている。

更に、東北縦貫自動車道・盛岡インター開通（昭和54年10月18日）など高速交通時代を迎え、交通量の増加傾向は一層高まるとともに、高速関連アクセス整備への要望が一段と強まってきている。

このような現状から急増する自動車交通に対し、通過交通の分離による交通の円滑化、交通安全の確保及び、沿道環境の改善を図ることを目的に、昭和46年度から調査を開始し、昭和59年に事業着手、昭和62年から工事に着手し事業を進めている。

この区間の埋蔵文化財包蔵地については、岩手県教育委員会が分布調査を実施し、4遺跡が確認されている。その結果に基づいて、岩手県教育委員会は建設省東北地方建設局岩手工事事務所と協議を行い、発掘調査を財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターの受託事業とする事とした。

これにより 岩手県教育委員会は、平成7年度埋蔵文化財調査事業について、平成7年2月28日付け「教文1053号」により、財団法人岩手県文化振興事業団に通知し、それを受けて、埋蔵文化財センターは、平成7年9月1日付けの委託契約に基づいて9月11日から小幅遺跡の発掘調査に着手した。残った地域については、平成8年度継続されることになった。（調査面積2,000㎡）

平成8年度は、埋蔵文化財調査事業に関する平成8年3月6日付け「教文1069号」による通知を受け、同年8月30日付け委託契約に基づいて9月17日から発掘調査に着手したが、当初調査予定面積の3,000㎡に対し、変更が生じ700㎡の減となり、2,300㎡の調査をした。

平成11年度は、埋蔵文化財調査事業に関する平成11年1月25日付け「教文1110号」による通知を受け、同年4月1日付け委託契約に基づいて4月7日から発掘に着手し、調査予定面積の908㎡の調査を終了した。

2. 遺跡の立地

小幅遺跡は、J R東北本線仙北町駅より西へ約 2.3kmに位置し、雫石川によって形成された河岸段丘上に立地し北緯 39° 40′ 58″、東経 141° 7′ 29″ 周辺にあたる。調査区の現況は、住宅跡の更地である。

3. 遺跡の基本層序

本遺跡の基本層序は次の通りである。

I層	10YR3/3	暗褐色	しまり疎	粘り弱	表土	ガラスなどを含む造成時の盛土。
II層	10YR2/2	黒褐色	しまり中	粘りやや弱	シルト	小石を多く含む。
III層	10YR5/8	黄褐色	しまり密	粘り弱	サンド	砂の中に小石を多く含む。地山

4. 調査の概要

調査区内は、現代の住宅跡地で、大部分が構築物の基礎等により地山部分まで攪乱を受けていた。

その中で検出された遺構は、竪穴状遺構が2、溝跡1条、土坑3基、柱穴状の遺構が90である。

出土した遺物は、須恵器片が1片、磁器片が小1袋のほか、寛永通寶1、鉄滓、動物骨骸などである。

<竪穴状遺構> (RE042~043)

RE042は、14次の調査区にかかり、貼床をした痕が確認され、長方形に掘り込まれている。また底面からは柱穴状遺構も検出されたが、竪穴状遺構に伴うものではない。

規模は、開口径410×250cm、底径370×210cm、深さ30cmである。

RE043は、床面が固くしまりがあり、溝状の窪みがみられる。埋土は床直上まで表土が入り込んでおり、新しいものである可能性が高い。

規模は、開口径250×210cm?、底径220×200cm?、深さ5cmである。

<土坑> (RD352~RD354)

検出された遺構数は3基である。出土遺物は無く、形状も不整形ではあるが、埋土がⅡ層起源の磁器片などを含む土質と同じと考え土坑とした。

どの遺構も4YYグリッド（盛岡市教育委員会設定グリッドに準ずる）の北東に位置し、平面形が不定形（楕円や長楕円など）で、検出面からは、全て浅い土坑である。

RD352の規模は、開口部の長径が140cm、短径が60cm、深さは30cmで、底面が狭く、壁面は外傾する。RD353は、長径250cm（推定）、短径80cm、深さは22cmと、平面形は細長い。RD354の規模は、長径120cm、短径90cm、深さ25cmで、丸底、壁面がやや内湾している。

<溝状遺構> (RG135)

調査区を鍵状に曲がる1条の溝状遺構で、14次調査区から13次の調査区外まで（3Aグリッド南西～4YYグリッド北東）続くことが確認された。

検出面からの掘り込みは浅く、断面形も不明瞭な部分が多い。

<柱穴群> (RZ023)

平面形が円形の筒状に掘り込まれた比較的小さな土坑である。数は90個で、場所によっては、柱穴として民家跡や柱穴列など、配置が確認できる部分もみられるが、不明な点も多く、遺構の性質上、柱穴群として1つにまとめた。

<出土遺物> 1点出土した須恵器片は、内外面ロクロ調整された坏の胴部（2）と思われるが、あまりにも小さく部分的なため、明確でない。また、RE042や柱穴群周辺より、大堀相馬産系と思われる灰釉の陶器片（6、7）が出土しているが、小さく断片的なため、器種・大きさは不明である。その他、4YYグリッド北東や、4Aグリッド北西からは、口径8.2cm、器高4.9cm、底径3.4cmの外面が草花文の染付碗（4）などの磁器片が出土している。寛永通寶については、字体より新寛永（1697~）と思われる。

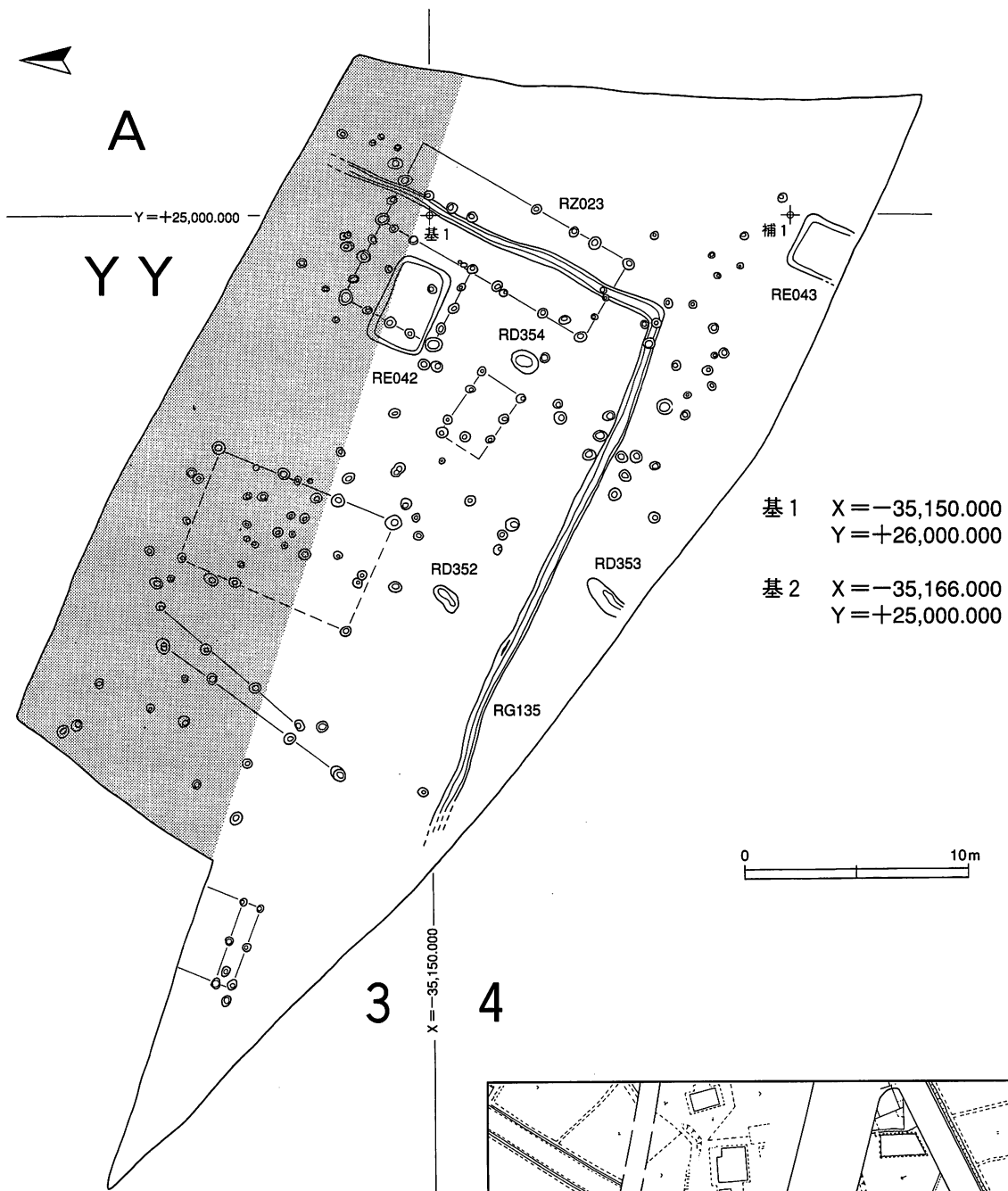
5. まとめ

調査区は、現代の住宅や建物のあった所で、黄褐色砂礫層（地山）の下までガラスやコンクリートなどが埋まっており、地層は大きく改変されていた。

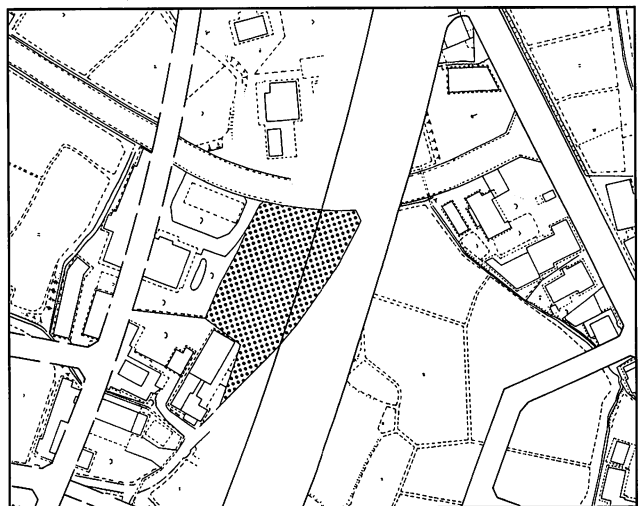
また、住宅以前の建物は、養豚場であり、それ以前は墓地であったことが近隣住人からの聞き取りにより判明した。

検出された遺構は、時期不明なものが多い。竪穴状遺構、貼床の下より検出された柱穴状遺構からはタイル片が出土しており、近代以降の遺構と思われる。その他の遺構についても、須恵器片が周辺から出土しているものの、掘り方や埋土から古代・中世の遺構はないものと考えられる。

なお、小幅遺跡（13次）に関わる報告は、これをもって全てとする。

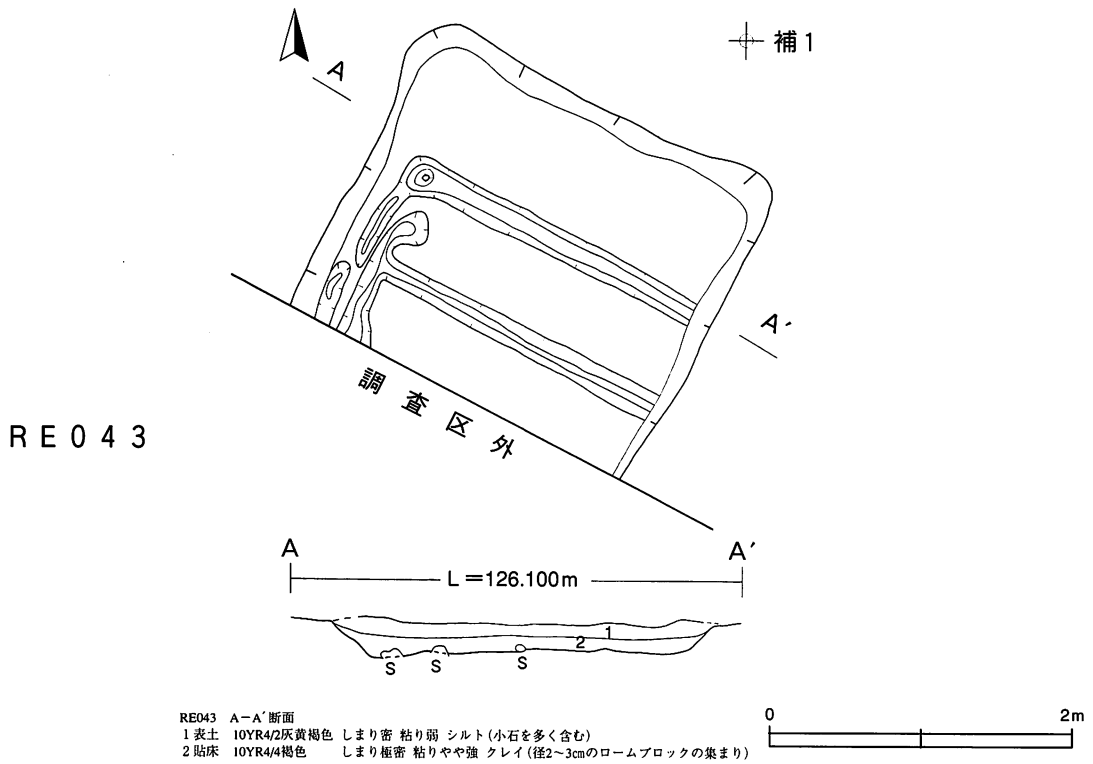
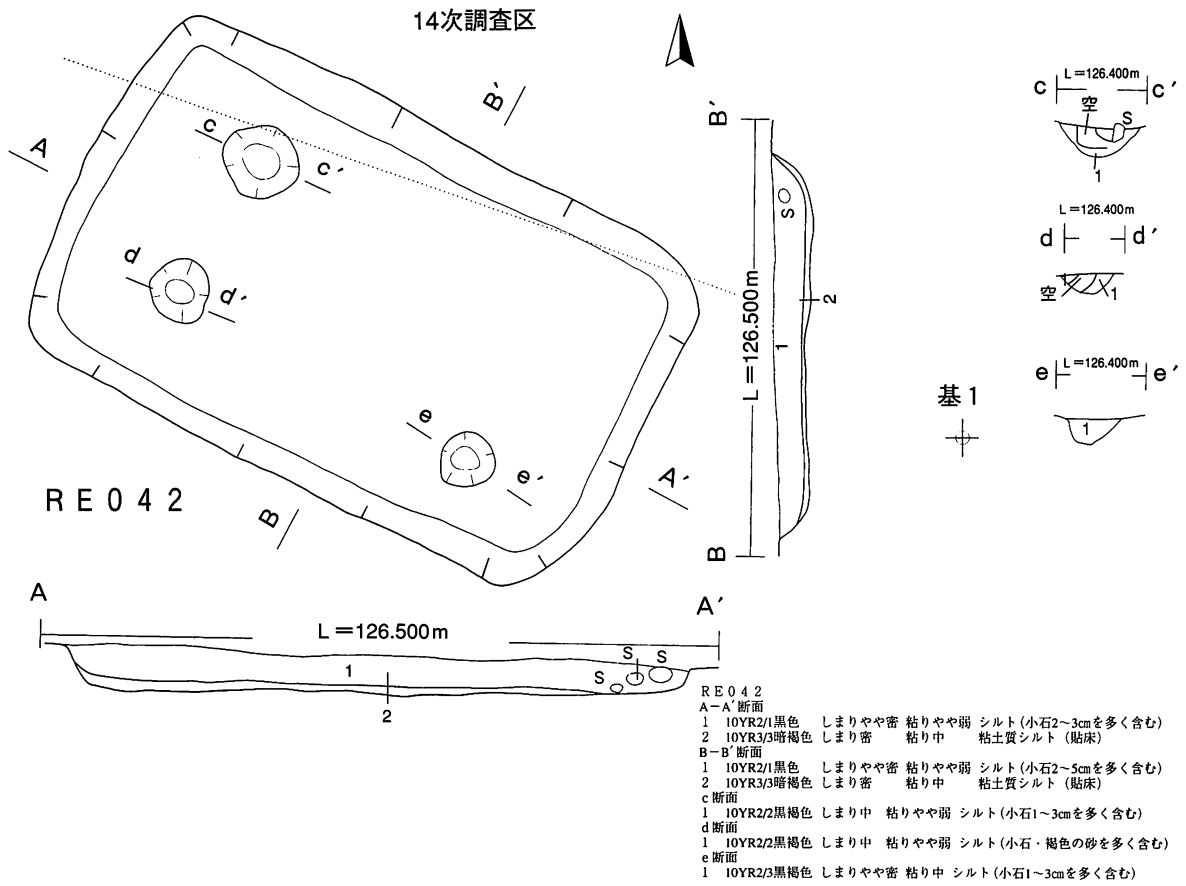


地形図・都市計画図
(1 : 3,000)



第1図 小幅遺跡第13次調査遺構配置図

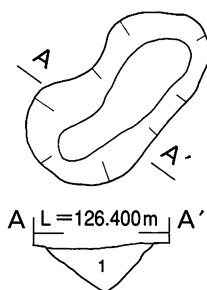
豎穴状遺構



第2図 小幅遺跡第13次調査豎穴状遺構

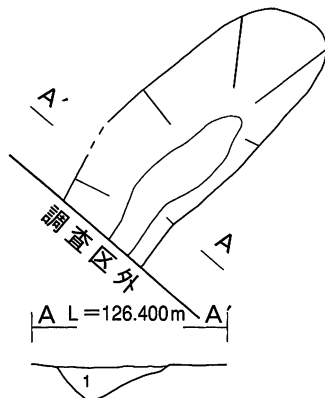
土 坑

RD 3 5 2



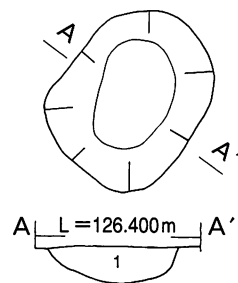
RD 3 5 2
1 10YR2/2 黒褐色 しまりやや密 粘りやや弱
シルト (小石2~3cmを多く含む)

RD 3 5 3



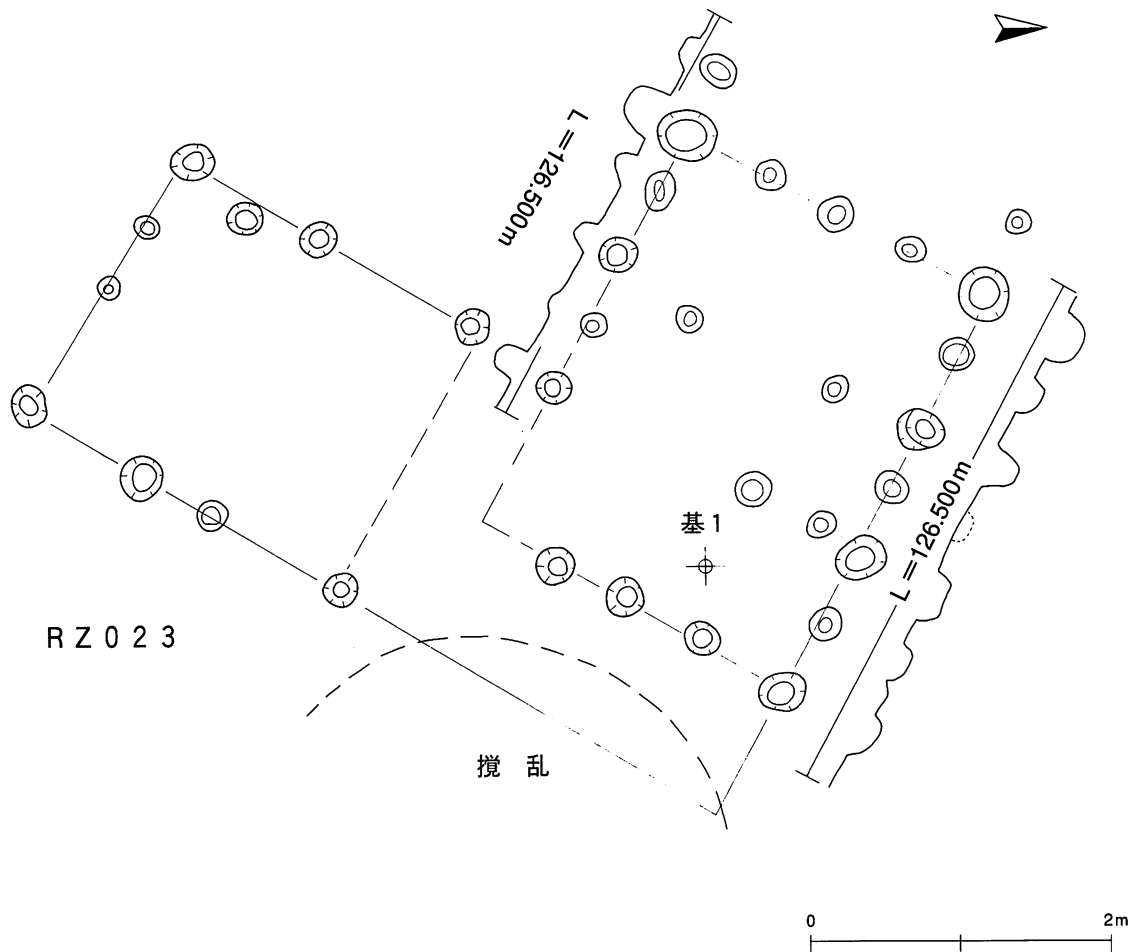
RD 3 5 3
1 10YR2/2 黒褐色 しまり中 粘り中
シルト (下位に小石1~3cmを多く含む)

RD 3 5 4



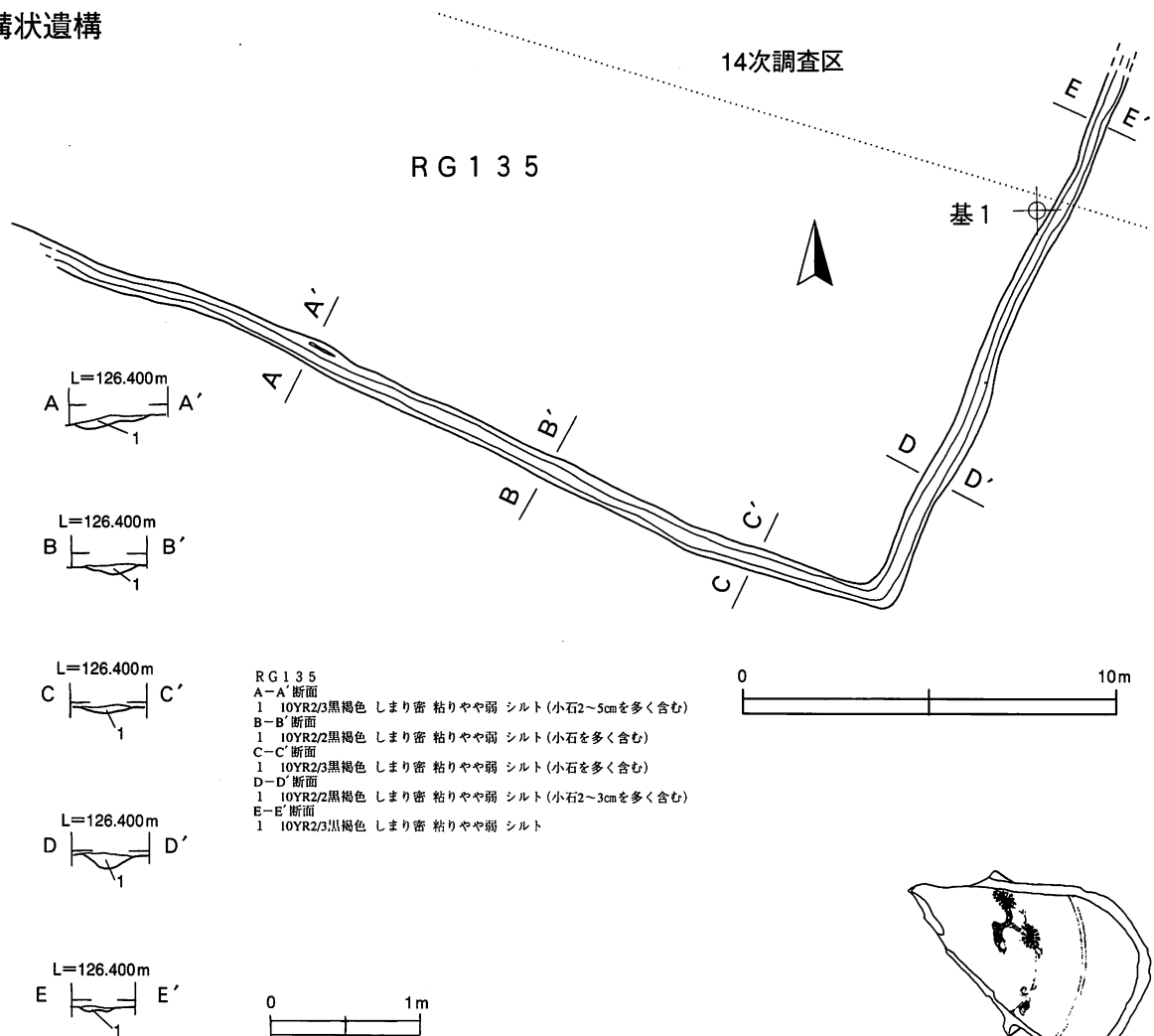
RD 3 5 4
1 10YR2/3 黒褐色 しまりやや密 粘り中
シルト (小石2~3cmを多く含む)

柱穴状遺構

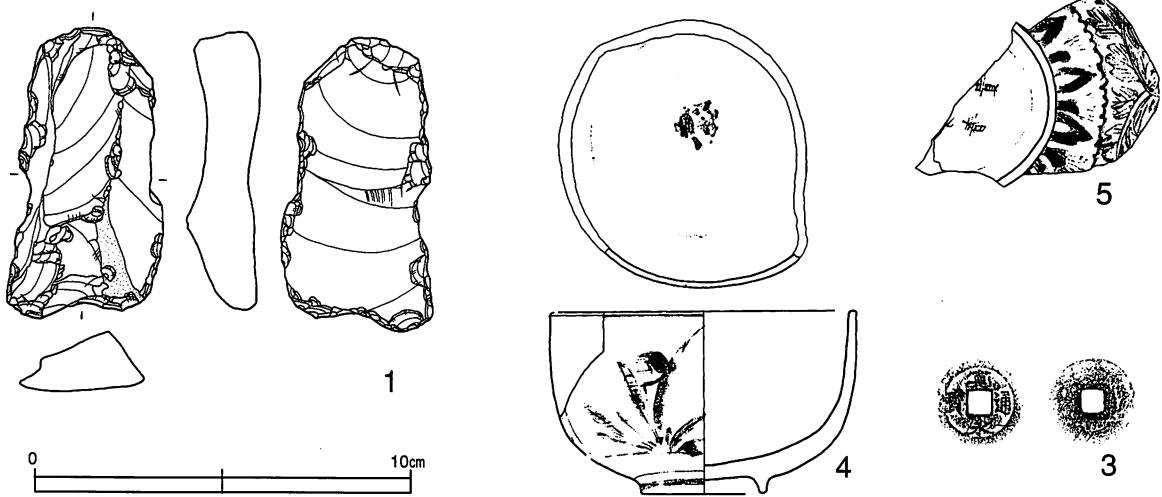


第 3 図 小 幅 遺 跡 第 13 次 調 査 土 坑 ・ 柱 穴 群

溝状遺構



出土遺物



第4図 小幅遺跡第13次調査溝状遺構・出土遺物

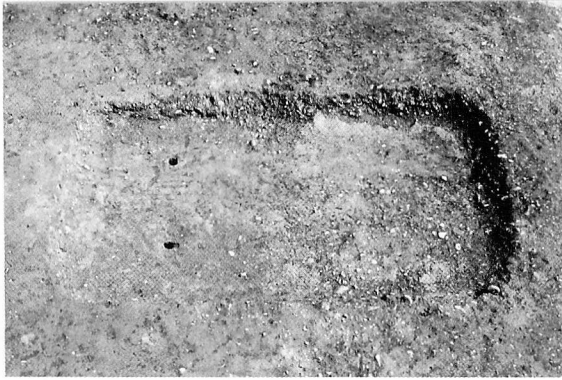


航空写真 遠景（南から）

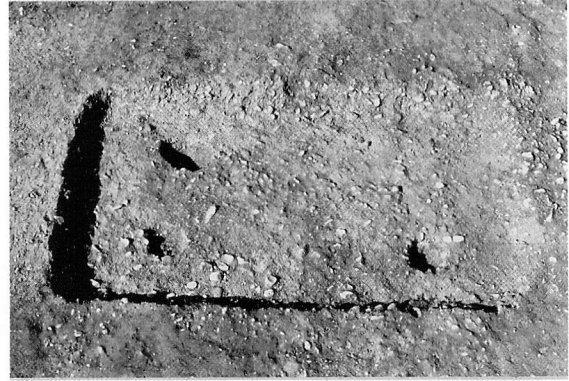


航空写真（真上から）

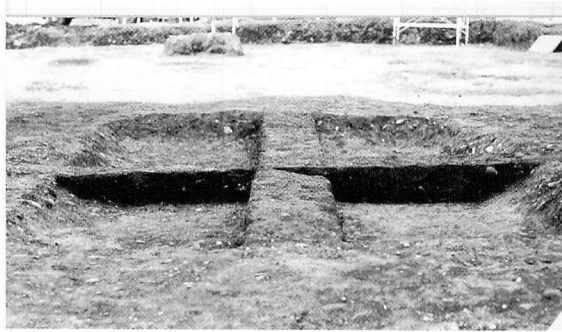
小幅遺跡第13次調査写真図版1 航空写真



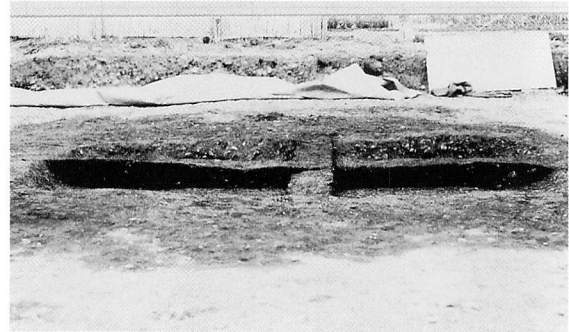
RE042 (貼床)



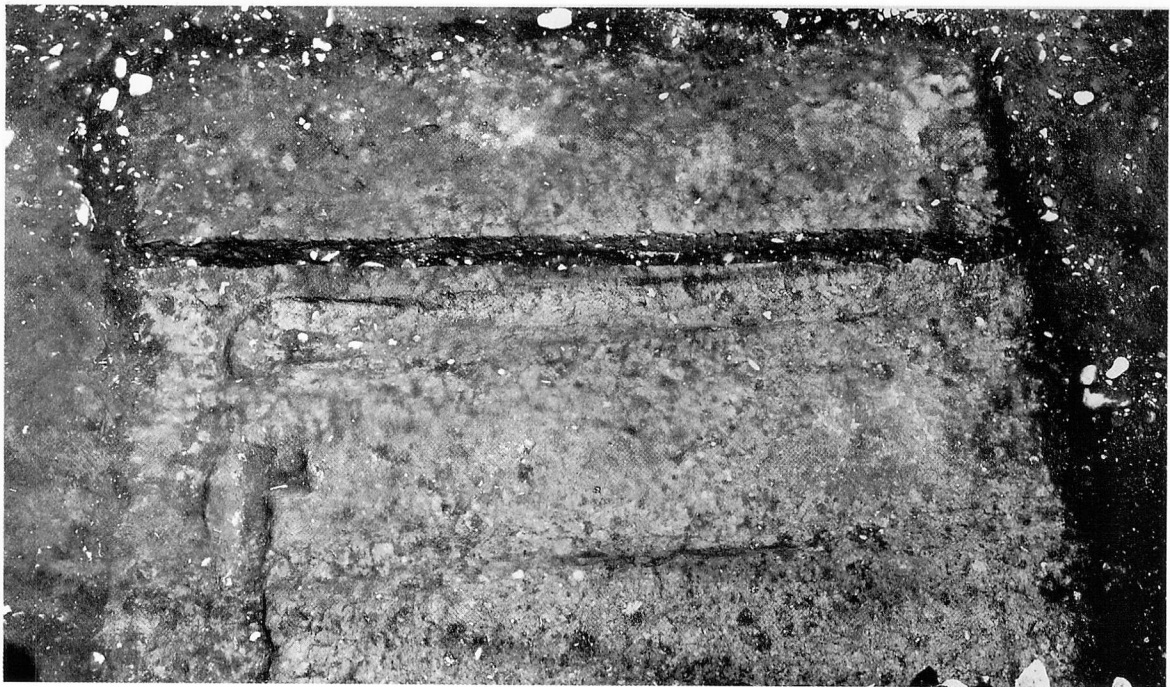
RE042 (完掘)



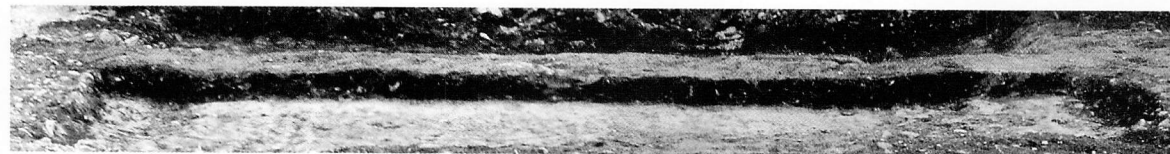
RE042断面 (東から)



RE042断面 (南から)



RE043 (平面)



RE043断面 (北から)

小幅遺跡第13次調査写真図版2 竪穴状遺構



RD 3 5 2 (平面)



RD 3 5 2 (断面)



RD 3 5 3 (平面)



RD 3 5 3 (断面)



RD 3 5 4 (平面)



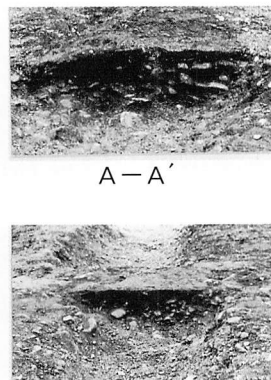
RD 3 5 4 (断面)



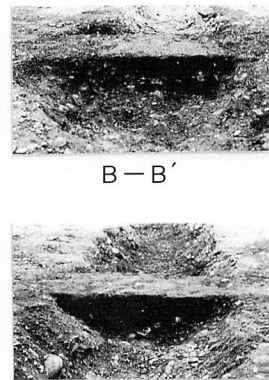
RG 135 (東から)



RG 135 (南から)



A-A'



B-B'



C-C'

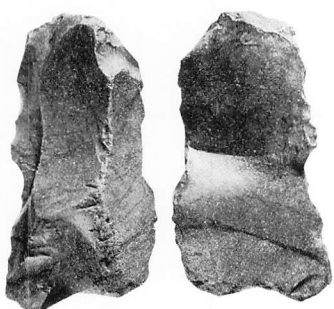


D-D'

小幅遺跡第13次調査写真図版3 土坑・溝状遺構



RZ023



不定形剥片石器

1



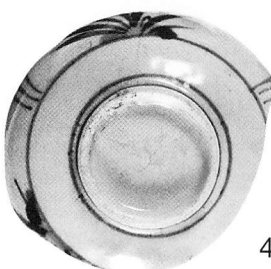
須恵器 (坏)

2



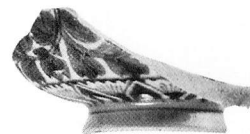
寛永通寶

3



磁器 (碗)

4



磁器 (碗)

5



陶器 (大掘相馬産系)

6

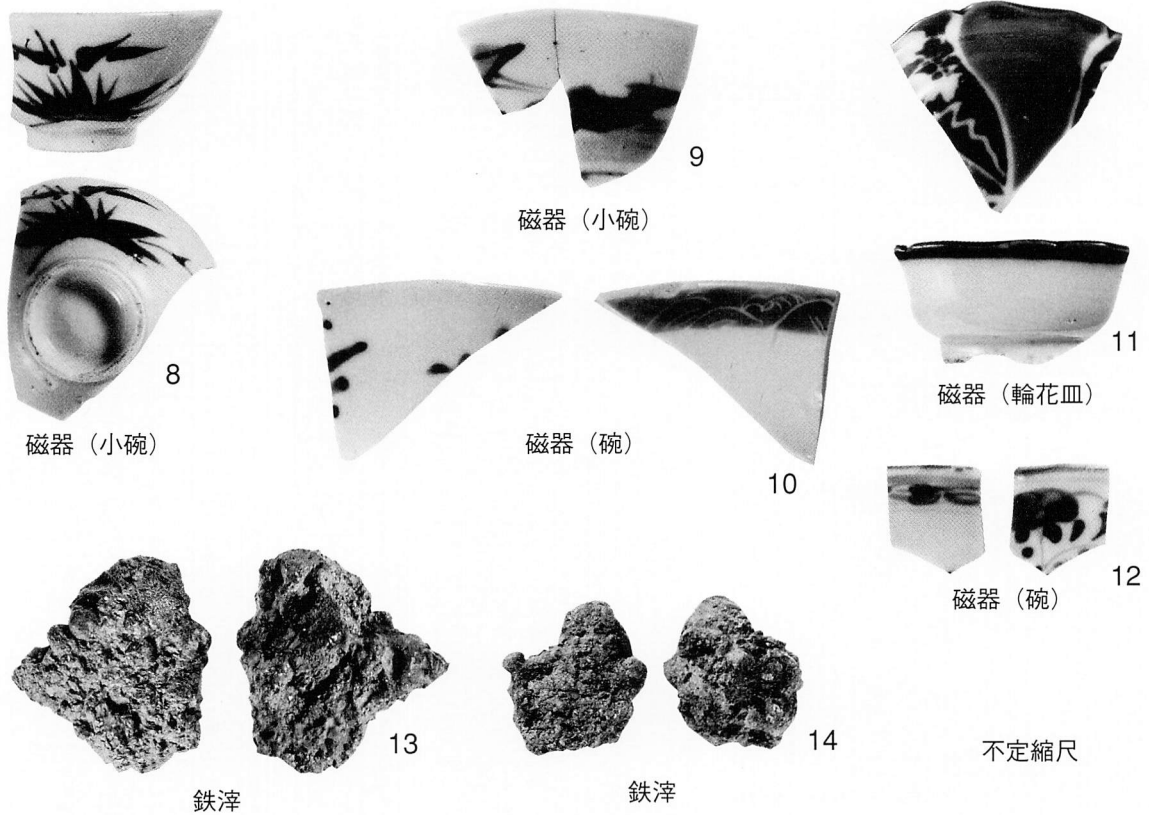


陶器 (大掘相馬産系)

7

S=1/2

小幅遺跡第13次調査写真図版4 柱穴群・出土遺物



小幅遺跡第13次調査写真図版5 土坑・溝状遺構出土遺物

報告書抄録

ふりがな	こはばいせきだいじゅうさんじはつくつちょうさほうこくしょ							
書名	小幅遺跡第13次調査発掘調査報告書							
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財報告書							
シリーズ番号	第340集							
編著者名	晴山 雅光							
編集機関	財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター							
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡 11-185 TEL 019(638)9001							
発行年月日	西暦2000年3月24日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
こはばいせき 小幅遺跡	いわてけんもりおかし 岩手県盛岡市 もとみやあざこはば 本宮字小幅 26-1ほか	03201	LE16- 2099	39度 40分 58秒	141度 7分 29秒	19990407 ～ 19990430	908m ²	「盛岡西バイパス建設事業」に伴う、緊急発掘調査
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
小幅遺跡	集落跡	縄文時代 平安時代 近世～現代	竪穴状遺構 土坑・柱穴群 溝状遺構		剥片石器 (頁岩) 須恵器片 磁器片 古銭 ほか		平安時代以前の遺構については確認されなかった	

(40) 道地Ⅱ遺跡

所在地 九戸郡九戸村大字江刺家第24地割
字築場118番35ほか

委託者 日本道路公団東北支社八戸管理事務所

事業名 東北縦貫自動車道路建設

発掘調査期間 平成11年4月8日～6月15日

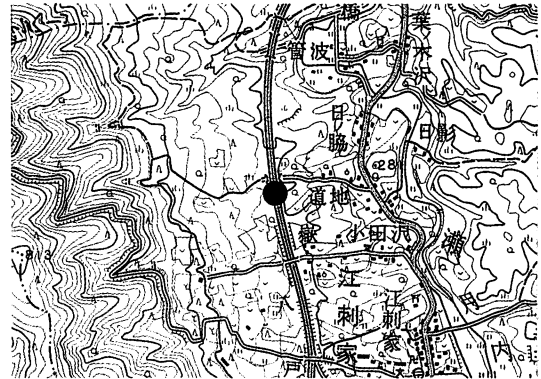
調査対象面積 2,170m²

発掘調査面積 2,170m²

遺跡番号・略号 J F 02-0066・D T Ⅱ-99

調査担当者 小原真一・布谷義彦

協力機関 九戸村教育委員会



遺跡位置

1 : 50,000 一戸

1. 調査に至る経過

道地Ⅱ遺跡は、「東北縦貫自動車道八戸線軽米・九戸地区除雪車Uターン路設置事業」に伴って、その事業区域内に位置することから発掘調査を実施することとなったものである。

本Uターン路設置事業は、除雪車が高速道路のインターチェンジ付近で回送及びバックを行わないでUターンできる通路を設置するものである。八戸自動車道九戸～軽米インターチェンジ間は、昭和61年11月27日に開通し現在に至っている。冬期間は高速道路の安全かつ円滑な交通の確保を目的に除雪作業を実施しているところである。しかし、除雪作業においてインターチェンジの流出部から流入部までの本線上の対応に苦慮している。除雪車がこの部分を作業するためには、インターチェンジ流出部まで後退もしくは次のインターチェンジまで回送しなければならない。この後退時は、①除雪車が交通流に逆行する。②誘導員が路上作業になる。など非常に危険な作業となっている。過去には、通行車を含んだ交通事故に至った事例もある。また、回送した場合高速道路の構造上、次のインターチェンジ（10km先）間で走行する必要が生じ、時間がかかり効率が悪い。本Uターン路を設置することにより危険な後退作業がなくなり、交通の安全が確保され作業効率も格段によくなるものである。埋蔵文化財の取り扱いについては、事業に先立ち平成10年4月に日本道路公団が岩手県教育委員会及び文化庁に埋蔵文化財の有無について照会し試掘を行ったところ、次の通り回答を得た。

軽米地区（約1,000m²）道地Ⅱ遺跡「別途調査が必要」

九戸地区（約3,600m²）君成田Ⅳ遺跡「工事に着手して差し支えなし」

これにより道地Ⅱ遺跡のみ発掘調査を実施することとなった。発掘調査事業については、財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターの受託事業となり、平成11年4月1日付で発掘調査委託契約を締結し調査を開始したものである。

2. 遺跡の立地

道地Ⅱ遺跡は、九戸村役場の北約6kmに位置し、折爪岳東麓の開析された丘陵地に立地している。

標高は310～319mで、北流する瀬月内川からの比高は約85mである。調査区は丘陵の尾根の部分から斜面にかけてで、現況は山林である。遺構の大半は、尾根の部分から検出された。本遺跡の周辺には、丸木橋遺跡（縄文早・前、古墳～奈良）、葉の木沢遺跡（縄文早・前・後）、管波Ⅰ遺跡（縄文早・前・後）、管波Ⅱ遺跡（縄文晩、平安）、道地Ⅲ遺跡（縄文前～晩）、嶽Ⅰ遺跡（縄文前・後・晩）、嶽Ⅱ遺跡（縄文早～晩、平安）、江刺家Ⅳ遺跡（縄文前～晩、弥生）、南田Ⅰ遺跡（縄文前～晩、平安）などがある。

3. 基本層序

調査区域内では、基本的には図に示すような層序が観察される。

I層 黒褐色土（10YR2/3） 現表土、主に腐葉土である。層厚10～15cm。

II層 暗褐色シルト（10YR3/4） 灰白色シルト（中礫火山灰）、黒褐色土のブロックや炭化物を含む。
層厚10～45cm。調査区北側斜面と南側斜面の下方に見られる。

III層 明黄褐色浮石（10YR6/8） 南部浮石。地点により褐色砂質シルト（10YR4/4）が混じる。
III層が欠如する地点もある。層厚は最大で30cm。

IV層 褐色粘土（10YR4/6） 八戸火山灰。

V層 黄褐色細砂（2.5Y5/6）

VI層 におい黄褐色粘土（10YR5/4） 径1～3cmの角礫をわずかに含む。

VII層 におい黄橙色粘土（10YR6/4） 多量の角礫を含む。締まりあり。

4. 調査の概要

今回の調査で検出された遺構は、住居跡1棟、土坑8基、配石・立石4基、竪穴住居状遺構2棟である。

<竪穴住居跡> 東側調査区の尾根の部分の北側斜面近くから1棟検出された。木根による攪乱を受けており北側の壁は確認できなかった。南側の壁は内湾気味に緩く立ち上がる。検出部分の最大径は約3.3mで、楕円形をしている。埋土は主に黒色土、黒褐色土からなり、南壁寄りには暗褐色土が堆積していた。また、床面近くの埋土には炭が大量に含まれ、床面全体に広がるので、焼失住居の可能性がある。床は南部浮石層を掘り込んで構築され、わずかに北側に傾斜している。床面中央よりやや南側に寄った位置に石囲炉を検出した。炉は、13個の亜角礫、亜円礫を、径64×55cmの楕円形に配列している。焼土は、床面より約15cm低い位置で検出され、範囲54×50cm、厚さ6cmである。床面北側の端に4個の石が100×70cmの長方形に、また、住居側の一辺に接するように6個の石が弧状に配列している。長方形の長辺の中間に柱穴がそれぞれ検出され、その柱穴の間には、径32cm、深さ28cmの小さなピットが検出された。この配石状の遺構は、位置や形状から出入り口に関わる施設の可能性がある。

<土坑> 8基検出された。径が1.3mと1.8mのフラスコピット2基と径1.6～1.9mの楕円形・円形・方形の土坑6基である。フラスコピットの内1基は、東側調査区住居の南東約1mに位置し、土坑南壁際から破損した石皿が出土している。

<配石・立石> 4基検出された。径10～40cmの扁平な亜角礫を配列している。西側調査区のK6配石遺構は、径が11～25cmの4個の礫を不規則に配列している。下部から平面形が1.24×0.67mの隅丸長方形、深さ14cmの土坑が検出された。東側調査区のH24配石遺構は、粗掘り時に重機等により移動している石が多い。立石遺構は、17×12×4cmの扁平な亜角礫が垂直に立っている。

<竪穴住居状遺構> 東西両調査区から1棟ずつ検出された。平面形は、長径が2.5mの楕円形のものと3.8mの不整の円形を呈している。炉や柱穴といった施設が検出されず、床面も浅鉢状に内湾気味に立ち上がる。

遺構の時代を決定づける出土遺物は少ないが、東側のP21竪穴住居状遺構からは、縄文晩期の注口土器が出土している。

<出土遺物> 出土した土器は、コンテナ1箱で縄文時代晩期のものが多く、中期の土器もわずかに出土している。石器は十数点の出土であるが、剥片石器は1点で、剥片石器製作時に生じる剥片が1点も出土していない。磨製石斧、石皿、石棒、磨石、凹石といった礫石器が目立つ。

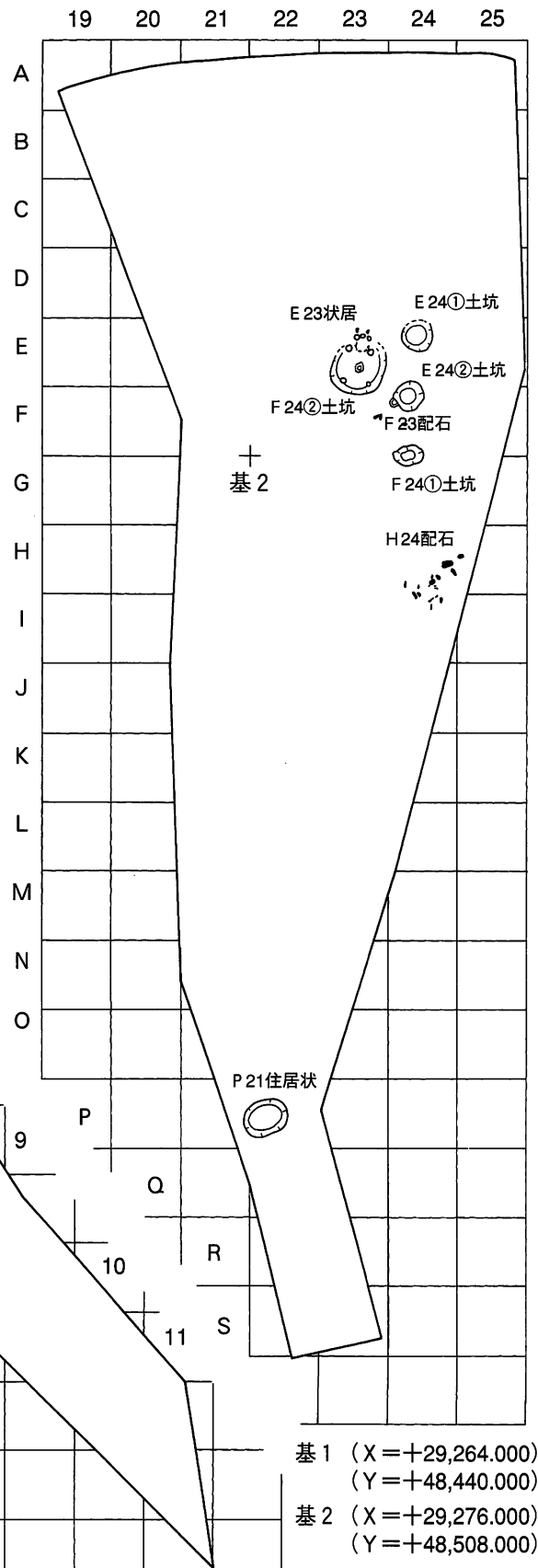
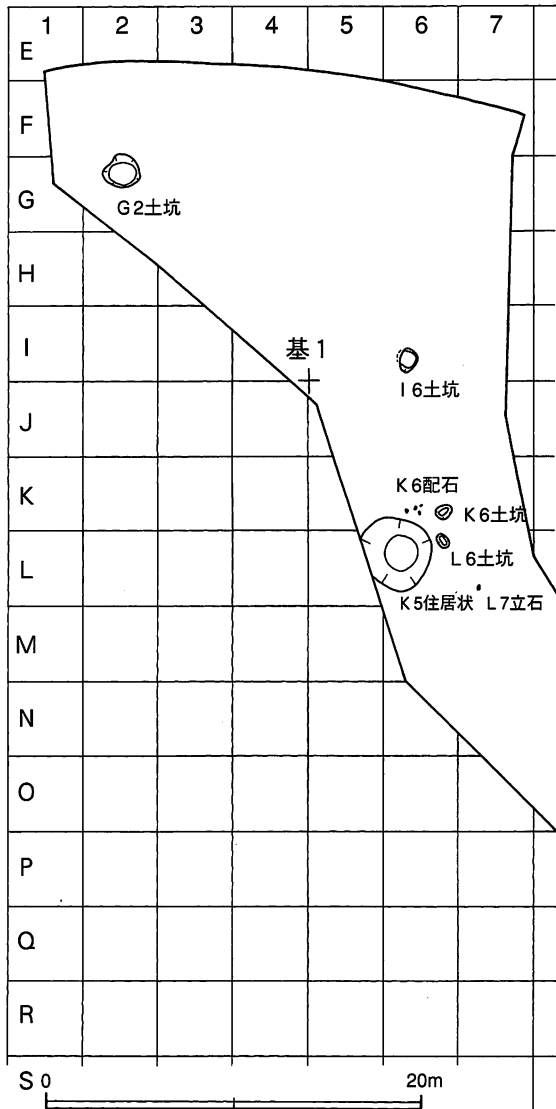
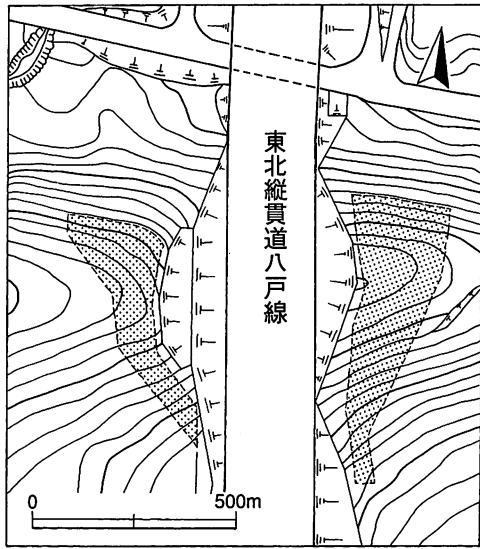
5. まとめ

今回の調査で、竪穴住居跡が検出されたので、本遺跡は、縄文時代晩期の集落跡であり、調査区の東西に集落が広がっていた可能性があることがわかった。

なお、道地Ⅱ遺跡に関する報告は、これをもって全てとする。

報告書抄録

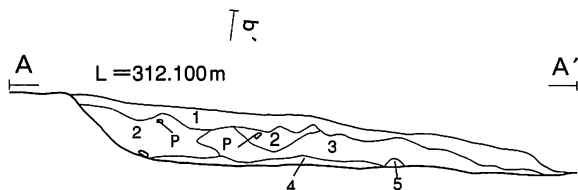
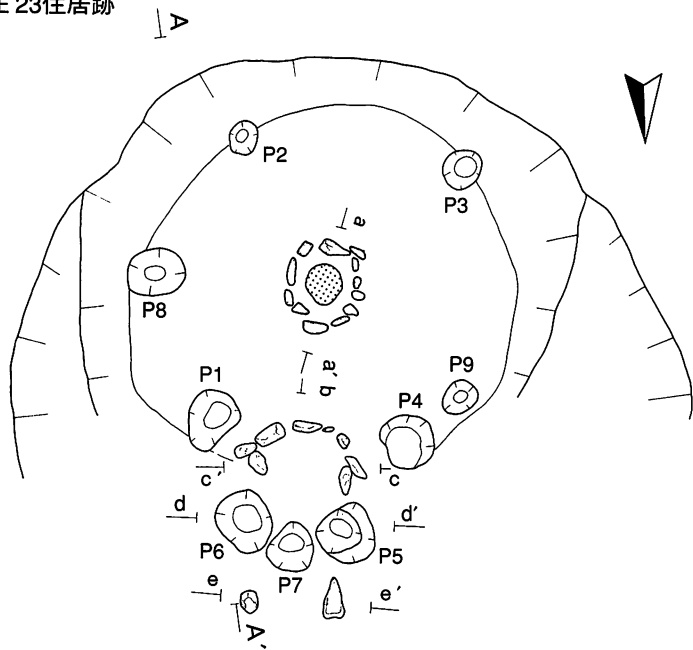
ふりがな	どうちにいせきはくつちようさほうこくしょ							
書名	道地Ⅱ遺跡発掘調査報告書							
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財報告書							
シリーズ番号	第340集							
編著者名	小原真一 布谷義彦							
編集機関	財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター							
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11-185 TEL019(638)9001							
発行年月日	西暦2000年3月24日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
どうちにいせき 道地Ⅱ遺跡	いわてけんくのへら 岩手県九戸村 おほがまきし 大字江刺家第 14地割字築場 118番35ほか	03506	JF02- 0066	40度 15分 44秒	141度 24分 13秒	1999. 4,8~6,7	2,170㎡	「八戸自動車 道建設」に伴 う緊急発掘調 査
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
道地Ⅱ遺跡	集落跡	縄文時代	竪穴住居跡 (1棟) 土坑 (8基) 配石・立石 (3基) 住居状遺構 (2基)		住居状遺構 (2基) 石器 (石匙・磨石)		縄文時代晩期の集落跡	



基 1 (X = +29,264.000)
(Y = +48,440.000)
基 2 (X = +29,276.000)
(Y = +48,508.000)

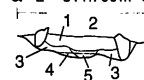
第 1 図 道地 II 遺跡遺構配置図

E 23住居跡

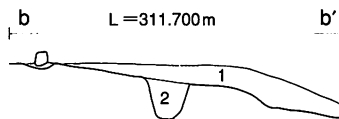


- A-A'
- | | | | |
|---|------------|------|--------|
| 1 | 7.5YR2/1 | 黑色土 | 含炭化物 |
| 2 | 7.5YR3/2 | 黑褐色土 | 含炭化物 |
| 3 | 7.5YR2/2 | 黑褐色土 | 含炭化物 |
| 4 | 7.5YR1.7/1 | 黑色土 | 含多量炭化物 |
| 5 | 7.5YR3/4 | 暗褐色土 | 含浮石炭化物 |

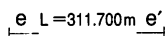
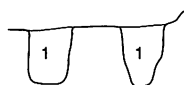
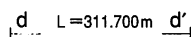
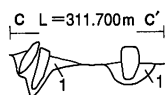
a L=311.700m a'



- a-a'
- | | | | |
|---|------------|-------|--------|
| 1 | 7.5YR1.7/1 | 黑色土 | 含多量炭化物 |
| 2 | 5YR2/1 | 黑褐色土 | 含烧土粒 |
| 3 | 7.5YR2/1 | 黑色土 | 含浮石 |
| 4 | 2.5YR4/6 | 赤褐色烧土 | |
| 5 | 5YR2/2 | 暗褐色土 | 含炭化烧土 |

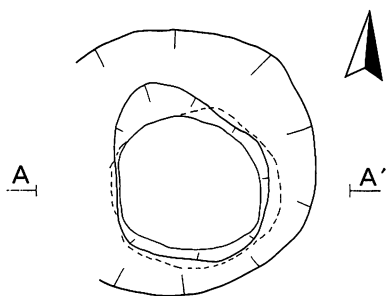


- b-b'
- | | | | |
|---|------------|------|--------|
| 1 | 7.5YR2/2 | 黑褐色土 | 含炭化物浮石 |
| 2 | 7.5YR1.7/1 | 黑色土 | 含微量炭化物 |

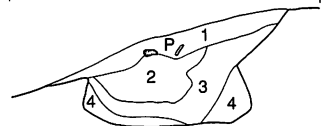


- c-c' d-d' e-e'
- | | | | |
|---|----------|------|--------|
| 1 | 7.5YR2/2 | 黑褐色土 | 含炭化物浮石 |
|---|----------|------|--------|

E 24①土坑

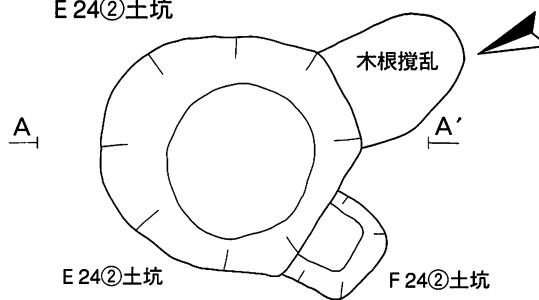


L=311.710m

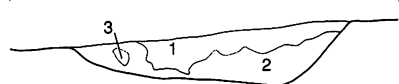


- A-A'
- | | | | |
|---|----------|------|--------|
| 1 | 7.5YR3/2 | 黑褐色土 | 含炭化物浮石 |
| 2 | 7.5YR2/2 | 黑褐色土 | 含炭化物浮石 |
| 3 | 7.5YR3/3 | 黑褐色土 | 含多量浮石 |
| 4 | 7.5YR3/4 | 黑褐色土 | 含炭化物浮石 |

E 24②土坑



L=312.000m

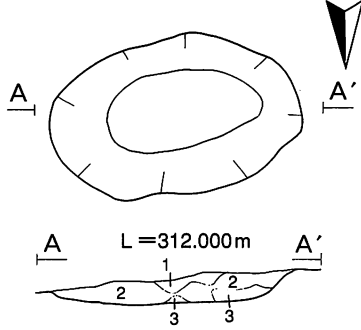


- A-A'
- | | | | |
|---|----------|------|--------|
| 1 | 7.5YR2/2 | 黑褐色土 | 含炭化物浮石 |
| 2 | 7.5YR3/2 | 黑褐色土 | 含炭化物浮石 |
| 3 | 7.5YR4/3 | 黑色土 | 含微量炭化物 |

0 2m

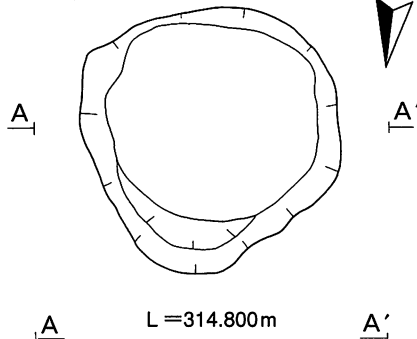
第2図 道地Ⅱ遺跡住居跡・土坑1

F 24①住居跡



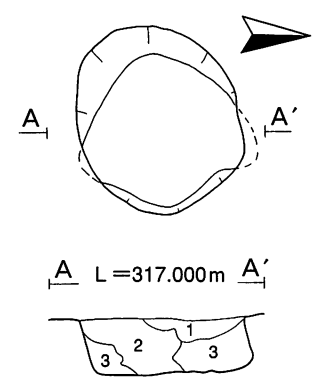
- A-A'
- | | | | |
|---|----------|------|--------|
| 1 | 7.5YR2/2 | 黑褐色土 | 含炭化物浮石 |
| 2 | 7.5YR3/2 | 黑褐色土 | 含炭化物浮石 |
| 3 | 7.5YR4/3 | 褐色土 | 含微量炭化物 |

G 2 土坑



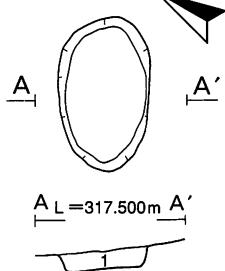
- A-A'
- | | | | |
|---|------------|------|--------|
| 1 | 7.5YR1.7/1 | 黑色土 | 含微量炭化物 |
| 2 | 7.5YR3/2 | 黑褐色土 | 含炭化物浮石 |
| 3 | 7.5YR2/2 | 黑褐色土 | 含炭化物浮石 |
| 4 | 7.5YR2/1 | 黑色土 | 含炭化物浮石 |
| 5 | 7.5YR3/4 | 暗褐色土 | 含炭化物浮石 |

I 6 土坑



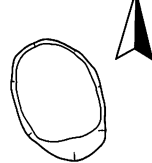
- A-A'
- | | | | |
|---|----------|------|--------|
| 1 | 7.5YR2/2 | 黑褐色土 | 含炭化物浮石 |
| 2 | 7.5YR3/2 | 黑褐色土 | 含炭化物浮石 |
| 3 | 7.5YR2/1 | 褐色土 | 含微量浮石 |

K 6 土坑

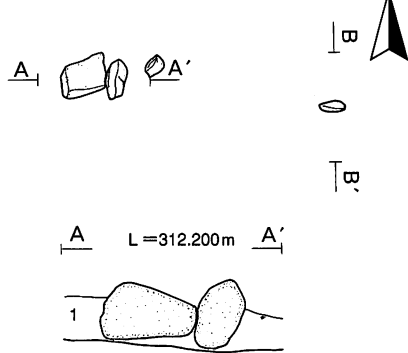


- A-A'
- | | | | |
|---|----------|------|------|
| 1 | 7.5YR2/2 | 黑褐色土 | 含炭化物 |
|---|----------|------|------|

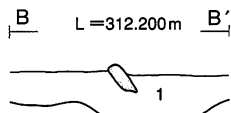
L 6 土坑



F 23 配石



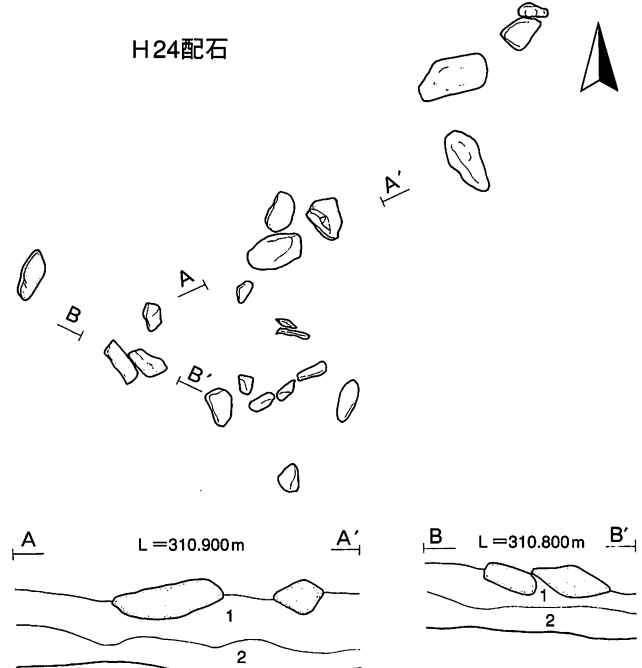
- A-A'
- | | | | |
|---|----------|------|--------|
| 1 | 7.5YR3/2 | 黑褐色土 | 含炭化物浮石 |
|---|----------|------|--------|



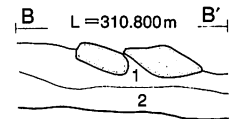
- B-B'
- | | | | |
|---|----------|-----|--------|
| 1 | 7.5YR4/3 | 褐色土 | 含微量炭化物 |
|---|----------|-----|--------|



H 24 配石

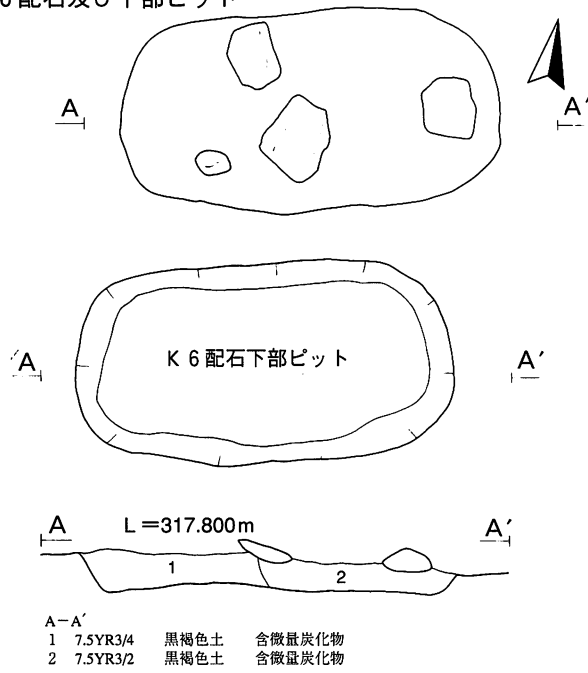


- A-A' B-B'
- | | | | |
|---|----------|-----|--------|
| 1 | 7.5YR4/3 | 褐色土 | 含微量炭化物 |
| 2 | 7.5YR4/6 | 褐色土 | 含浮石 |

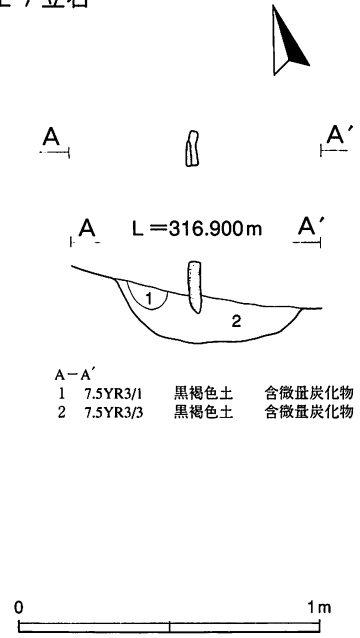


第3図 道地Ⅱ遺跡土坑2・配石1

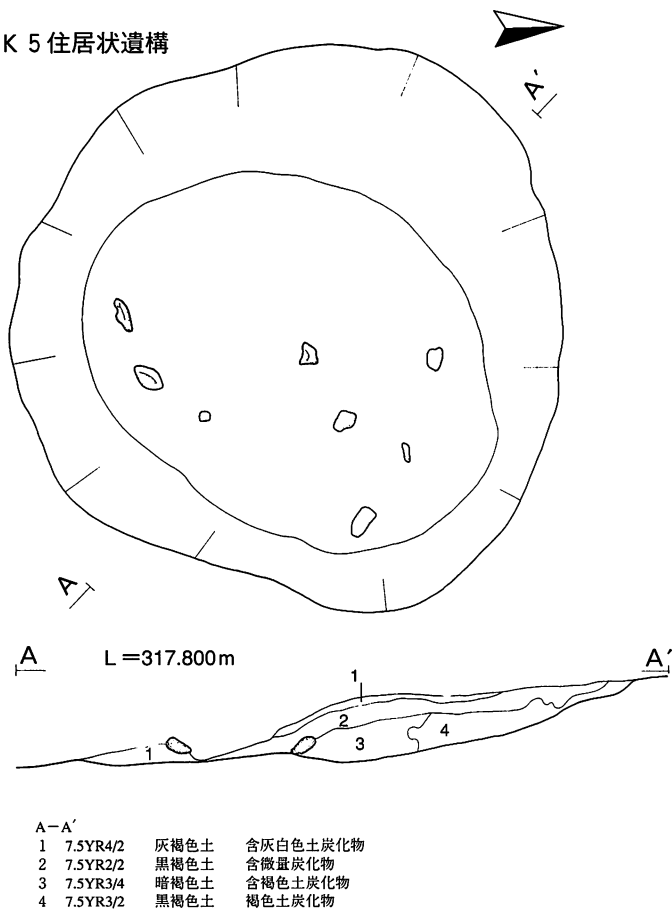
K 6 配石及び下部ピット



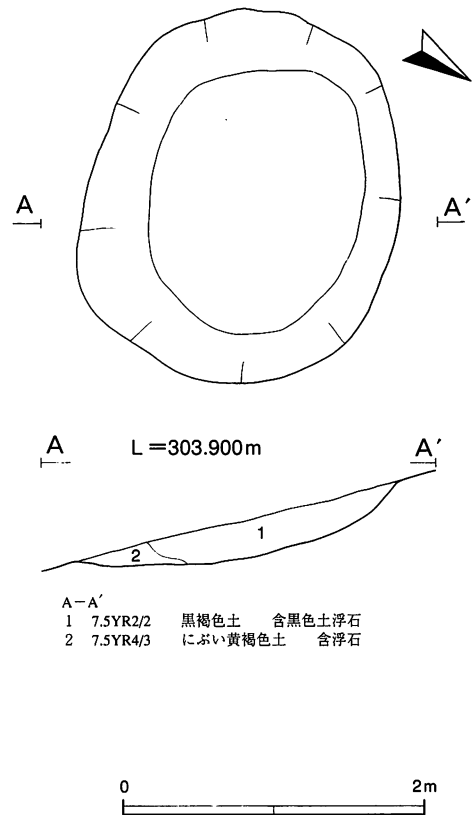
L 7 立石



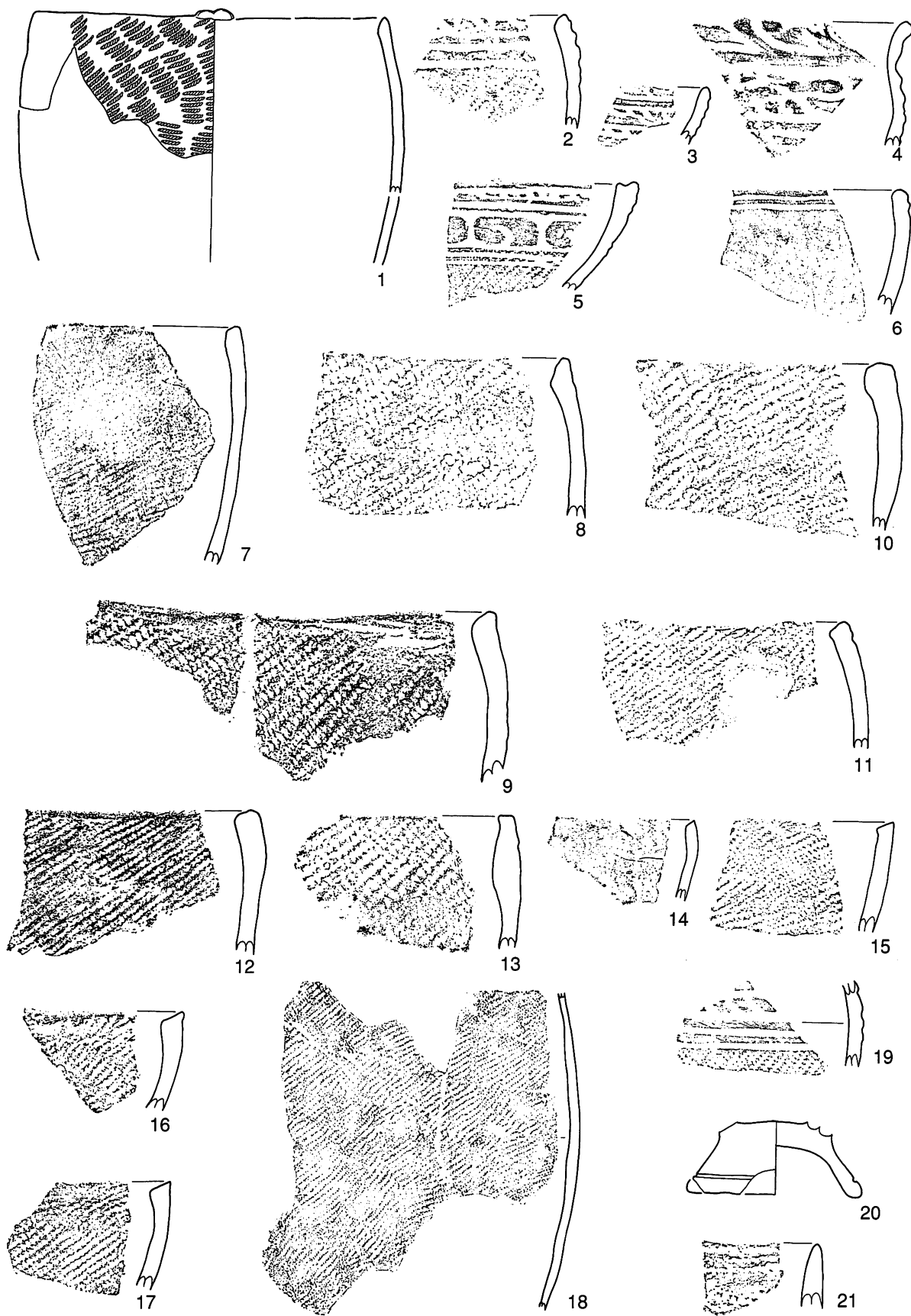
K 5 住居状遺構



P 21 住居状遺構

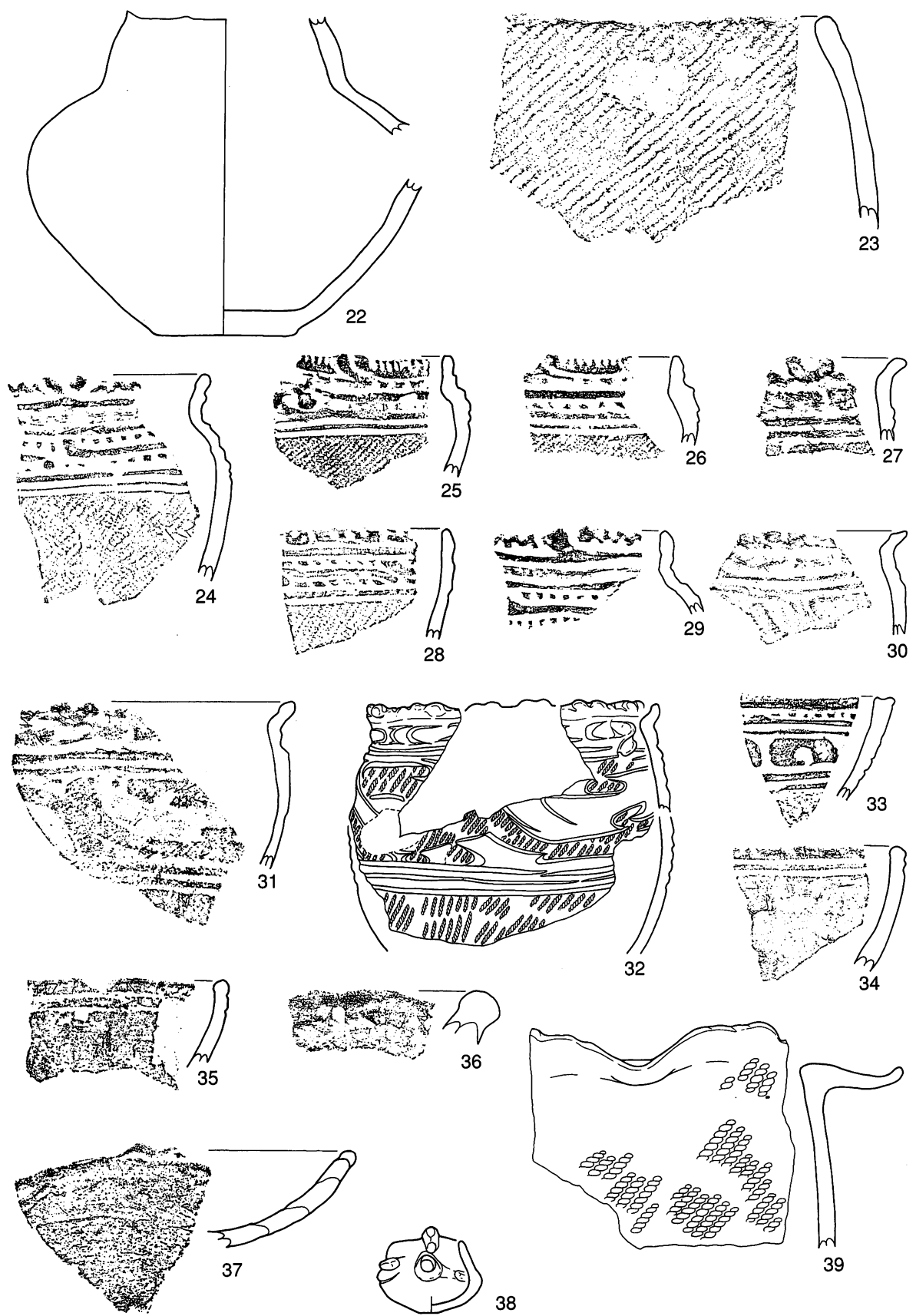


第 4 図 道地Ⅱ遺跡配石 2・立石・住居状遺構



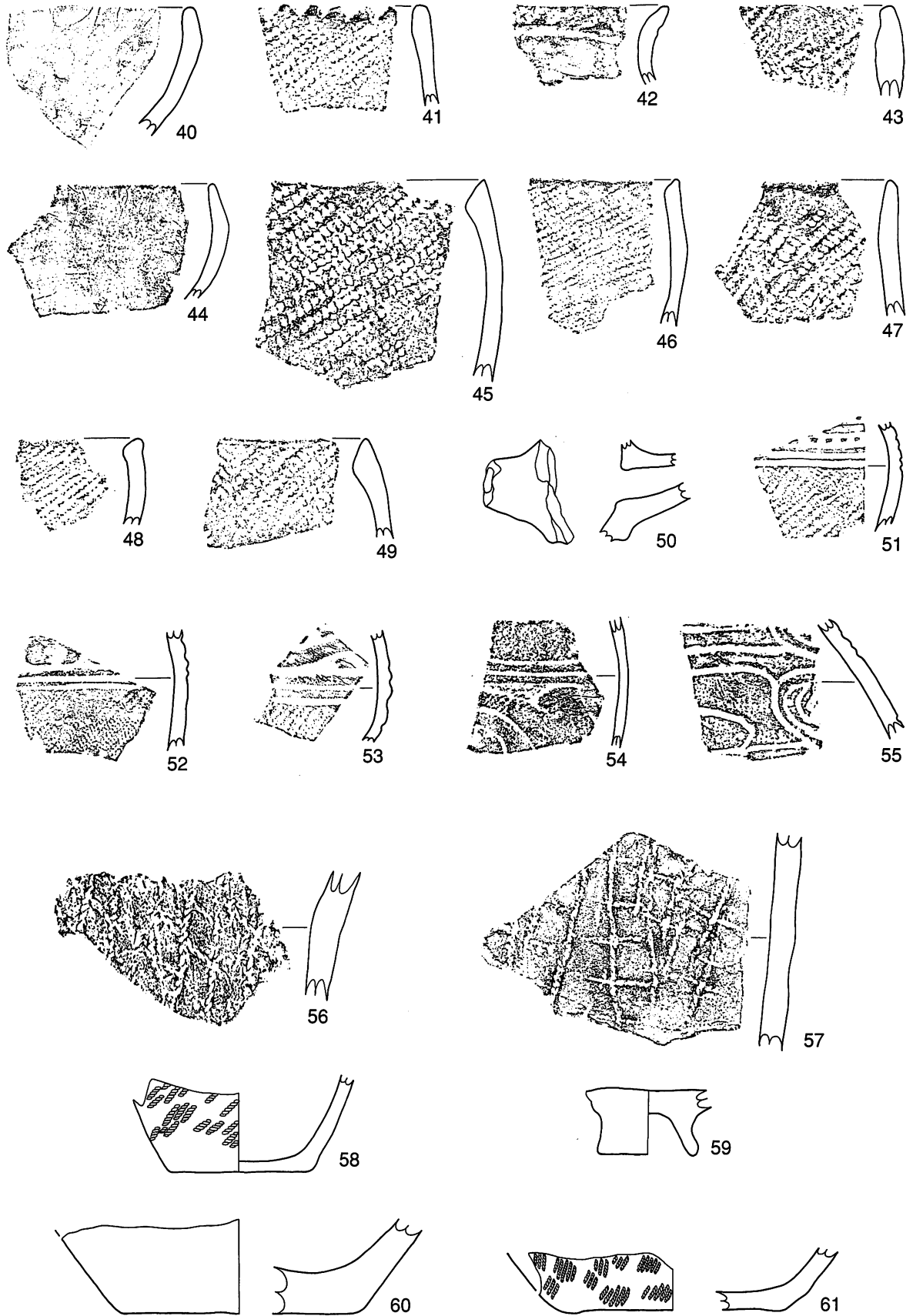
第5図 道地Ⅱ遺跡出土遺物1

1・18… $\frac{1}{4}$ その他… $\frac{1}{2}$



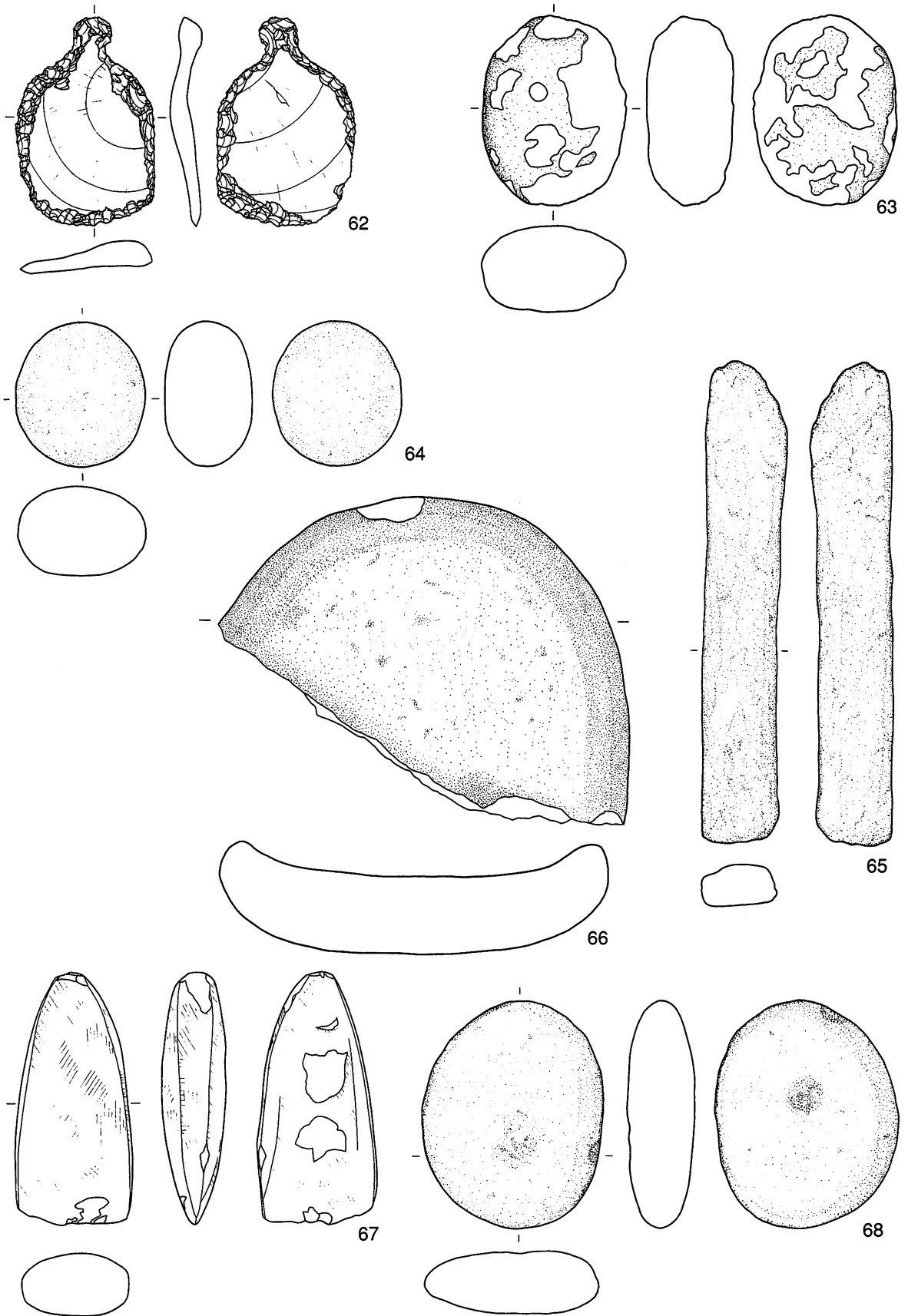
第6图 道地Ⅱ遺跡出土遺物2

S... $\frac{1}{2}$



第7図 道地Ⅱ遺跡出土遺物3

S... $\frac{1}{2}$



第8図 道地Ⅱ遺跡出土遺物4

62・67… $\frac{1}{2}$ その他… $\frac{1}{3}$

遺物観察表

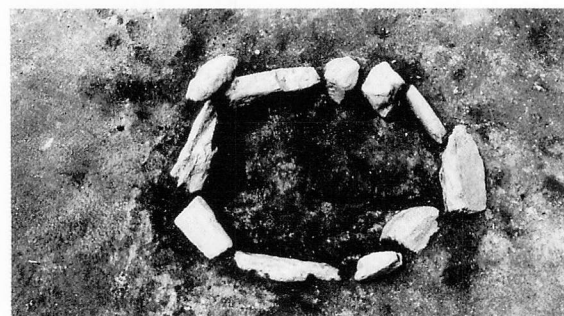
番号	出土地点	器種	部位	文様等の特徴					
1	E23住埋土	深鉢	口～体	L R横 口唇部B突起 すず付着					
2	E23住埋土	浅鉢	口	L R横 口唇部刻目連続					
3	E23住埋土	浅鉢	口	羊歯状文 口唇部刻目連続 すず付着					
4	E23住埋土	深鉢	口～体	羊歯状文 口唇部B突起刻目連続 平行沈線					
5	E23住埋土	浅鉢	口	L R横 三叉文 口唇部沈線 平行沈線 列点					
6	E23住埋土	浅鉢	口	平行沈線					
7	E23住埋土	深鉢	口～体	R L斜 すず付着					
8	E23住埋土	深鉢	口	R L縦 すず付着					
9	E23住埋土	深鉢	口	L R横 すず付着					
10	E23住埋土	深鉢	口	L R横 すず付着					
11	E23住埋土	深鉢	口	L R横					
12	E23住埋土	深鉢	口	L R横					
13	E23住埋土	深鉢	口	L R横 内側肥厚					
14	E23住埋土	浅鉢	口	ミニチュア土器?					
15	E23住埋土	深鉢	口	L R斜					
16	E23住埋土	浅鉢	口	L R斜 すず付着					
17	E23住埋土	浅鉢	口	L R横 すず付着					
18	E23住埋土	深鉢	体	L R斜 すず付着					
19	E23住埋土	浅鉢	体	羊歯状文 平行沈線					
20	E23住埋土	台付鉢	台						
21	P 21住居状埋土	深鉢	口	3条のL R L原体圧痕 L R横					
22	P 21住居状埋土	注口土器	頸～底						
23	E24㊦土坑埋土	深鉢	口～体	L R横 すず付着					
24	東側北斜面	深鉢	口～体	羊歯状文 口唇部B突起刻目連続 平行沈線 L R横					
25	東側北斜面	深鉢	口	口唇部B突起刻目連続 平行沈線 頸部突起 L R横					
26	東側北斜面	深鉢	口	羊歯状文 口唇部B突起刻目連続 平行沈線 L R横					
27	東側頂上部	深鉢	口	三叉文 口唇部B突起 平行沈線					
28	東側北斜面	浅鉢	口	羊歯状文 口唇部刻目連続 L R横 内側すず付着					
29	東側北斜面	深鉢	口	羊歯状文 口唇部B突起刻目連続 内側すず付着					
30	東側頂上部	深鉢	口	口唇部B突起刻目連続 平行沈線 雲形文?					
31	東側尾根	深鉢	口～体	口唇部B突起刻目連続 雲形文 L R横 すず付着					
32	東側頂上部	深鉢	口～体	口唇部B突起刻目連続 雲形文 L R横 30と同一個体?					
33	東側頂上部	浅鉢	口	三叉文 口唇部沈線 列点 平行沈線 5と同一個体?					
34	東側北斜面	浅鉢	口	口縁部平行沈線 6と同一個体?					
35	東側北斜面	浅鉢	口	口縁部平行沈線 横ナデ					
36	東側尾根	浅鉢	口唇	口唇部肥厚					
37	東側北斜面	浅鉢	口～体	口唇部B突起貼付					
38	東側北斜面	注口土器	完形	ミニチュア土器 胴部4対突起					
39	東側北斜面	片口土器	口～体	片口の両側に刺突のある突起 すず付着					
40	東側北斜面	浅鉢	口～体						
41	東側北斜面	深鉢	口	口唇部刻目連続 すず付着					
42	東側北斜面	深鉢	口	口縁部沈線区画 原体圧痕 L R					
43	東側北斜面	深鉢	口	L R横 内側肥厚					
44	東側北斜面	浅鉢	口～体						
45	東側北斜面	深鉢	口～体	波状口縁 L R横 すず付着					
46	東側北斜面	深鉢	口～体	L R横					
47	東側頂上部	深鉢	口～体	R L縦					
48	東側尾根	浅鉢	口	L R横					
49	東側尾根	深鉢	口	L R横 すず付着					
50	東側北斜面	注口土器	注口						
51	東側北斜面	深鉢	体	羊歯状文 平行沈線 L R横 内側すず付着					
52	東側尾根	浅鉢	体	三叉文 平行沈線 L R横 5・33と同一個体?					
53	東側北斜面	浅鉢	体	羊歯状文 平行沈線 L R横					
54	東側トレンチ㉔	深鉢	体	雲形文か三叉文? 平行沈線					
55	西側トレンチ㉕	深鉢	体	沈線による平行線と渦巻文					
56	東側頂上部	深鉢	体	燃系					
57	東側南斜面	深鉢	体	燃系					
58	西側頂上	深鉢	体下～底	L R横					
59	東側トレンチ㉔	台付鉢	底～台						
60	東側北斜面	深鉢	底	横ナデ					
61	東側北斜面	深鉢	底	L R横					
番号	出土地点	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石質	産地	備考
62	E23住埋土	石匙	7.2	4.8	1.1	28.3	珪質頁岩	奥羽山脈	
63	E23住埋土	磨石・敲石類	9.9	7.5	4.5	490	花崗岩	奥羽山脈	
64	E23住埋土	磨石・敲石類	7.5	6.7	4.5	340	花崗岩	奥羽山脈	
65	E23住埋土	石棒	25.1	4.3	2.3	380	チャート	北上山地	
66	E24土坑埋土下部	石皿			5.7	2300	安山岩	奥羽山脈	欠損
67	東側頂上部	磨製石斧	8.8	4.1	2.2	117	凝灰岩	奥羽山脈	
68	西側尾根風倒木	磨石・敲石類	11.8	9.4	3.3	570	砂岩	奥羽山脈	



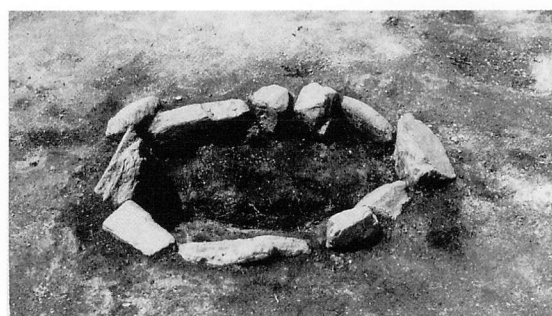
E 23住 全景



E 23住 埋土断面

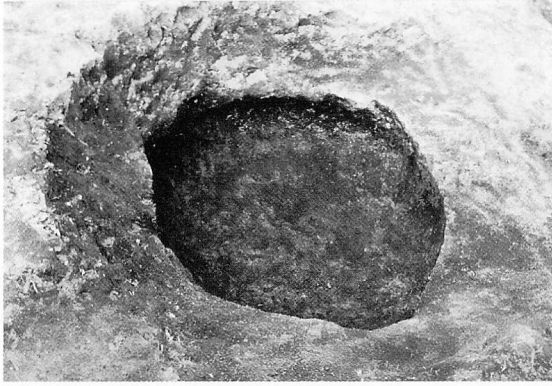


E 23住 炉平面



E 23住 炉平面

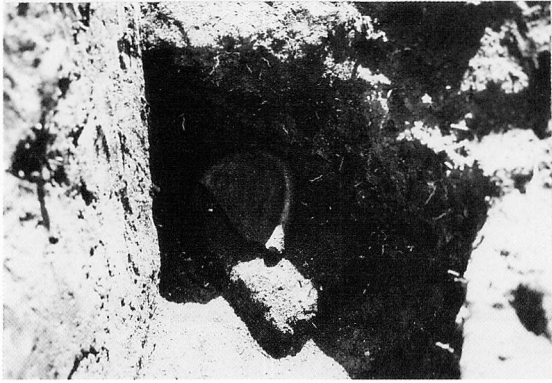
道地Ⅱ遺跡写真図版1 住居跡



E 24①土坑平面



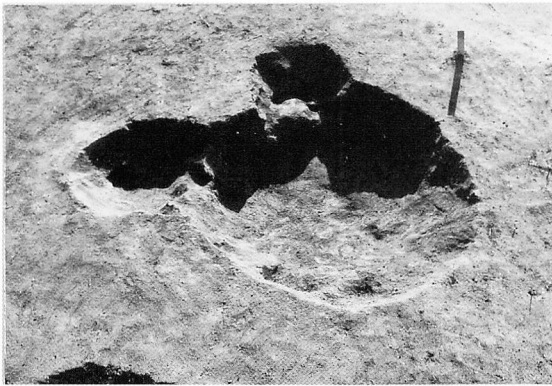
E 24①土坑断面



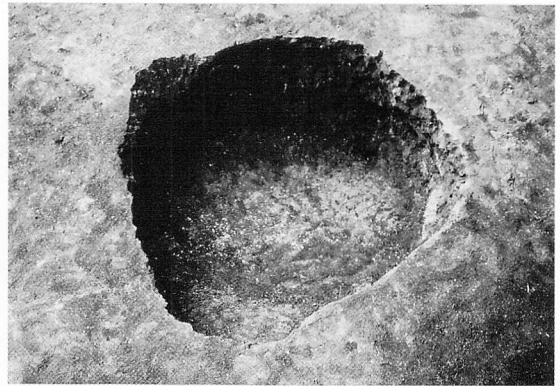
E 24①土坑石皿出土



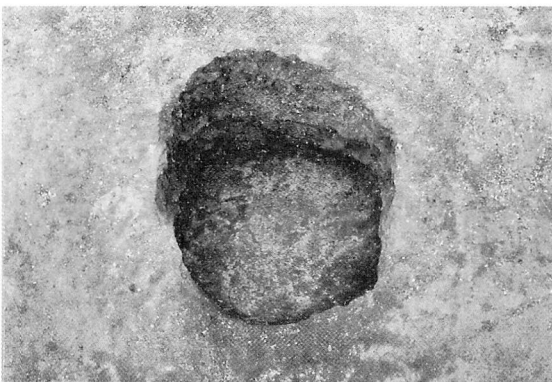
F 24①土坑平面



E 24② · F 24②土坑平面



G 2 土坑平面

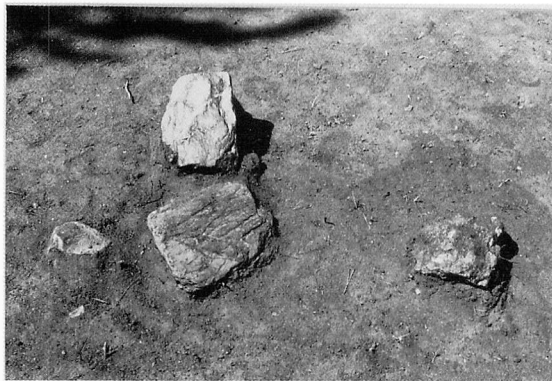


I 6 土坑平面



L 6 土坑平面

道地Ⅱ遺跡写真図版2 土坑



K 6 配石検出



K 6 配石断面



K 6 配石下部ピット

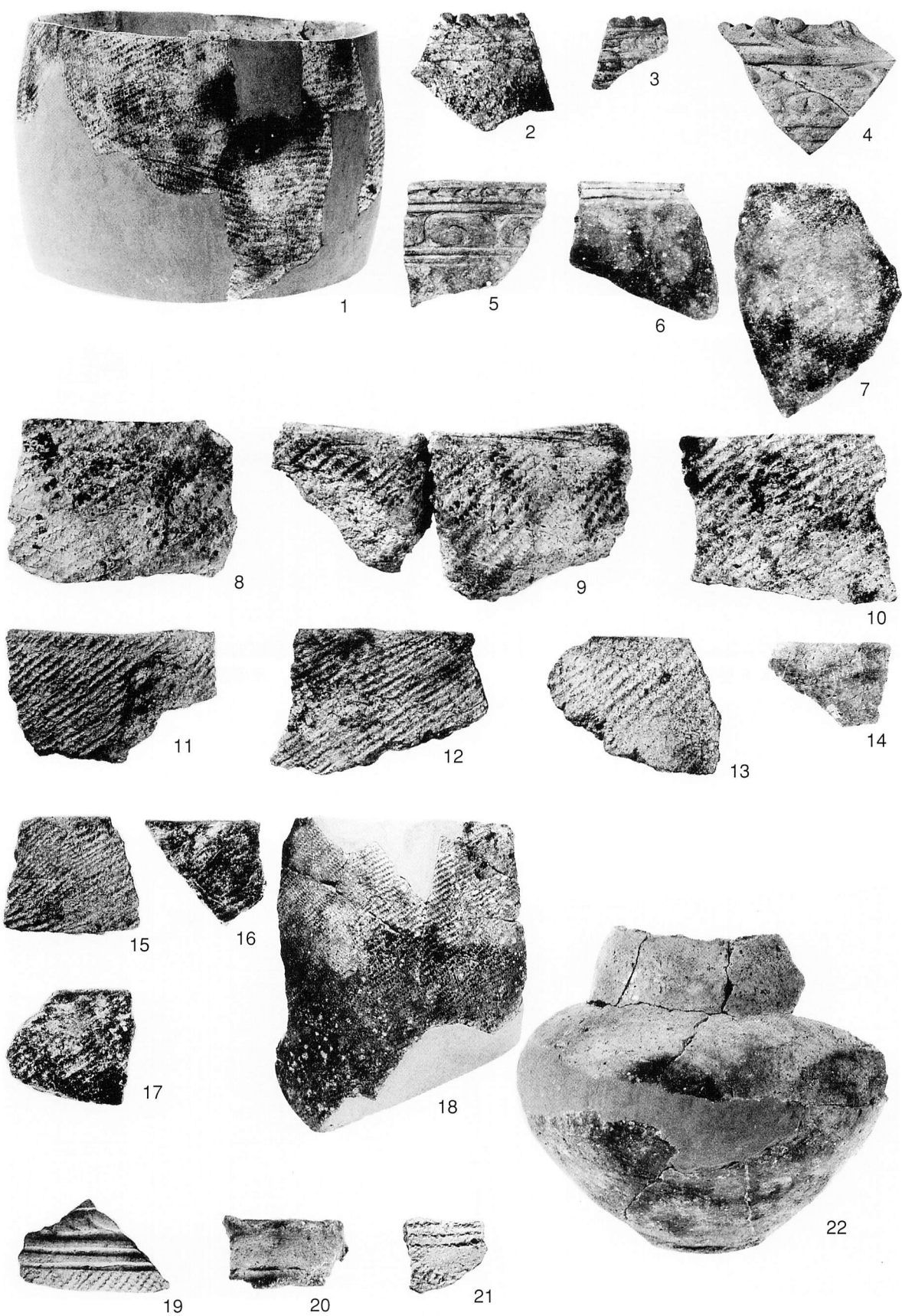


東側基本断層

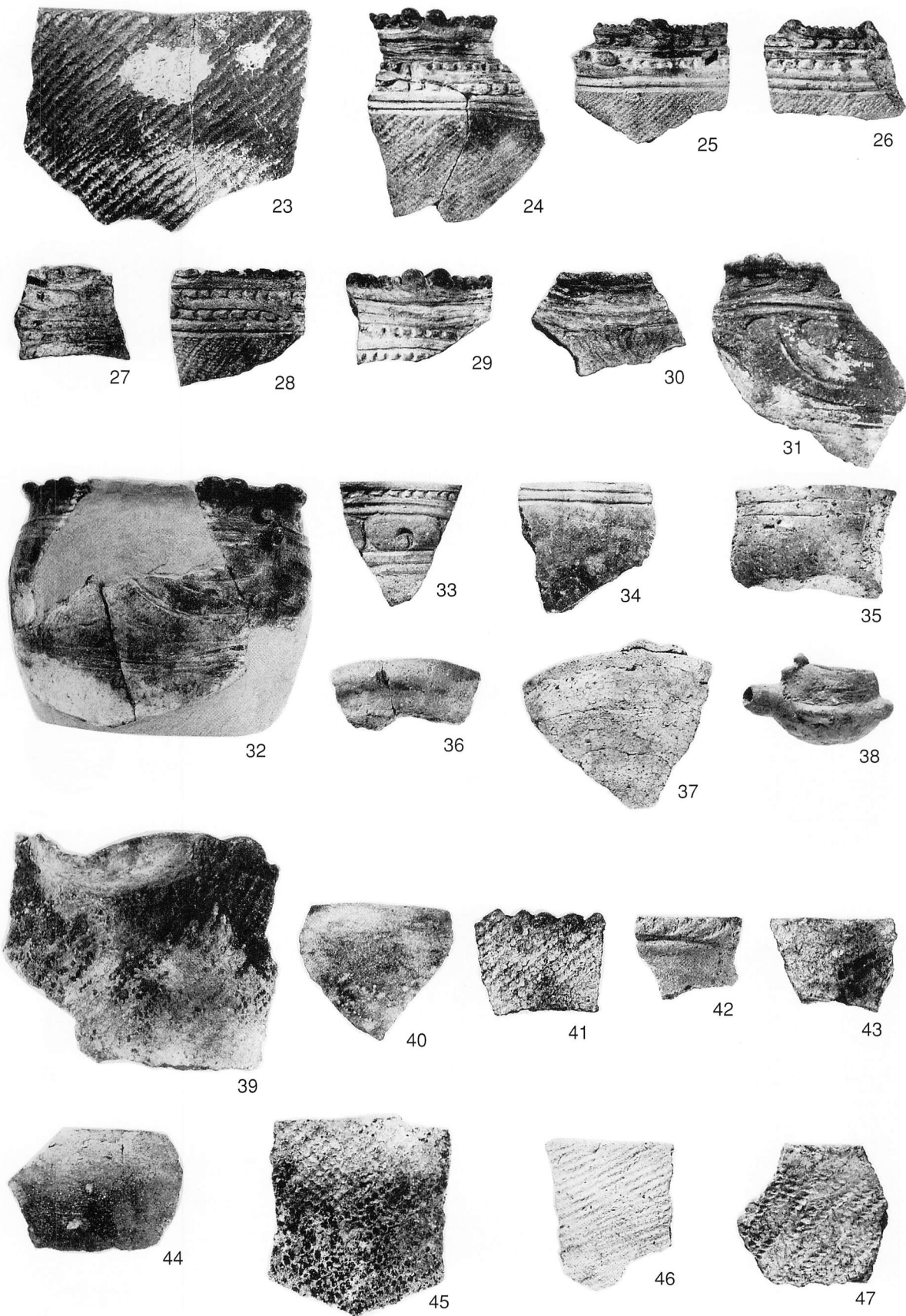


遺跡遠景

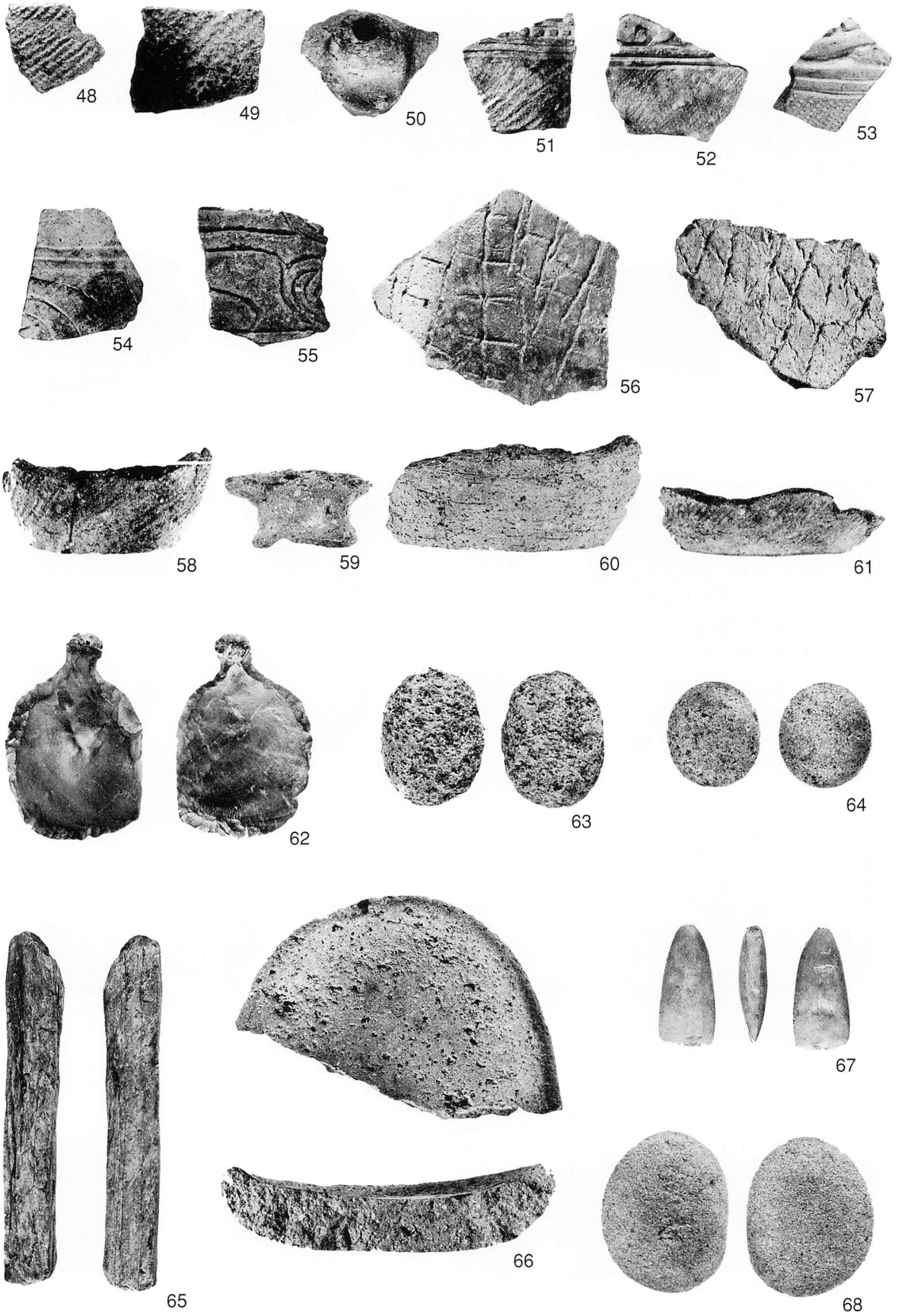
道地Ⅱ遺跡写真図版3 配石・基本層序・遺跡遠景



道地Ⅱ遺跡写真図版4 遺構内出土遺物



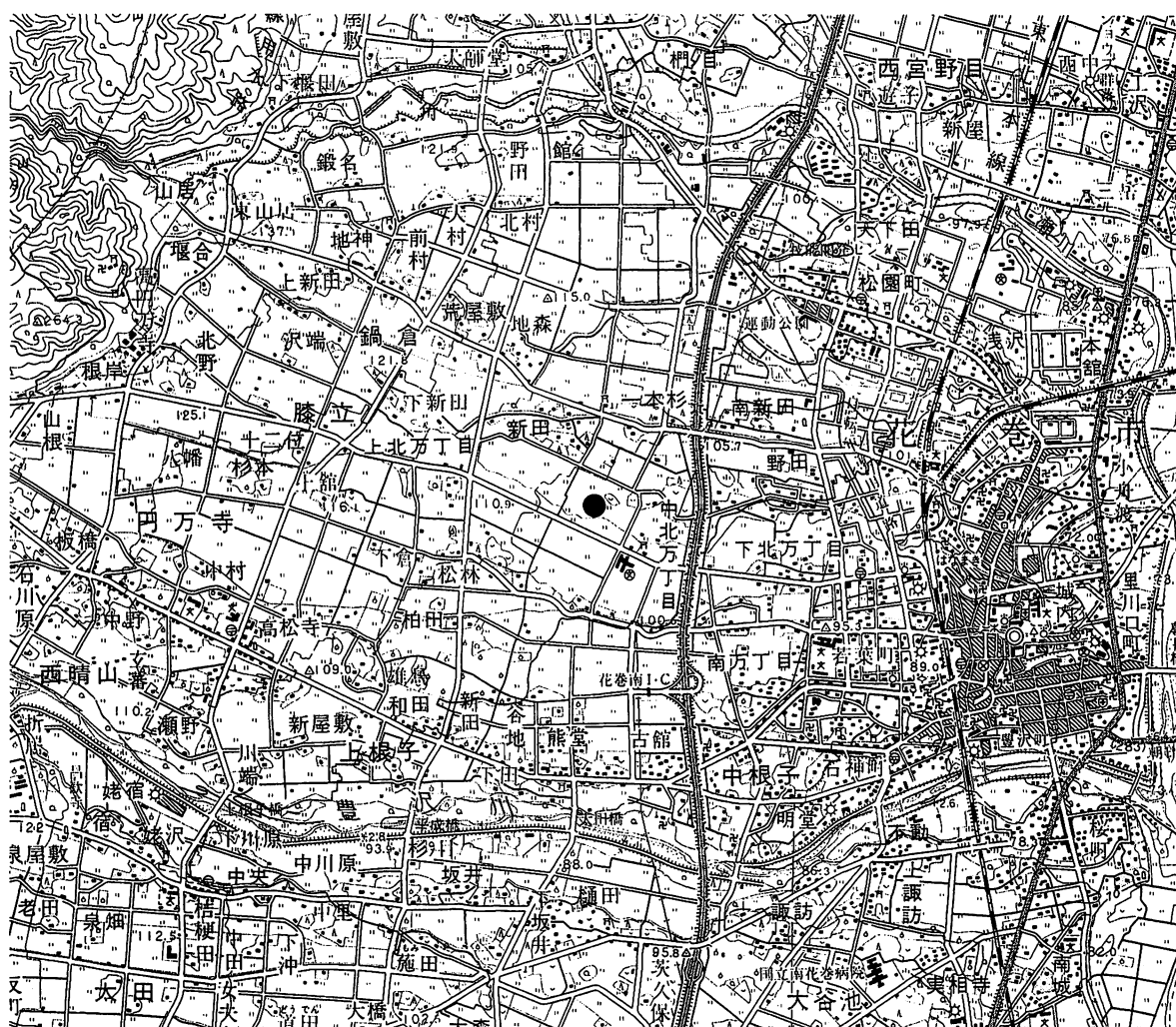
道地Ⅱ遺跡写真図版5 遺構内出土遺物



道地Ⅱ遺跡写真図版6 遺構内出土遺物

(41) 谷地遺跡

所在地 花巻市上北万丁目347番地ほか
委託者 岩手県花巻地方振興局花巻農村整備事務所
事業名 ほ場整備事業（担い手育成区画整理型）
北万丁目地区
発掘調査期間 平成11年7月21日～9月1日
調査対象面積 1,805m²
発掘調査面積 1,805m²
遺跡番号・略号 ME25-2230・YT-99
調査担当者 朝倉雄大・吉田 充
協力機関 花巻市教育委員会



遺跡位置

1:50,000 花巻

1. 調査に至る経過

谷地遺跡は「ほ場整備事業（担い手育成区画整理型）北万丁目地区」の施行に伴って、その事業区域内に位置することから発掘調査することとなったものである。

当事業は、花巻市北万丁目地区の水田ほ場整備を主とした総合的な水田営農活性化を目的とした基盤整備事業である。事業者である岩手県花巻地方振興局花巻農村整備事務所では、事業実施に先立って岩手県教育委員会に対し事業区域内に埋蔵文化財が存在しないかの問い合わせをした。問い合わせを受けた岩手県教育委員会では、事業実施に当たっては岩手県教育委員会と事前に協議をして欲しいことを通知した。

通知を受けた花巻農村整備事務所では、当事業の実施に係る埋蔵文化財の取り扱いについて岩手県教育委員会と協議を重ねたが、その結果、平成10年10月に埋蔵文化財の内容把握のため試掘調査を実施することとなり、平成10年10月19日～20日の2日間実施された。

試掘の結果、平安時代に属する住居跡等の遺構が発見されたことにより、平成11年度に本調査を実施する旨を花巻農村整備事務所に連絡した。通知を受けた花巻農村整備事務所では、調査を実施して欲しい旨の回答をした。

回答を受けた岩手県教育委員会は、花巻農村整備事務所に対し、平成11年3月2日付け第1251号「埋蔵文化財発掘調査事業について」によって、平成11年度に発掘調査を実施し、実際の調査は（財）岩手県文化振興事業団が担当する旨を通知し、併せて（財）岩手県文化振興事業団にも同様の通知をした。

通知を受けた両者は、発掘調査の詳細について協議・打合せをし、実際の調査は平成11年7月16日付けで岩手県花巻地方振興局長と（財）岩手県文化振興事業団理事長との間で委託契約を締結し、平成11年7月21日～同年9月1日まで現地調査を実施した。

発掘調査報告書の作成に係る室内整理は冬期間に実施したが、調査によって発見された遺構・遺物とも些少であったことから、冊子による報告書は作成しないで調査略報（平成11年度）に掲載して一切の報告を終了することとした。

2. 遺跡の立地

谷地遺跡はJR東北本線花巻駅の西約2.5km、東北自動車道花巻南ICの北西約1.5kmに位置し、北上川が形成した後背湿地上にある。遺跡の南約2.3kmには北上川の支流である豊沢川が東流する。遺構検出面の標高は106m前後である。現況は水田であり、本遺跡のある北万丁目地区は昭和20年代、昭和40年代に区画整理が施されている。

3. 遺跡の基本層序

地点により違いがあるが、およそ次のような特徴の土層が順に堆積する。

I層 暗褐色土～灰黄褐色土 現表土 層厚10～20cm前後。

II層 黒褐色土 層厚0～50cm前後。

III層 黄褐色土 地山 層厚不明。

遺跡の周辺は、全体的に南に緩く傾斜している地形であり、調査区内では北側に向かうにつれII層が厚く堆積する。地山面まで厚いところで地表面から70～80cm程ある。一方、南側ではII層の堆積が認められずI層の現表土を剥ぐとすぐにIII層の地山面に至る。また、調査区北端を東西に横切る農道部分は、前回及び前々回に行われた区画整理の際の農道拡張に伴う盛土が60～70cm程堆積していた。

4. 調査の概要

検出された遺構は平安時代の竪穴住居跡1棟、近現代の溝跡7条である。

＜**竪穴住居跡**＞ 調査区南西部、Ⅲ層上面より検出された。規模は3.30×3.12mで、平面形は隅丸方形を呈する。埋土は黄灰色土を主体とする4層に大別される。壁の上部は削平されているが、床面から緩く外傾して立ち上がっている。壁高は東壁8cm、西壁9cm、南壁3cm、北壁10cmである。床面はⅢ層中にあり、ほぼ平坦で軟らかい。土坑は東南角隅にP1、南壁中央付近にP2の2基が検出された。P1は貯蔵穴と思われる。カマドは北東壁の中央やや西寄りに設置されている。カマドの主軸方向はN-57°-Eである。本体部、煙道部とも削平されていることから詳細な構造は不明であり、煙出し部も下部の円形状の土坑が僅かに残存するのみである。燃烧部は径45×38cmの楕円形状の赤褐色～橙色の焼土により形成される。芯材等に利用された垂角礫及び垂円礫が床や燃烧部上に散在していた。遺構の時期は、出土遺物の特徴から平安時代に属するものと思われる。

＜**溝跡**＞ 昭和40年代の区画整理の際廃絶されたと思われる旧道側溝2条を含め、7条が検出された。

SD1溝跡は、現農道が拡張される際に廃絶された旧道に伴う側溝である。遺構は東西方向に走り、検出長は約39m、上端幅30～135cm、深さ5～23cmである。SD2溝跡は、東西方向に走る溝跡で検出長は約36m、上端幅26～98cm、深さ5～10cm程である。流路はやや蛇行しており一定していないが、旧道側溝の流路に似る。SD3溝跡は、南北方向に走る溝跡で検出長約6m、上端幅40cm前後、深さ10cm前後である。軸線方向はN-14°-Eである。SD4溝跡は北溝と南溝のからなる南北方向の溝跡である。検出長は北溝約2.8m、南溝約5mで、ともに上端幅30～50cm、深さ5～20cmである。軸線方向は北溝、南溝ともN-15°-Eである。SD5溝跡は、東西方向に走る溝跡で検出長約24m、上端幅30～50cm、深さ5～15cm程である。軸線方向はN-97°-Eである。SD6溝跡は南北方向に走る溝跡で検出長約6.2m、上端幅30～42cm、深さ5～15cmである。軸線方向はN-16°-Eである。また、SD5溝跡とSD6溝跡は切り合い関係にあり、SD5溝跡が新しくSD6溝跡が古い。

なお、SD4溝跡、SD5溝跡は遺構検出面が他の溝跡より上位であることから、他の遺構に比べ遺構の構築年代は新しいものと思われる。

5. 出土遺物

大コンテナ1箱分の土器片や石器が出土した。遺構内ではSI1住居跡から土師器や須恵器が10点、遺構外では縄文土器が3点、剥片石器が3点出土した。

1～10はSI1住居跡からの出土である。1～9は土師器で1～5は甕、6は鉢、7～9はロクロ成型の坏である。10は須恵器甕の口縁部破片である。11～13は縄文土器である。いずれも深鉢の胴部破片で、11～12はLR単節縄文、13は網目状撚糸文中～後期の粗製土器である。14～16は石器である。14は石筥、15は石鏃で先端部が欠損した無茎鏃である。16は不定形石器である。

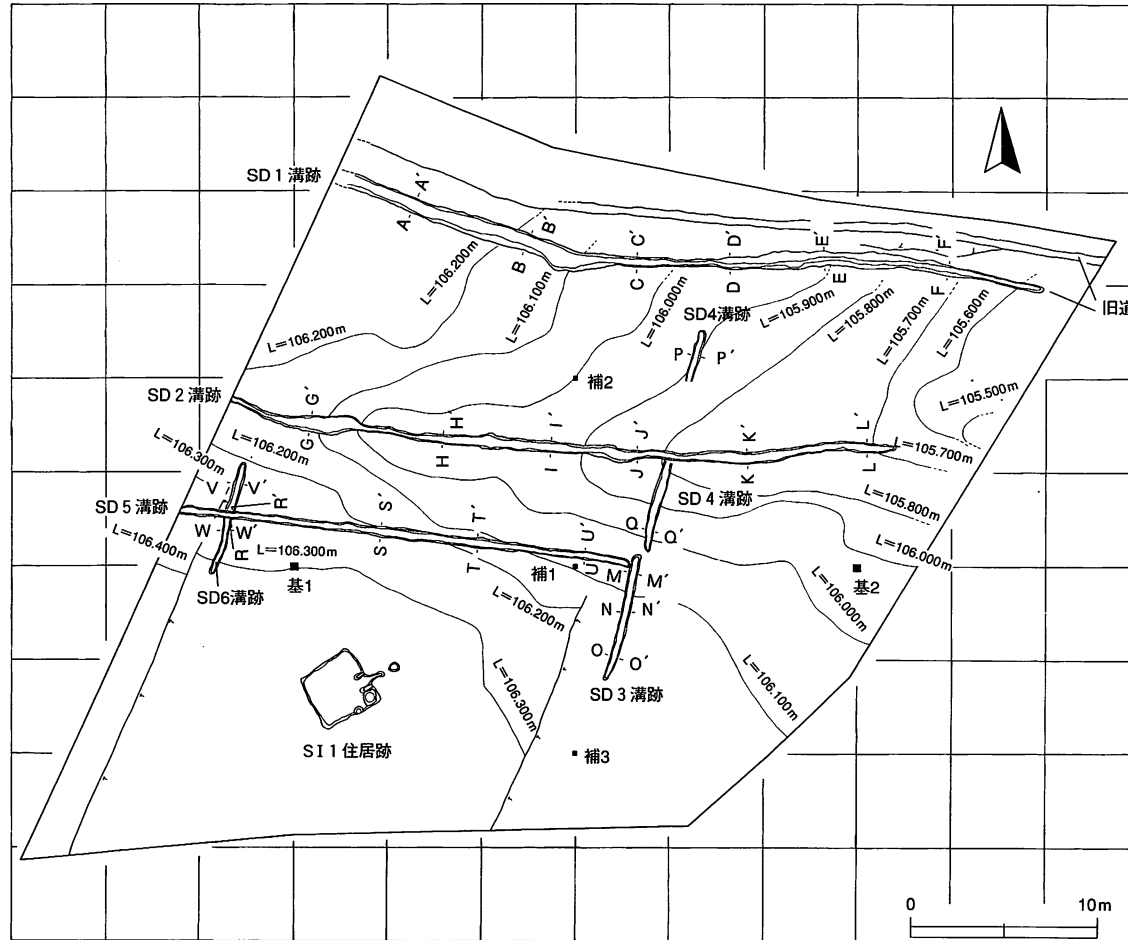
6. まとめ

今回の調査により、平安時代の竪穴住居跡と近現代の溝跡及び旧道側溝跡を確認し、同時代における人々の生活の痕跡及び土地利用の一端を窺い知ることができた。平安時代の遺構は竪穴住居跡1棟のみの検出であったが、立地環境から周辺地域における集落の存在が予想される。近現代については、旧道が前回及び前々回のは場整備の際に盛土により拡張されていることが分かっており、検出された側溝跡は覆土の堆積状況から前回のは場整備の際に廃絶されたものと言える。溝跡については、具体的な時期は出土遺物がないため不明であるが、これまでの土地利用状況及び埋土、規模等から近現代の水田耕作に伴う水路施設と思われる。

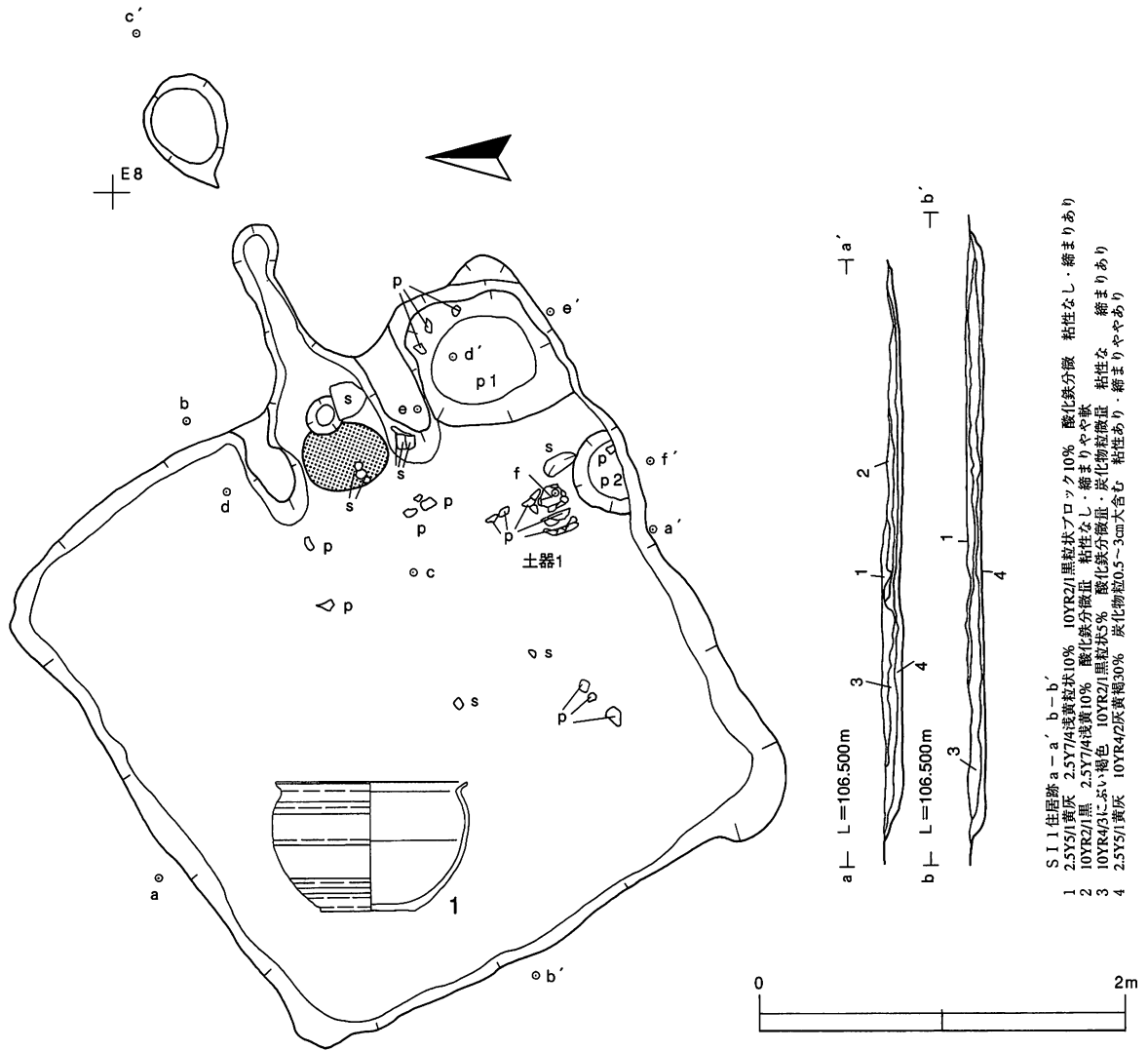
なお、谷地遺跡に関する報告は、これをもって全てとする。

A B C D E F G H I J K L

1
2
3
4
5
6
7
8
9
0

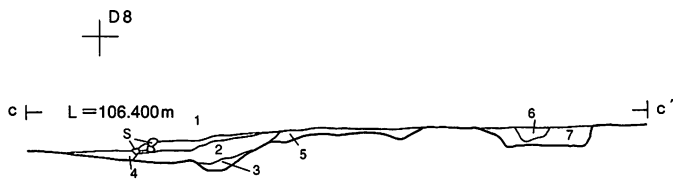


第1図 谷地遺跡遺構配置図



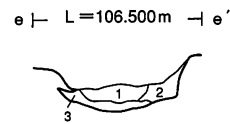
S I 1住居跡 a-a', b-b'

1 2.5Y5/1黄灰 2.5Y7/4淡黄粒状10% 10YR2/1黒粒状ブロック10% 酸化鉄分微 粘性なし・締まりあり
 2 10YR2/1黒 2.5Y7/4淡黄10% 酸化鉄分微量 粘性なし・締まりややあり
 3 10YR4/3にふい褐色 10YR2/1黒粒状5% 酸化鉄分微量・炭化物粒微量 粘性なし・締まりあり
 4 2.5Y5/1黄灰 10YR4/2灰黄褐30% 炭化物粒0.5~3cm大含む 粘性あり・締まりややあり



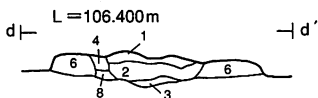
S I 1住居跡 c-c'

1 10YR3/2黒褐 焼土粒・ブロック25%含む
 2 7.5YR2/1黒 焼土粒・ブロック30% 炭化物粒微量
 3 7.5YR2/1黒 (やや明るめ) 2.5Y7/1灰白10% 焼土粒・ブロック20% 炭化物粒微量
 4 10YR3/2黒褐 炭化物粒15% 焼土5%
 5 10YR黒褐 2.5Y7/1灰白20% 焼土5% 炭化物微量
 6 10YR3/2黒褐粘性シルト 10YR5/2灰黄褐30% 10YR2/1黒10% 焼土微量
 粘性あり・締まり普通
 7 10YR2/2黒褐シルト 10YR2/1黒30% 焼土微量 粘性ややあり・締まり普通



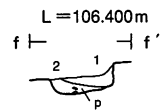
S I 1住居跡 e-e'

1 2.5YR8/3淡黄20% 2.5Y5/2暗灰黄砂質粘土 焼土3% 炭化物粒3%
 粘性あり・締まりなし
 2 2.5YR5/3黄褐砂質粘土 土器片含む
 3 10YR4/2灰黄褐砂質粘土 2.5Y8/4淡黄10% 焼土粒5% 炭化物粒5%
 粘性あり・締まりなし



S I 1住居跡 d-d'

1 10YR3/2黒褐 焼土粒・ブロック25%含む
 2 7.5YR2/1黒 5YR6/6橙焼土ブロック20% 土器片含む 炭化物粒微量
 3 7.5YR2/1黒 2.5Y7/1灰白30% 焼土20% 炭化物微量
 4 2.5Y7/1灰白 焼土粒5%
 5 7.5YR2/1黒 5YR6/6橙焼土粒60% 炭化物微量
 6 2.5YR8/3淡黄 焼土微量 炭化物微量粘性あり・締まり普通

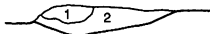


S I 1住居跡 f-f'

1 10YR4/3にふい黄 焼土粒・炭化物粒少量 土器片含む 粘性ややあり
 締まり普通
 2 10YR4/2灰黄褐 2.5Y8/2灰白 焼土粒・炭化物少量 土器片含む
 粘性あり・締まり普通

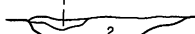
第2図 谷地遺跡 S I 1住居跡

A L=106.400m → A'



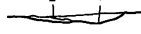
- SD 1 溝跡 A-A'
- 10YR4/2 灰黄褐色 2.5Y7/4 浅黄粘土 20% 酸化鉄分少量 粘性なし・締まりあり
 - 10YR4/3 におい黄褐 2.5Y7/6 明黄褐 5% 酸化鉄分少量 粘性なし・締まりあり

B L=106.400m → B'



- SD 1 溝跡 B-B'
- 10YR3/2 黒褐 2.5Y7/4 浅黄粘土 30% 酸化鉄分少量 粘性なし・締まりあり
 - 10YR4/3 におい黄褐 2.5Y7/6 明黄褐 酸化鉄分少量 粘性なし・締まりあり

C L=106.200m → C'



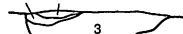
- SD 1 溝跡 C-C'
- 10YR3/2 黒褐 2.5Y7/4 浅黄 25% 酸化鉄分微量 粘性なし・締まり普通
 - 10YR3/2 黒褐 2.5Y7/4 浅黄 70% 酸化鉄分微量 粘性なし・締まり普通

D L=106.200m → D'



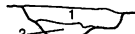
- SD 1 溝跡 D-D'
- 10YR4/3 におい黄褐 2.5Y7/4 浅黄 3% 酸化鉄分微量 粘性なし・締まりあり
 - 10YR3/2 黒褐 2.5Y7/4 浅黄 10% 酸化鉄分微量 粘性なし・締まり普通

E L=106.400m → E'



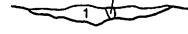
- SD 1 溝跡 E-E'
- 2.5YR7/4 浅黄 10YR3/2 黒褐 20% 酸化鉄分少量 粘性なし・締まりあり
 - 10YR4/2 灰黄褐 酸化鉄分少量 粘性なし・締まりあり
 - 10YR3/2 黒褐 2.5Y7/4 浅黄 10% 粘性なし・締まりあり

F L=106.000m → F'



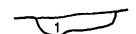
- SD 1 溝跡 F-F'
- 10YR3/2 黒褐 2.5Y7/4 浅黄 3% 粘性なし・締まりあり
 - 10YR3/2 黒褐 2.5Y7/4 浅黄 30% 粘性なし・締まりあり

G L=106.300m → G'



- SD 2 溝跡 G-G'
- 10YR3/2 黒褐 炭化物微量・酸化鉄分微量 粘性ややあり・締まり普通
 - 10YR4/2 灰黄褐色 (砂質) 粘性なし・締まり普通

H L=106.200m → H'



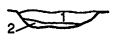
- SD 2 溝跡 H-H'
- 10YR3/2 黒褐 (やや暗め) 粘性なし・締まり普通

I L=106.100m → I'



- SD 2 溝跡 I-I'
- 10YR3/2 黒褐 10YR7/4 におい黄橙 2% 粘性ややあり・締まり普通

J L=106.000m → J'



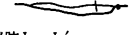
- SD 2 溝跡 J-J'
- 10YR3/2 黒褐 10YR7/4 におい黄橙 3% 粘性ややあり・締まり普通

K L=105.900m → K'



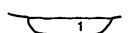
- SD 2 溝跡 K-K'
- 10YR3/2 黒褐 10YR7/4 におい黄橙 5% 粘性なし・締まり普通
 - 10YR2/2 黒褐 粘性あり・締まりややあり

L L=105.800m → L'



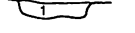
- SD 2 溝跡 L-L'
- 10YR3/2 黒褐 10YR7/4 におい黄橙 5% 粘性なし・締まりあり

M L=106.200m → M'



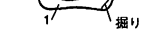
- SD 3 溝跡 M-M'
- 2.5Y7/4 浅黄 10YR4/2 灰黄褐 30% 粘性なし・締まりあり

N L=106.200m → N'



- SD 3 溝跡 N-N'
- 2.5Y7/4 浅黄 10YR4/2 灰黄褐 10% 粘性なし・締まりあり

O L=106.200m → O'



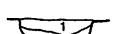
- SD 3 溝跡 O-O'
- 2.5Y7/4 浅黄 酸化鉄分少量 粘性なし・締まりあり

P L=106.100m → P'



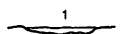
- SD 4 溝跡 P-P'
- 10YR3/3 暗褐 10YR5/3 におい黄褐 60% 粘性なし・締まり普通

Q L=106.200m → Q'



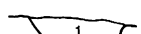
- SD 4 溝跡 Q-Q'
- 10YR3/2 黒褐 2.5Y6/4 におい黄 20% 粘性なし・締まりあり
 - 10YR4/3 におい黄褐 粘性なし・締まり普通

R L=106.500m → R'



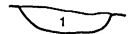
- SD 5 溝跡 R-R'
- 10YR7/6 明黄褐 10YR3/1 黒褐 15% 酸化鉄分微量 粘性なし・締まりあり

S L=106.400m → S'



- SD 5 溝跡 S-S'
- 10YR7/6 明黄褐 10YR4/2 灰黄褐 斑状 10% 酸化鉄分微量 粘性ややあり・締まりあり

T L=106.300m → T'



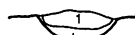
- SD 5 溝跡 T-T'
- 10YR7/6 明黄褐 10YR4/2 灰黄褐 斑状 15% 酸化鉄分微量 粘性ややあり・締まりあり

U L=106.200m → U'



- SD 5 溝跡 U-U'
- 2.5Y7/4 浅黄 10YR4/2 灰黄褐色 斑状 10% 粘性なし・締まりあり

V L=106.400m → V'

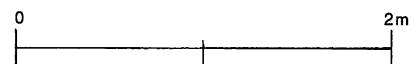


- SD 6 溝跡 V-V'
- 2.5Y7/4 浅黄 10YR3/2 黒褐 20% 粘性ややあり・締まり普通
 - 2.5Y7/4 浅黄 粘性あり・締まり普通

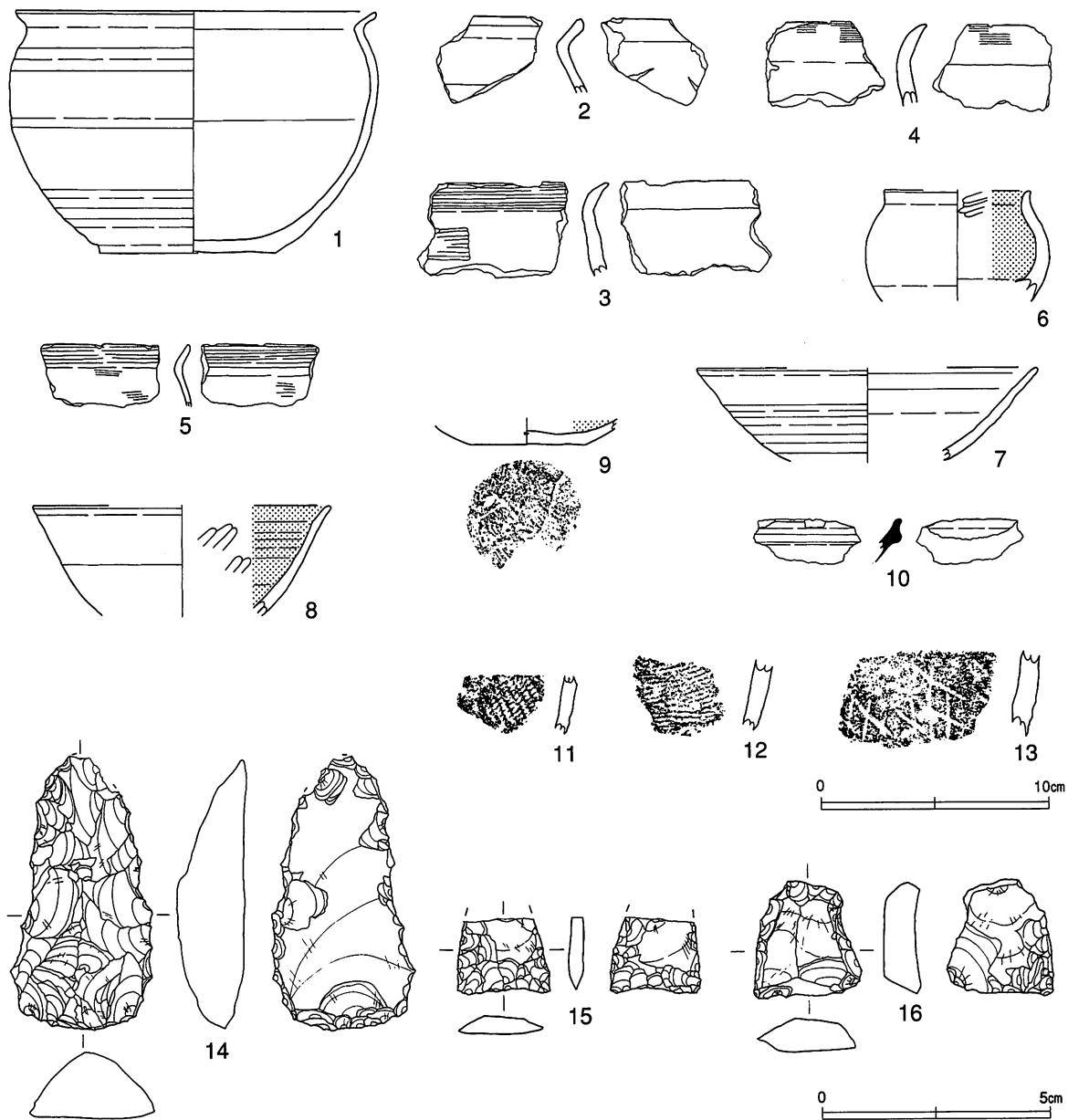
W L=106.400m → W'



- SD 6 溝跡 W-W'
- 2.5Y7/4 浅黄 10YR3/2 黒褐 10% 粘性ややあり・締まり普通
 - 2.5Y7/4 浅黄 10YR3/2 黒褐 5% 粘性あり・締まり普通



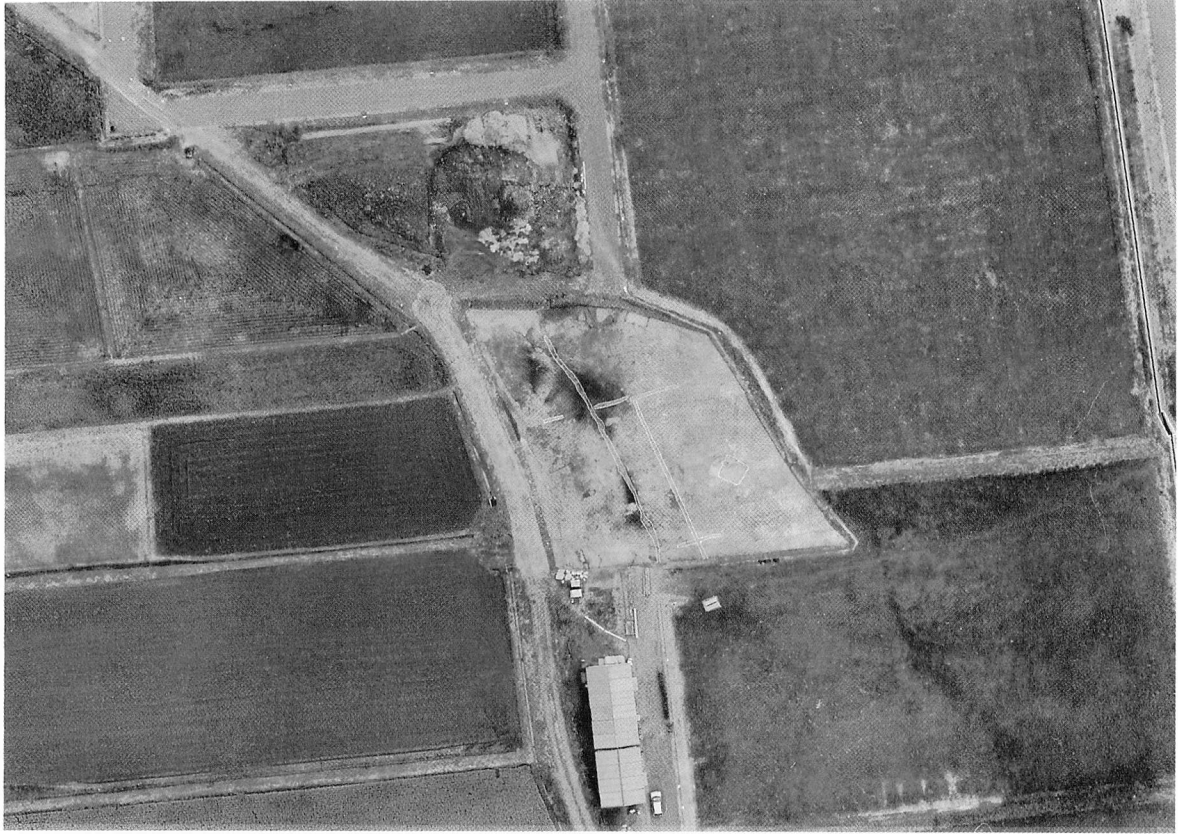
第 3 図 谷地遺跡溝跡



No.	出土地点	種類	器種	部位	内面調整 (口縁部)	内面調整 (胴部)	外面調整 (口縁部)	外面調整 (胴部/底部)	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	底厚 (cm)	備考
1	SI11住居跡埋土	土師器	甕	口~底部	R	R	R	R/回転系切り	(15.8)	7.7	10.6	0.6	
2	SI11住居跡埋土	土師器	甕	口縁部	R	-	R	-	-	-	-	-	
3	SI11住居跡埋土	土師器	甕	口縁部	-	-	Y	N	-	-	-	-	
4	SI11住居跡埋土	土師器	甕	口縁部	Y	-	Y	-	-	-	-	-	
5	SI11住居跡埋土	土師器	甕	口縁部	Y	-	Y	-	-	-	-	-	
6	SI11住居跡P2内	土師器	鉢	口~胴部	R	R→M	R	R	(6.4)	-	-	-	内黒
7	SI11住居跡カマド内	土師器	坏	口~胴部	R	R	R	R	(14.9)	-	-	-	
8	SI11住居跡P2内	土師器	坏	口~胴部	R	R→M	R	R	(13.0)	-	-	-	内黒
9	SI11住居跡埋土	土師器	坏	底部	-	R	-	R/回転系切り	-	(5.0)	-	0.6	内黒
10	SI11住居跡埋土	須恵器	甕	口縁部	R	-	R	-	-	-	-	-	
11	J7グリッド表土	縄文土器	深鉢	胴部				LR縄文	-	-	-	-	
12	J7グリッド表土	縄文土器	深鉢	胴部				LR縄文?	-	-	-	-	
13	D3グリッド風倒木痕	縄文土器	深鉢	胴部				網目状燃系文	-	-	-	-	
14	E4グリッドII層中	剥片石器	石篋						長さ 6.0	幅 3.1	厚さ 1.4	重さ 26.74g	
15	C7グリッドIII層直上	剥片石器	石鏃						長さ 1.7	幅 2.0	厚さ 0.4	重さ 1.52g	無茎鏃
16	C7グリッドIII層直上	剥片石器	不定形石器						長さ 2.5	幅 2.3	厚さ 0.8	重さ 5.49g	

※1 ヘラミガキ(M)、ヨコナデ(Y)、ヘラナデ(N)、ロクロ痕(R)

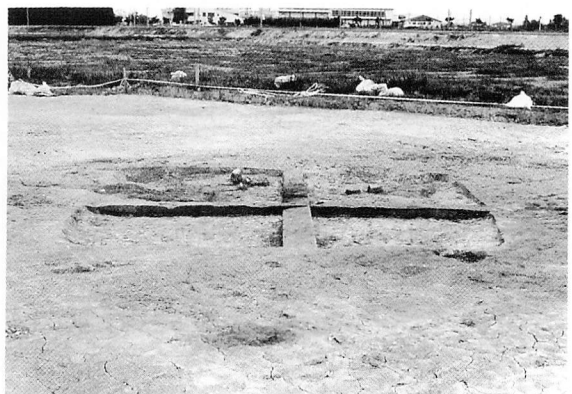
第4図 谷地遺跡出土遺物



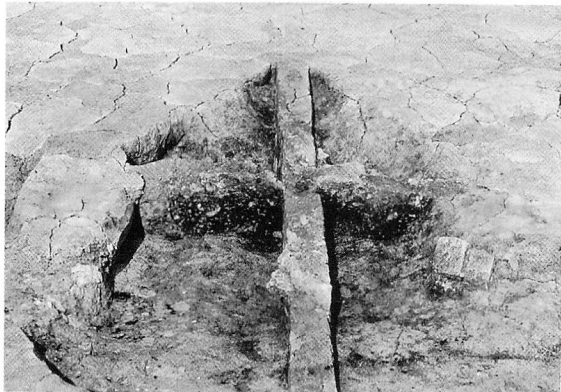
遺跡全景 (W→)



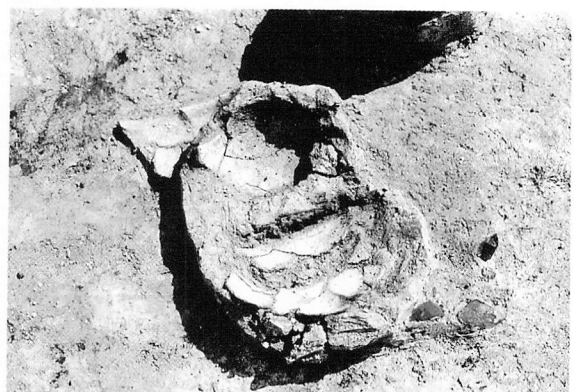
SI 1 住居全景



SI 1 住居断面

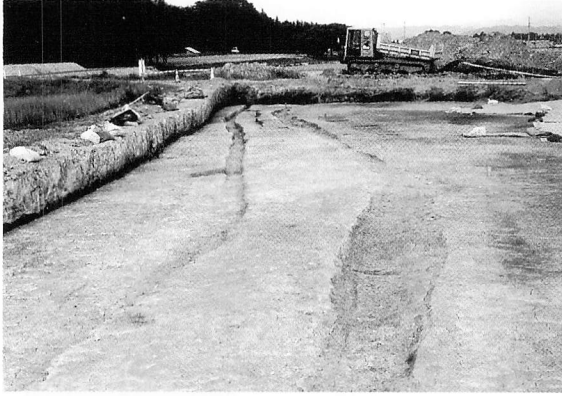


SI 1 住居カマド断面

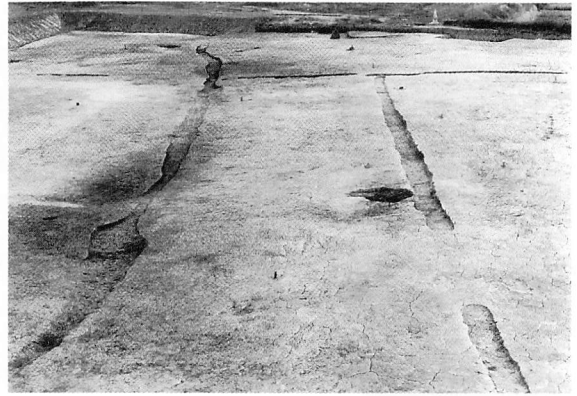


SI 1 住居土器出土状況

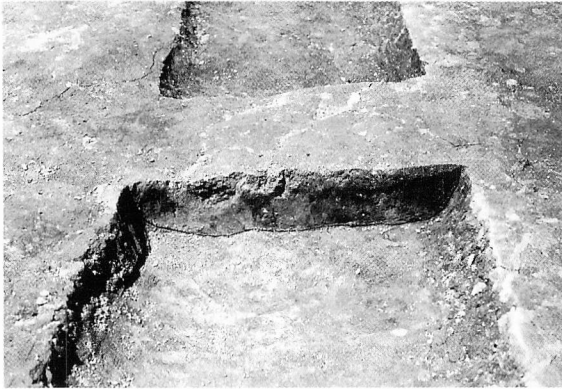
谷地遺跡写真図版 1 検出遺構 (1)



旧道側溝跡全景



S D 2 (左) ・ S D 3 (右) 溝跡全景



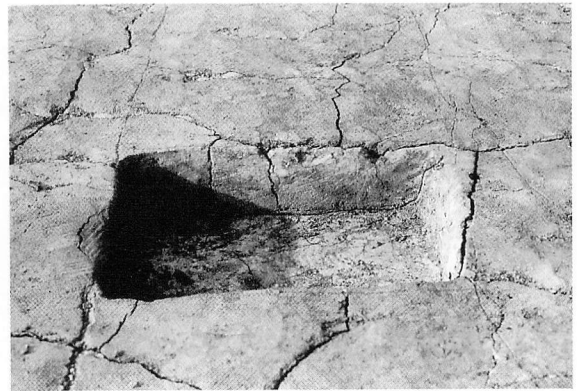
S D 2 溝跡断面



S D 5 溝跡断面



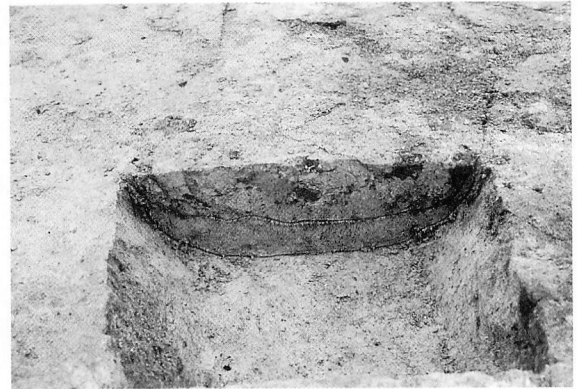
S D 3 溝跡全景



S D 3 溝跡断面

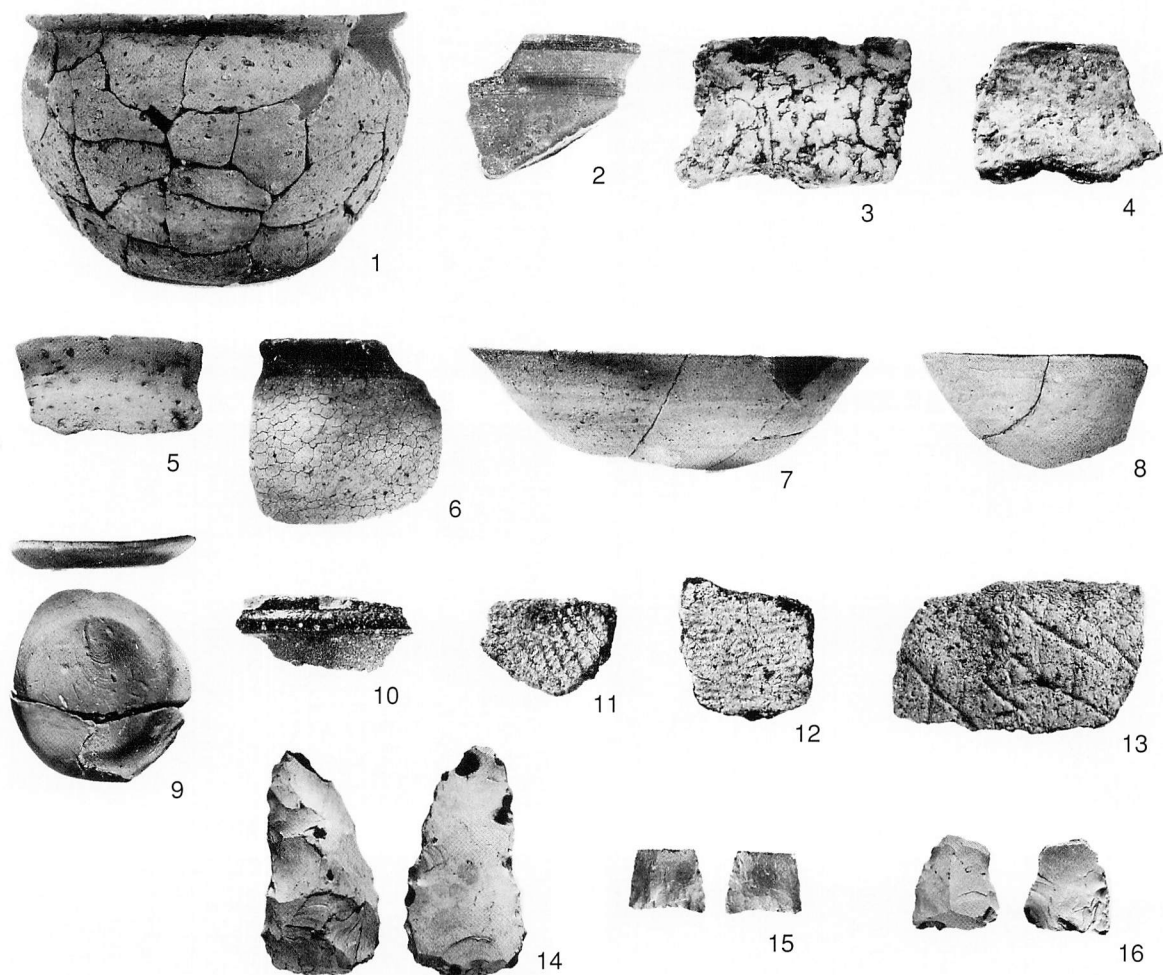


S D 6 溝跡全景



S D 6 溝跡断面

谷地遺跡写真図版2 検出遺構(2)



谷地遺跡写真図版3 出土遺物

報告書抄録

ふりがな	やちいせきはくつちようさほうこくしよ							
書名	谷地遺跡発掘調査報告書							
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財報告書							
シリーズ番号	第340集							
編著者名	朝倉雄大							
編集機関	財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター							
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡 11-185 TEL 019(638)9001							
発行年月日	西暦2000年3月24日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 〃 〃	東経 〃 〃	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
谷地遺跡	はなまきしかみきたまん 花巻市上北万 ちようめ ぼんち 丁目347番地 ほか	03205	ME25- 2230	39度 23分 39秒	141度 05分 13秒	1999 7.21~9.1	1,805㎡	「ほ場整備事業 (北万丁目地 区)」に伴う緊急 発掘調査
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
谷地遺跡	散布地	平安時代 近現代	竪穴住居跡 溝跡		土師器・須恵器 縄文土器・剥片石器			

(42) 医者屋敷遺跡

所在地 胆沢郡金ヶ崎町西根字医者屋敷 8-26ほか

委託者 岩手県水沢地方振興局土木部

事業名 都市計画道路町裏辻岡線

発掘調査期間 平成11年4月9日～5月20日

調査対象面積 1,270㎡

発掘調査面積 1,270㎡

遺跡番号・略号 NE57-0139・IS Y-99

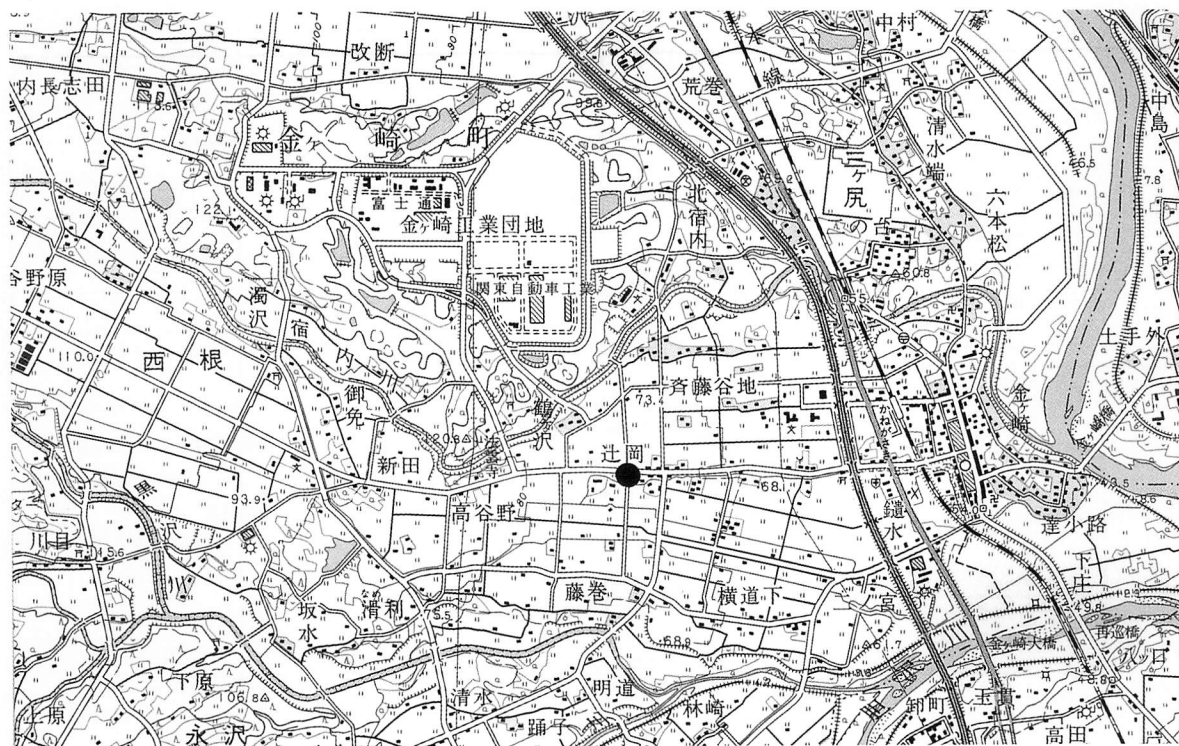
調査担当者 濱田 宏・小野寺正之

協力機関 金ヶ崎町教育委員会

1. 調査に至る経過

医者屋敷遺跡の発掘調査は、「都市計画道路荒巻中針線街路工事」の施行に伴って、その事業区域内に遺跡が存することから実施することになったものである。

本事業は、交通量の増加に伴う交通の安全と円滑な流れを確保するため平成8年度より執行しており、本年8月に開催されるインターハイ会場へのアクセス道路としての役割をも担うものである。調査は、事業者と岩手県教育委員会の協議後、(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが委託を受け実施した。



遺跡位置

1 : 50,000 北上

2. 遺跡の立地

医者屋敷遺跡は、J R東北本線金ヶ崎駅の西南西約 1.5kmに位置し、東流する城堰川北側の段丘上に立地している。調査区は、県道胆沢・金ヶ崎線辻岡交差点付近の道路拡幅部分である。金ヶ崎町内には、縦街道古墳群・高谷野原Ⅱ遺跡・上餅田遺跡・烏海柵跡・柏山館跡などの著名な遺跡が存在し、本遺跡の周辺にも、古代を中心とする集落跡が確認されている。

3. 基本層序

本遺跡の基本層序は次のとおりである。

- 第Ⅰ層 10YR7/4 にぶい黄橙色土層 道路の盛り土で層厚40～50cm。
- 第Ⅱ層 10YR3/2 黒褐色粘土層 旧水田耕作土で層厚10～15cm。
- 第Ⅲ層 10YR2/1 黒色粘土層 古代の層準で層厚15～20cm。
- 第Ⅳ層 10YR7/1 灰白色粘土層 地山で層厚は不明。

4. 調査の概要

検出された遺構は、土坑2基、旧河道1カ所である。

<土坑> L3区で2基確認された。いずれも平面形は不整で、埋土は礫混じりの暗褐色土である。出土遺物がなく詳細な時期は特定できないが、ともに近世以降と思われる。

<旧河道> M3区で、幅5m弱、深さ約1mの河道が検出された。検出状況から、東西方向のいずれかに流れていたものと思われる。時期は不明であるが、検出面等から近世以降と思われた。

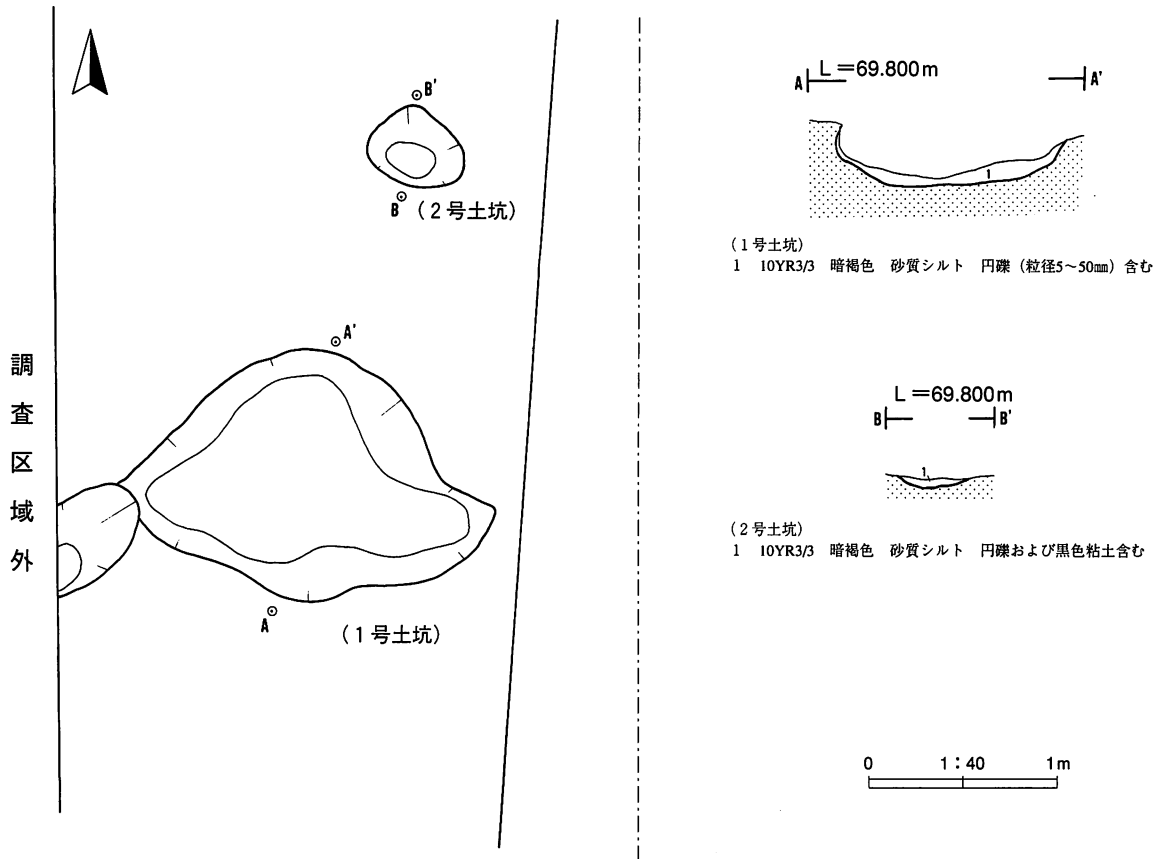
<出土遺物> 近代以前の遺物はいっさい出土していない。

今回の調査では、時期を特定できる遺構・遺物が確認されず遺跡の内容は不明であった。

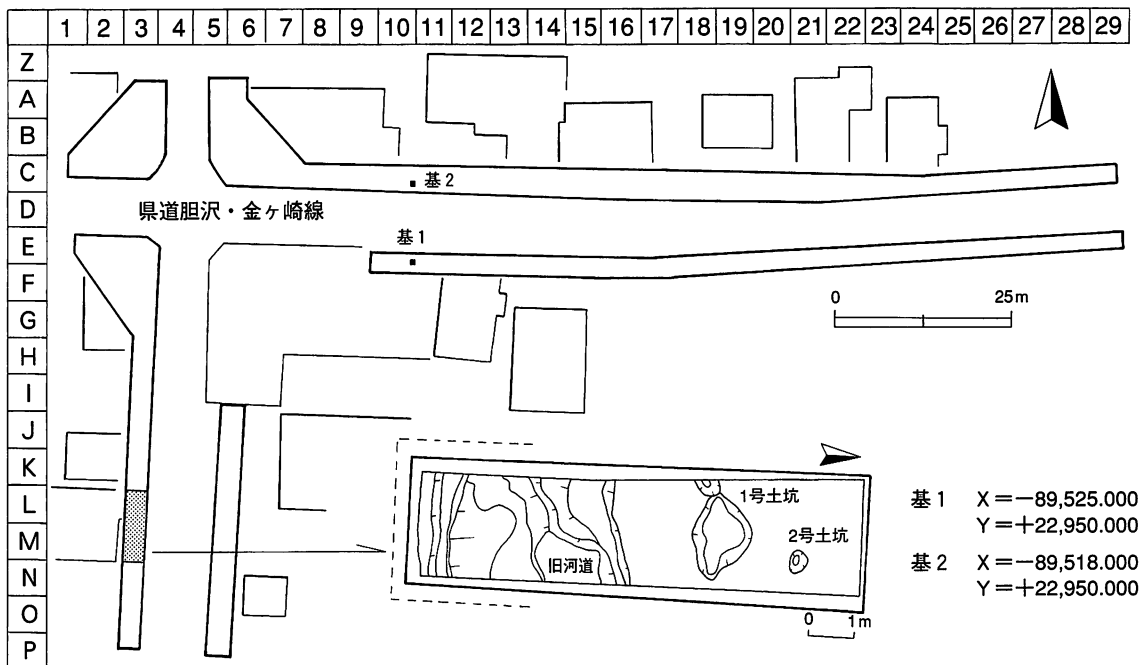
なお、医者屋敷遺跡（水沢地方振興局分）に関わる報告はこれをもって全てとする。

報告書抄録

ふりがな	いしややしきいせきはつちようさほうこくしょ							
書名	医者屋敷遺跡発掘調査報告書							
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第340集							
編著者名	濱田 宏・小野寺正之							
編集機関	(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター							
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11-185 TEL 019(638)9001							
発行年月日	西暦2000年3月24日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 〃	東経 〃	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
いしややしきいせき 医者屋敷遺跡	いわてけんいせき 岩手県胆沢郡 かねがきまちようにしほ 金ヶ崎町西根 あざいしややしき 字医者屋敷 8-26ほか	03381	NE-57 0139	39度 11分 35秒	141度 05分 56秒	1999.4.9 ～ 1999.5.20	1,270㎡	都市計画道路 建設
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
医者屋敷遺跡	散布地	不明	土坑 2基 旧河道 1カ所		現代の遺物			



検出遺構(土坑)



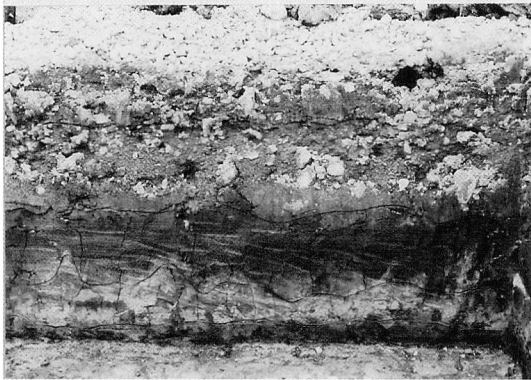
医者屋敷遺跡遺構配置図



調査区中央部（北→）



作業風景



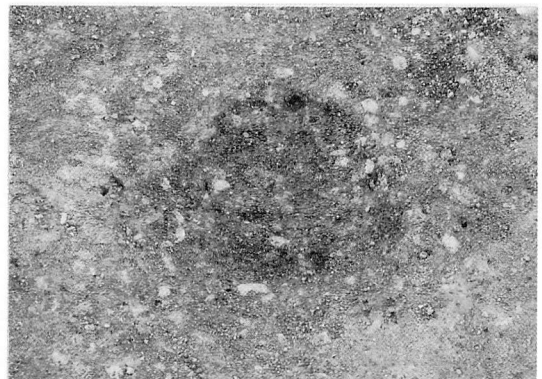
基本層序



旧河道全景



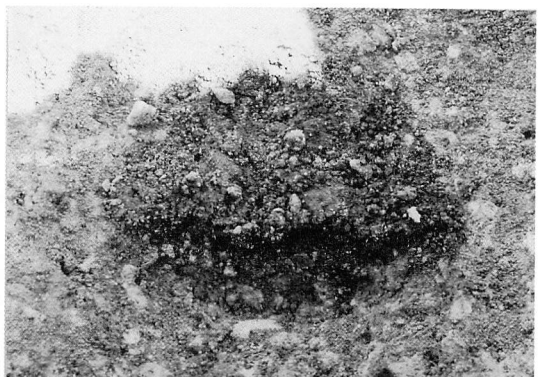
1号土坑全景



2号土坑全景



埋土

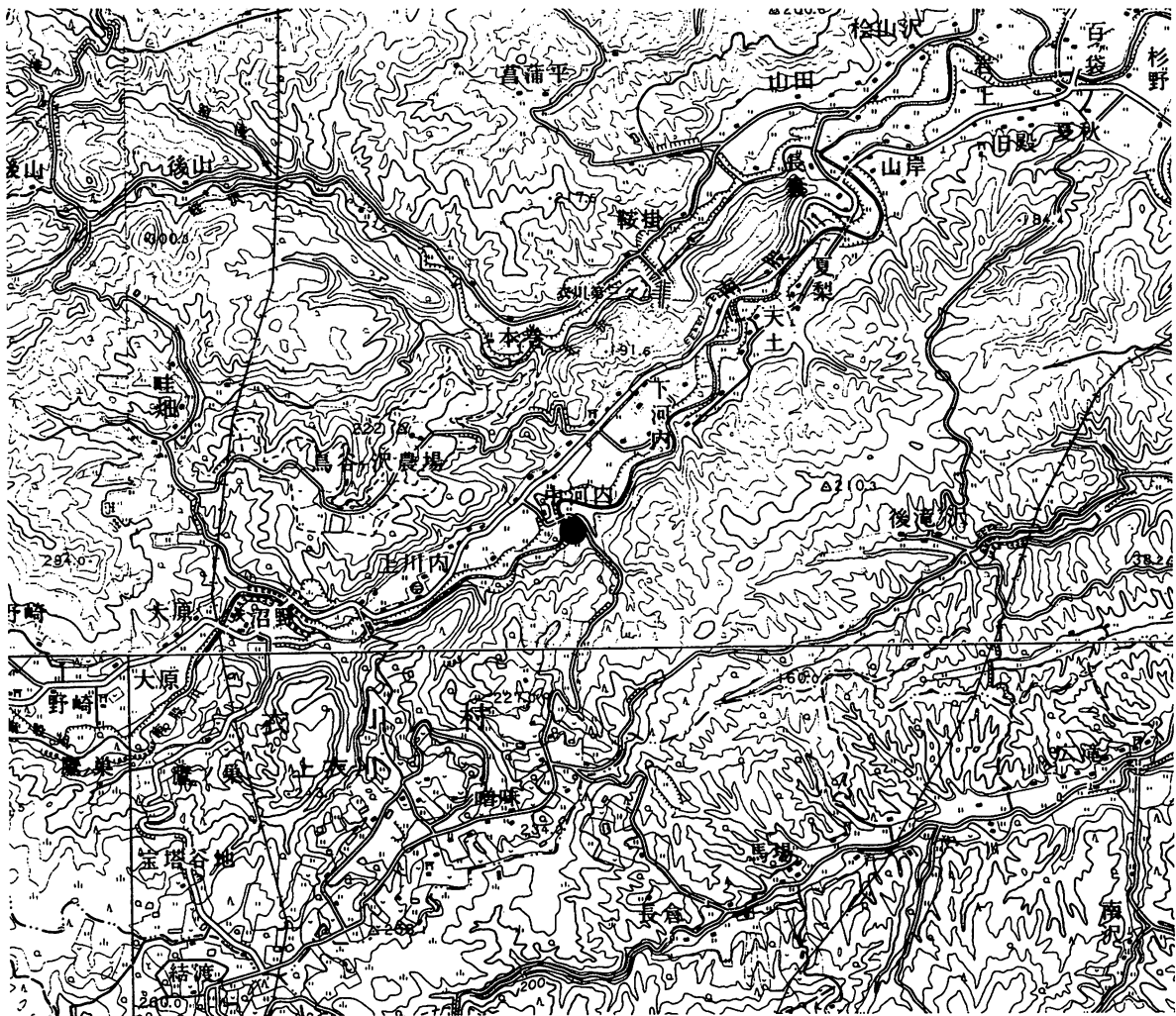


埋土

医者屋敷遺跡検出遺構

(43) 向^{むかい}遺跡

所在地 胆沢郡衣川村大字上衣川字向27-4他
委託者 水沢地方振興局水沢農村整備事務所
事業名 広域農道整備事業胆沢南部地区
発掘調査期間 平成11年9月1日～10月27日
調査対象面積 2,200m²
発掘調査面積 2,200m²
遺跡番号・略号 NE64-2121・MK-99
調査担当者 吉田 充・朝倉雄大
協力機関 衣川村教育委員会



遺跡位置

1:50,000 「焼石岳」「水沢」「栗駒山」「一関」

I. 調査に至る経過

本遺跡は「広域農道整備事業胆沢南部地区」の施行に伴って、その事業区域内に位置することから発掘調査をすることになったものである。

「広域農道整備事業胆沢南部地区」は、胆沢町及び衣川村内の農地を受理しているが、当地域の農業は水稻を基幹とし、野菜、花き、畜産を加えた複合経営が営まれ、さらに、高収益作物の生産拡大や産地化により農業経営の向上を図ろうとしている。

しかし、農畜産物の流通を行う道路網の整備が遅れており、混雑した国県道を利用している状況である。

この様な中で、農畜産物の輸送体系を確立し、農業の振興を図るために本地区に計画されたものである。

本地区の施行にかかる埋蔵文化財の取り扱いについては、水沢地方振興局胆江土地改良事業所から平成8年3月19日付け胆土地第482号「広域農道整備事業胆沢南部地区実施に伴う遺跡分布調査について（依頼）」の文章によって岩手県教育委員会に対して分布調査を依頼したのが最初である。依頼を受けた岩手県教育委員会では現地踏査等を実施し、その結果を平成8年6月5日付け教文第190号「広域農道整備事業実施に係る埋蔵文化財の分布調査について（回答）」で胆江土地改良事業所へ回答し、その際工事施行範囲内において向遺跡の存在が付記された。

回答を受けた水沢農村整備事務所では、岩手県教育委員会と協議し平成10年3月24日に同遺跡の試掘調査を実施した結果、遺跡等が観察された埋蔵文化財の保護に係る手続きが必要と判断された。

以上の結果に基づき水沢農村整備事務所は平成11年8月4日付けで水沢地方振興局長と（財）岩手県文化振興事業団理事長との間で契約を締結し、2,200㎡の発掘調査を実施した。

II. 遺跡の立地と環境

1. 遺跡の立地と地形

本遺跡は衣川村役場から南西に約5kmに位置し、北東に流れる南股川右岸に立地する。標高は約100～110m、南股川との比高差は約20mである。現況は水田、畑地および原野である。

南股川の河床には基盤である新第三系中新統下黒沢層青灰色凝灰質砂岩が露出し、本遺跡はこの基盤にのる段丘構成物と崖錐堆積物上にある。段丘面は北隣する胆沢扇状地で区分された水沢高位段丘面に相当し、南股川上流の下立沢まで続く。本段丘面は下川内と天土の間地点で下流方が下がるように緩く屈曲し、北方の北沢でもそのリニアメントが見られる。

2. 基本土層

調査区内は昭和20年代やそれ以前には場整備等で地形が改変されているため、自然堆積を示すのは畑地のごく一部だけである。1区～9区に分けた地域全体をみると、地山上に旧表土、改良土（開拓やほ場整備等で攪乱を受けた層）、耕作土の順に堆積している。この3層は、地山の性質や湧水の有無により少しずつ層相を異にする。従って、基本土層は遺構や遺物の出土する範囲を中心に考え、①崖錐堆積物を地山とする畑地と（3区）②段丘礫層を地山とする畑地・原野（9区）の2つの基本土層を考え説明する（第1図）。なお、水田部分は明らかにほ場整備の痕跡を残す層を介在させ上記2タイプとは異なるが、現代の土留め柵を検出した（4区）だけで遺構・遺物を検出していないので省略する。

< 3区 >	I層	7.5YR3/1	黒褐色砂質シルト	ややしまる	Ⅲ b層	5YR3/1	黒褐色砂質シルト	ややしまる
	Ⅱ層	7.5YR2/1	黒色砂質粘土	しまり悪い				遺物包含層
	Ⅲ a層	N1.5/	黒色砂質シルト	しまり悪い	Ⅳ層	7.5YR4/4	褐色砂質礫	遺構検出面

<p>第1図</p>	<9区>	I層	10YR2/3	黒褐色粘土質シルト	ややしまる	
		II層	10YR2/3	黒褐色粘土質シルトと7.5YR5/6明褐色粘土質シルト(30%)との混合土	ややしまる	
		III層	7.5YR1.7/1	黒色粘土質シルト	ややしまる	遺物包含層
		IV層	10YR3/3	暗褐色礫混じり砂質粘土		遺構検出面

Ⅲ. 検出された遺構と遺物

検出された遺構は、土坑9基、柱穴状土坑3基である。

1. 遺構（遺物：第5図1～5、写真図版4の1～5）

1号土坑（第3図） 9区に位置する。平面形は長楕円形状を呈し、規模は166×66cm、深さは35cmである。遺物は出土していない。

2号土坑（第3図） 3区に位置する。平面形は長楕円形を呈し、規模は210×85cm、深さは50cmである。斜面上方に深くなる。遺物は出土していない。

3号土坑（第3図） 3区に位置する。平面形は不正円形状を呈し、規模は140×105cm、深さは37cmである。粗製の土器片1が出土している。

4号土坑（第3図） 3区に位置する。平面形は不正円形を呈し、規模は175×125cm、深さは38cmである。無紋の土器片2が出土している。

5号土坑（第3図） 3区に位置する。平面形は不正円形を呈し、規模は75×65cm、深さは24cmである。遺物は出土していない。

6号土坑（第3図） 3区に位置する。平面形は楕円形状を呈し、規模は150×100cm、深さは26cmである。遺物は出土していない。

7号土坑（第4図） 3区に位置する。8号土坑に隣接し、開口部はつながっている。平面形は長楕円形状を呈し、規模は155×90cm、深さは34cmである。粗製の土器片3と撚糸文?の土器片4が出土している。

8号土坑（第4図） 3区に位置する。7号土坑に隣接し、開口部はつながっている。平面形は楕円形状を呈し、規模は135×95cm、深さは40cmである。遺物は出土していない。

9号土坑（第4図） 9区に位置する。平面形は円形を呈し、規模は140×130cm、深さは18cmである。遺物は出土していない。

1号柱穴状土坑（第4図） 8区に位置する。平面形は楕円形状を呈し、規模は65×40cm、深さは25cmである。遺物は出土していない。

2号柱穴状土坑（第4図） 3区に位置する。平面形は不正円形を呈し、規模は40×37cm、深さは17cmである。遺物は出土していない。

3号柱穴状土坑（第4図） 3区に位置する。平面形は楕円形状を呈し、規模は65×45cm、深さは30cmである。土器片5は口縁部で、口唇に1条の沈線、外面に2本の隆帯が施されている。縄文時代晩期と考えられる。

2. 出土遺物

土器片約250点、石器約50点出土した。これらは旧地形の残りが良い3区と、段丘の縁に位置する9区からほとんど出土している。遺物は焼成の悪いものと比較的良好のものがあり、後者は薄手でやや赤みを帯び、縄目も小さい。粗製の土器片が多く、口縁部片など特徴のある土器から考えると、縄文時代晩期（大洞C₂～A式）の土器片が多く（11、13、12、21,5、15、7）、弥生時代後期に属するもの（20）も少量出土している。

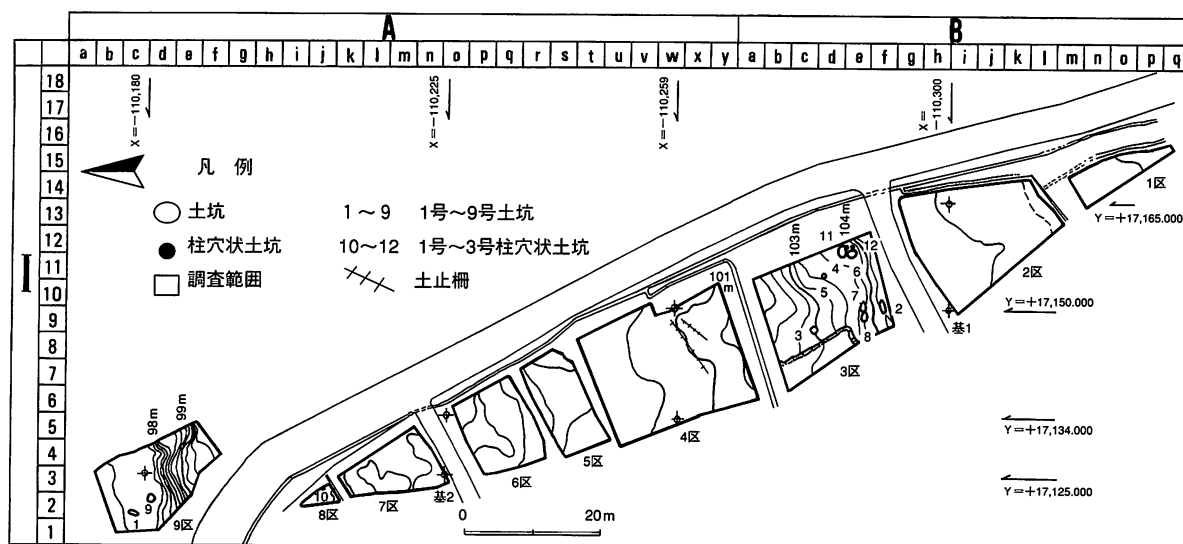
IV. まとめ

本遺跡は崖錐地形と段丘地形が複合した北向き斜面に立地している。昭和20年代までの土地改良で約8割が改変され、保存状態は良いほうではない。遺構は崖錐堆積物や段丘礫層上に掘りこまれ、不正な形状を示すものが多く、円形状ないし楕円形状の平面形をなす。遺物は頸部から口縁にかけて無文の土器片や充填縄文を持つ土器片の他に、薄手で小さな縄目をもつ撚糸文の土器片が1片見られ、縄文時代晩期を中心に弥生時代まで営まれていた集落跡の存在をうかがわせる。本調査結果は今後の歴史解明の貴重な資料を提供すると思われる。

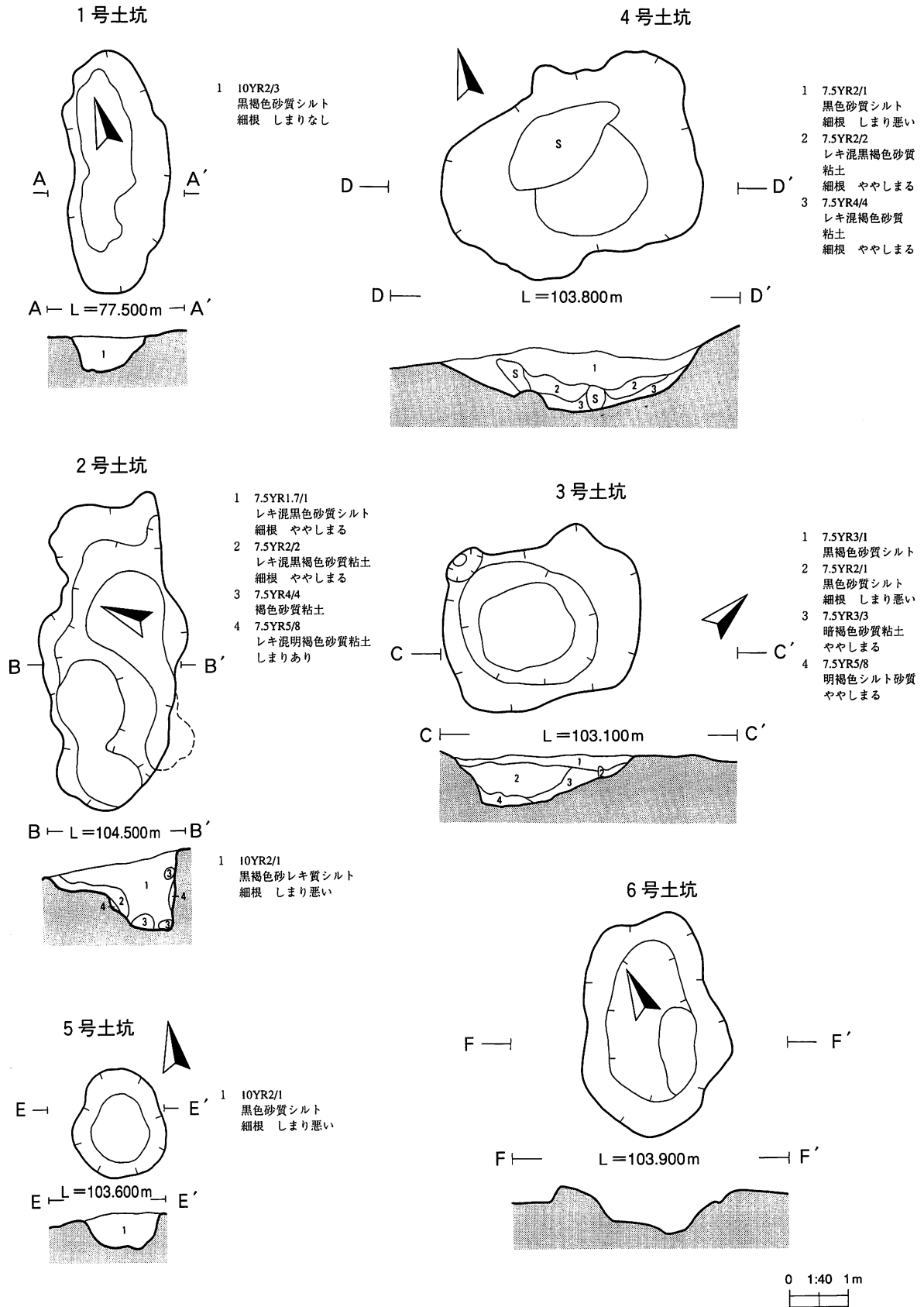
なお、向遺跡に関する報告は、これをもって全てとする。

報告書抄録

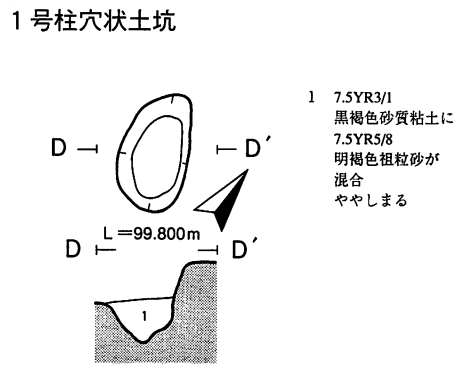
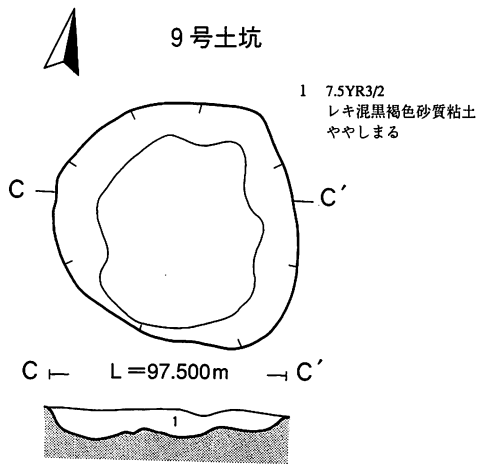
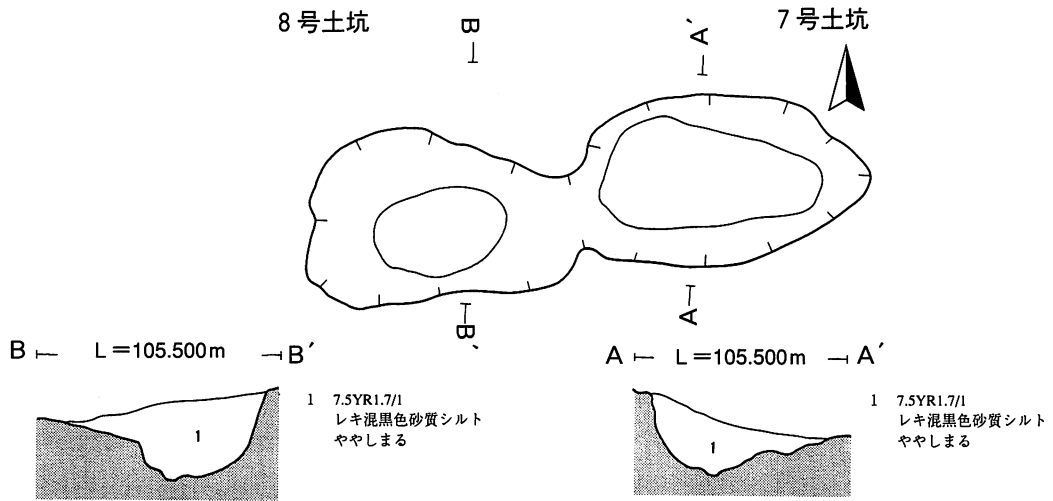
ふりがな	むかいせきはつちようさほうこくしょ							
書名	向遺跡発掘調査報告書							
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財報告書							
シリーズ番号	第340集							
編著者名	吉田 充							
編集機関	財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター							
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡 11-185 TEL 019(638)9001							
発行年月日	西暦2000年3月24日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 〃 〃	東経 〃 〃	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
向遺跡	岩手県胆沢郡 衣川村上衣川 字向	03384	NE64- 2121	39度 0分 22秒	141度 1分 54秒	1999.9.1 ~ 10.27	2,200㎡	広域農道整備 に伴う緊急発掘
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
向遺跡	散布地	縄文時代晩期 弥生時代	土坑 9基 柱穴状土坑 3基		縄文土器片 22点 石器 10点			



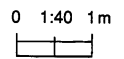
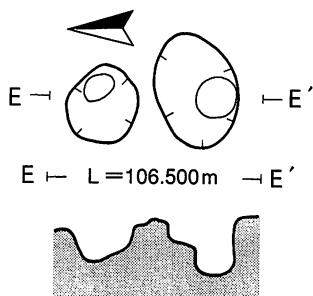
第2図 向遺跡遺構配置図



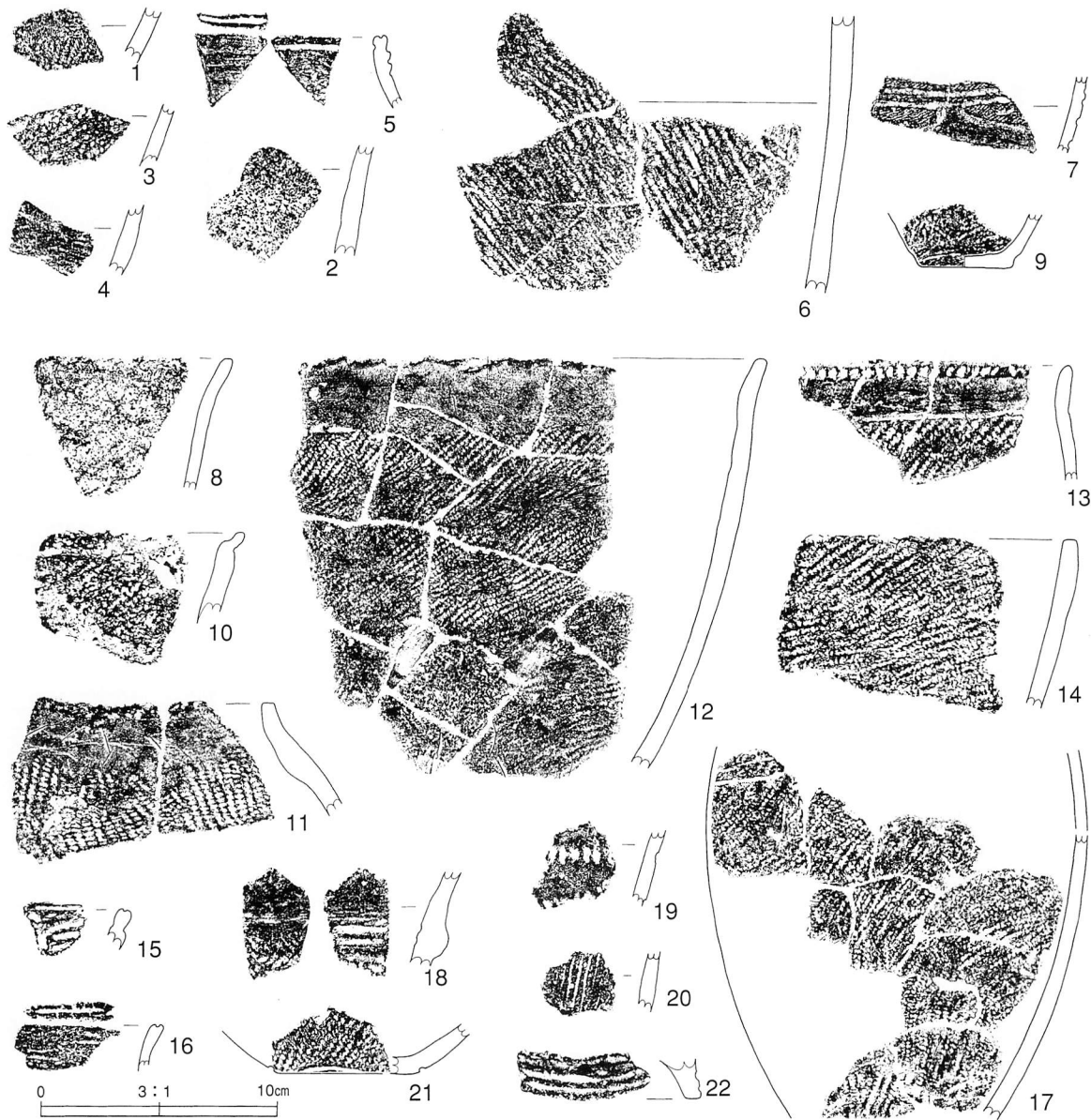
第3図 向遺跡1～6号土坑



2号3号柱穴状土坑

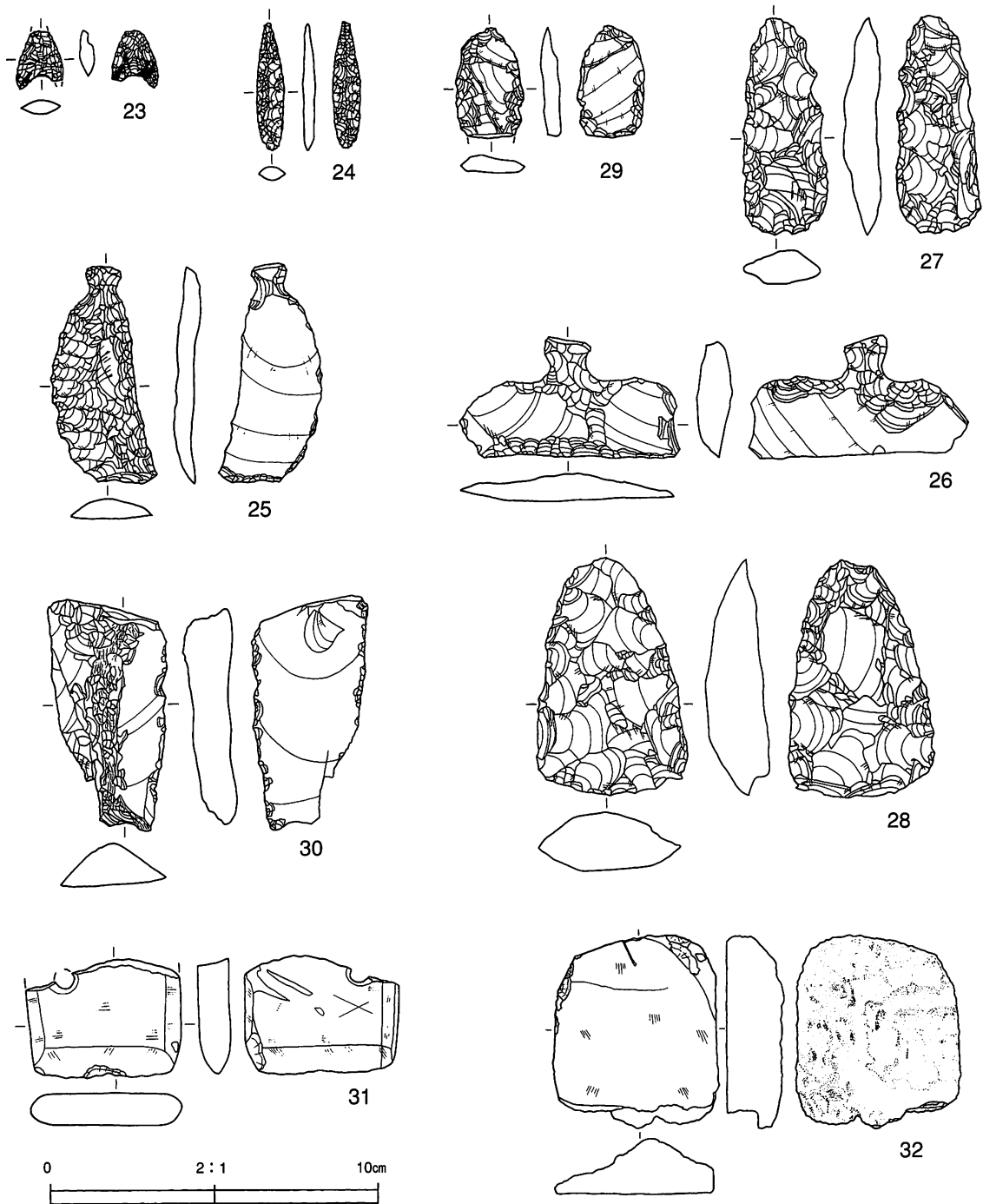


第4図 向遺跡7・8号土坑、1～3号柱穴状土坑



番号	出土地点	層位	器種	部位	原体・方向	特徴	器厚(mm)	時期
1	3号土坑	埋土	深鉢	胴部	LR・ヨコ	内面:ナデ 胎土:砂質粘土 焼成:悪い	7	縄文時代晩期
2	4号土坑	埋土	深鉢	胴部		外面:無紋 内面:ナデ 胎土:砂質粘土 粗粒の石英粒多い	7	縄文時代晩期
3	7号土坑	埋土	深鉢	胴部	LR・ヨコ	外面:風化が進み、はっきりしない 内面:ミガキ 胎土:粗粒砂質粘土 焼成:悪い	5	縄文時代晩期
4	7号土坑	埋土	深鉢	胴部	R・ヨコ	外面:燃系紋? 内面:炭化物付着 胎土:細砂質粘土 焼成:良い	7	縄文時代晩期
5	3号柱穴状土坑	埋土	壺	口縁部		外面:口唇に1条の沈線、頸部に2本の隆帯 内面:1条の沈線、ミガキ 胎土:細砂質粘土 焼成:良い	5	縄文時代晩期
6	A I c3	II層最下部	深鉢	胴部	P・ヨコ	内面:ミガキ 胎土:粗砂質粘土 焼成:やや良い	4	縄文時代晩期
7	A I c3	II層最下部	深鉢	胴上部		外面:1条の沈線下に沈線で区画された隆帯に充填縄文を施す 内面:ナデ 炭化物付着 胎土:粘土 焼成:やや良好	8	縄文時代晩期
8	A I d5	II層	深鉢	口縁部		外面:無紋 内面:ナデ? 胎土:砂質粘土 風化がすすんでいても良い	5	縄文時代晩期
9	A I d2	II層最上部	深鉢	胴下半~底部	LR・ヨコ	外面:胴部と底部の境目は沈線で区切られ、段になっている。内面:ナデ 胎土:粗砂質粘土 焼成:悪い	5	縄文時代晩期
10	A I c11	粗掘	深鉢	口縁部	LR・ヨコ	頸部の内外面に沈線が走り、頸部が折れ外反する 内面:ナデ 胎土:砂質粘土 焼成:悪い	8	縄文時代晩期
11	A I d8	II層最上部	深鉢	口~胴	LR・タテ	外面:口唇に刻み 頸部は無紋帯 胴部上半は膨らむ 口縁部は外反し立ちあがる 内面:ナデ 焼成:良い	7	縄文時代晩期
12	B I c11	II層最上部	深鉢	口縁部	LR・ヨコ	外面:小波状口縁 頸部無紋帯、径4mmの未完通穴 胎土:砂質粘土 焼成:悪い	7	縄文時代晩期
13	B I d11	II層最上部	深鉢	口縁部	LR・ヨコ	外面:口唇に刻み 頸部は無紋帯 胴部上半は膨らむ 口縁部は外反し立ちあがる 内面:ナデ 焼成:悪い	6	縄文時代晩期
14	B I b11	II層最上部	深鉢	口縁部	LR・ヨコ	外面:上端でやや内傾する 内面:ナデ 胎土:砂質粘土 焼成:悪い	8	縄文時代晩期
15	B I d11	II層最上部	深鉢	口縁部		外面:口縁部小突起? 口唇に沈線 変形工字文 内面:ミガキ 胎土:細砂質粘土 焼成:良い	7	縄文時代晩期
16	B I b11	II層最上部	深鉢	口縁部		外面:口唇に沈線 内面:1条の沈線 ナデ 胎土:砂質粘土 焼成:悪い	5	縄文時代晩期
17	B I c11	II層最上部	深鉢	胴部	LR・ヨコ	内面:ナデ 胎土:砂質粘土 焼成:悪い	6	縄文時代晩期
18	B I e11	II層最上部	深鉢	口縁部	LR・ヨコ	外面:頸部は無紋で胴上半の隆帯とは隆帯でせきられる 内面:隆帯付近は2条の平行沈線がひかれる	7	縄文時代晩期
19	B I b11	II層最上部	深鉢	胴部上半		外面:幅数mmの長楕円形状の刺突が5mm間隔に1列並び 内面:ナデ 胎土:粗砂質粘土 焼成:悪い	6	縄文時代晩期
20	B I c10	深鉢	胴部		R・タテ	外面:燃系紋 内面:損傷あり 胎土:砂質粘土 焼成:悪い	6	弥生時代
21	B I d8	II層最上部	深鉢	胴下半~底部	LR・ヨコ	外面:胴部と底部の境目に1条の沈線 内面:ナデ 胎土:粗砂質粘土 焼成:良い	6	縄文時代晩期
22	B I c10	II層最上部	台付鉢	脚部		外面:2条の沈線が走る 内面:ミガキ 胎土:砂質粘土	8	縄文時代晩期

第5図 向遺跡出土遺物：土器



No.	出土地点	層位	器種	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重さ(g)	石質・産地	備考
23	B I b 10-2	II	石鏃	50	39	4	0.8	頁岩・奥羽山脈	先端部、基部欠損
24	B I c 11-4	粗	尖頭器	39	9	4	1.2	頁岩・北上山地	先端部欠損
25	A I e 4-4	II	石匙	67	32	9	12.9	頁岩・奥羽山脈	縦長
26	B I d 10-3	II	石匙	37	67	11	18.5	頁岩・北上山地	横長
27	A I b 2-3	II	石籠	66	26	11	17.1	頁岩・奥羽山脈	
28	A I c 3-1	II	石籠	72	45	20	56.0	頁岩・奥羽山脈	
29	A I c 3-4	II	不定形	72	36	16	35.4	頁岩・奥羽山脈	使用痕?
30	B I d 11-3	II	不定形	34	21	6	4.9	頁岩・奥羽山脈	2縁片調整、先端部欠損
31	A I b 3-2	II	石製品	36	47	10	25.2	凝灰岩・奥羽山脈	石斧の転用品
32	3区		砥石	88	74	25	218.4	石英安山岩・奥羽山脈	土捨て場採取

第6図 向遺跡出土遺物：土器



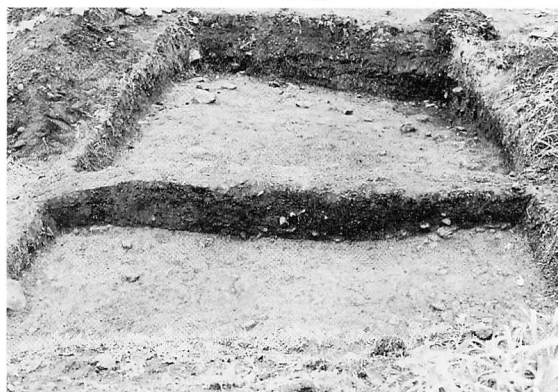
3区全景



4区全景



3区土層断面



9区土層断面



1号土坑

平面



断面



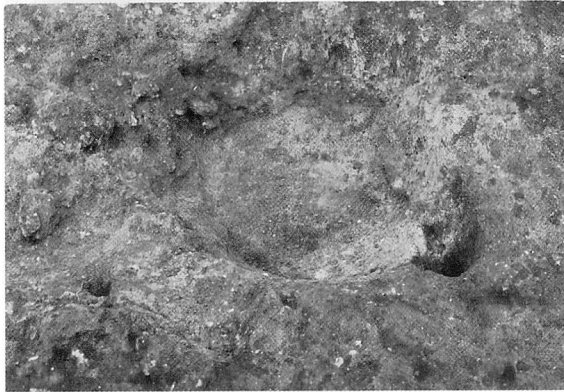
2号土坑

平面



断面

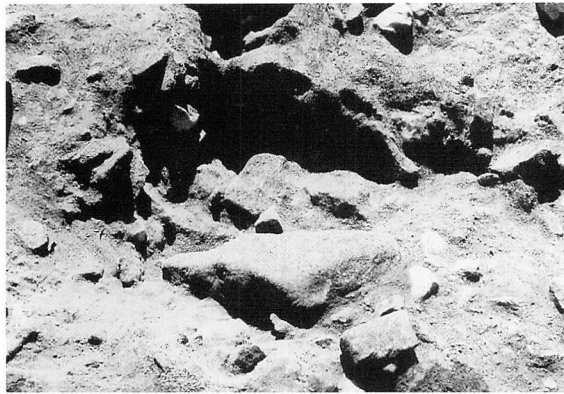
向遺跡写真図版1 3・4区全景、3区・9区土層断面、1～2号土坑



3号土坑 平面



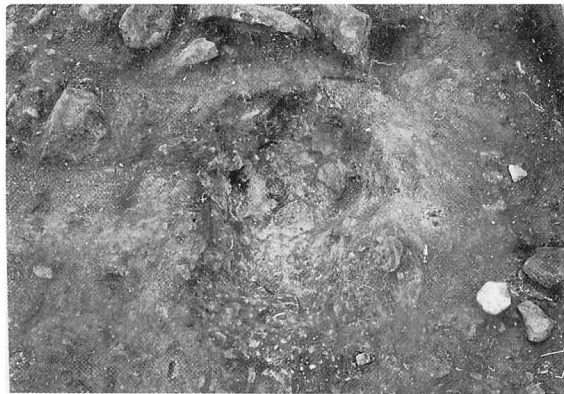
断面



4号土坑 平面



断面



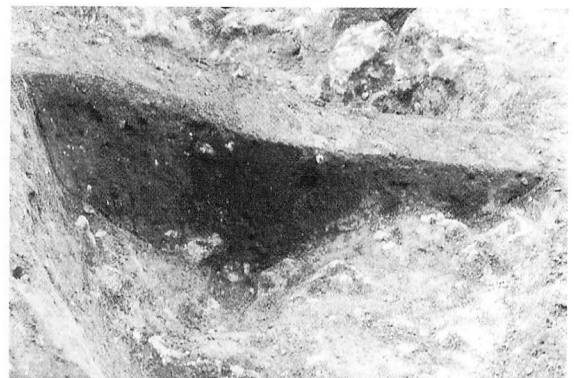
5号土坑 平面



断面



7号土坑 平面



断面

向遺跡写真図版2 3~5号、7号土坑



8号土坑 平面



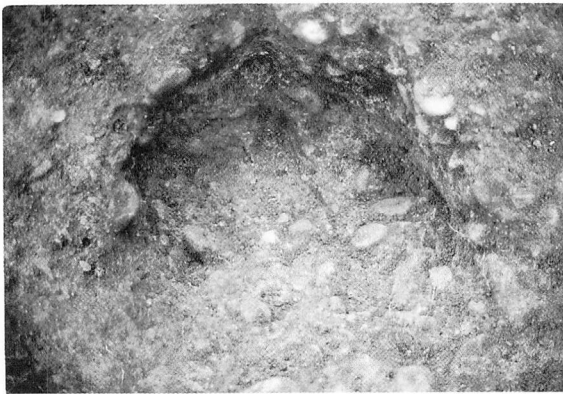
断面



9号土坑 平面



断面



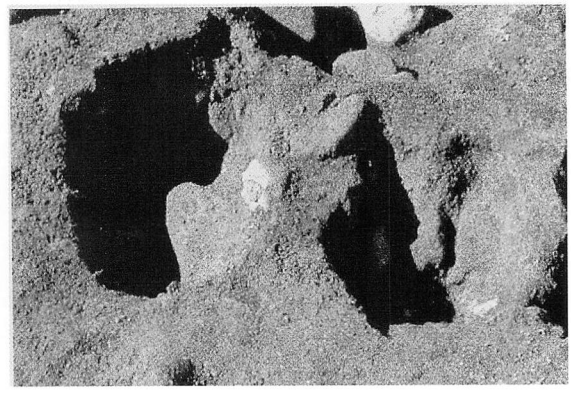
1号柱穴状土坑 平面



断面

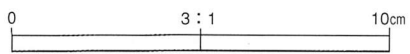
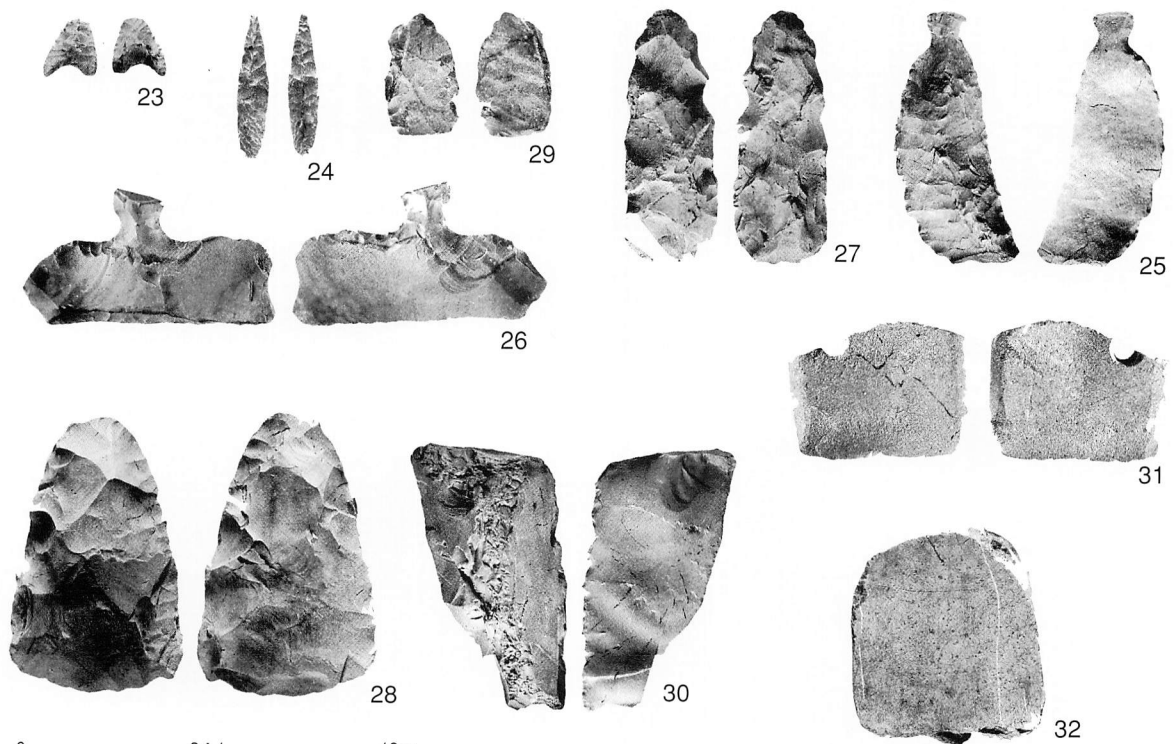
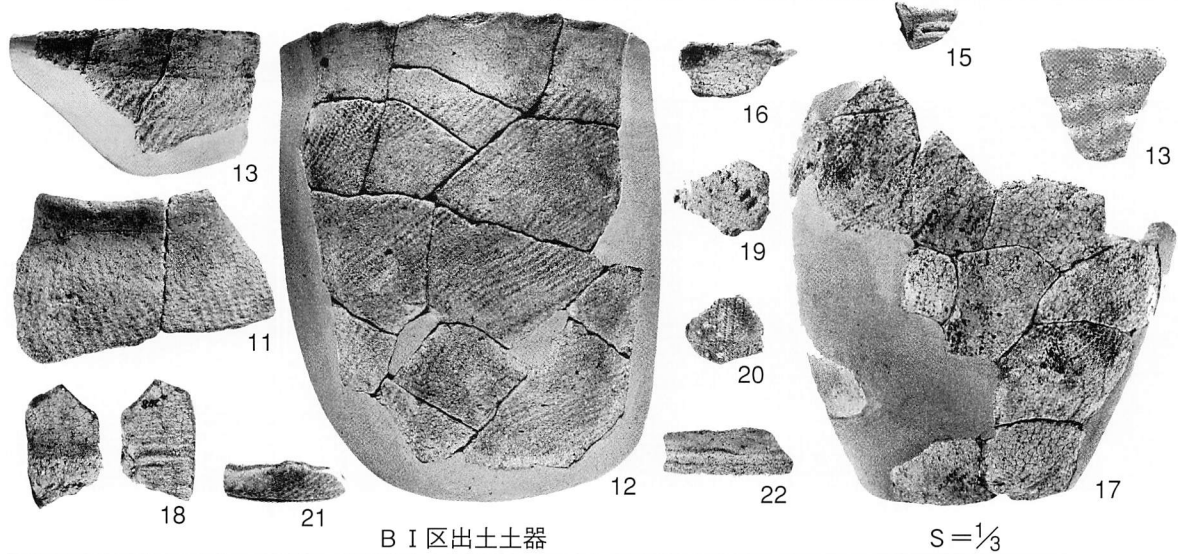
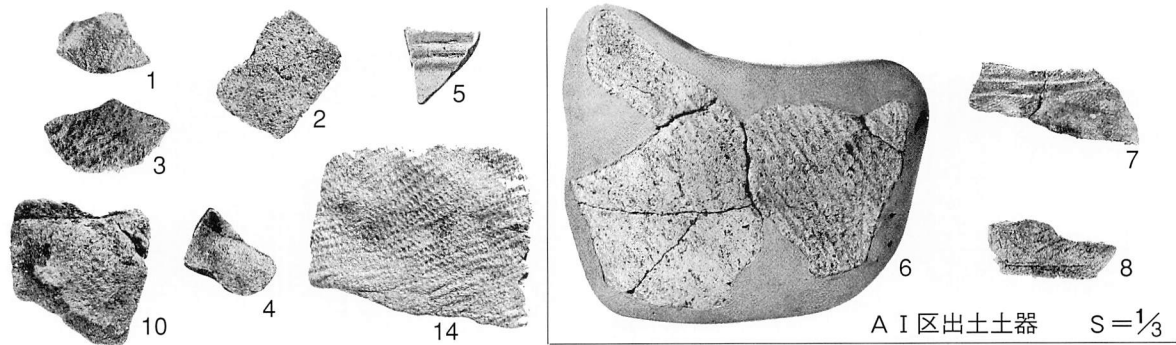


6号土坑 平面



2、3号柱穴状土坑 平面

向遺跡写真図版3 6・8～9号土坑、1～3号柱穴状土坑

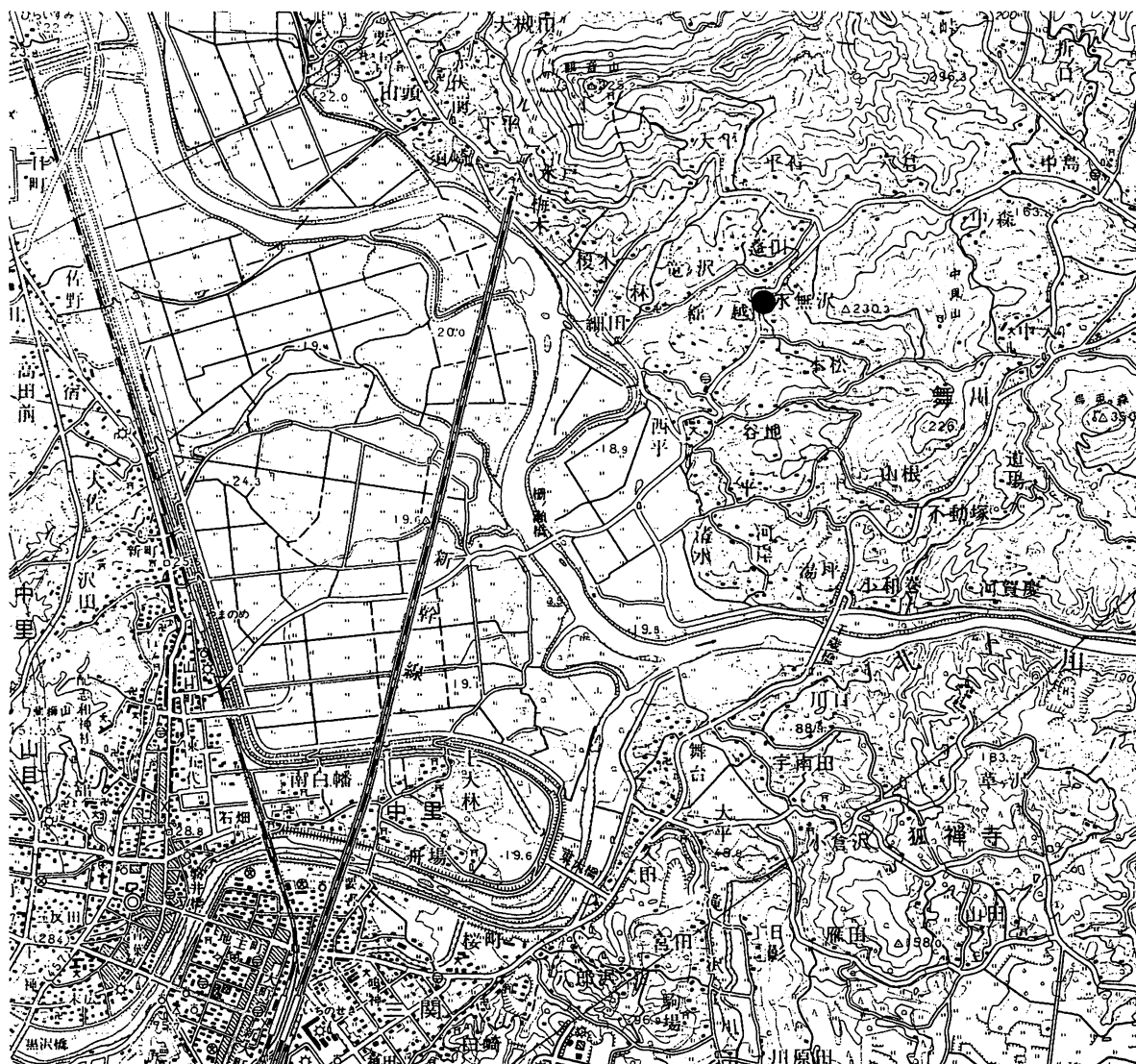


石器 S=1/2 (32は1/3)

向遺跡写真図版 4 出土遺物

(44) 羽場城遺跡

所在地 一関市舞川字水無沢41-3ほか
委託者 岩手県一関地方振興局土木部
事業名 一般県道中里・西平線
発掘調査期間 平成11年6月7日～9月1日
調査対象面積 2,870 m²
発掘調査面積 2,870 m²
遺跡番号・略号 NE87-0168・HB J-99
調査担当者 半澤武彦・菅原靖男
協力機関 一関市教育委員会



遺跡位置

1:50,000 一関

1. 調査に至る経過

羽場城遺跡は、一般県道中里・西平線の改良事業の実施に伴って、その事業区間に存することから、発掘調査を実施することとなったものである。一般県道中里・西平線は、一関市街地と狭山地区を結ぶ生活路線であるが、勾配やカーブがきついため視距がとれず、走行の安全性が確保できない状況にある。このことから、道路を拡幅し急カーブをなくすことにより、交通の安全を確保するものである。

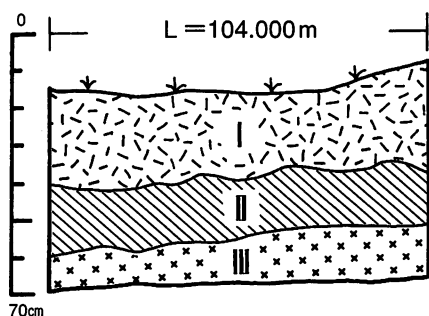
当該計画予定箇所は埋蔵文化財包蔵地であり、岩手県教育委員会と調査について協議を行い、発掘調査を財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターで実施することとした。

2. 遺跡の立地

J R 東北本線一関駅から北東方向へ約 6 km の、北上川が形成した河岸段丘の段丘面（標高 102～105 m）に当該遺跡は位置している。当該遺跡の一带を含め、周辺部の同様な地形は随所で開析が進んでおり、段丘面の平坦部は少ない。調査開始前までの状況は雑木林で、調査区は舟の舳先のように突出した形となっている。

地形は中央から南側は平坦であるが、北東方向へ向かうに従って谷状に傾斜し、降雨等により容易に土壌が流出する乏水地を形成している。

3. 基本層序



<基本層序柱状図>

I層：10YR4/3 鈍い黄褐色・粘性あり・締まり疎・シルト

（表面に極薄く腐食土が分布し草木の根が多い。火山性のガラスを10㎡当たり20粒程度含んでいる。）

II層：10YR3/4 暗褐色・粘性あり・締まりやや密・シルト

（北東斜面の一部に分布し遺物包含層を形成する。厚い部分でも30cm程度で、層位による新旧関係は見られない）

III層：10YR5/6 黄褐色・粘性ややあり・締まり密・砂質シルト

（径2～5cmの角張った小礫と金雲母を含んでおり、地山層を形成している。）

4. 調査の概要

本調査開始に先立って、調査区全体に満遍なく2×4m程度の試掘を計8箇所に行い、各地点の遺物出土状況や土壌の層序を勘案しながら、表土をバックホーによって除去し検出作業を進めた。その結果、調査区中央から南側を中心に、住居状遺構1棟、陥し穴2基、土坑3基、柱穴状土坑7基が検出された。

<住居状遺構：1棟> 調査区中央の東側で検出され、規模は長軸4.2m・短軸3.4mで、平面形は円に近い楕円を呈し、断面形は中央が平坦で壁に向かうにつれて緩やかに立ち上がる形状である。柱穴状の土坑がほぼ中央に1基と、住居状遺構を囲むように西側半分では8基検出されている。径は小さいもので15cm（7基）大きいものでも30cm（2基）で、深さは8～17cmと浅いものが多く、柱穴状土坑からの遺物の出土は見られなかった。その一方で、対称的な位置となる東半分では同様な柱穴状土坑が検出されず、これは東側が若干高くなった斜面のため、風化作用を受け消失したものと思われる。遺構全体からは、奈良時代のものと考えられる磨滅した土師器の甕の一部が5点出土してはいるものの遺物量は些少であり、遺構の時代時期は不明である。

<陥し穴：2基> 調査区中央で、東西方向にほぼ並列して2基が検出された。東側の陥し穴（陥し穴1）は、開口部が楕円形に広がり、次第に狭まりながら途中から垂直に落ち込む、陥し穴特有の形状を呈している。一方の西側に位置する陥し穴（陥し穴2）は、開口部は前者とほぼ同様な形状であるが、底部までの深さは約40cmと浅いため、おそらく風化作用を受けたものと考えられる。遺物は磨滅した縄文土器が両者合わせて20数点出土している。

<土坑：3基> 住居状遺構と対称的な位置の西側に、長軸 5.2m・短軸 2.4mの楕円形をした規模の大きな2号土坑（RD2）が検出された。形状は住居状遺構と似ているが、柱穴状の土坑等は検出されず土坑として登録した。断面形は浅い皿状を呈しており、遺物は磨滅した縄文土器が数点出土した程度である。

他の2基の土坑は規模が小さく、磨滅した縄文土器が僅かに出土したのみに過ぎない。

<柱穴状土坑：7基> 全て規模は小さく浅いもので対応関係は見られず、遺物も出土していない。

5. 出土遺物

<概要> 住居状遺構や土坑等の遺構内から出土した遺物は、磨滅した縄文土器数点と、住居状遺構から奈良時代のものと推定される磨滅した土師器片5点、陥し穴1から弥生土器片が1点、陥し穴1・2からの石鏃2点のみである。当該遺跡からの出土遺物は、遺構外の遺物包含層（Ⅱ層）からのものがそのほとんどを占めており、土器・土製品は磨滅していたものが多かったものの石器や石製品は、石鏃を始めとして石匙・石筥・磨石・凹石・石錘等、比較的原形を保ったままで出土している。

<土器・土製品の特徴について> 縄文時代前期（大木2～3式）のものが半数程度を占め、中期・晩期が約2割、晩期から弥生時代初頭にかけてのものが約3割となっている。ほとんどのものは胎土が脆く磨滅しており、接合可能なものは、ごく僅かである。

出土した土器について、縄文時代前期のものは地文にS字状捺糸文が施され、口縁部では粘土紐による貼り付けと棒状工具による刻みが施文されているものが多い。No.1・3を始めとして粘土紐が口縁を巡るのが大半の中で、No.2のように、半円状の粘土紐による貼り付けと、その両脇に斜め方向の沈線を持ち、口唇部には等間隔の刺突が確認できるものもある。その他に、No.4は粘土紐の下部に棒状工具を使用した刺突を持ち、No.5・6では、竹管・半截竹管による刺突表現が施されている。

縄文時代前期～中期（大木6～7式）の特徴が見られるNo.7や、縄文時代中期（大木8b式）のNo.8のような土器の出土は僅かである。

縄文時代晩期の土器は大洞A'式の形態が多く、変形工字文が施された浅鉢などがあり、弥生土器は、弥生時代初頭の波状口縁を持った甕や、平行沈線文の鉢などが出土している。

土製品は、No.14（下半身部分が出土・腰の周りを巡る刺突・背面に楕円状の沈線がある）、No.15（右腕肩部分が出土・肩を巡る刺突列がある）で、縄文時代晩期末～弥生時代初期の中実土偶と推定される。

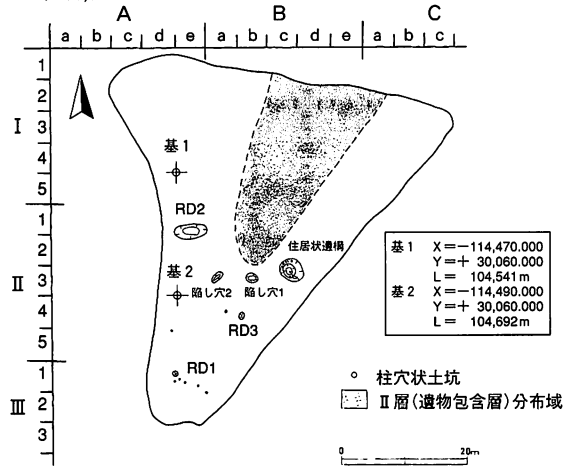
6. まとめ

縄文時代の集落跡を予測していたが、高台の尾根部分に位置する調査区中央の平坦部分に、僅かな遺構が検出されたのみであった。出土遺物は、遺物包含層を形成していた北東斜面に分布するⅡ層部分からのものが主体であるが、Ⅱ層の遺物分布状況には新旧関係を示す層位的な差異は認められなかった。

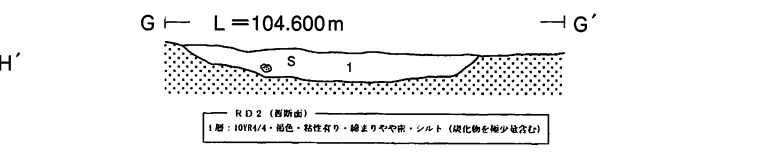
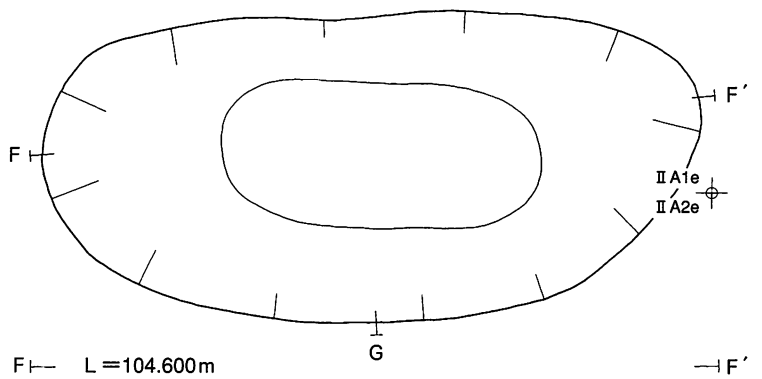
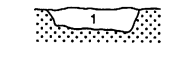
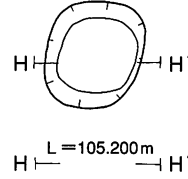
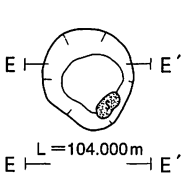
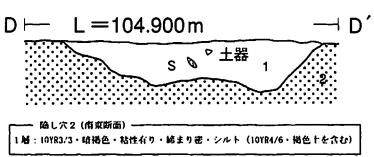
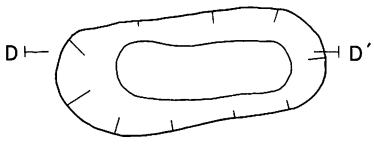
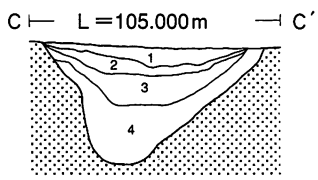
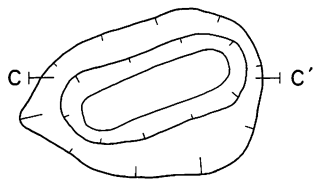
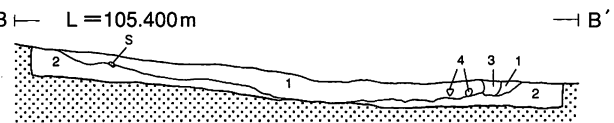
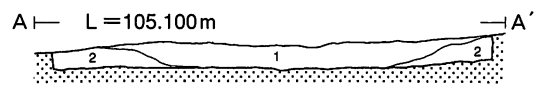
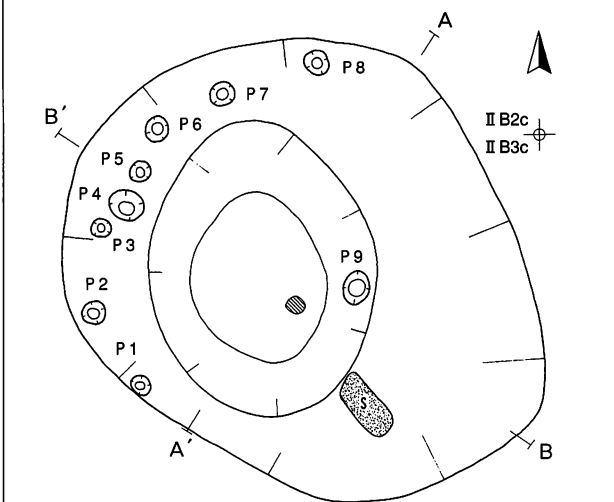
また、天正年間に存在したとされる「羽場城跡」に関する遺構や遺物は、今回の調査では確認できていない。

なお、羽場城遺跡に関わる報告は、これをもって全てとする。

X=-114,450.000
Y=+ 30,040.000

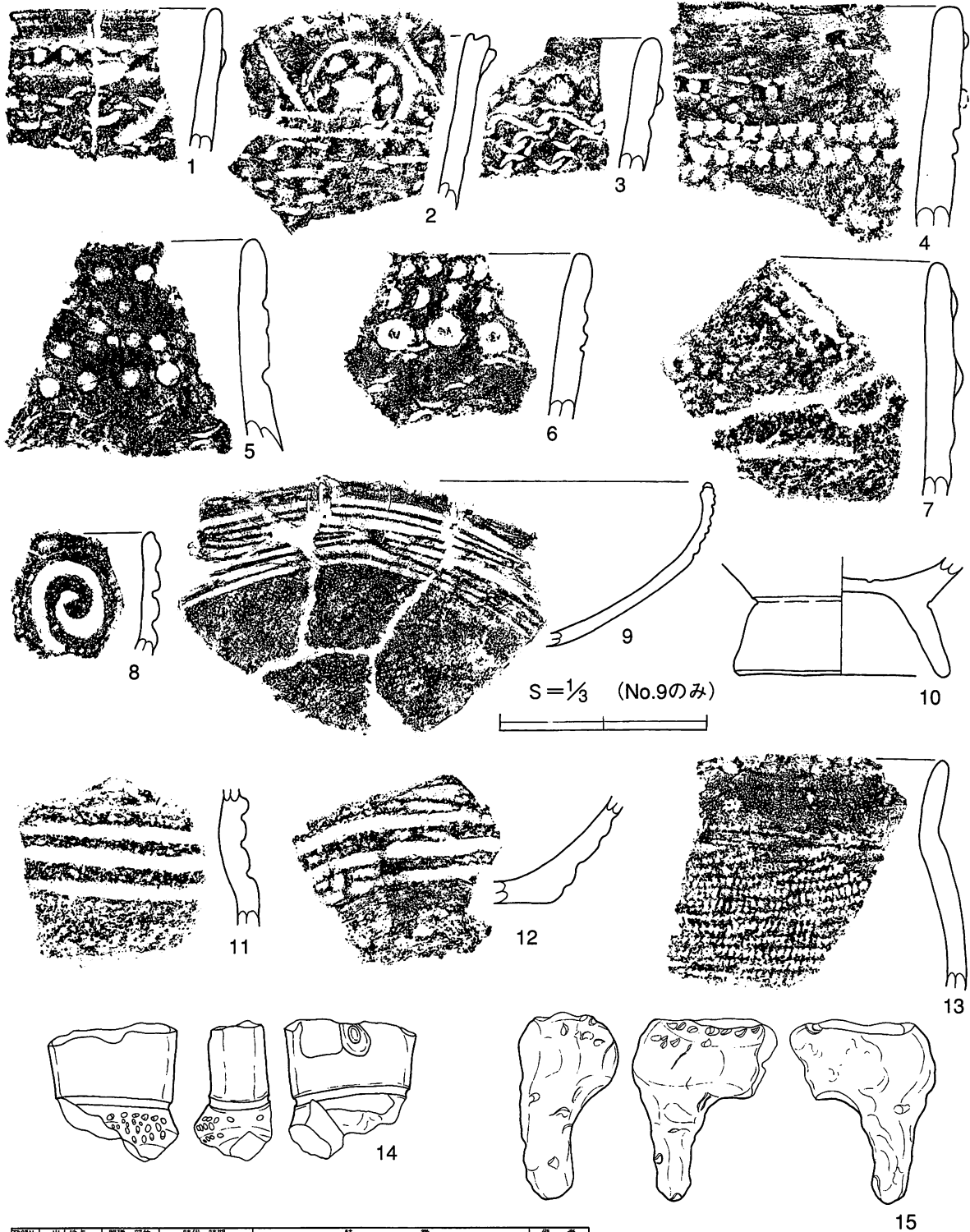


一羽場城遺跡遺構配置図一



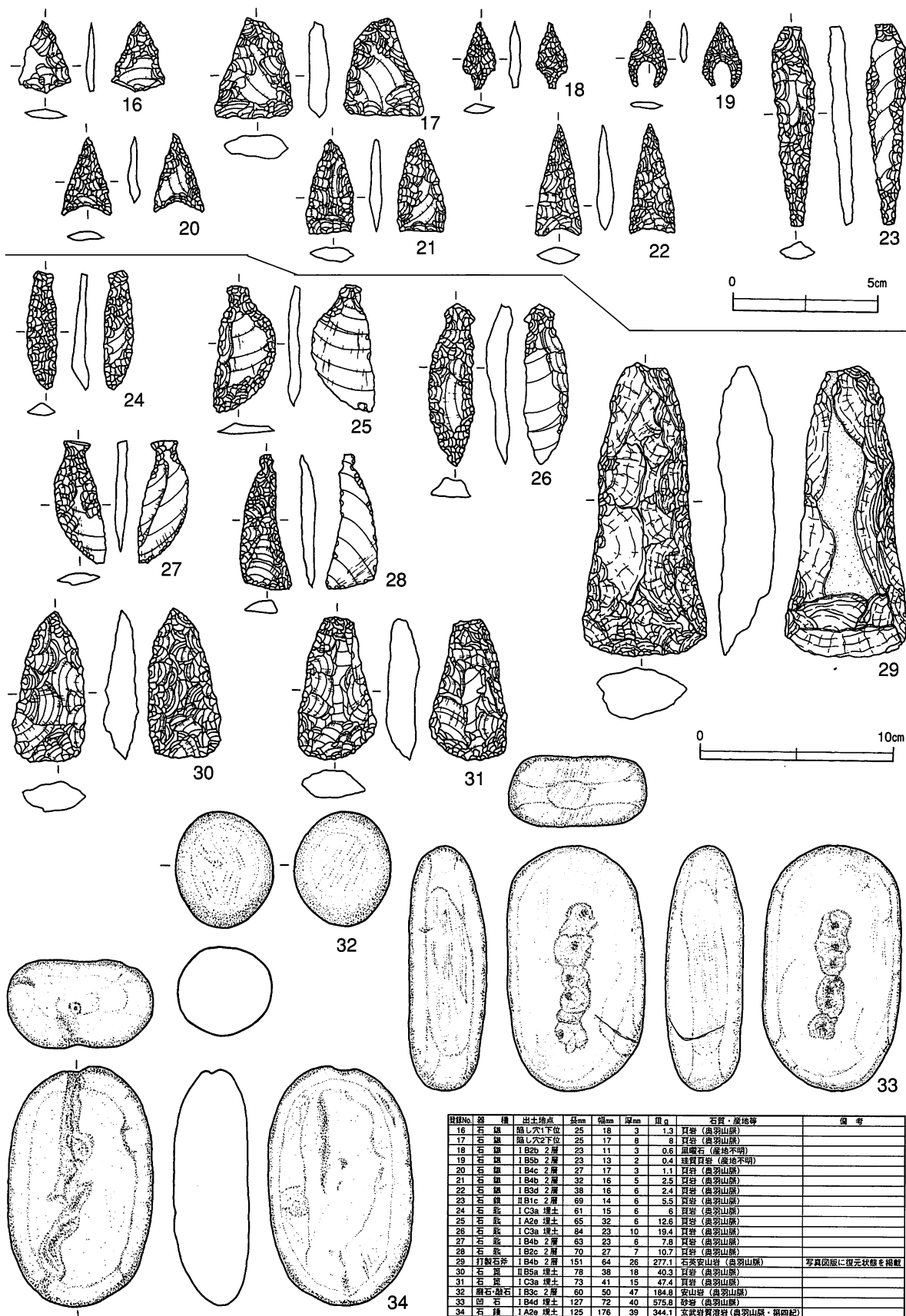
● = 地山 ■ = 炭化物 S = 石

羽場城遺跡 遺構配置図及び検出遺構図 (平面・断面図)



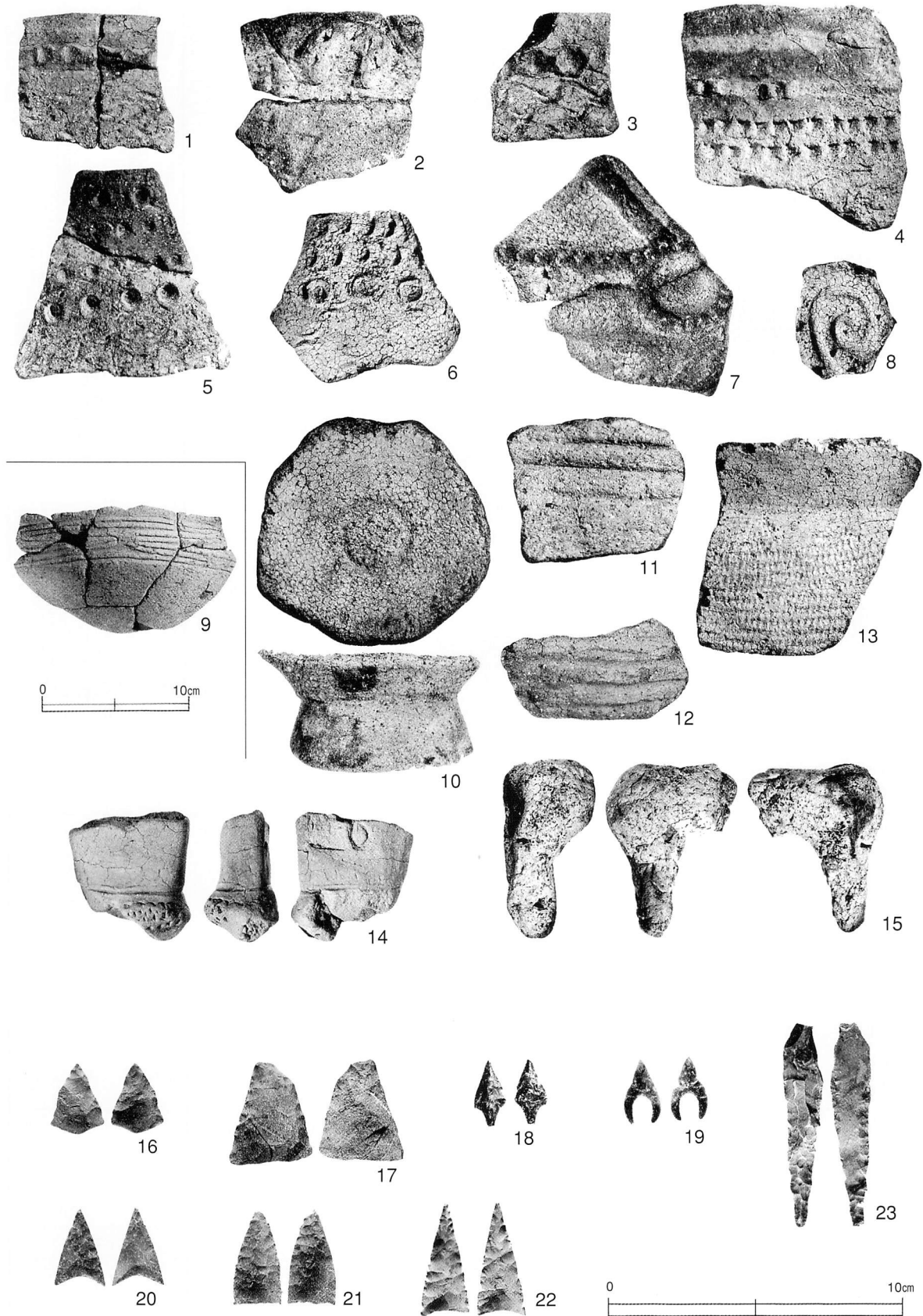
登録No	出土地点	器種・部位	時代・時期	特徴	備考
1	I B 2 e (2層)	深鉢・口縁部	縄文時代(前期)	大木2b式・S字状器底文の地文と、貼り付けた粘土紐に刺みがある	
2	I B 4 c (2層)	深鉢・口縁部	縄文時代(前期)	大木2b式・S字状器底文の地文と、半円状粘土紐の貼付がある	
3	I B 4 d (2層)	深鉢・口縁部	縄文時代(前期)	大木2b式・S字状器底文の地文と、貼り付けた粘土紐に刺みがある	
4	I C 3 a (埴土)	深鉢・口縁部	縄文時代(前期)	大木2b式・粘土紐の貼付と棒状工具による刺突表現が施される	
5	I B 3 d (2層)	深鉢・口縁部	縄文時代(前期)	大木3式・S字状器底文の地文と、竹管の刺突表現が施される	
6	II B 1 c (埴土)	深鉢・口縁部	縄文時代(前期)	大木3式・S字状器底文の地文と、竹管・半截竹管の刺突表現が施される	
7	I B 3 d (2層)	深鉢・口縁部	縄文時代(前期~中期)	大木6~7式・粘土紐の貼付と半截竹管の刺突表現が施される	
8	I B 3 d (埴土)	鉢	縄文時代(中期)	大木8b式・糊状面に収束する渦状の沈線がある	
9	I A 2 a (埴土)	深鉢・口縁部	縄文時代(晩期)	大木A式・笠形土文が施され、胴部に円筒方向の文様がある	裏面図 1/3
10	I A 2 a (埴土)	深鉢付鉢	縄文時代(晩期)	大木A式・内部の底部に円形を描く沈線が施される	
11	胎し穴1(下位)	鉢7・口縁部	弥生時代(初期)	口縁部に3本の深い沈線が施される	
12	I B 4 b (2層)	鉢7・底部	弥生時代(初期)	底部腹に3本の深く窪らな沈線が施される	
13	I B 3 d (埴土)	鉢7・口縁部	弥生時代(初期)	波状口縁を持ち胴部に刺みが施され、胴部にLR斜めの文様がある	
14	I A 2 a (埴土)	中葉土偶頭部	縄文時代(晩期)	胴部一帯が出土・胴の腹りに刺突が通り、背に楕円の沈線がある	
15	I B 3 d (2層)	中葉土偶頭部	縄文時代(晩期)	右肩一帯が出土・肩の上部に刺突がある	

羽場城遺跡 出土遺物 (土器・土製品)

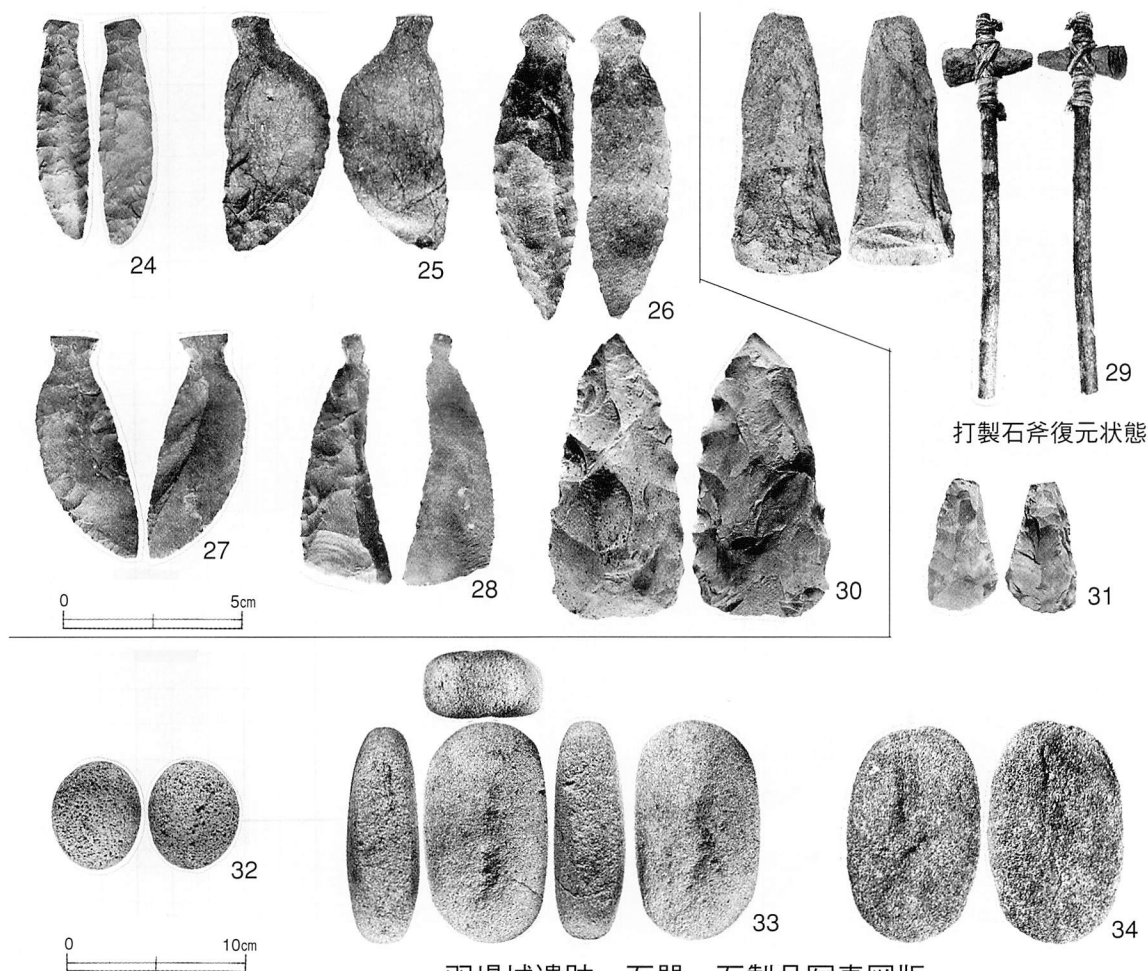


図番No.	器 種	出土地点	長mm	幅mm	厚mm	重g	石質・原産地等	備 考
16	石 鏃	跡し穴1下位	25	18	3	1.3	頁岩 (奥羽山脈)	
17	石 鏃	跡し穴2下位	25	17	8	8	頁岩 (奥羽山脈)	
18	石 鏃	I B2b 2層	23	11	3	0.6	風礫石 (産地不明)	
19	石 鏃	I B5b 2層	23	13	2	0.4	輝頁岩 (産地不明)	
20	石 鏃	I B4c 2層	27	17	3	1.1	頁岩 (奥羽山脈)	
21	石 鏃	I B4b 2層	32	16	5	2.5	頁岩 (奥羽山脈)	
22	石 鏃	I B3d 2層	38	16	6	2.4	頁岩 (奥羽山脈)	
23	石 鏃	II B1c 2層	69	14	6	5.5	頁岩 (奥羽山脈)	
24	石 鏃	I C3a 埋土	61	15	6	6	頁岩 (奥羽山脈)	
25	石 鏃	I A2e 埋土	65	32	6	12.6	頁岩 (奥羽山脈)	
26	石 鏃	I C3a 埋土	84	23	10	19.4	頁岩 (奥羽山脈)	
27	石 鏃	I B4b 2層	63	23	6	7.8	頁岩 (奥羽山脈)	
28	石 鏃	I B2c 2層	70	27	7	10.7	頁岩 (奥羽山脈)	
29	打製石斧	I B4b 2層	151	64	26	277.1	石英安山岩 (奥羽山脈)	写真図版(復元図を掲載)
30	石 鏃	II B5a 埋土	78	38	18	40.3	頁岩 (奥羽山脈)	
31	石 鏃	I C3a 埋土	73	41	15	47.4	頁岩 (奥羽山脈)	
32	磨石・磨石	I B3c 2層	60	50	47	184.8	安山岩 (奥羽山脈)	
33	砂 石	I B4d 埋土	127	72	40	575.8	砂岩 (奥羽山脈)	
34	石 鏃	I A2e 埋土	125	176	39	344.1	玄武岩質輝岩 (奥羽山脈・銀四郎)	

羽場城遺跡 出土遺物 (石器・石製品)



羽場城遺跡 土器・土製品石器 写真図版



羽場城遺跡 石器・石製品写真図版
報告書抄録

ふりがな	はばじょういせきはつつつちょうさほうこくしょ							
書名	羽場城遺跡発掘調査報告書							
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財報告書							
シリーズ番号	第340集							
編著者名	半澤武彦・菅原靖男							
編集機関	財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター							
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11-185 TEL 019(638)9001・9002							
発行年月日	西暦2000年3月24日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 〃 〃	東経 〃 〃	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
はばじょういせき 羽場城遺跡	いわてけんいちのせきし 岩手県一関市 舞川字水無沢 41-3ほか	03209	NE87- 0168	38度 58分 05秒	141度 10分 48秒	1999.6.7 ～ 9.1	2,870㎡	一般県道中里 西平線改良工 事に伴う緊急 発掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
羽場城遺跡	集落跡	縄文時代 (前期～晩期) 弥生時代 (初頭) 奈良時代	住居状遺構1棟 陥し穴2基 土坑3基 柱穴状土坑7基		縄文土器(前期～晩期) 弥生土器(初頭) 石器・石製品(石鏃・凹石他) 土師器(奈良・甕の一部)		天正年間に存在したと される「羽場城跡」に 関する遺構や遺物につ いては検出・出土して いない。	



調査区遠景（西から撮影・手前は北上川・矢印が調査区）



左写真A地点から見た調査区（北から撮影）



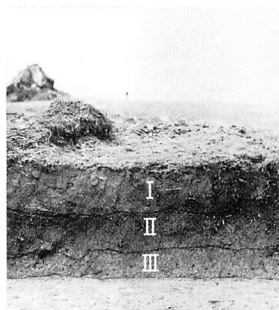
調査区からの展望
（左方向が一関市内・前方に新幹線と平泉・栗駒山）



調査区
河岸段丘の段丘面上に調査区がある
（矢印の部分）



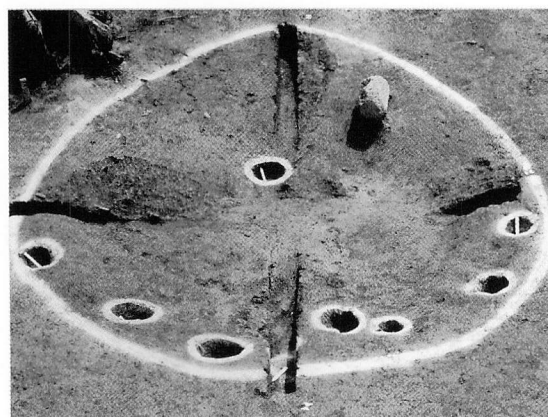
調査前風景（西から）



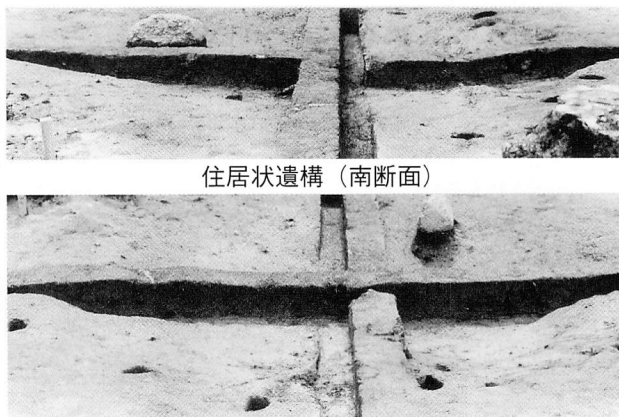
基本層序（南断面）



遺構全景（東から）



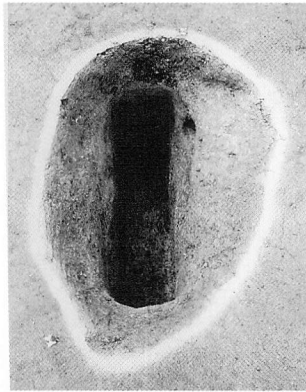
住居状遺構（西から）



住居状遺構（南断面）

住居状遺構（東断面）

羽場城遺跡 全景・基本層序・検出遺構写真



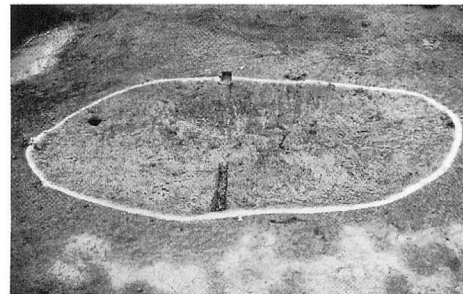
陥し穴1 完掘



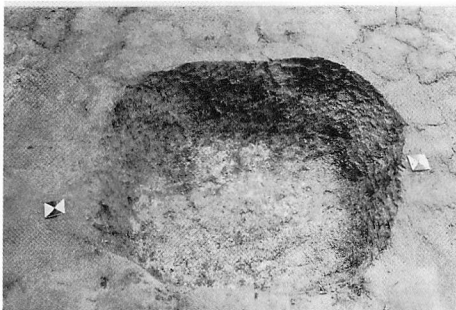
陥し穴2 完掘



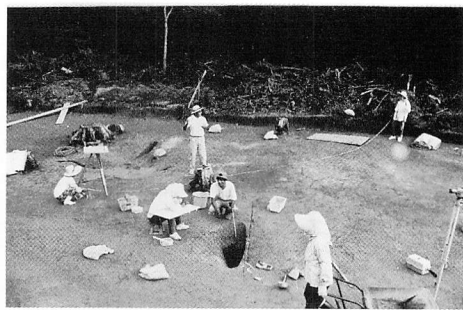
土坑1 (RD1) 完掘



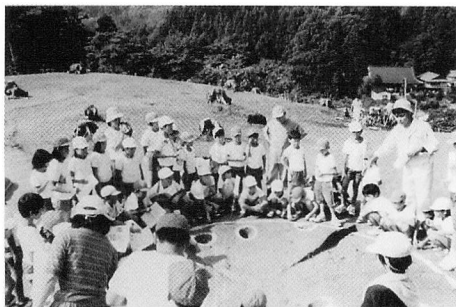
土坑2 (RD2) 完掘



土坑3 (RD3) 完掘



実測作業風景



遺跡見学会のようす (一関市立舞川小2・5・6年生)
※小学生対象の見学会で、No.29の打製石斧を復元した。(右写真)



柄には藤の硬い部分を使用した
→

←藤の内樹皮を剥いで紐状にし、石斧を固定する

装着・復元された打製石斧 (石器・石製品No.29)

羽場城遺跡 検出遺構・発掘調査風景写真

1. 調査に至る経過

沖野Ⅱ遺跡は「主要地方道二戸安代線緊急地方道路整備事業」工事に伴って、事業計画区間に位置することから発掘調査を行うことになった。

本線は二戸市と浄法寺町・安代町を結ぶ幹線道路であるが、特に似鳥地区は幅員が狭くカーブが多い中、交通量が多いため、車両のすれ違い等に支障をきたしている。また、歩道も無く児童等の歩行者にも危険な状態である。そのような中、今回盛岡以北の新幹線開通予定に伴い、周辺市町村からの利用者が見込まれ、交通量の増大が考えられる。それに対応すべくアクセス道路としての性格から、交通の円滑化、安全確保のため、この時期に合わせて改修を行うものである。

当事業の施行に係る埋蔵文化財の取り扱いについては、二戸地方振興局土木部から、「平成9年12月25日付二地土第1465号」で「緊急地方道整備事業における埋蔵文化財の試掘調査について」の文書で、岩手県教育委員会に試掘調査を依頼した。依頼を受けた岩手県教育委員会は平成10年3月12日に試掘し、その調査の結果を「平成10年3月20日付 教文第1039号 主要地方道二戸安代線緊急地方道路整備に係る埋蔵文化財の試掘調査に付いて（回答）」により二戸地方振興局土木部に回答し、沖野Ⅱ遺跡の範囲内であることが付記された。この発掘調査については、遺跡が確認されたことから工事の工程を考慮し、岩手県教育委員会と協議し、平成11年度に発掘調査を行うことになった。発掘調査開始に係る発掘調査承諾書については「平成11年2月17日付 二地土第1788号」で財団法人岩手県文化振興事業団に提出した。

2. 遺跡の立地

沖野Ⅱ遺跡は、八戸自動車道浄法寺インターチェンジの北東約6.8kmに位置し、調査区の南側を北流する安比川の左岸により形成された河岸段丘上に立地する。遺跡の標高は約136m、調査前の状況は水田と畑地である。

3. 遺跡の基本層序

本遺跡の基本土層は、次のとおりである。

I層 10YR3/2 黒褐色土	粘土質シルト	層厚10~30cm	粘性やや有	しまりやや有	現表土
II層 10YR2/2 黒褐色土	粘土質シルト	層厚15~40cm	粘性やや有	しまりやや有	旧水田耕作土
III層 10YR2/1 黒色土	シルト	層厚20~30cm	粘性やや有	しまり有	中掬浮石を含む
IV層 10YR3/3 暗褐色土		層厚10~20cm	粘性なし	しまりなし	中掬浮石層
V層 10YR3/2 黒褐色土	砂質シルト	層厚10~20cm	粘性やや有	しまり有	中掬浮石を含む
VI層 10YR4/3 ぶい黄褐色土	砂質シルト	層厚15~30cm	粘性有	しまりやや有	2~3cmの礫を含む
VII層 10YR4/6 褐色土	砂質土	層厚15~30cm	粘性なし	しまりやや有	地山

4. 調査の概要

今回の調査区は北東から南西に長く延びているため、それに合わせて3級基準点（2点）と補点（4点）を打設し、1区画5mのグリッドを設定した。基準点2点を結ぶ線は、公共座標第Ⅹ系の南北方向より東に63°偏する。検出された遺構は時期不明の土坑2基、柱穴状ピット群1箇所（計4基）、旧河道跡1箇所である。

<1号土坑> H21区北側、IV層上面より検出した。平面形は円形、断面形はビーカー状である。直径は70cm、深さは40cmを測る。埋土は黒色シルト質土で構成され、黒色土の下に中掬浮石が認められるが、これは壁面の崩落によるものと思われる。出土遺物がなく、詳細は不明である。

<2号土坑> I31区北側、IV層下面より検出した。上部は削平を受けており、残存する底面までの深さは

約20cmである。埋土は黒色シルト質土で構成されている。断面の形状から、フラスコ状ピットの底部付近のみが残存したと思われる。出土遺物がなく時期は不明である。

<柱穴状ピット群> F38～39区南側、Ⅳ層下面より柱穴状ピットを4基検出した。規模は直径20～30cm、深さは23～29cmである。埋土は中礫浮石を含む黒褐色土、暗褐色の砂質土で構成される。柱穴間の距離は約2mで、それらは方形に配されている。いずれも柱痕は認められなかった。出土遺物もなく、また南側が調査区域外に延びている可能性があり、性格は不明である。

<旧河道跡> 調査区西側ほぼ中央部を南へ向かって、安比川に流れ込んでいたと思われる河道跡である。幅は約20～23m、深さは最大で約1mである。東・西側には、その上流から流れ込んだ土器が集中して出土している箇所がある。河道中央部は、橋脚建設のための工事中道路が作られた際に削平を受けていた。

<出土遺物> 土器・石器合わせて中コンテナ1箱分を出土した。大半は調査区東側にある窪地と西側の旧河道跡から出土し、層位はⅢ層下～Ⅳ層上である。土器の時期はほとんどが縄文時代後期初頭であり、十腰内様式に属するものが多く、文様の特徴により次のように分類した。

I類 地文のみ施文されるもの（1～9）

ほとんどが斜縄文だが、4のみ網目状撚糸文が施されている。1の底部には網代痕がわずかに残っている。

Ⅱ-A類 波状口縁を持ち、ボタン状貼付突起を持つもの（10～13）

山形口縁で、頂部直下にボタン状の貼付突起を持ち、その突起に円形刺突が施されている。10は口縁に平行する隆帯と沈線、円形刺突から垂下する隆帯を持ち、頂部直下には円形刺突が3個施されている。

Ⅱ-B類 波状口縁を持ち、ボタン状突起なしのもの（14～17）

山形口縁（14、15）とゆるやかな波状口縁（16、17）の2種類がある。いずれも口縁に平行する1～3条の沈線を持ち、沈線間は無文である。15は口縁に平行する隆帯を持ち、頂部真下に菱形区画文が施されていたと思われる。16は沈線が長円状、17は三角状の区画文と頂部から蛇行する沈線を持つ。

Ⅲ類 沈線が施文されるもの（18～26）

18は口縁部に2条の平行沈線、胴部中央に2条の平行沈線を横位に施し、斜行する2条の平行沈線で文様を区画、さらに渦巻状の沈線を施している。22・23も2条の平行沈線によって区画されている。19・20、24～26は胴部破片であるが、沈線間が無文のもの（19、20）と文様を区画するもの（24～26）とがある。20は曲線状の沈線を持つ。

Ⅳ類 折り返し口縁を持つもの（27～35）

口縁部が折り返されて、器壁が二重になっている。原体にはLR（27～29、31～33）とRL（30、34、35）とがある。

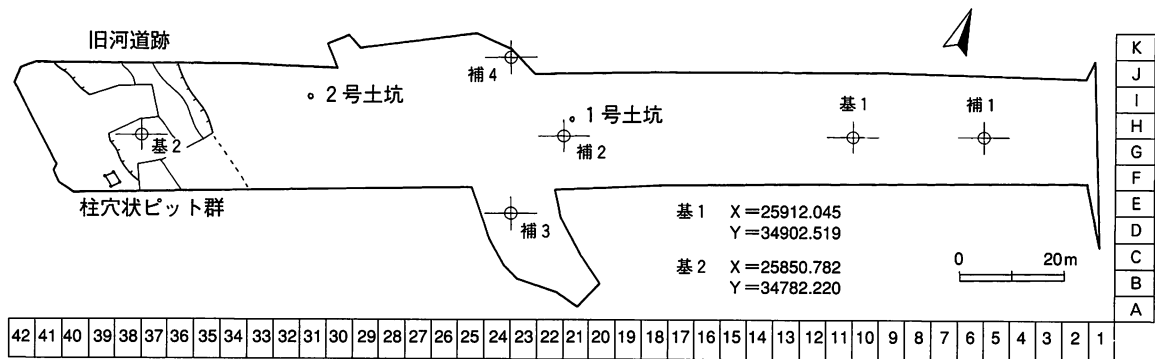
なお36は、香炉の突起部分と推定される。石器は礫石器3点（37～39）、剥片が2点（40、41）出土した。37・38は両面が使用された磨石で、その面は磨滅している。38は縦方向に沿って使用されている。

40は碧玉で深緑色を呈する剥片である。

5. まとめ

今回の調査では、確認された遺構が少なく、遺跡の性格を明らかにすることはできなかった。土坑・柱穴状ピット群の検出や遺物の出土により、周辺地域に縄文時代の集落跡の存在が想定される。

なお、沖野Ⅱ遺跡に関わる報告は、これをもって全てとする。

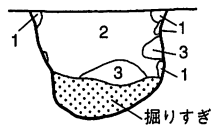
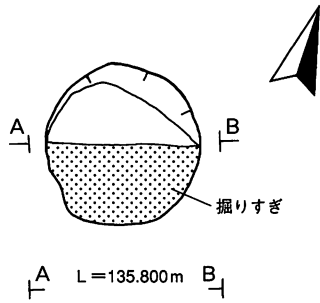


第1図 沖野Ⅱ遺跡遺構配置図

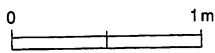
報告書抄録

ふりがな	おきのにいせきはつくつちょうさほうこくしょ							
書名	沖野Ⅱ遺跡発掘調査報告書							
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第340集							
編著者名	小野寺正之 濱田 宏							
編集機関	財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター							
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11-185 TEL 019(638)9001							
発行年月日	西暦2000年 3月24日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
おきの 沖野Ⅱ遺跡	いわてけんじょうのへし 岩手県二戸市 なとりおきの 似鳥字沖野 70-3 ほか	03213	JF18- 1216	40度 13分 56秒	141度 14分 34秒	1999. 7.16~9.17	5,119m ²	「主要地方道二戸安代線」事業に伴う緊急発掘調査
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
沖野Ⅱ遺跡	散布地	縄文時代	土坑 2基 柱穴状ピット群 1箇所（計4基）		縄文土器（後期） 剥片石器 石器			

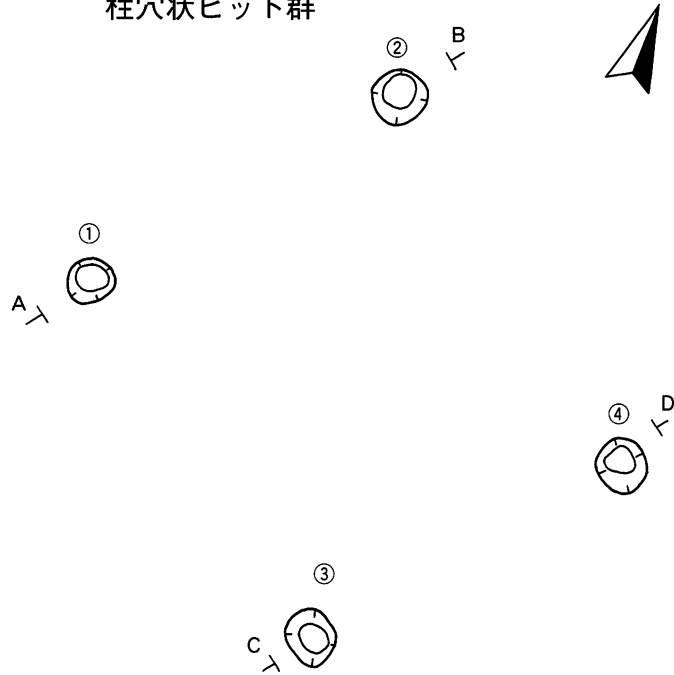
1号土坑



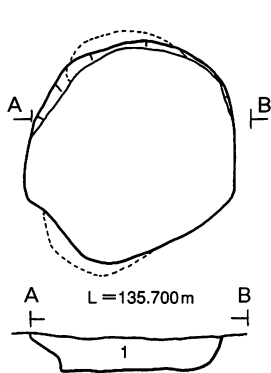
- 【1号土坑】
- 1 10YR4/6 褐色 シルト 中振浮石層
 - 2 10YR2/1 黒色 シルト
 - 3 10YR2/3 黒褐色 シルト 中振浮石を10%含む
 - 4 10YR2/2 黒褐色 シルト



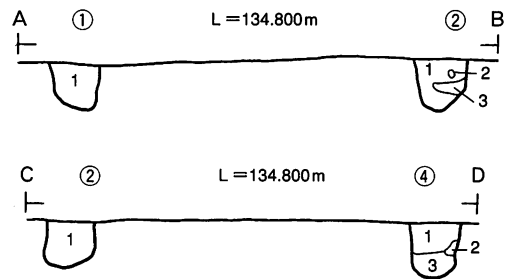
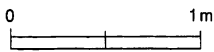
柱穴状ピット群



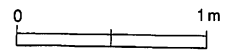
2号土坑



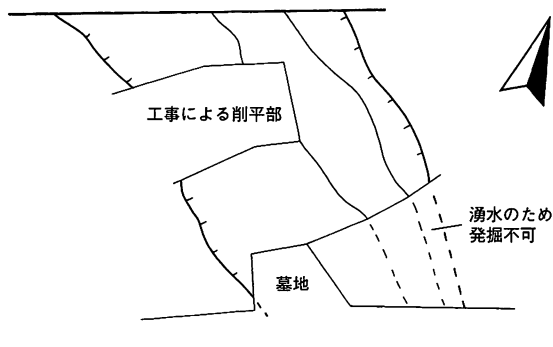
- 【2号土坑】
- 1 10YR2/2 黒褐色 砂質シルト 中振浮石を40%含む



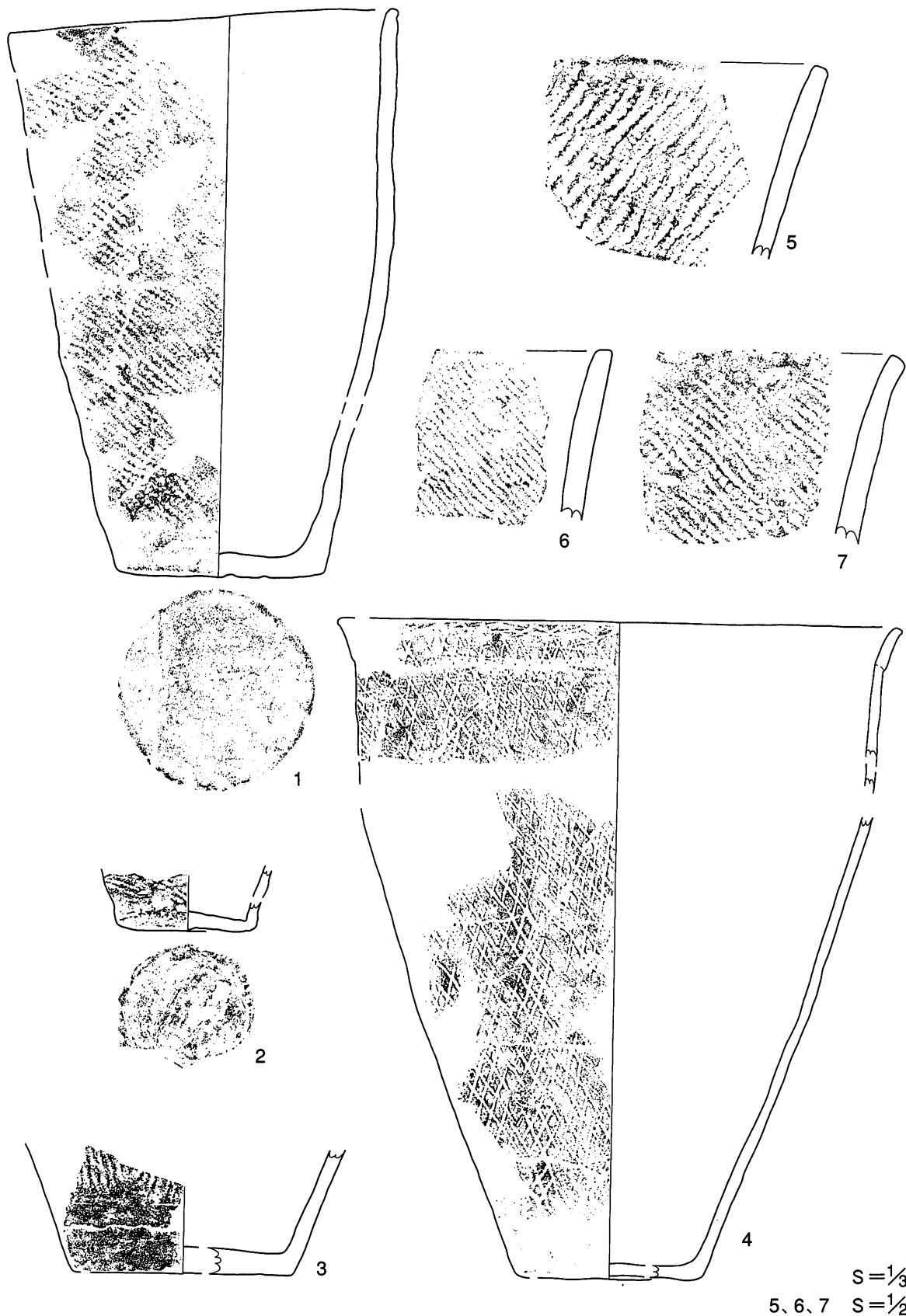
- 【柱穴状ピット群】
- 1 10YR2/2 黒褐色 シルト 中振浮石を1%含む
 - 2 10YR3/4 暗褐色 シルト
 - 3 10YR3/3 暗褐色 砂質土



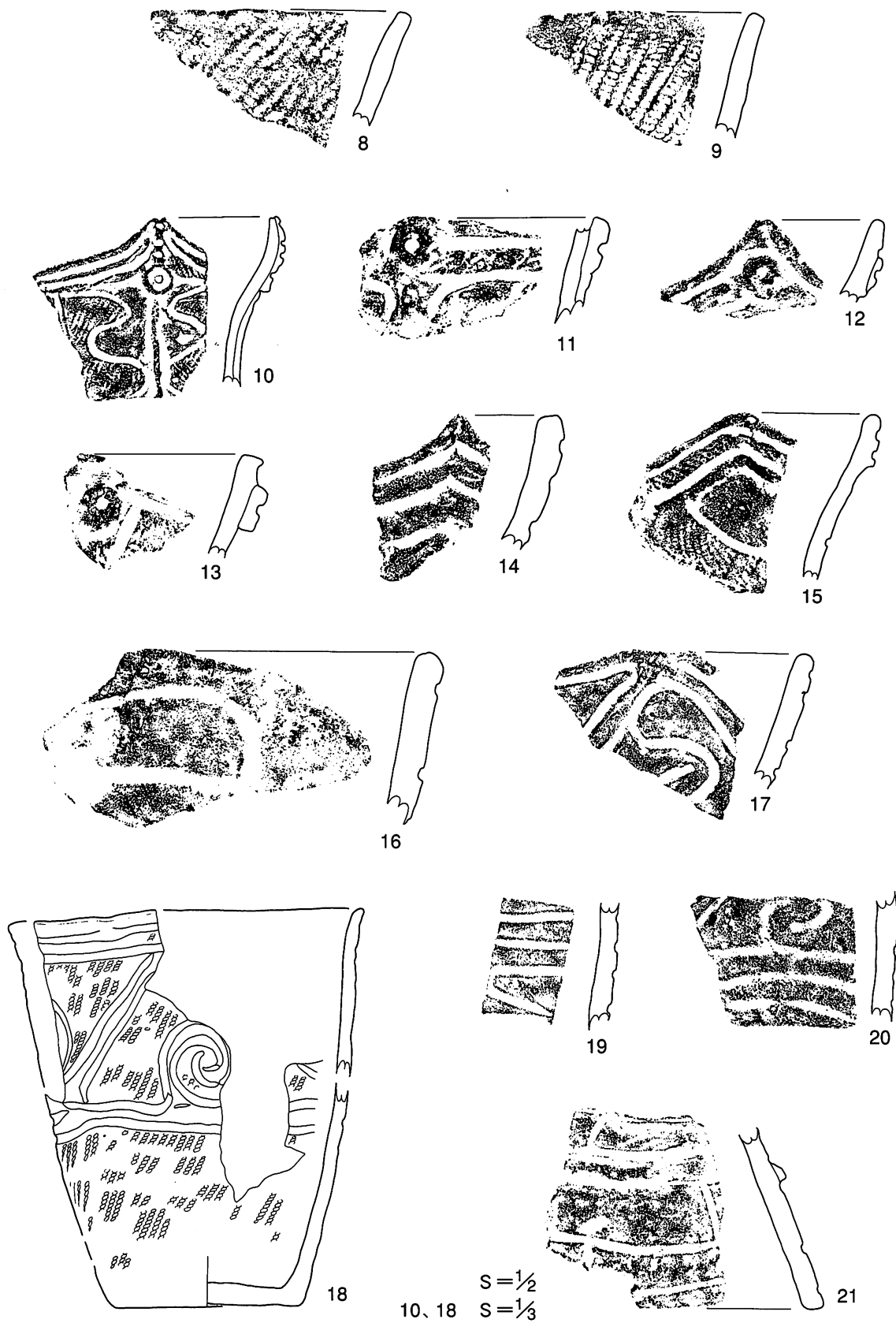
旧河道跡



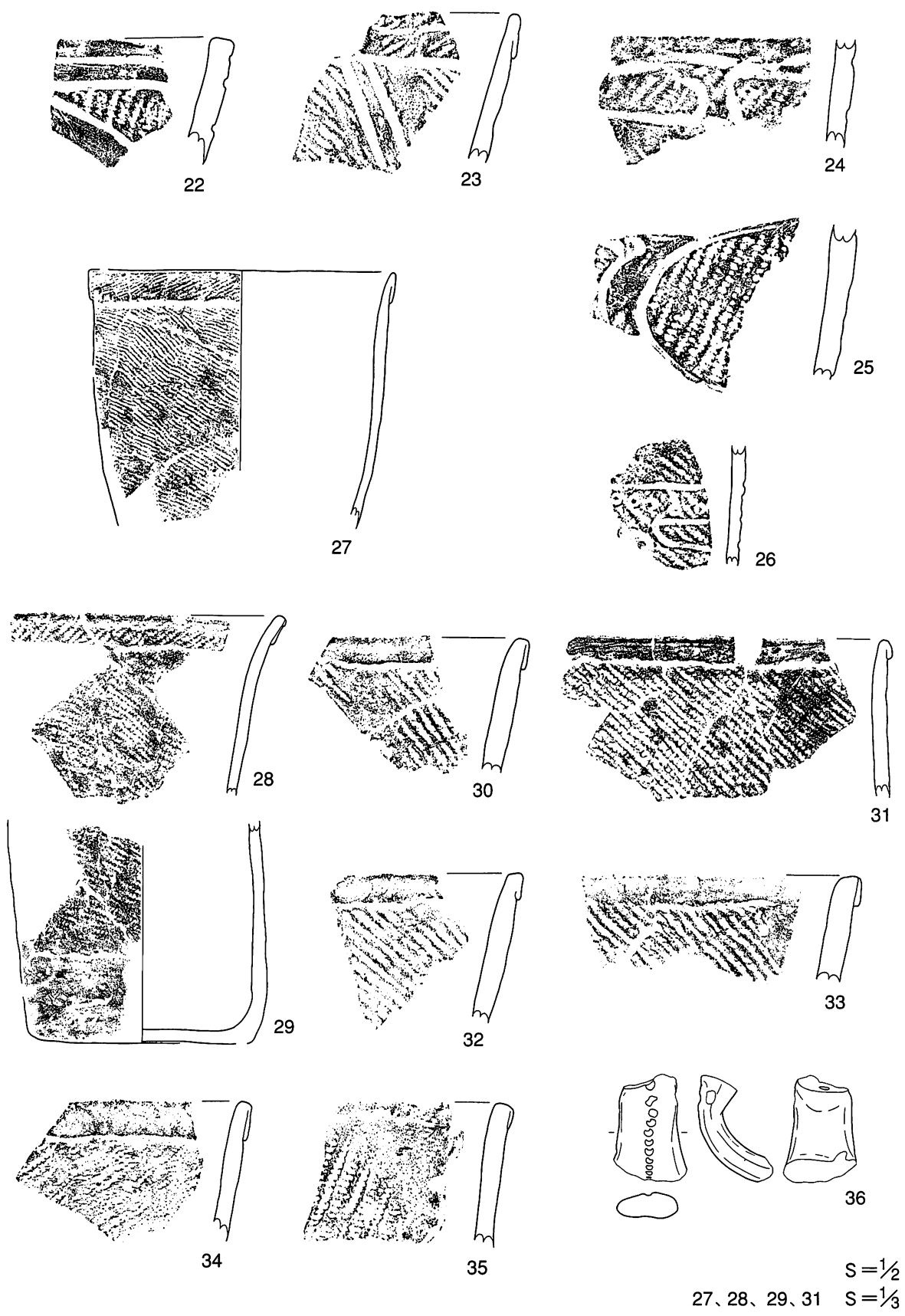
第2図 沖野Ⅱ遺跡1・2号土坑、柱穴状ピット群、旧河道跡



第3図 沖野Ⅱ遺跡出土土器(1)



第4図 沖野Ⅱ遺跡出土土器(2)



第5図 沖野Ⅱ遺跡出土土器(3)

第1表 沖野Ⅱ遺跡出土遺物観察表（土器）

図No	分類	出土地点	層位	器種	部位	原体	外面	内面	胎土
1	I	I37	Ⅲ層下	深鉢	口～底部	RL	全体に施文の後、折り返し口縁を磨消。口唇やや外反。底部に網代痕。	ナデ	
2	I	G38	Ⅱ層	深鉢?	底部	LR	円形平底	ナデ	海綿骨針含む
3	I	G6	Ⅲ層	深鉢?	底部	RL	円形平底	ナデ	
4	I	F8&9	Ⅲ層	深鉢	口縁、胴～底部		全体に網目状熱糸文を施文の後、口唇部に押圧。口唇やや外反	ナデ	海綿骨針含む
5	I	G6	Ⅲ層	深鉢	口縁	RL	地文のみ、色調：橙（5YR 6/6）	ナデ	金雲母・砂粒を含む
6	I	H9	Ⅳ層上	深鉢	口縁	LR	地文のみ、やや外反	ナデ	金雲母・石英・砂粒を含む
7	I	F38	埋土	深鉢	口縁	LR	口唇わずかに外反	ナデ	金雲母・石英を含む、やや粗い
8	I	J40	Ⅲ層上	深鉢	口縁	RL	地文のみ、口唇わずかに外反	ナデ	金雲母・石英・砂粒を含む、やや粗い
9	I	J40	Ⅱ層	深鉢	口縁	RL	口縁部わずかに外反	ナデ	金雲母・砂粒を含む、やや粗い
10	Ⅱ-A	G39	Ⅱ層下	深鉢	口縁	RL	口縁に平行する沈線。ボタン状貼付突起（円形刺突あり）、棒状隆帯が垂下し、左右に区画文、円形刺突	ナデ	金雲母・砂粒を含む、やや粗い
11	Ⅱ-A	J39	Ⅲ層上	浅鉢?	口縁		突起部にボタン状貼付突起（円形刺突あり）、口縁に平行する沈線、1条は円形区画文	ナデ	石英・砂粒を含む、やや粗い
12	Ⅱ-A	H38	Ⅱ層	浅鉢?	口縁		波状口縁に平行する沈線、突起部にボタン状貼付突起（円形刺突あり）	ナデ	金雲母・砂粒を含む
13	Ⅱ-A	J25	Ⅲ層	浅鉢?	口縁?		波状口縁に平行する沈線、突起部にボタン状貼付突起（円形刺突あり）	ナデ	金雲母・砂粒を含む
14	Ⅱ-B	G38	Ⅱ層	深鉢	口縁		波状口縁に平行する1条の隆帯と3条の沈線、やや内湾	ナデ	金雲母・砂粒を含む、やや粗い
15	Ⅱ-B	I9	Ⅲ層上	深鉢	口縁	LR	波状口縁に平行する隆帯が3条、やや外反、区画内に施文	ナデ	金雲母・砂粒を含む、やや粗い
16	Ⅱ-B	H38	Ⅱ層	深鉢	口縁		沈線による円形区画文	ナデ	石英・砂粒を含む
17	Ⅱ-B	I39	Ⅲ層下	深鉢	口縁		浅い沈線による三角状区画文、頂部から蛇行する沈線	ナデ	石英・砂粒を含む
18	Ⅲ	G&H38	Ⅱ層	深鉢	口～底部	RL	口縁部・胴部中央、口縁部から斜行する2条の平行沈線、胴部に渦巻状の沈線	ナデ	石英・砂粒を含む
19	Ⅲ	G36	Ⅲ層下	深鉢	胴部?		平行する2条の沈線、長円状区画文	ナデ	石英・砂粒を含む
20	Ⅲ	C区	V層上	深鉢?	胴部?		平行する3条の沈線、蛇行する沈線	ナデ	石英・砂粒を含む、やや粗い
21	Ⅲ	I39	Ⅲ層下	台付浅鉢	台部		沈線による方形区画文、棒状の隆帯貼り付け	ナデ	金雲母・砂粒を含む
22	Ⅲ	J39	Ⅲ層上	浅鉢	口縁	LR	口縁に平行する2条の沈線と斜めの沈線によって区画。沈線間は無文。	ナデ	金雲母・石英・砂粒を含む
23	Ⅲ	H38	Ⅱ層	深鉢	口縁	LR	口縁に平行する2条の沈線と斜めに平行する沈線で区画。	ナデ	金雲母・石英・砂粒を含む
24	Ⅲ	C区	V層上	深鉢?	胴部?	RL	地文を施した後、沈線によって方形区画文を描く	ナデ	金雲母・砂粒を含む、やや粗い
25	Ⅲ	J39	Ⅲ層上	深鉢?	胴部?	LR	深い沈線による円形区画文	ナデ	金雲母・石英・砂粒を含む、やや粗い
26	Ⅲ	I29	Ⅱ層	深鉢?	胴部	LR	地文を施した後、浅い沈線による区画文・円形刺突	ナデ	金雲母・砂粒を含む
27	Ⅳ	H35	Ⅳ層上	深鉢	口縁～胴部	LR	地文を施した後、折り返し口縁の上に押圧、口唇少し外反	ナデ	石英・砂粒を含む、やや粗い
28	Ⅳ	H38	Ⅱ層	深鉢	口縁	LR	折り返し口縁、No.29と同一個体か?	ナデ	金雲母・砂粒を含む
29	Ⅳ	H37	Ⅲ層上	深鉢	底部	LR	底部：楕円形、No.28と同一個体か?	ナデ	石英・砂粒を含む、やや粗い
30	Ⅳ	H38	Ⅳ層上	深鉢	口縁	RL	折り返し口縁部がわずかに外反	ナデ	金雲母・石英・砂粒を含む
31	Ⅳ	H37	Ⅲ層上	深鉢	口縁	LR	折り返し口縁、口縁部やや外反	ナデ	金雲母・石英・砂粒を含む
32	Ⅳ	H38	Ⅳ層上	深鉢	口縁	LR	折り返し口縁	ナデ	金雲母・石英・砂粒を含む
33	Ⅳ	H38	Ⅳ層上	深鉢	口縁	LR	折り返し口縁、一部指ナデ(?)	ナデ	金雲母・砂粒を含む
34	Ⅳ	I39	Ⅲ層下	深鉢	口縁	RL	折り返し口縁	ナデ	金雲母・砂粒を含む
35	Ⅳ	J40	Ⅲ層	深鉢	口縁	RL	弱い折り返し口縁、口唇わずかに外反、一部文様が剥落している	ナデ	金雲母・石英・砂粒を含む、やや粗い

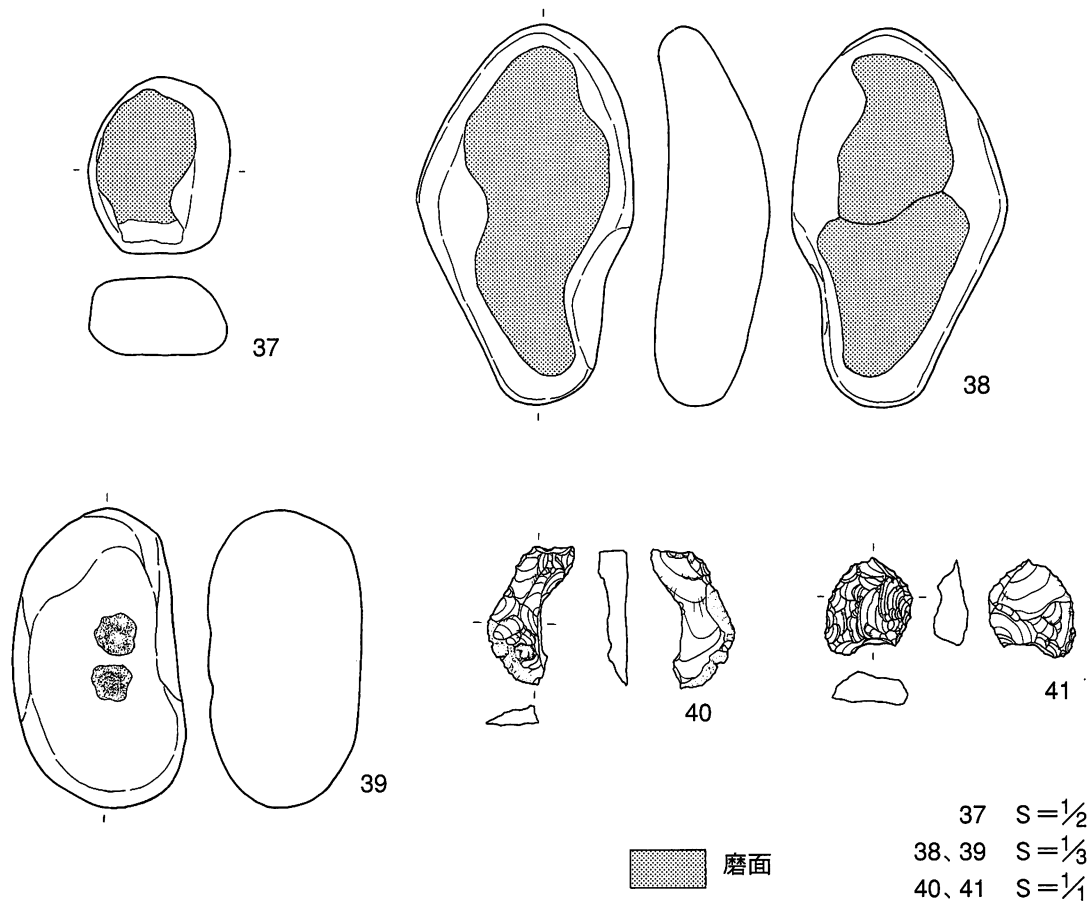
I 文様が単一の施文のみで、個体全体に施文されているもの

Ⅱ A：波状口縁を持ち、区画文に沈線が用いられ、ボタン状貼付突起あり。B：ゆるやかな波状口縁、ボタン状貼付突起なし。

Ⅲ 沈線による区画文を持ち、地文が施されているもの。

Ⅳ 折り返し口縁を持ち、地文が施されているもの。

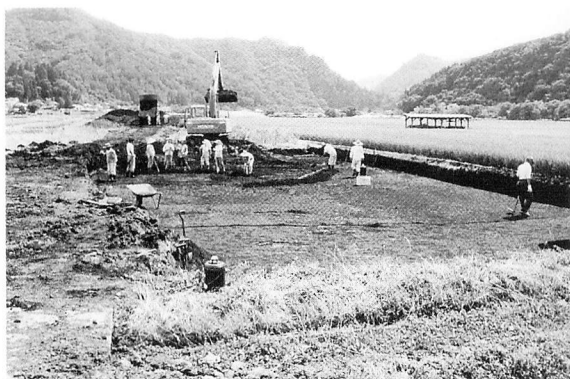
図No	分類	出土地点	層位	器種	部位	焼成	外面	内面	色調
36		不明	不明	香炉?	突起?	普通	ほぼ直線状に押圧された円形刺突		7.5YR 6/6 橙



第2表 出土遺物観察表（石器）

No	出土地点	層位	器種	石質	産地	長さcm	幅cm	厚さcm	重量g	備考
37	H10	Ⅲ層上	磨石	頁岩	奥羽山脈	4.7	3.6	2.1	46.5	礫石器
38	G39	Ⅱ層	砥石	石英安山岩	奥羽山脈	15.1	8.6	4.2	681.1	礫石器
39	H38	Ⅲ層下	凹石	安山岩	奥羽山脈	11.8	6.7	6.2	671.8	礫石器
40	H38	Ⅳ層上	剥片	碧玉	(人工?)	3.7	1.5	0.8	3.1	人工物（スラッグ）か？
41	J40	Ⅲ層上	剥片	珪質頁岩	産地不明	2.2	2.2	0.9	5.1	剥片

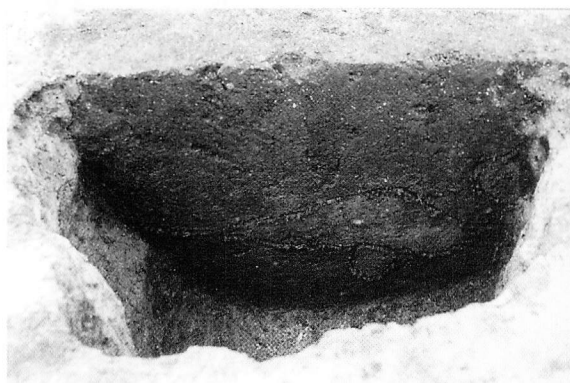
第6図 沖野Ⅱ遺跡石器、第2表出土遺物観察表（石器）



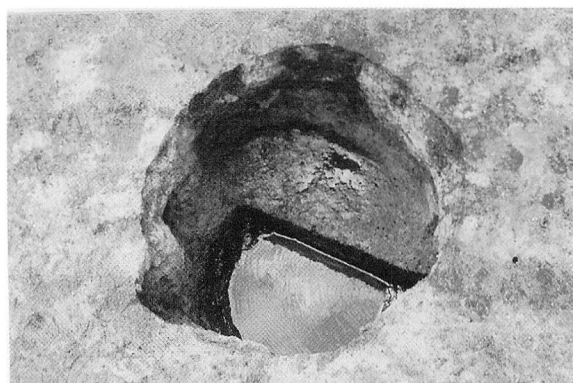
作業風景



基本土層



1号土坑 断面



平面



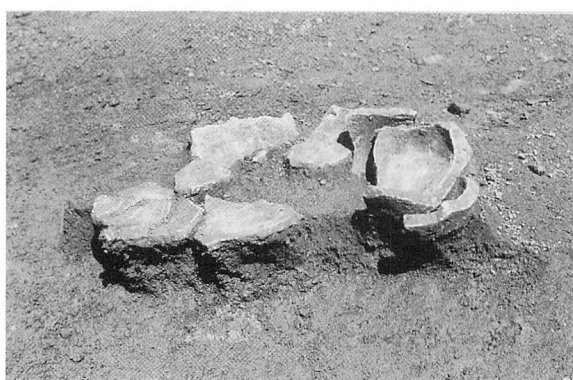
2号土坑 断面



平面

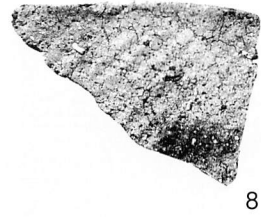
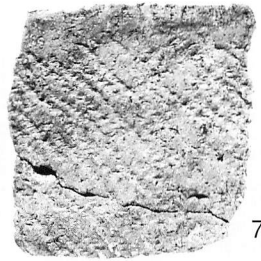
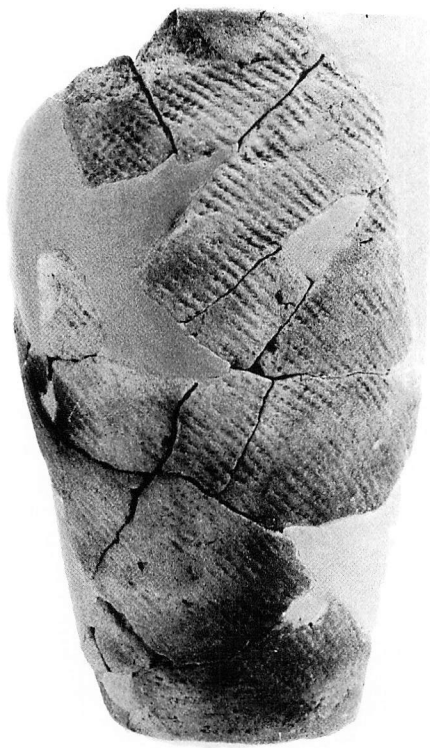


柱穴状ピット群 平面

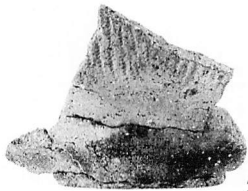
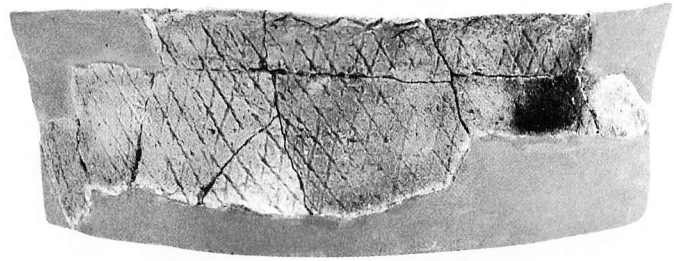


遺物出土状況

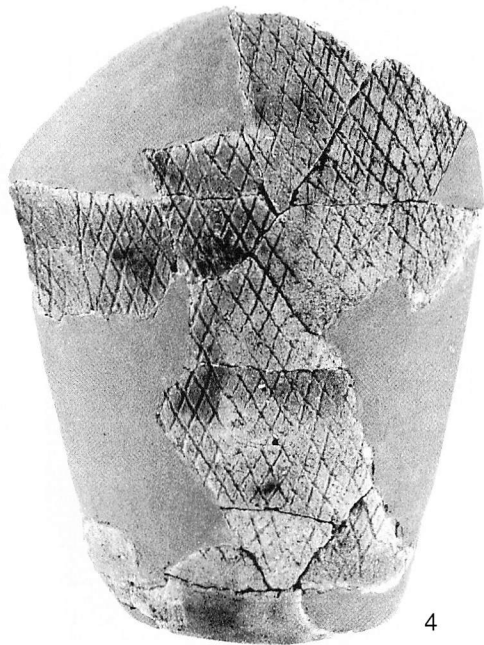
沖野Ⅱ遺跡写真図版1 検出遺構



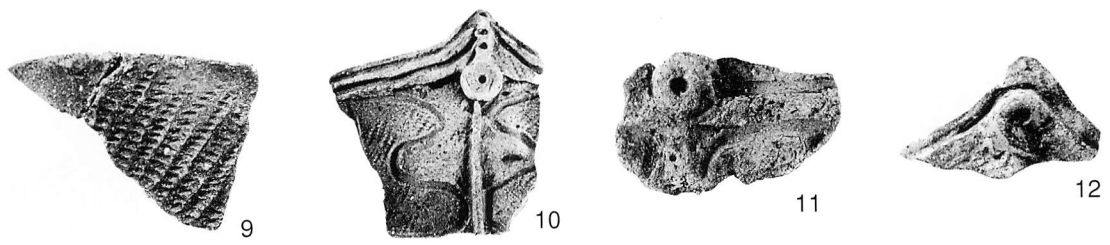
5~8 S=1/2



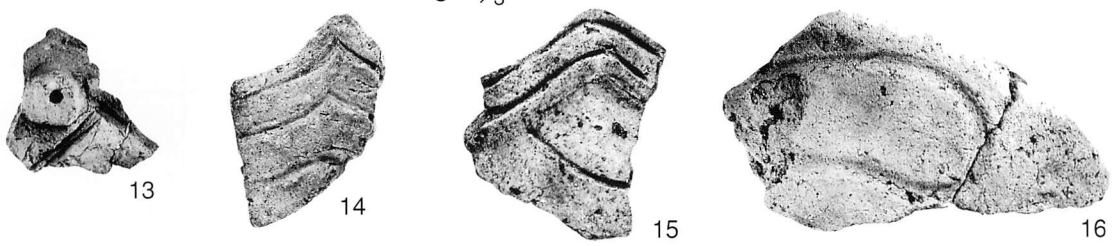
1~4 S=1/3



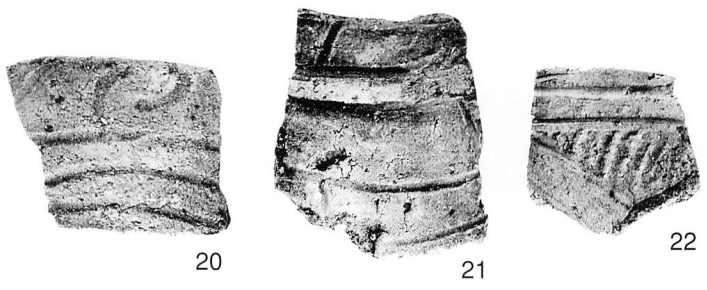
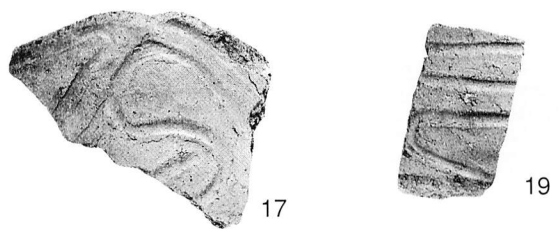
冲野Ⅱ遺跡写真図版2 出土遺物（土器1）



S=1/3

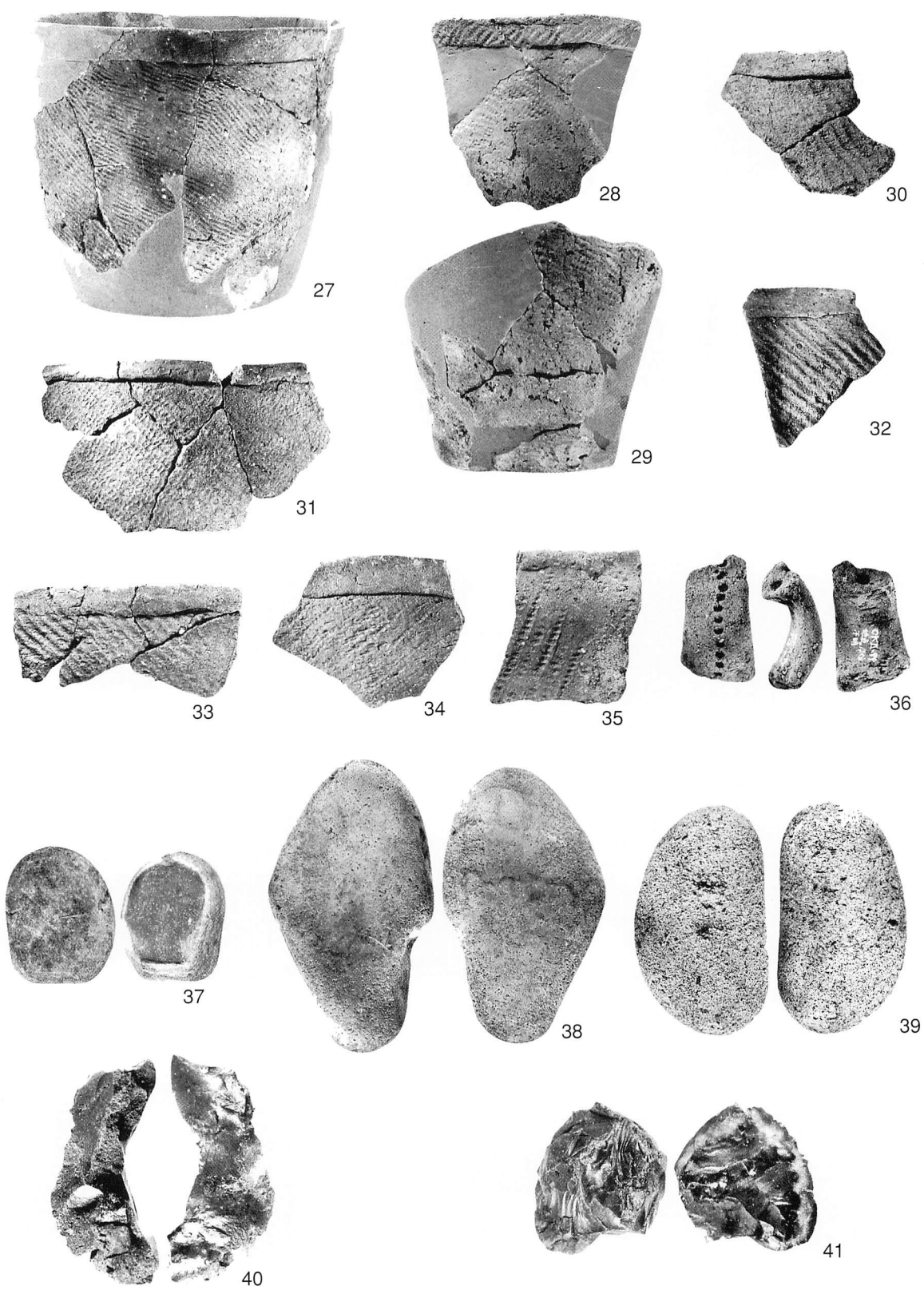


S=1/3



10、18以外 S=1/2

沖野Ⅱ遺跡写真図版3 出土遺物（土器2）

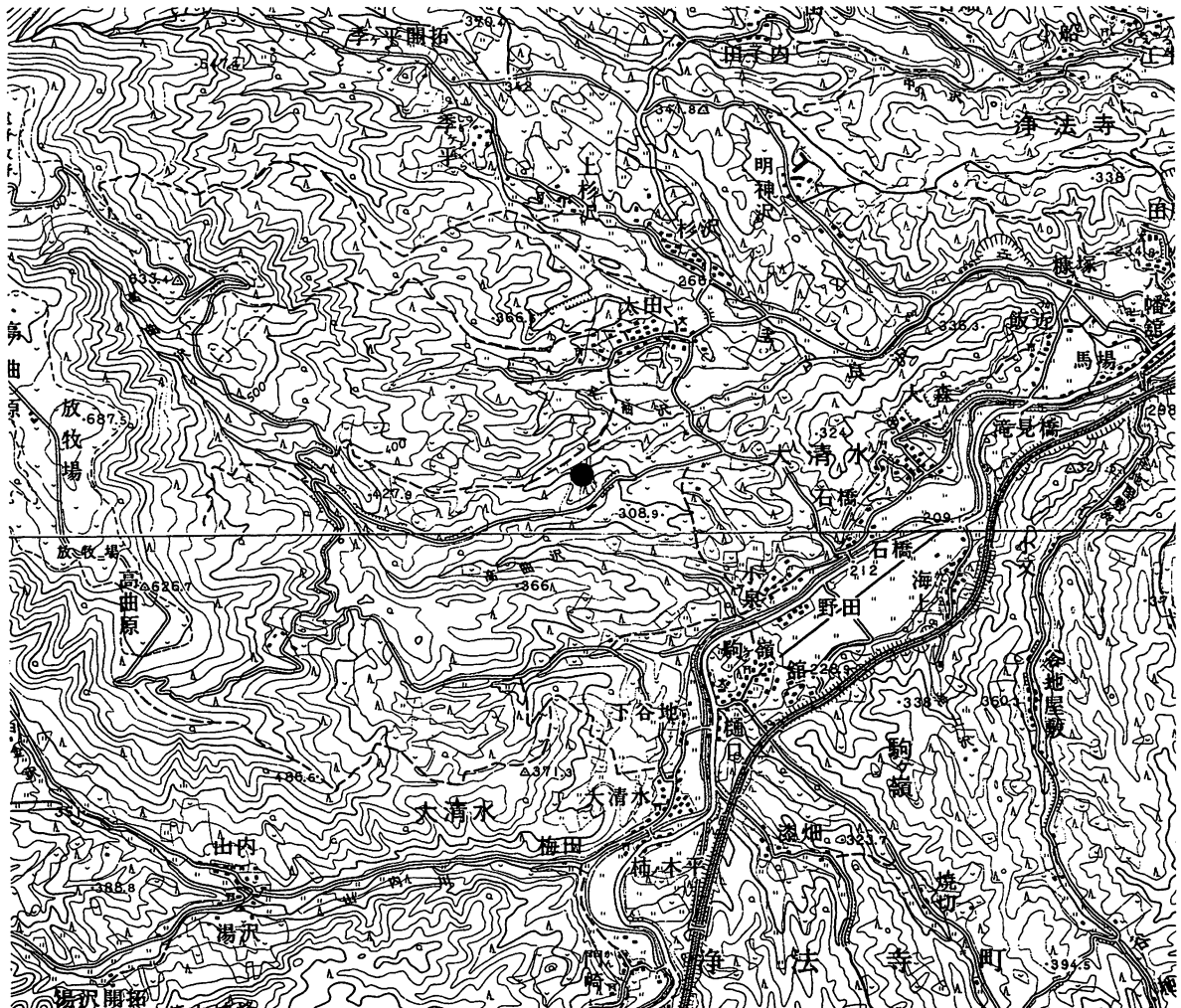


27~29、31、38、39 S=1/3 30、32~37 S=1/2 40、41 S=1/4

沖野Ⅱ遺跡写真図版4 出土遺物（土器3、石器）

(46) ^{ながそで}長袖 I 遺跡

所在地 二戸郡浄法寺町大字浄法寺字長袖69-11ほか
委託者 岩手県二戸振興局二戸農村整備事務所
事業名 一般農道整備事業「太田地区」
発掘調査期間 平成10年8月3日～9月30日 平成11年9月6日～9月30日
調査対象面積 平成10年度 1,778m² 平成11年度 934m²
発掘調査面積 平成10年度 1,778m² 平成11年度 934m²
遺跡番号・略号 J E 35-1389・NS I -98・99
調査担当者 平成10年度 晴山雅光・平澤里香 平成11年度 本多準一郎・千葉正彦
協力機関 浄法寺町教育委員会



遺跡位置

1 : 50,000 浄法寺・荒屋

1. 調査に至る経過

長袖Ⅰ遺跡は、「一般農道整備事業 太田地区」の工事施工に伴って、その事業区域内に位置することから発掘調査をすることとなったものである。

当事業の施行にかかる埋蔵文化財の取り扱いについては、岩手県二戸地方振興局二戸農村整備事務所（元土地改良事業所）から平成9年9月30日付二土地第616号によって岩手県教育委員会に対して分布調査を依頼した。これを受けた岩手県教育委員会では平成9年11月4日に分布調査を実施したが、その結果は平成9年11月6日付け教文第640号で二戸農村整備事務所へ回答し、その際工事施行範囲内が長袖Ⅰ遺跡の範囲内であることが付記された。

回答を受けた二戸農村整備事務所では、平成9年11月11日付二土地第745号で岩手県教育委員会に試掘を依頼した。依頼を受けた岩手県教育委員会は平成9年11月26日に試掘を実施した。その結果、事業予定地内は発掘調査が必要であることが付記された。その後、岩手県教育委員会と二戸農村整備事務所の協議により、財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターの受託事業となった。調査は平成10年8月～10月、平成11年9月～10月の2カ年にわたって行うこととなった。

2. 遺跡の立地

長袖Ⅰ遺跡は、浄法寺町の中心地である浄法寺町地区に所在する町役場の西南西約42km、安比川に流入する長袖川の上流部に位置し、河岸段丘および山地の緩斜面に立地する。標高はおよそ285～295mである。調査前の状況は、林野・畑地・農業用道路である。近隣には、長袖南遺跡などがある。

3. 遺跡の基本序層

本遺跡の基本土層は次のとおりである。

第Ⅰ層	10YR2/3	黒褐色土シルト	しまりやや疎・粘性やや弱	層厚 5 cm～20cm
第Ⅱ層	10YR1.7/1	黒色土シルト	しまりやや疎・粘性やや弱	層厚 5 cm～30cm
第Ⅲ層	10YR5/3	にぶい黄褐色土	しまり密・粘性中	層厚 0 cm～5 cm 十和田 a 火山灰と思われる。
第Ⅳ層	10YR2/2	黒褐色土シルト	しまりやや密・粘性中	層厚 5 cm～30cm（遺物包含層）
第Ⅴ層	10YR2/1	黒色土シルト	しまりやや密・粘性中	層厚 0 cm～20cm（遺物包含層）
第Ⅵ層	10YR2/2	黒褐色土シルト	しまりやや密・粘性中	層厚 0 cm～20cm
第Ⅶ層	10YR3/4	暗褐色土シルト	しまりやや密・粘性やや強	層厚 0 cm～10cm
第Ⅷ層	7.5YR5/8	明褐色土粘土	二ノ倉火山灰と思われる。	

4. 調査の概要

検出された遺構は、縄文時代と思われる土坑が2基、時期不明の土坑が1基と柱穴状土坑が1基である。遺物については、縄文土器片を中心に二十数点出土している。

①遺 構

<1号土坑> 調査区東IC4i～5iに位置し、Ⅳ層下位面より検出した。平面形は長楕円形である。径は260×65cm、深さは40cmを測り、断面形は半円形を呈する。埋土は黒褐色土を主体に赤褐色の礫を含む層で構成されている。底面は丸みを帯び、締まりがある。壁は一部崩落している。出土遺物はないが、北辺付近より石鏃が出土している。

<2号土坑> 調査区南IC4g～4hに位置し、Ⅷ層面より検出したが、現道と重複しており削平をうけている。平面形は不整な楕円形であり、径は270cm、深さは80cmを測る。埋土はⅡ層黒色土・Ⅳ層黒褐色土が見られる。底面は狭く凹凸があり、壁は固く締まりがある。出土遺物はなく、時期については不明である。

<3号土坑> 調査区南 I B 6 g に位置し、IV層下位面より検出した。平面形は不整な楕円形である。径は225×125cm、深さは125cmを測り、断面形は不整である。埋土はV層黒色土を主体に、上層に炭化物を含む層で構成されている。底面はやわらかく湧き水がみられ、壁は南壁は固く、北壁はしまりが無い。縄文土器片が出土している。

<柱穴状土坑> 調査区東 I C 5 h に位置し、IV層上面より検出した。平面形は楕円形である。径は80×50cm、深さは10cmを測り、断面形は皿形を呈する。埋土は黒褐色土を主体に僅かに炭化物粒を含む層で構成される。底面は平坦で中央が僅かに隆起し、壁は垂直に立ち上がる。出土遺物はなく時期不明であるが、僅かに削平された現況畑地より検出しており、新しい時期のものと思われる。

②遺物

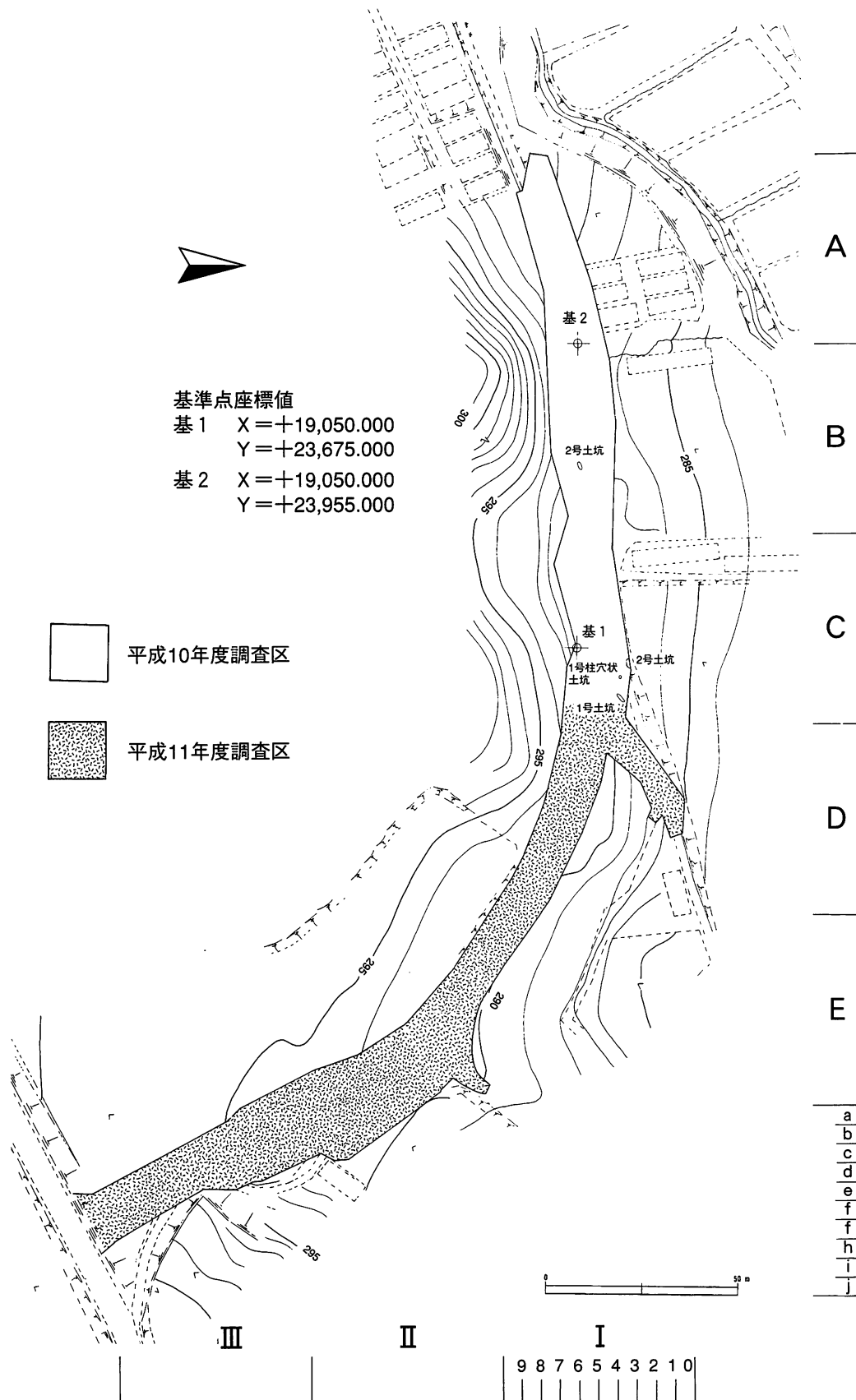
昨年度は、縄文土器片が4点出土。貼瘤のみられる鉢の胴部と、縄文を施した深鉢の胴部の2個体である。また、石鏃1点（無形凹基）のほか、青磁茶碗（中世）の底部も出土した。今年度は、縄文土器片が十数点出土した。ほとんどが胎土に雲母や石英が含まれるLR横の原体が旋文してある地文の土器片であり、一部、単軸絡条体の原体を旋文している木目状燃糸文などの土器片も出土している。

5. まとめ

今回の調査によって、縄文時代の遺構・遺物があることが明らかになり、当事の人々の生活痕跡をうかがい知ることができたが、断片的なところが多いため具体的な結論づけは難しい。今後、周辺地域の調査が進むにつれ本遺跡の全容が解明されると思われる。なお、長袖 I 遺跡（二戸農村整備事務所分）に関わる報告はこれをもって全てとする。

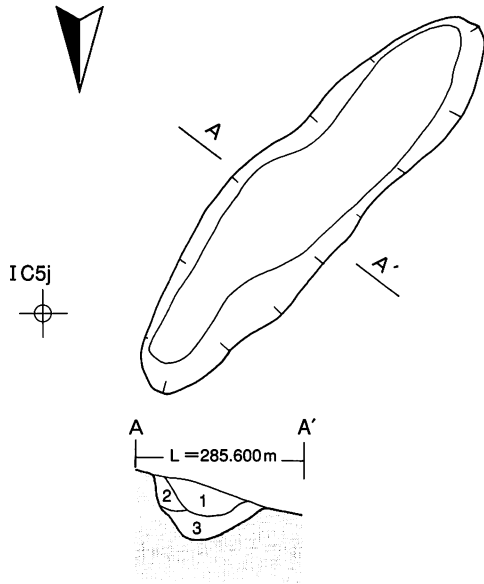
報告書抄録

ふりがな	ながそでいちいせきはつかつちようさほうこくしよ							
書名	長袖 I 遺跡発掘調査報告書							
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財報告書							
シリーズ番号	第340集							
編著者名	本多準一郎 晴山雅光							
編集機関	財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター							
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11-185 TEL(019)-638-9001							
発行年月日	西暦2000年3月24日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ながそで 長袖 I 遺跡	二戸郡浄法寺町 大字浄法寺 字長袖69-11 ほか	03521	JE35- 1389	40度 10分 14秒	141度 6分 43秒	1998年度 8.3~9.30 1999年度 9.6~9.30	1998年度 1,778m ² 1999年度 934m ²	「一般農道整備 事業」に伴う 緊急発掘
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
長袖 I 遺跡	散布地	縄文・中世	土坑・柱穴状土坑		土器片十数点 磁器 1点			



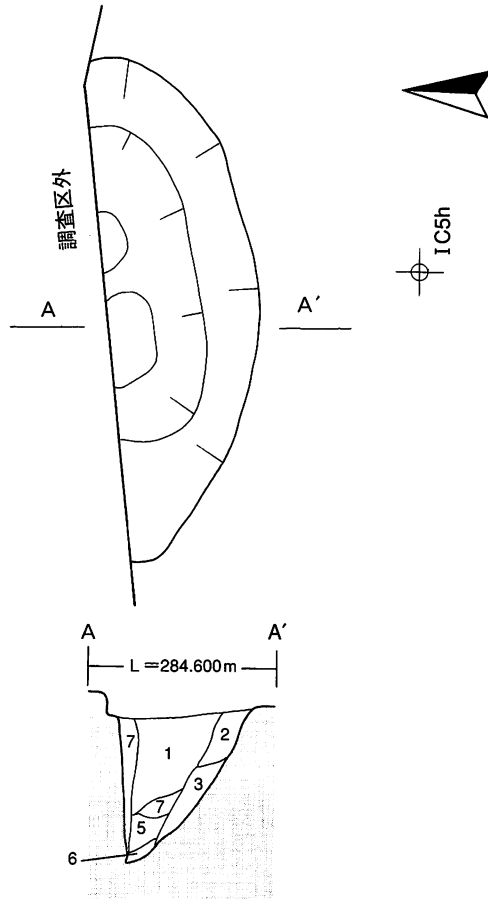
第1図 長袖 I 遺跡遺構配置図

1号土坑



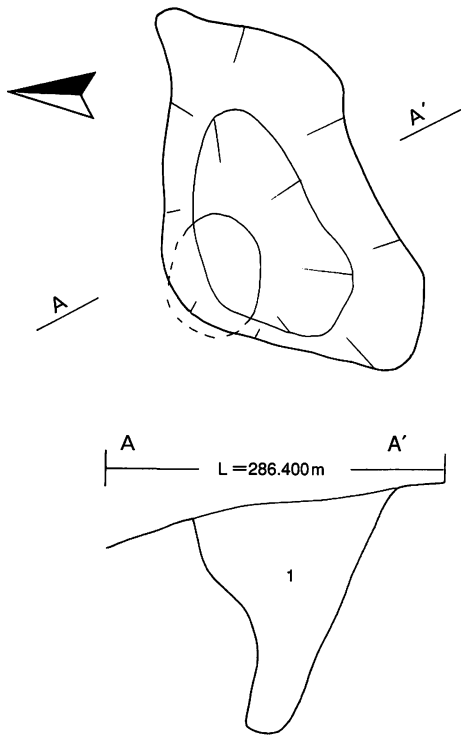
- 1号 土坑
- 1 10YR2/2 黒褐色 しまり中 粘りやや弱 シルト
(褐色の礫をえあずかに含む)
 - 2 10YR2/2 黒褐色 しまり中 粘りやや弱 シルト
(褐色・赤褐色の礫をわずかに含む)
 - 3 10YR3/3 暗褐色 しまりやや密 粘り中 シルト
(黄色の礫2~3mmを15~20%含む)

2号土坑



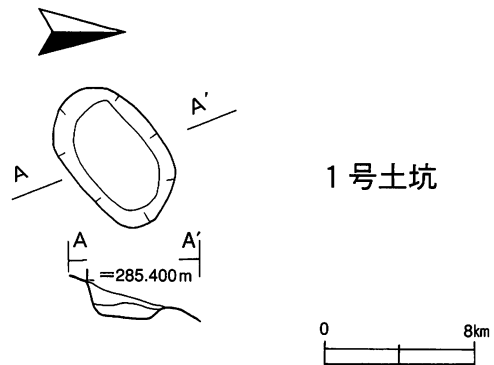
- 2号 土坑
- 1 10YR2/2 黒褐色 しまり中 粘りやや弱 シルト
(褐色・赤褐色の礫1mm以下を5~10%含む)
 - 2 10YR2/2 黒褐色 しまり中 粘りやや弱 シルト
(赤褐色の礫1~2mmをわずかに含む)
 - 3 10YR3/4 暗褐色 しまりやや密 粘り中 粘土質 シルト
 - 4 10YR3/4 暗褐色 しまりやや密 粘り中 粘土質 シルト
(褐色・赤褐色の礫をわずかに含む)
 - 5 10YR2/3 暗褐色 しまりやや疎 粘りたつ弱 シルト
(褐色・赤褐色の礫をわずかに含む)
 - 6 10YR3/4 黒褐色 しまり中 粘り中 粘土質 シルト
(赤褐色の礫1~3mmをわずかに含む)
 - 7 7.5YR4/6 褐色 しまり密 粘り中 シルト
(現道造成時の切土・盛土)

3号土坑



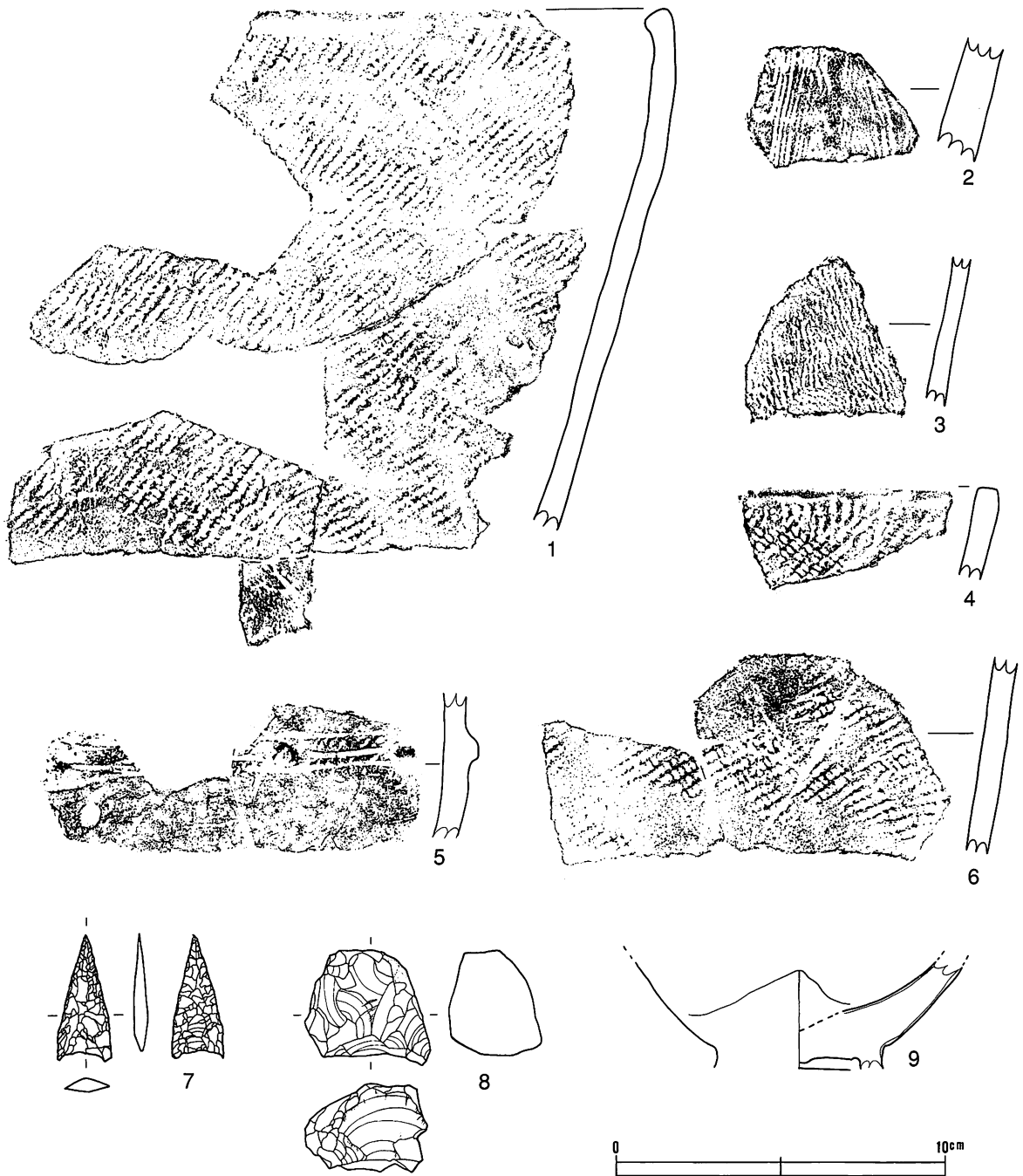
- 3号 土坑
- 1 10YR1.7/1 黒色 しまり中 粘り中 シルト
(埋土土層には、炭化物を多く含む。壁面には褐色のロームブロック
20~40cmを含み、下層には赤褐色の礫2~5cmを多く含む)

1号土坑



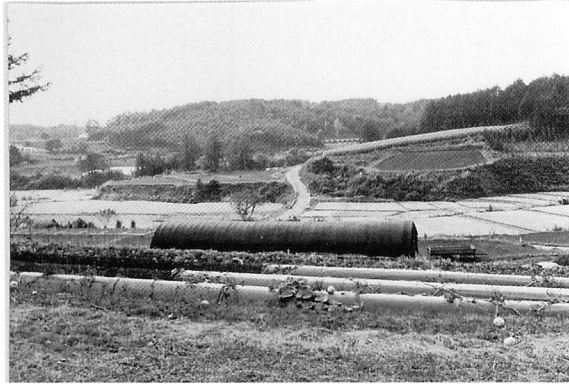
- 1号 柱穴状
- 1 10YR2/1 黒褐色 しまりやや疎 粘りやや弱 シルト
(わずかに炭化粒1mm以下を含む)
 - 2 10YR2/2 黒褐色 しまり中 粘り中 シルト
(赤褐色の礫 ~1mmをわずかに含む)

第2図 長袖I遺跡検出遺構



No.	出土位置	器種	部位	原体	特徴	時期
1	ⅢF9a盛土中	深鉢	口縁~胴部	LR横	地文のみ 胎土・雲母・石英	縄文
2	I D6g Ⅲ層	深鉢	胴部	L・R軸絡糸体	木目状燃系文 胎土・雲母・石英	縄文
3	ⅡE3b Ⅲ層	深鉢	胴部	LR	燃系文 胎土・雲母・石英	縄文
4	ⅢF9a盛土中	深鉢	口縁部	LR横	地文のみ 胎土・雲母・石英	縄文
5	c区西端Ⅱ層	注口?	胴部	LR横	2本の平行沈線で区画した中に縄文を施文し、瘤と瘤を1本の沈線で結んでいる	縄文後期後葉
6	ⅢF9a盛土中	深鉢	胴部	LR横	地文のみ 胎土・雲母・石英	縄文
9	A区東端	深鉢	底部		中国産青磁 15C~	中世

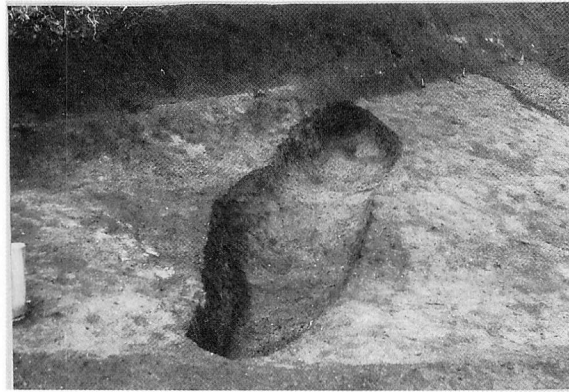
第3図 長袖I遺跡出土遺物・土器観察表



調査区遠景



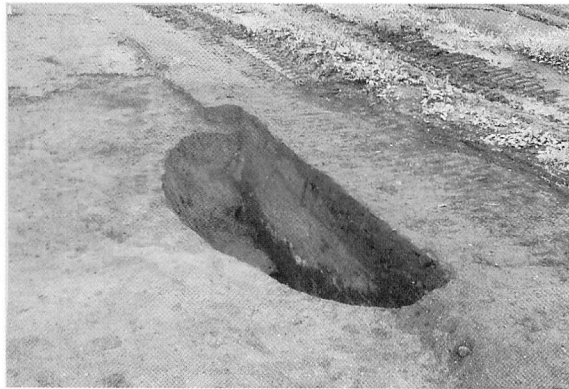
調査区全景



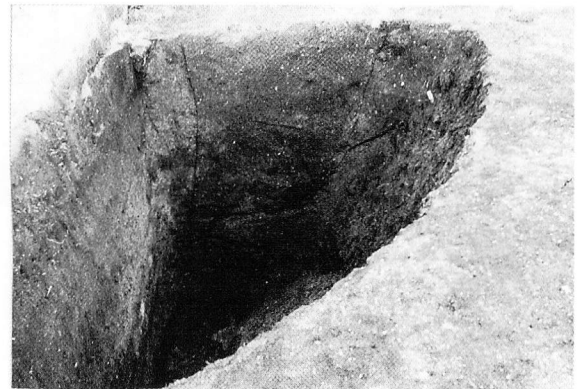
1号土坑 平面



断面



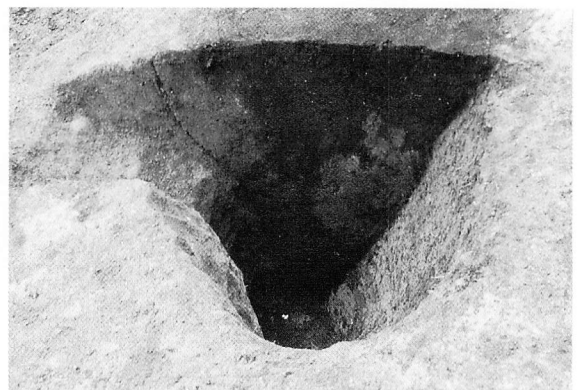
2号土坑 平面



断面



3号土坑 平面

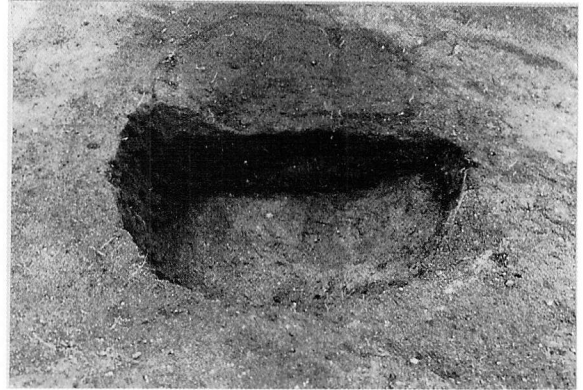


断面

長袖 I 遺跡写真図版 1 検出遺構



1号柱穴状 平面



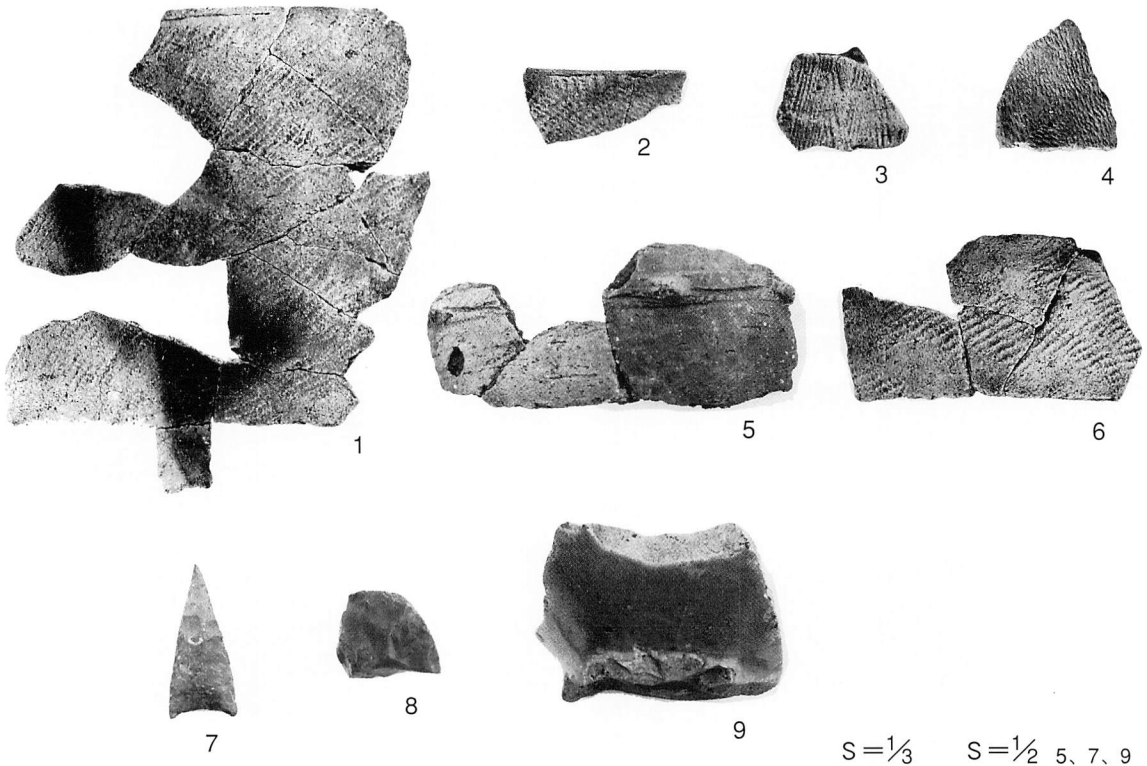
断面



出土状况



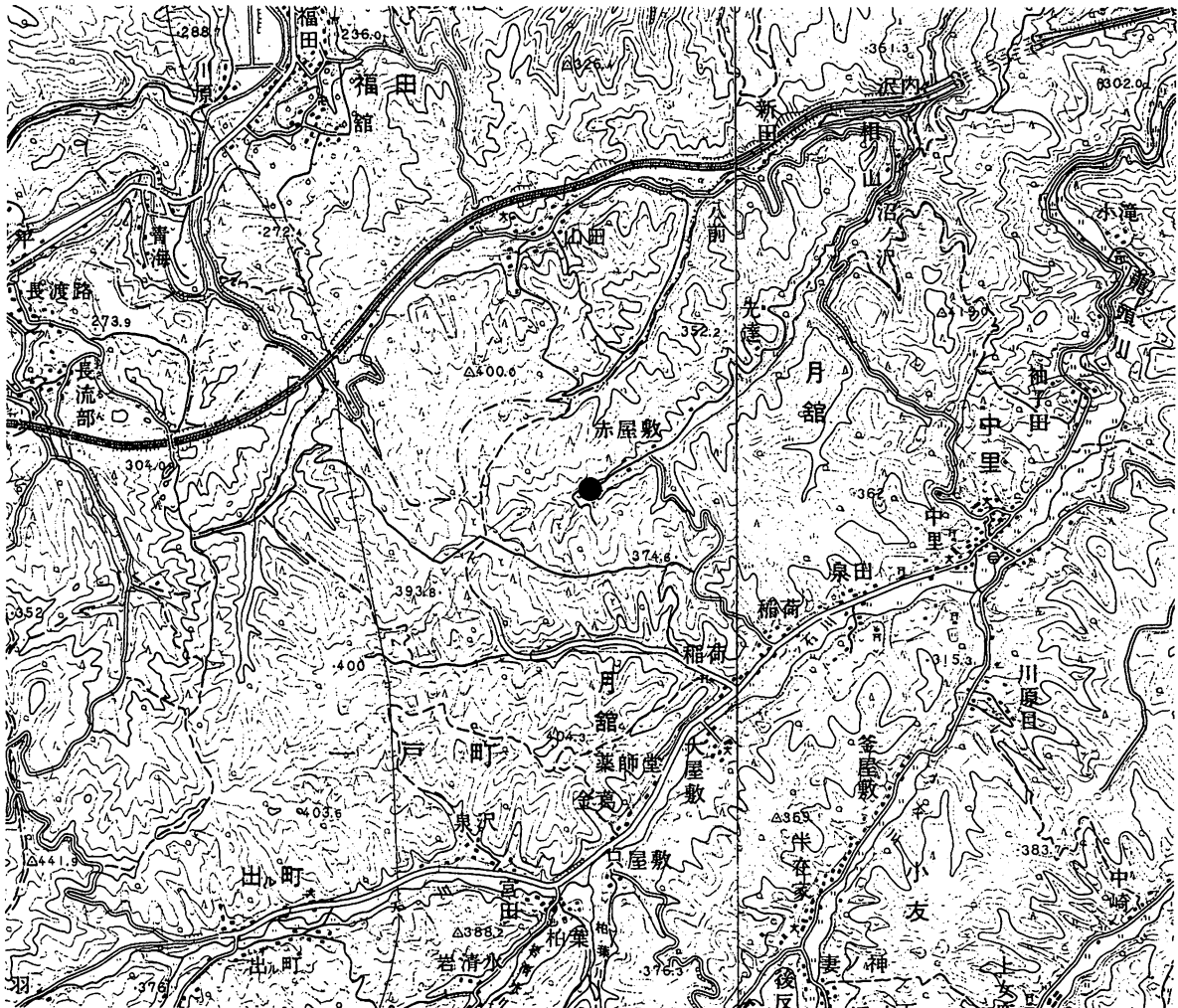
出土状况



写真図版 2 長袖 I 遺跡検出遺構・出土遺物

(47) 赤屋敷遺跡

所在地 二戸郡一戸町月館字赤屋敷地内
委託者 岩手県二戸地方振興局二戸農村整備事務所
事業名 一般農道整備事業「赤屋敷地区」
発掘調査期間 平成11年8月18日～9月6日
調査対象面積 575㎡
発掘調査面積 575㎡
遺跡番号・略号 J E28-1284・AYS-99
調査担当者 本多準一郎・千葉正彦
協力機関 一戸町教育委員会



遺跡位置

1:50,000 浄法寺・一戸

1. 調査に至る経過

赤屋敷遺跡は「一般農道整備事業 赤屋敷地区」の施工に伴って、その事業区域内に位置することが確認されたため発掘調査することとなったものである。

事業者である岩手県二戸地方振興局二戸農村整備事務所では、事業実施に先立ち岩手県教育委員会に事業区域内に埋蔵文化財が存在するか問い合わせた。その結果、事業実施にあたり事前協議必要との回答を受けた。両者は、事業の実施にかかる埋蔵文化財の取り扱いについて協議を重ね、平成8年10月31日に埋蔵文化財の把握のための試掘調査を実施した。試掘調査の結果、岩手県教育委員会は発掘調査が必要である旨を平成8年11月12日付け教文第688号により二戸農村整備事務所に通知した。その後、両者の協議により、発掘調査を財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターの受託事業とすることとした。

2. 遺跡の立地

赤屋敷遺跡は、東日本旅客鉄道東北本線一戸駅の西約8kmの山中、南側斜面の標高約290～300mに位置している。調査地のやや中央を農道がほぼ東西に走っており、調査前の状況は、農道の南側は主に畑地であり北側は杉林となっていた。また、東側の調査区は埋没谷となっている。近隣には柵ノ木遺跡が存在する。

3. 遺跡の基本層序

本遺跡の基本土層は次のとおりである。

第Ⅰ層 10YR2/1黒色土シルト 粘性 なし、しまり なし

第Ⅱ層 10YR3/1黒褐色土シルト主体に10YR4/6褐色土シルト・10YR4/3にぶい黄褐色土シルトを含む
粘性 なし、しまり あり

第Ⅲ層 10YR3/1黒褐色土シルト～10YR4/1褐色土シルト質粘土 粘性 強、しまり 強

第Ⅳ層 7.5YR5/8明褐色土シルト 粘性 有り、しまり 有り（二ノ倉火山灰か？）

4. 調査の概要

今回の調査で検出された遺構は、縄文時代の竪穴住居跡1棟、焼土遺構5基である。なお調査地の大部分を占める杉林についてはトレンチで確認調査のみを行った。

①遺 構

<1号竪穴住居跡> 調査区東側C6～E8グリッドに位置する。Ⅳ層面から掘り込まれており、4～5号焼土周辺を精査した際に、黒褐色土の不整な落ち込みとして検出された。南東に傾く緩斜面に構築されているため、斜面下方の壁が消失している。又、斜面上方は現道下に伸びているため、検出できたのは、東壁及び西壁の一部分のみであり、全体の平面形は不明である。検出部分から推測すると、径8mほどのほぼ円形を呈すると思われる。埋土は、自然堆積の様相を呈している。黒褐色土シルトを主体とし、ほぼⅡ層に相当する。埋土上～中部より、後期後葉の土器片が出土している。残存する壁については、床面からほぼ直立して立ち上がり、壁高は東壁で40～48cm、西壁で10～20cmを測る。床面は斜面下方へ向かって緩く傾斜している。壁及び床面は、ほぼⅣ層に相当しているが、斜面上方では、一部、Ⅳ層とは異なる黄褐色粘土質土が露出している。壁・床面ともに固くしまっている。炉は床面のほぼ中央付近に位置し、地床炉で50×55cmほどの円形を呈する。焼成がよく、焼土の層厚は最大12cmである。柱穴については、床面で、40個検出した。うち、床面の中央寄り検出した5個については、主柱穴だった可能性がある。これらの埋土には、掘り方と柱痕が認められ、柱穴底面も固く締まっている。一方、その他の柱穴は、壁際を巡り小径のものであるが、その配列は2条認められる。この壁柱穴の配列から見ると、少なくとも1回の建て替えが行われたことが推測される。時期については、住居の形態・出土遺物などから、縄文時代後期後葉に属すると推定される。

<1号焼土遺構> 調査区南西部C7グリッド付近Ⅱ層上面より検出した。平面形は不整な楕円形を呈する。径は60×35cmで、焼土の層厚は最大で13cmである。遺物は出土せず時期については不明である。

<2号焼土遺構> 調査区南西部C8グリッド東Ⅱ層上面より検出した。平面形はほぼ楕円形的である。径は55×60cmで、焼土の層厚は最大で11cmである。焼成もよく、しまりもあるが、遺物は出土せず時期については不明である。

<3号焼土遺構> 調査区南西部D11グリッド付近Ⅱ層上面より検出した。平面形は湾曲した楕円形を呈する。径は88×35cmで、焼土の層厚は最大で11cmである。南側部分が攪乱を受けている。遺物は出土せず時期については不明である。

<4号焼土遺構> 調査区南西部D7グリッド付近1号住居埋土下部より検出した。平面形は楕円形を呈する。径は35×50cmで、焼土の層厚は最大で5cmである。焼成・しまりともあまりよくなく、異地性のものと推定される。遺物が出土していないため時期については不明である。

<5号焼土遺構> 調査区南西部D7グリッド南西同じく1号住居跡埋土上部より検出した。埋土上部から検出したことから、1号住居跡には直接伴わないものと推定される。平面形は楕円径を呈する。径は80×50cm、焼土の層厚は最大で、11cmであるが、焼成・しまりともあまりよくなく、異地性のものと推定される。遺構の特徴として、焼土上部に土器片が一括して出土している点がある。出土した土器片から縄文時代後期後葉に属すると思われる。

②遺物

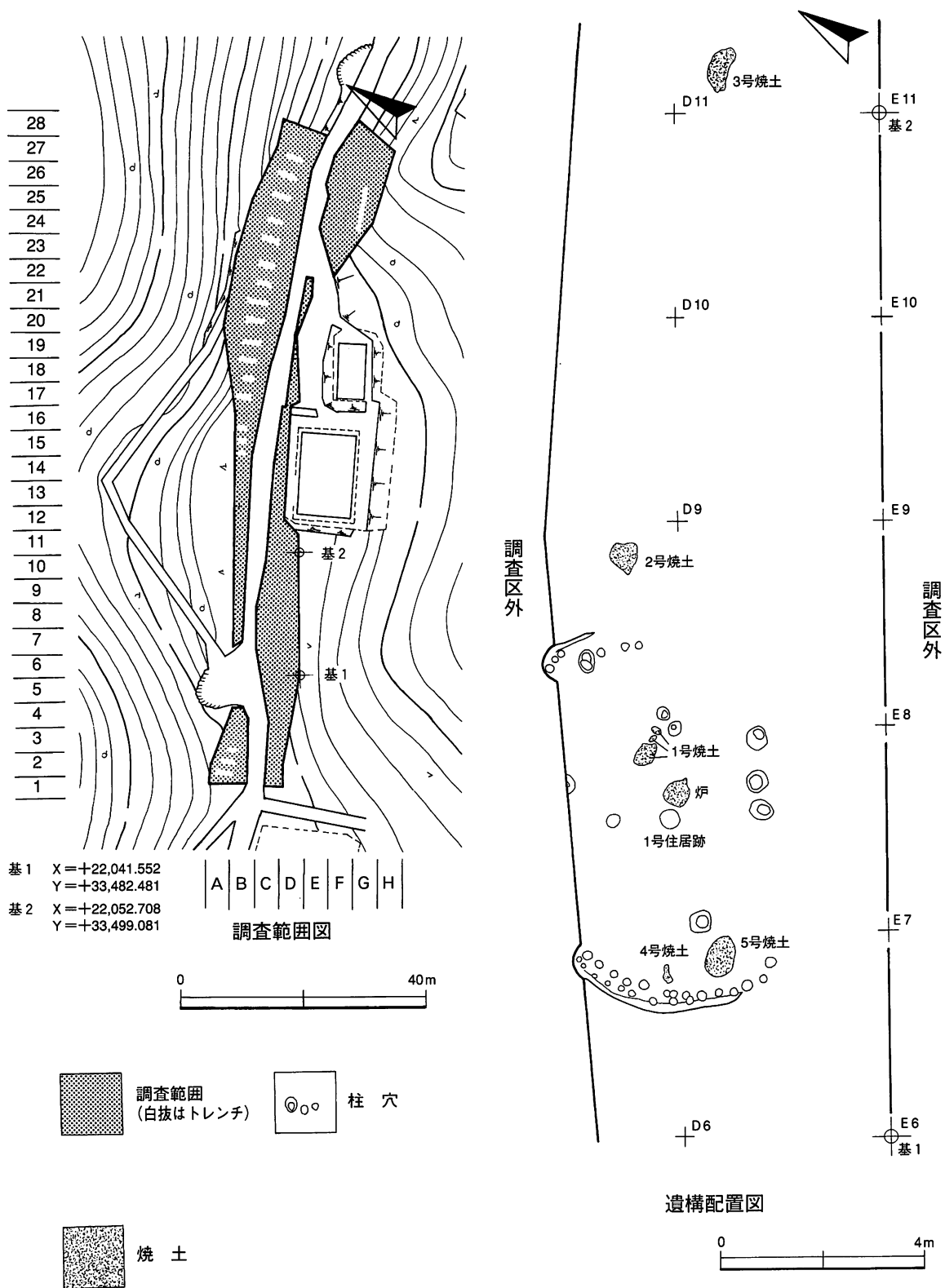
土器は接合・復元したもの4個体と土器片30数点、磨製石斧が2点出土している。ほとんどが、縄文後期後葉に属する土器であるが、一部縄文晩期に属すると思われる土器も出土している。

5. まとめ

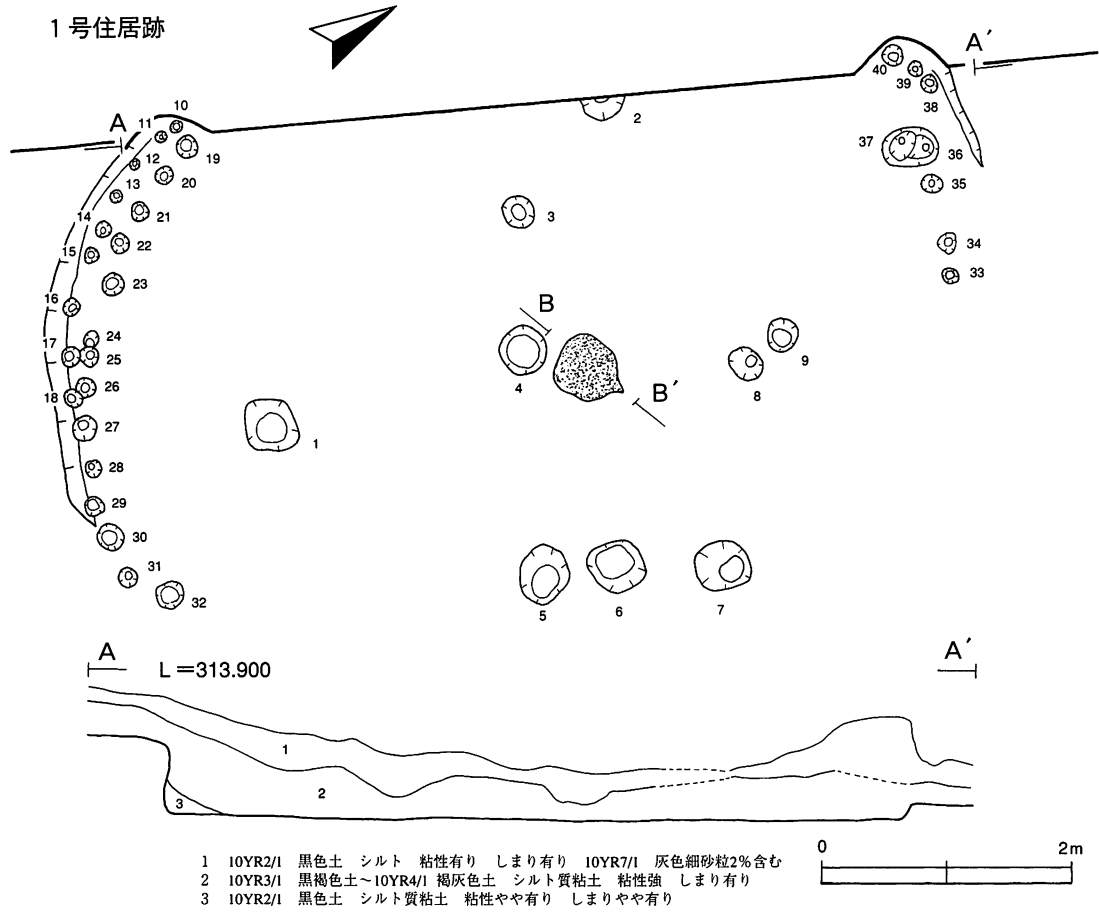
今回の調査では本遺跡が縄文時代後期の遺跡であることが確認された。住居跡1棟の検出だけであったが、今までの県内の調査報告例から見ても1棟だけ単独で存在するとは考えにくく、おそらく周辺部にも住居跡が存在する可能性があると思われる。今後、周辺地域の調査によって当遺跡の性格と広がりが明確にされるものと期待される。なお、赤屋敷遺跡に関わる報告はこれをもって全てとする。

報告書抄録

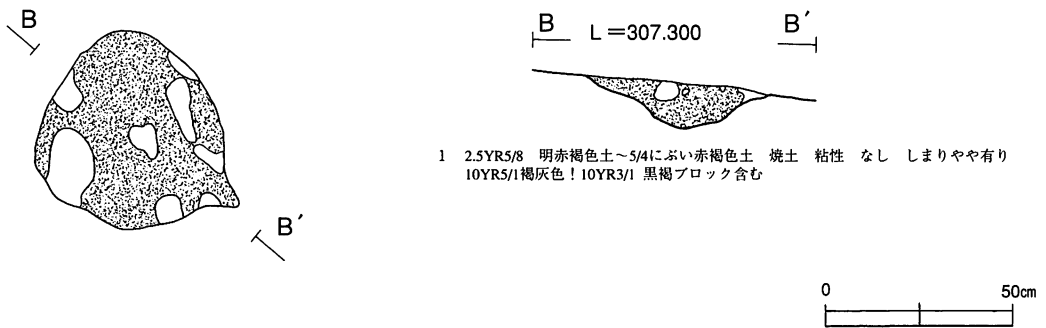
ふりがな	あかやしきいせきはつつちょうさほうこくしょ							
書名	赤屋敷遺跡発掘調査報告書							
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財報告書							
シリーズ番号	第340集							
編著者名	本多準一郎							
編集機関	財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター							
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11-185 TEL 019(638)9001							
発行年月日	西暦2000年3月24日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	遺跡番号	北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積	調査原因
あかやしき 赤屋敷遺跡	にのへぐんいちのへちょう 二戸郡一戸町 つきだてあざあかやしき 月館字赤屋敷	03524	JE28- 1284	40度 11分 52秒	141度 14分 18秒	1999 8.17~9.5	575m ²	「一般農道整備 事業」に伴う 緊急発掘
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
赤屋敷遺跡	散布地	縄文時代 後期~	竪穴住居跡1棟 焼土遺構 5基		縄文時代の土器片			



第1図 赤屋敷遺跡調査範囲図と遺構配置図



1号住居炉跡



No.	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7	P8
径 cm	48×44	32×—	25×24	38×38	40×48	46×42	46×40	29×24
深さ cm	63	16	29	18	38	17	31	44

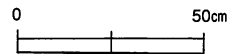
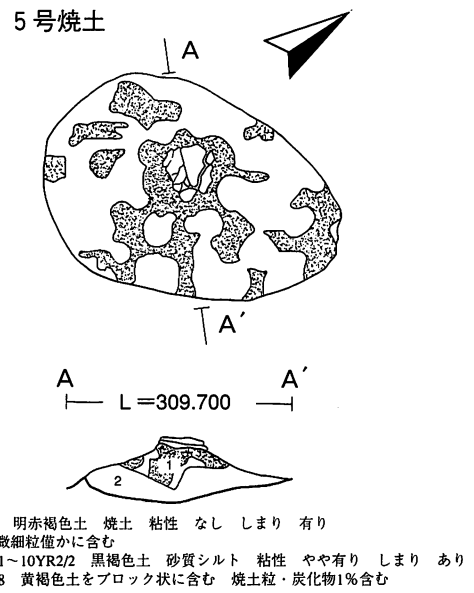
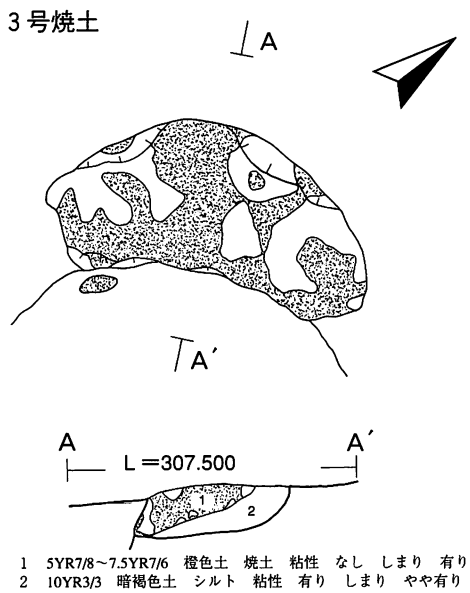
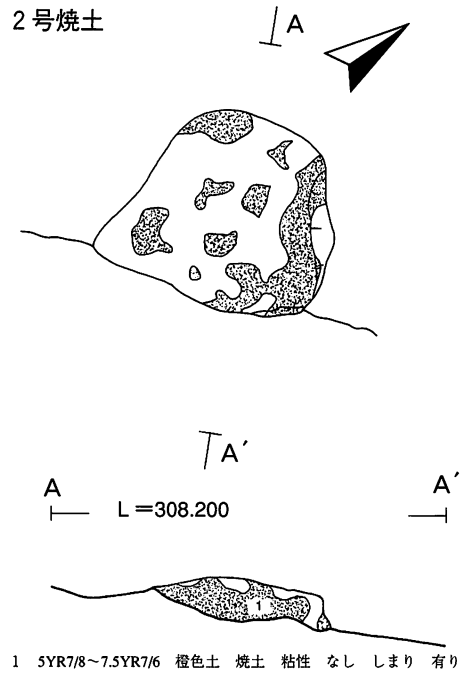
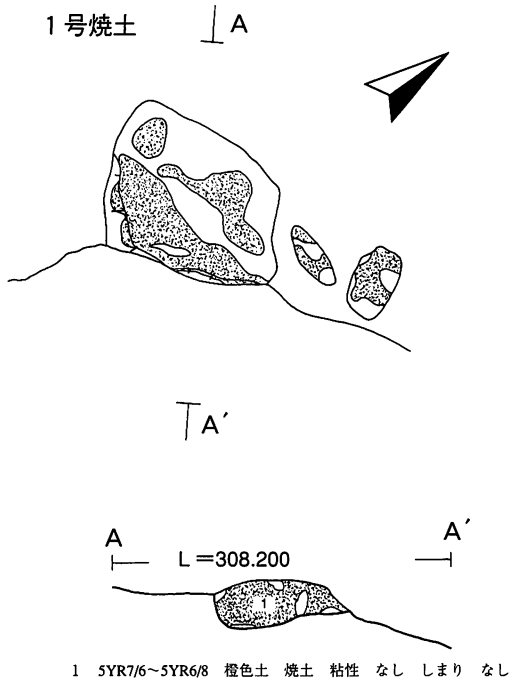
No.	P25	P26	P27	P28	P29	P30	P31	P32
径 cm	16×16	16×14	20×20	14×12	16×14	32×22	15×16	22×24
深さ cm	7	20	30	18	20	6	11	7

No.	P9	P10	P11	P12	P13	P14	P15	P16
径 cm	26×26	10×9	10×10	10×9	9×12	12×12	11×12	14×14
深さ cm	64	5	12	19	8	13	10	7

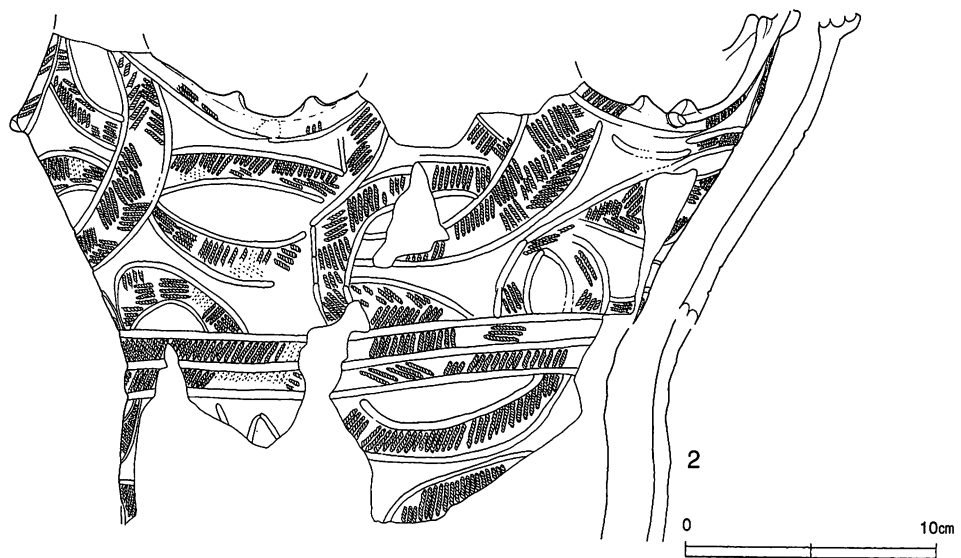
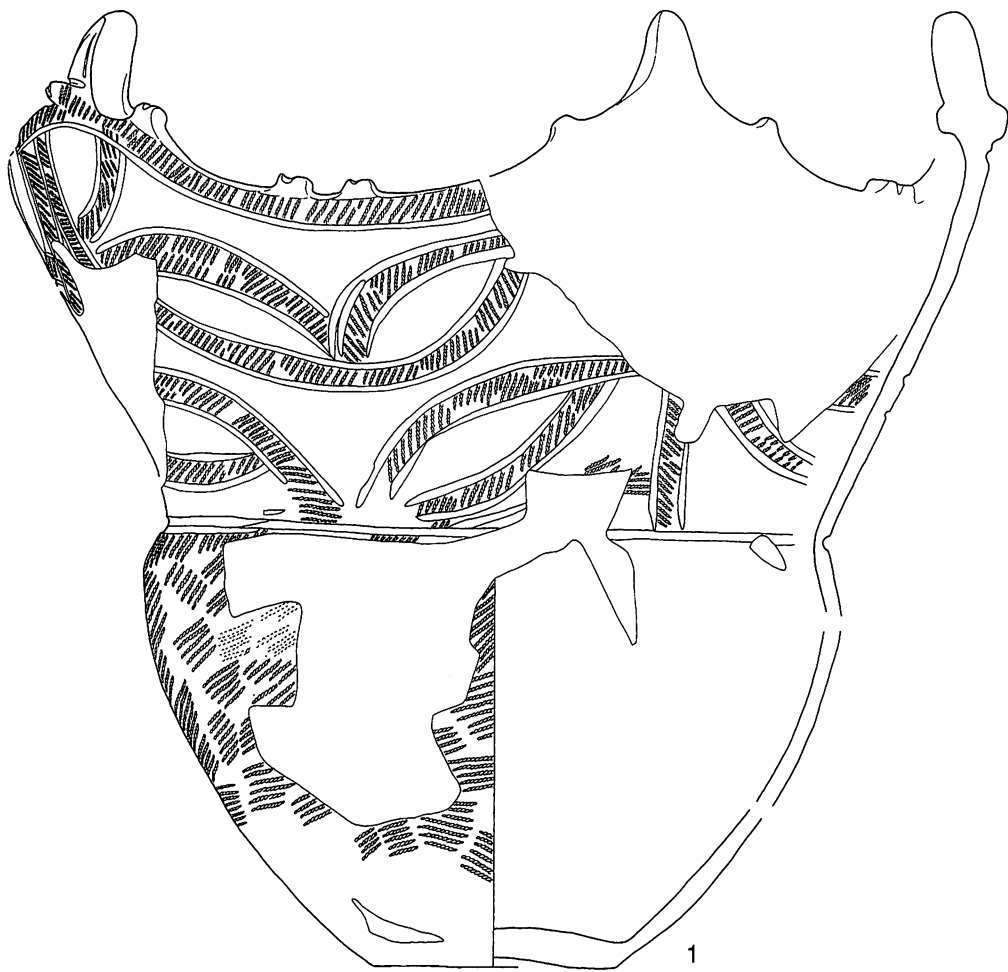
No.	P33	P34	P35	P36	P37	P38	P39	P40
径 cm	12×12	12×16	16×14	14×18	20×24	13×14	12×13	16×18
深さ cm	10	14	20	18	10	13	11	15

No.	P17	P18	P19	P20	P21	P22	P23	P24
径 cm	16×15	16×14	18×20	15×14	14×14	15×16	20×18	13×11
深さ cm	20	18	15	17	22	23	10	13

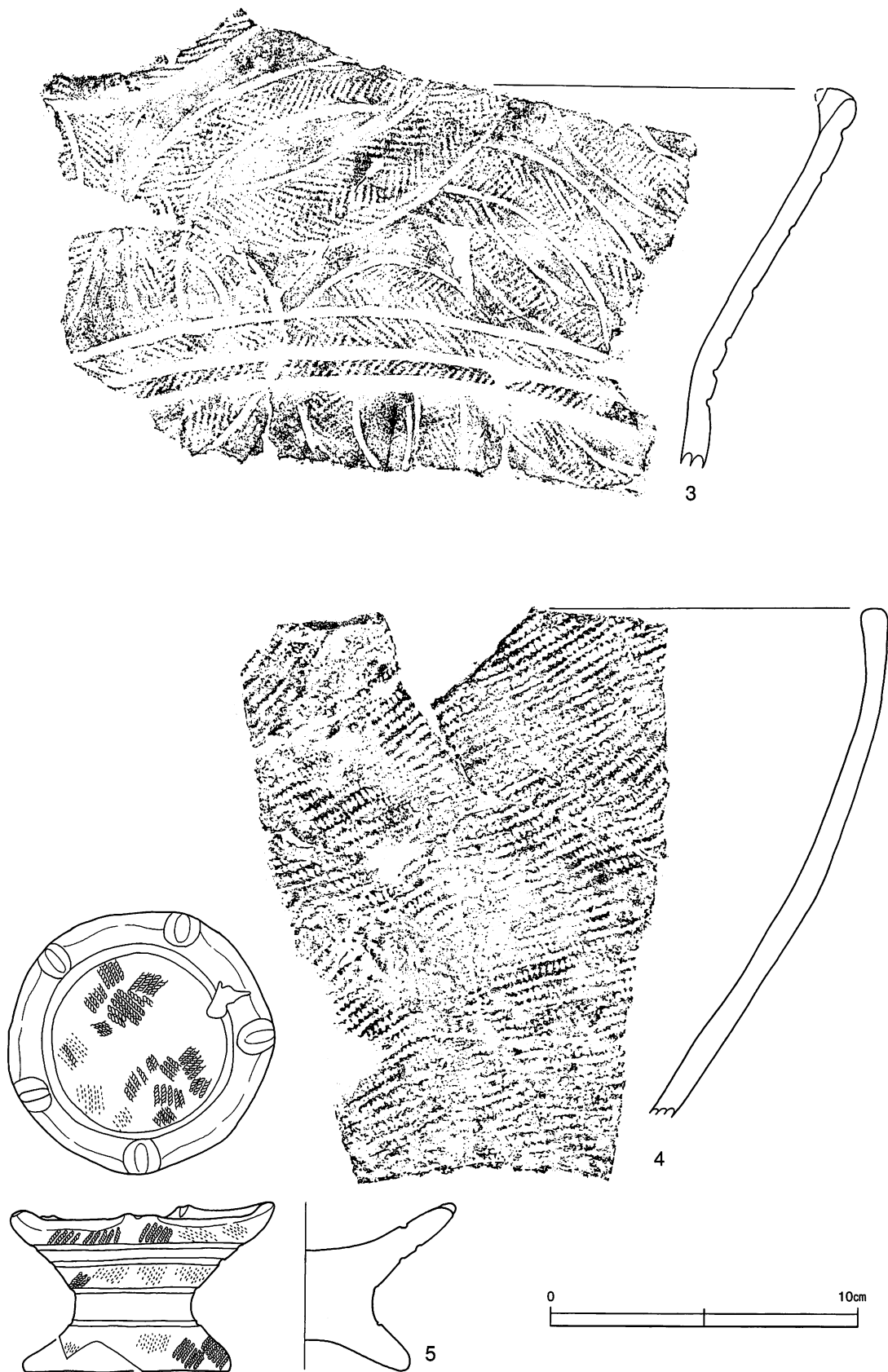
第2図 赤屋敷遺跡1号住居跡



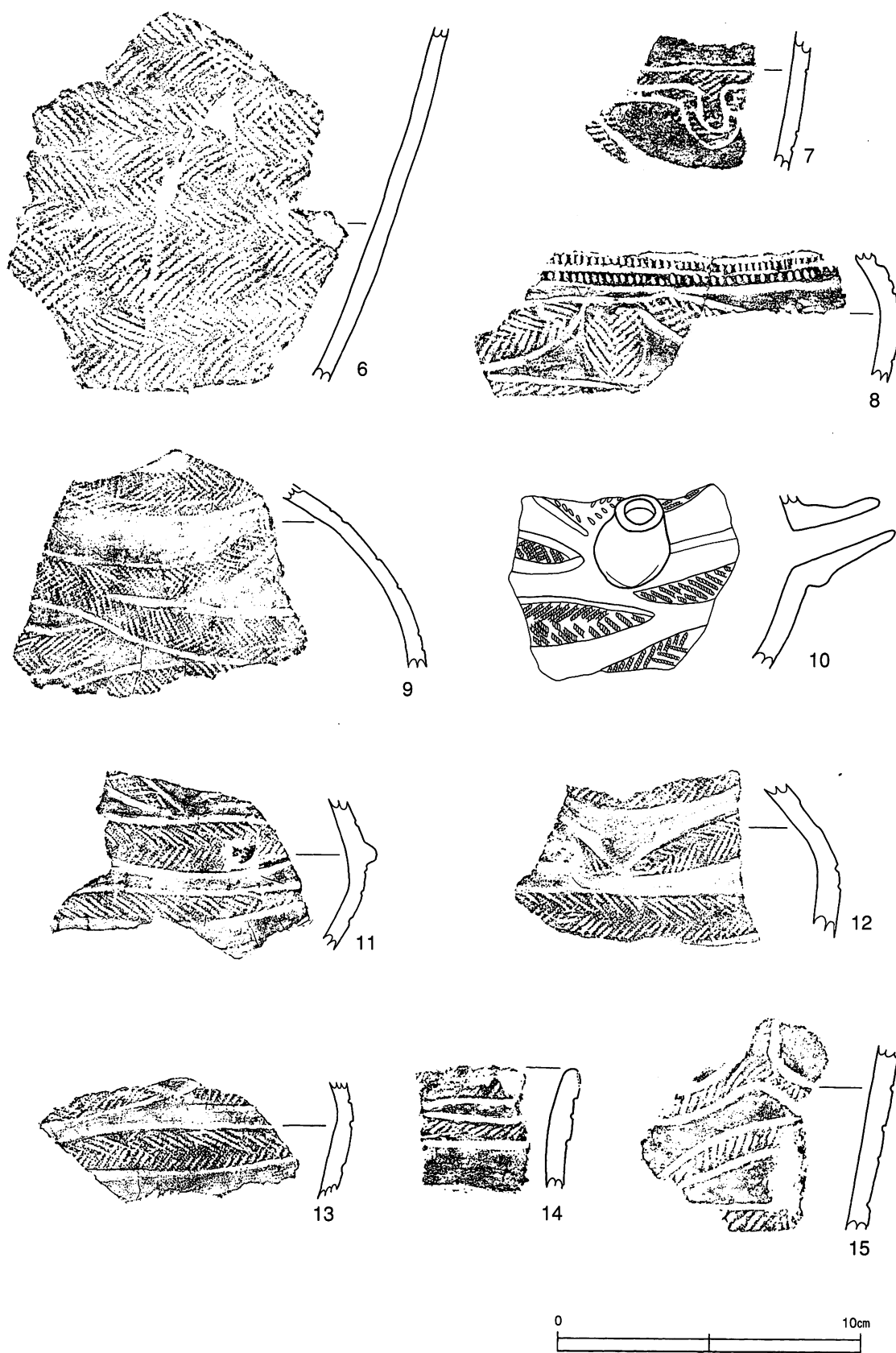
第3図 赤屋敷遺跡1号~5号焼土遺構



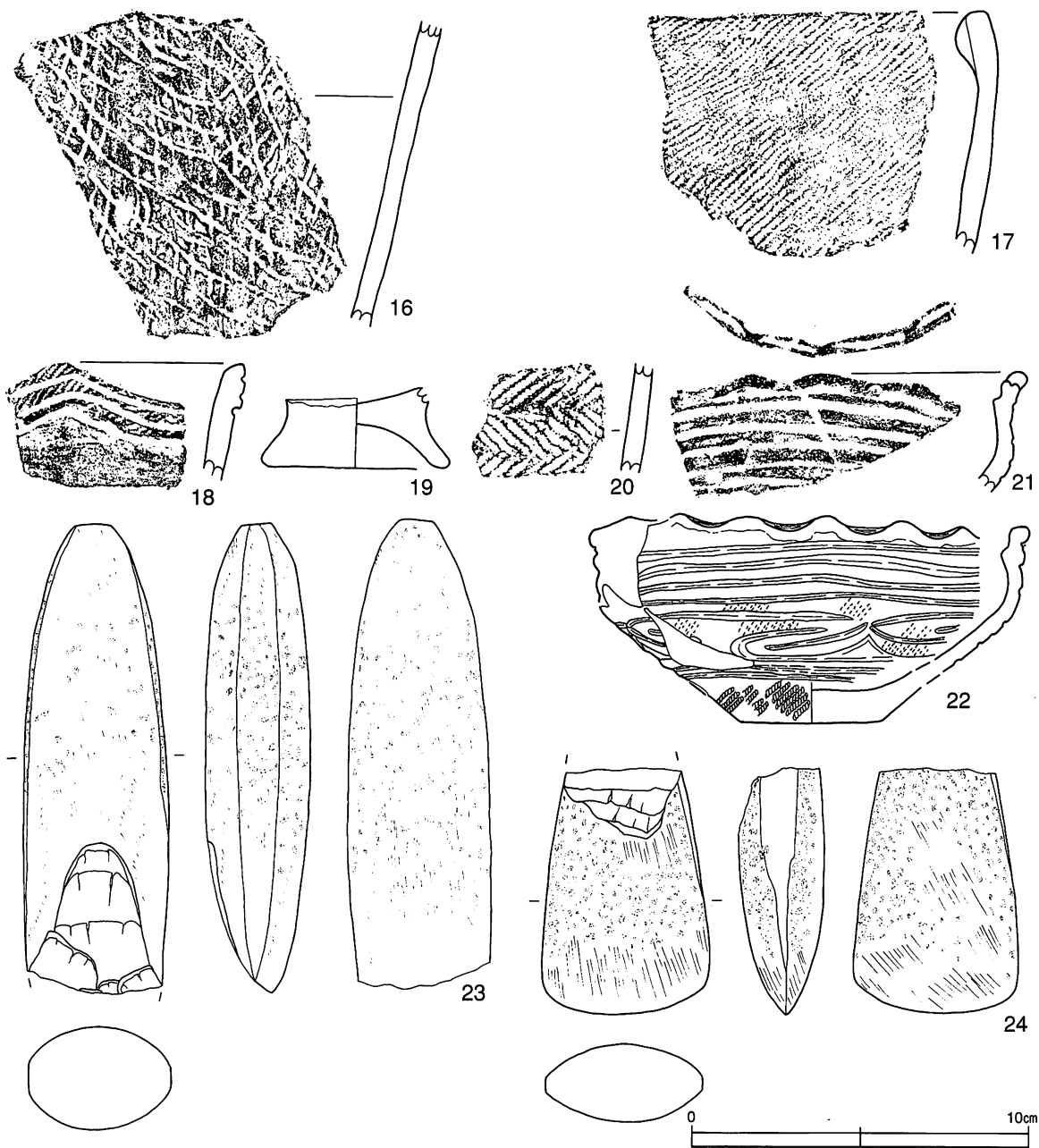
第4図 赤屋敷遺跡出土遺物



第5図 赤屋敷遺跡出土遺物



第6図 赤屋敷遺跡出土遺物



No.	出土位置	器種	部位	原体	特徴	時期
1	1号住埋2東	深鉢	口縁~底部	LR	口縁部外傾 4個1対の刻目を持つ貼瘤と角状突起 2個1対の刻み目を持つ貼瘤 肥厚しやや内削ぎ気味 入組状帯縄文	縄文後期後葉
2	1号住埋2東	深鉢	口縁~胴部	LR・RL	口縁部外傾 太波状口縁 (5弁) 口唇肥厚 3個1対の尖鋭突起 入組状帯縄文 非結束羽状縄文	縄文後期後葉
3	1号住埋2東	深鉢	口縁~胴部	LR・RL	2と同一個体	縄文後期後葉
4	1号住埋2西	台付皿?	ほぼ完形	LR	5単位の刻み目を持つ貼瘤状突起 沈線区画による磨消(充填) 縄文 円形に沈線で区画し縄文を施文	縄文後期中葉
5	1号住埋2西	深鉢	口縁~胴部	LR	地文のみ 胎土:雲母・石英 内側:ナデ	縄文後期
6	1号住埋2西	深鉢	胴部	O段多条	文様:非結束羽状縄文 胎土:雲母・砂粒含む 内面ナデ	縄文後期
7	D7 II層	深鉢	口縁部	LR	文様:磨消縄文 沈線文 胎土:雲母・石英を含む	縄文後期前葉
8	D7 II層	深鉢	胴部	LR・RL	文様:曲線状帯縄文 非結束羽状縄文 刻目	縄文後期中葉
9	D7 II層	注口土器	胴部	LR・RL	文様:入組状帯縄文 非結束羽状縄文 胎土:雲母・砂粒含む	縄文後期
10	D7 II層	注口土器	胴部	O段多条	文様:帯状文 非結束羽状縄文による充填 胎土:雲母・石英を含む	縄文後期後葉
11	D7 II層上	注口土器	胴部	O段多条	文様:帯状文 非結束羽状縄文による充填 胎土:雲母・石英を含む 10と同一個体	縄文後期後葉
12	D7 II層	注口土器	胴部	O段多条	文様:帯状文 非結束羽状縄文による充填 貼瘤 胎土:雲母・石英を含む 10と同一個体	縄文後期後葉
13	D7 II層	注口土器	胴部	O段多条	文様:帯状文 非結束羽状縄文による充填 貼瘤 胎土:雲母・石英を含む 10と同一個体	縄文後期後葉
14	D7 II層	深鉢	口縁~胴部	LR	文様:隆帯 沈線文 胎土:雲母・石英を含む	縄文後期
15	D7 II層	深鉢	胴部	LR	文様:曲線状帯縄文 2本の沈線で区画し縄文を施文 胎土:雲母・砂粒を含む	縄文後期
16	D7 II層	深鉢	口縁部	LR	口唇:肥厚・ナデ 文様:地文のみ 胎土:雲母・砂粒含む	縄文後期
17	D7 II層	深鉢	胴部	R単軸絡糸体	文様:編目象眼系文 胎土:雲母・砂粒含む	縄文後期
18	裏採	深鉢	口縁部	LR	文様:沈線文 胎土:雲母・石英を含む	縄文後期
19	D7 II層	鉢	台	O段多条	文様:非結束羽状縄文 胎土:雲母・砂粒を含む	縄文後期
20	D7 II層	深鉢	胴部		大付鉢の台 胎土:雲母・石英を含む	縄文後期
21	D7 II層南	浅鉢	口縁部		22と同一個体	縄文晩期中~後葉
22	D7 II層南	浅鉢	口縁~底部	LR	頂部に沈線を持つ山形突起 内側沈線 盤形文? 赤色塗彩	縄文晩期中~後葉

第7図 赤屋敷遺跡出土遺物・土器観察表



調査前風景



調査終了風景

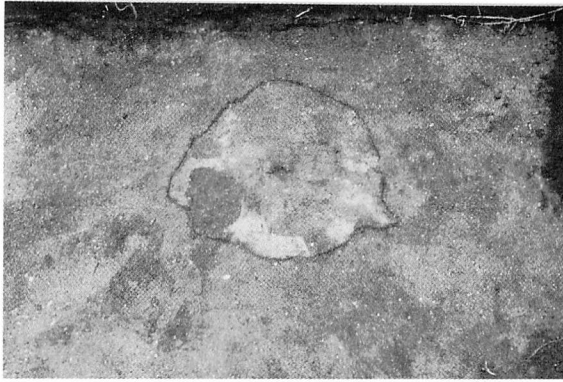


1号住居跡全景



1号住居跡埋土断面

赤屋敷遺跡写真図版1 検出遺構



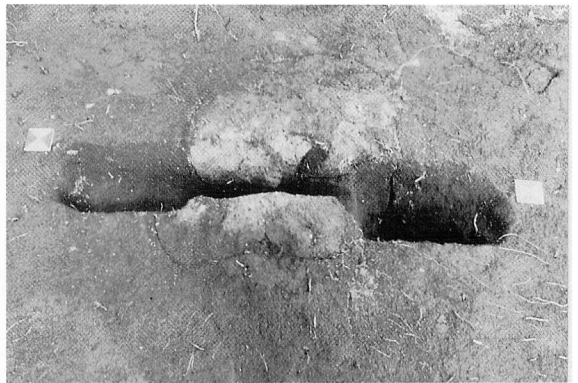
1号住居跡炉 平面



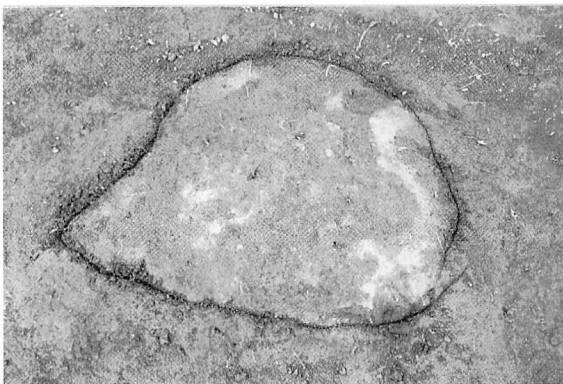
断面



1号烧土 平面



断面



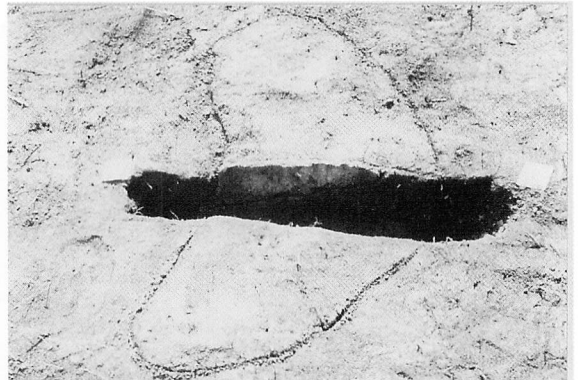
2号烧土 平面



断面



3号烧土 平面



断面

赤屋敷遺跡写真図版2 検出遺構



4号烧土 平面



断面



5号烧土 平面



断面

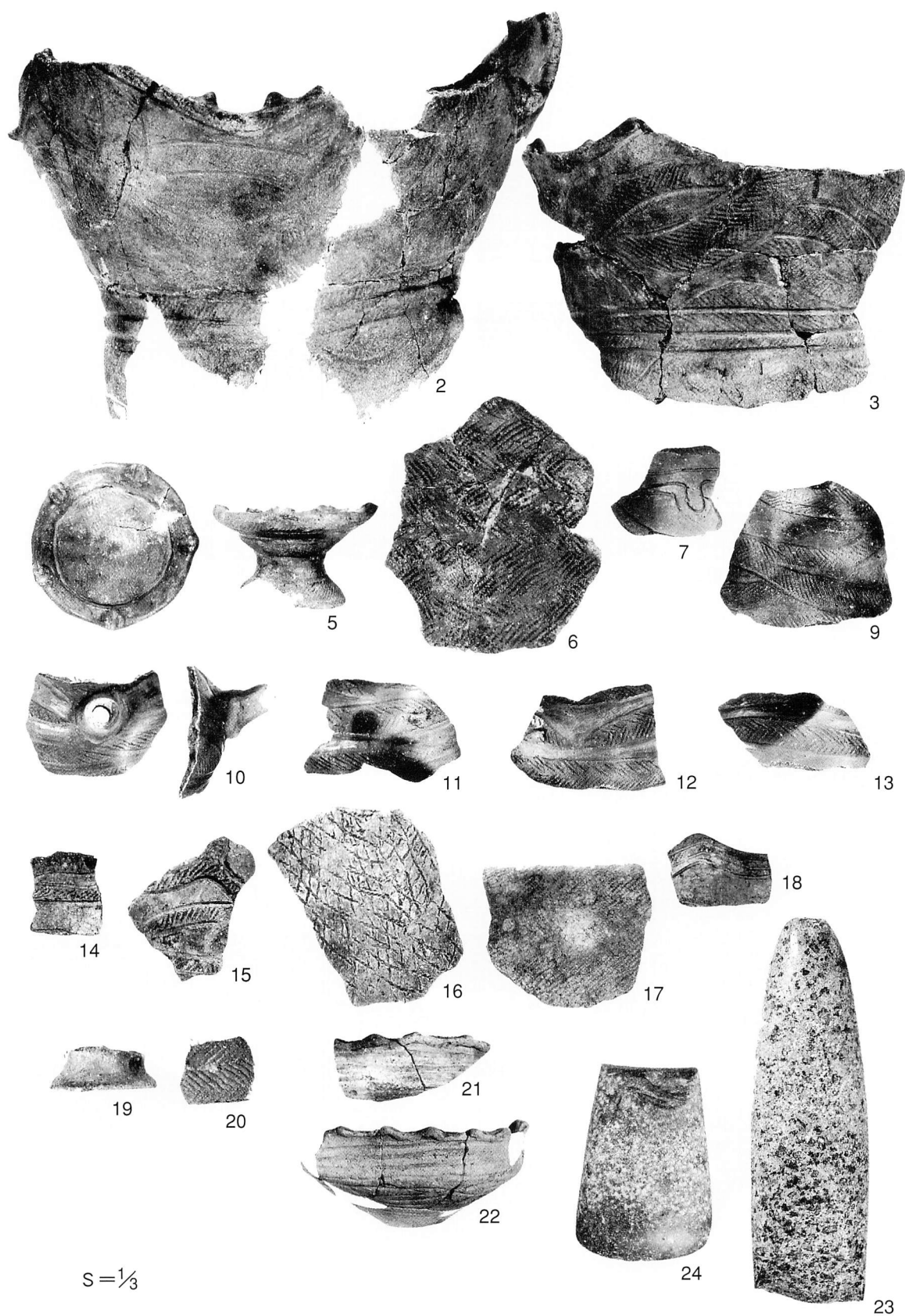


s=1/3

1

4

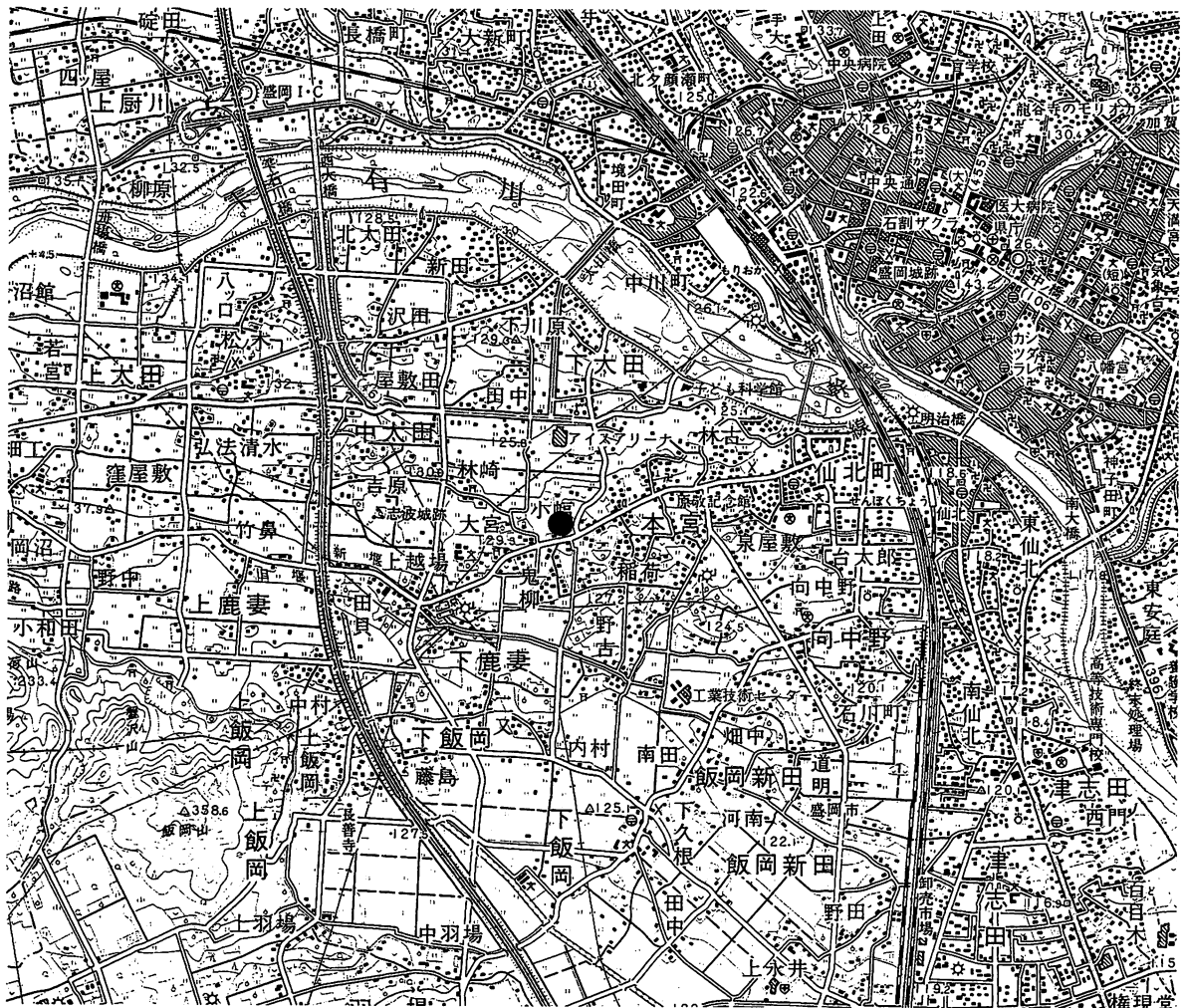
赤屋敷遺跡写真図版3 検出遺構・出土遺物



赤屋敷遺跡写真図版 4 出土遺物

(48) 小^こ幅^{はば}遺跡第14次調査

所在地 盛岡市本宮字小^こ幅26-1ほか
委託者 盛岡市
事業名 盛南開発関連（区画整備）
発掘調査期間 平成11年 5月1日～ 5月15日
調査対象面積 320㎡
発掘調査面積 320㎡
遺跡番号・略号 LE16-2009・OKH-99-14
調査担当者 晴山雅光・松尾芳幸
協力機関 盛岡市教育委員会



遺跡位置

1 : 50,000 盛岡

1. 調査に至る経過

盛岡南新都心開発計画は、盛岡市が来るべき21世紀に向けて、経済・文化などに対する各機能を兼ね備えた北東北の拠点都市を目指して、現在の既成市街地の他に市域の南部地域を新市街地として開発し、両者が有機的に結びついた軸状都心を形成するために策定された土地区画整備事業である。

この事業は、平成3年9月に、岩手県、盛岡市、都南村（現盛岡市）の三者が、地域振興整備公団に対して事業要求を行い、これを受けて公団は実施計画を作成した。平成3年12月に建設大臣と国土庁長官から事業実施許可が下り、平成3年度から平成17年度までの15年間に事業予定期間とし、面積313haを対象とした、土地区画整備事業が実施されることとなった。

この間、事業対象地域に係わる埋蔵文化財取扱いについても協議が重ねられた。その結果、盛岡市教育委員会が、試掘調査を行い、本調査を必要とする範囲を確定し、本調査は、財団法人岩手県文化振興事業団の受託事業とすることとなった。

ここに、盛岡市分320㎡の調査が、財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターによって、平成11年5月1日から、5月17日まで行われるに至った。

調査の結果、遺構・遺物とも少なかったことから、同年冬期間に整理をし、当埋蔵文化財センターの平成11年度調査略報に本報告として掲載した。

2. 遺跡の立地

小幡遺跡は、JR東北本線仙北町駅より西へ約2.3kmに位置し、雫石川によって形成された河岸段丘上に立地し北緯39°40′58″、東経141°7′29″周辺にあたる。調査区の現況は、住宅跡の更地である。

3. 遺跡の基本層序

本遺跡の基本層序は次の通りである。

I層	10YR3/3	暗褐色	しまり疎	粘り弱	表土	ガラスなどを含む造成時の盛土。
II層	10YR2/2	黒褐色	しまり中	粘りやや弱	シルト	小石を多く含む。
III層	10YR5/8	黄褐色	しまり密	粘り弱	サンド	砂の中に小石を多く含む。地山

4. 調査の概要

調査区内は、現代の住宅跡地で、大部分が構築物の基礎等により地山部分まで攪乱を受けていた。その中で検出された遺構は、住居状遺構1棟、溝跡1条、柱穴群63である。

出土した遺物は、土師器片が1片、剥片石器3点のほか、磁器片が少々である。

< 堅穴状遺構 > 検出された堅穴状遺構は1棟で、13次の調査区にも広がり、同一遺構として処理している。

RE042は、貼床をした跡が確認され、長方形に掘り込まれたもので、規模は、開口径410cm×250cm、底径370cm×210cm、深さ30cmである。

< 溝状遺構 > 13次の調査区を鍵状にのびる1条の溝状遺構は、調査区外までのびていることが確認された。遺構の主体は13次調査区にあり、同一遺構としている。

検出面からの掘り込みは浅く、断面形も不明瞭な部分が多い遺構である。

< 柱穴群 > 平面形が円形で、筒状に掘り込まれた比較的小さな土坑を柱穴群とした。遺構数は63で、柱穴として配置が確認できるものもわずかにみられる。

< 出土遺物 > 出土した遺物は、磁器片が3個のほか、土師器片が1片、不定形の剥片石器が3点出土している。個々の遺物については以下の通り観察表にまとめた。

<土 器>

番号	出土地点	層位	種類	器種	部位	外面	内面	口径	器高	底径	備考
1	3 Y Y	Ⅲ上	土師器	坏	口縁	ロクロ	ロクロ	—	—	—	口唇部外反

<石 器>

番号	出土地点	層位	器種	材質	長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重 (g)	備考
2	3 Y Y	Ⅲ上	不定形	頁 岩	5. 8	4. 2	1. 1	22. 0	剥 片
3	3 Y Y	Ⅲ上	不定形	頁 岩	5. 7	2. 9	1. 1	14. 9	剥 片
4	3 Y Y	Ⅲ上	不定形	頁 岩	3. 4	2. 2	0. 7	4. 2	剥 片

3. まとめ

調査区は、現代の住宅や建物のあった所で、黄褐色砂礫層（地山）の下までガラスやコンクリートなどが埋まっており、地層は大きく改変されていた。

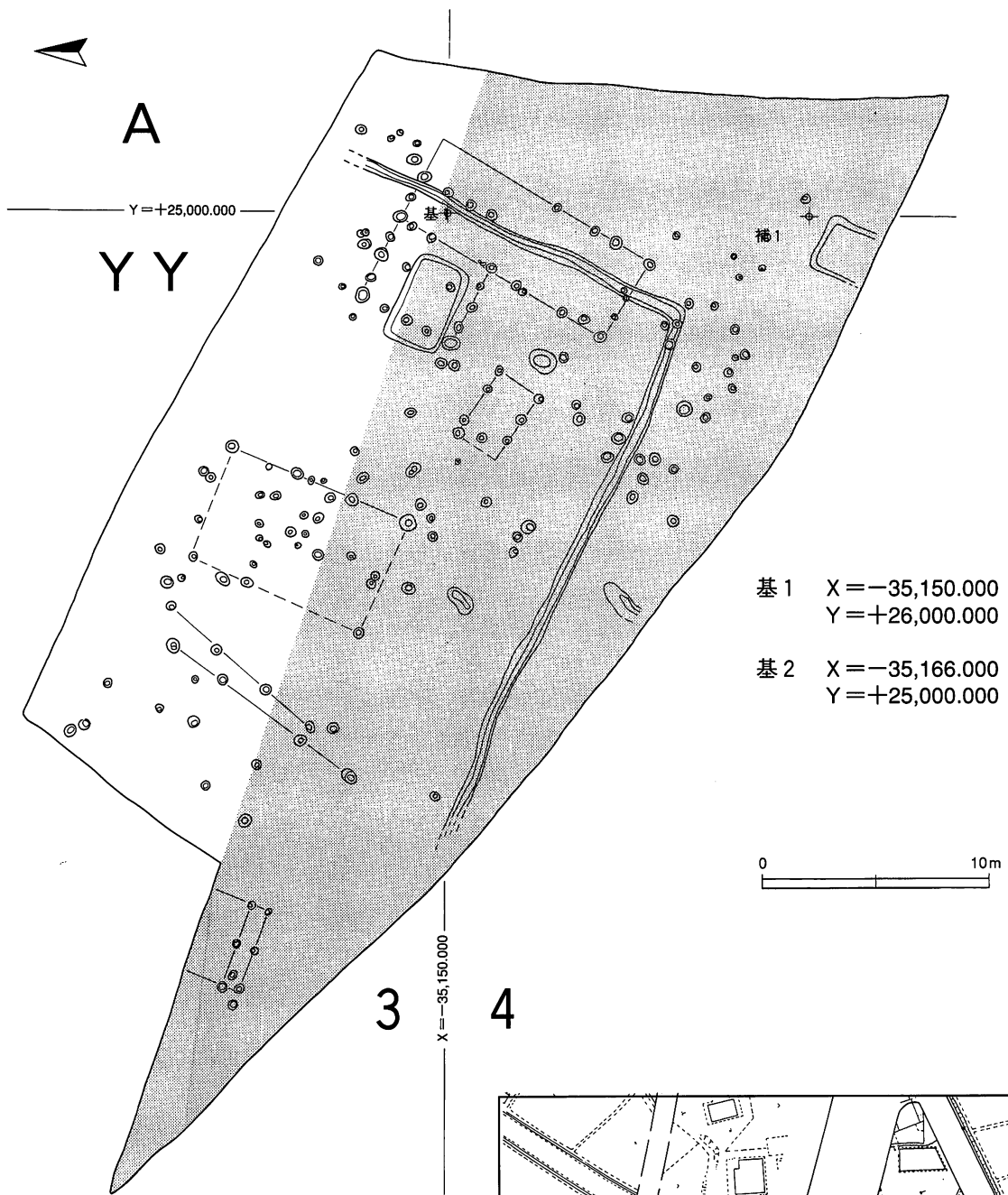
また、住宅以前の建物は、養豚場であり、それ以前は墓地であったことが近隣住人からの聞き取りにより判明した。

検出された遺構は、時期不明なものが多い。竪穴状遺構、貼床の下より検出された柱穴群の埋土からはタイル片が出土しており、近代以降の遺構と思われる。その他の遺構についても、土師器片が周辺から出土しているものの、掘り方や埋土から古代・中世の遺構はないものとする。

なお、小幡遺跡14次（盛岡市分）に関わる報告は、これをもって全てとする。

報 告 書 抄 録

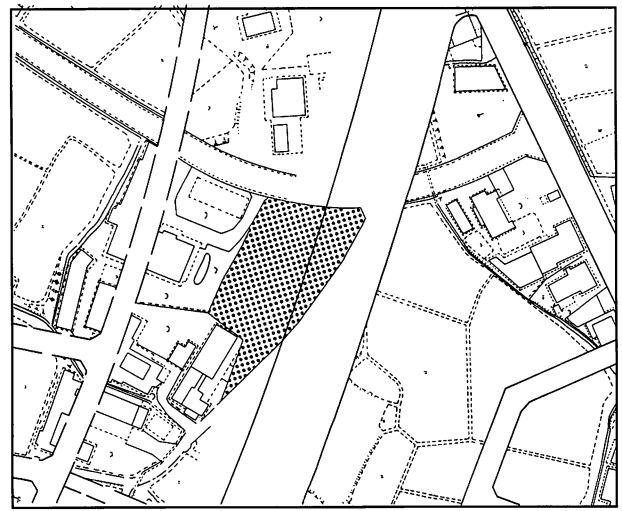
ふりがな	こはばいせきだいじゅうよじはくつちょうさほうこくしょ							
書 名	小幡遺跡第14次調査発掘調査報告書							
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財報告書							
シリーズ番号	第340集							
編 著 者 名	晴山 雅光							
編 集 機 関	財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター							
所 在 地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡 11-185 TEL 019(638)9001							
発行年月日	西暦2000年 3月24日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コ ー ド 市町村 遺跡番号		北 緯 〃 〃	東 経 〃 〃	調査期間	調査面積	調査原因
こはばいせき 小幡遺跡	いわてけんもりおかし 岩手県盛岡市 もとみやまごこはば 本宮字小幡 26-1ほか	03201	LE16- 2099	39度 40分 58秒	141度 7分 29秒	19990501 ～ 19990515	320㎡	「盛南開発関連 事業」に伴う 緊急発掘調査
所収遺跡	種 別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
小幡遺跡	集落跡	縄文時代 平安時代 近世～現代	竪穴状遺構 柱穴群 溝状遺構		剥片石器 土師器片			



基 1 X = -35,150.000
Y = +26,000.000

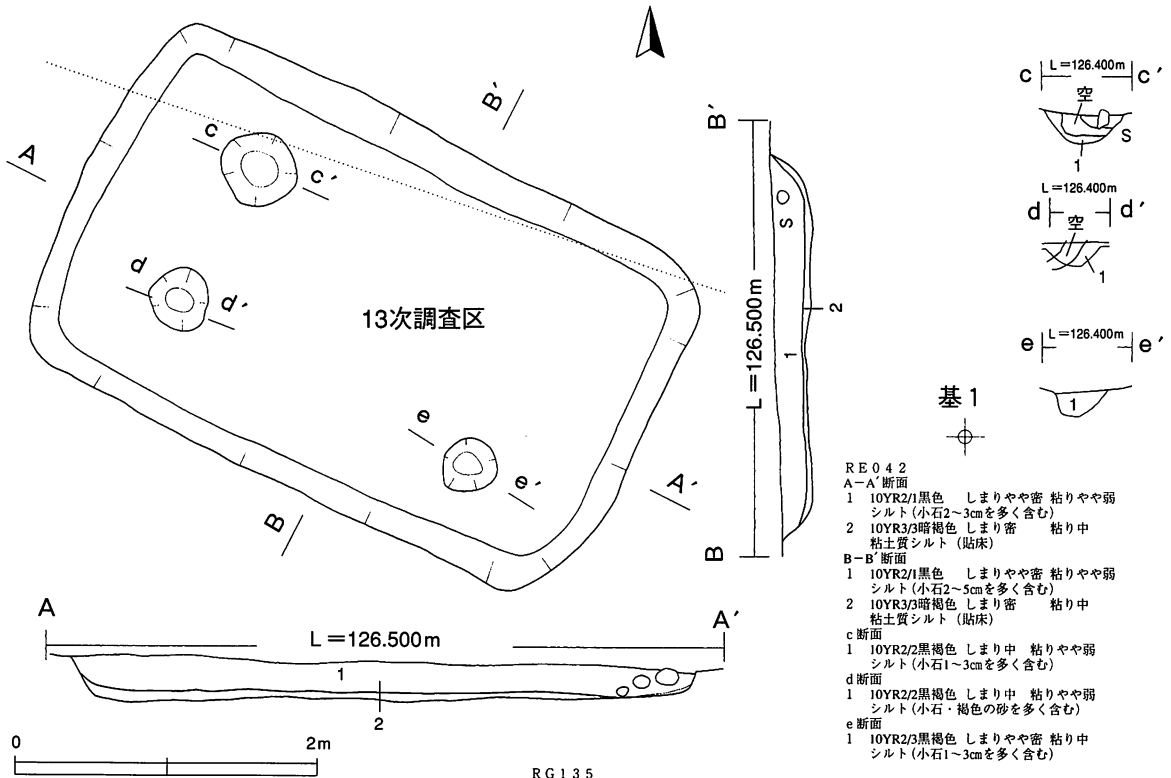
基 2 X = -35,166.000
Y = +25,000.000

地形図・都市計画図
(1 : 3,000)

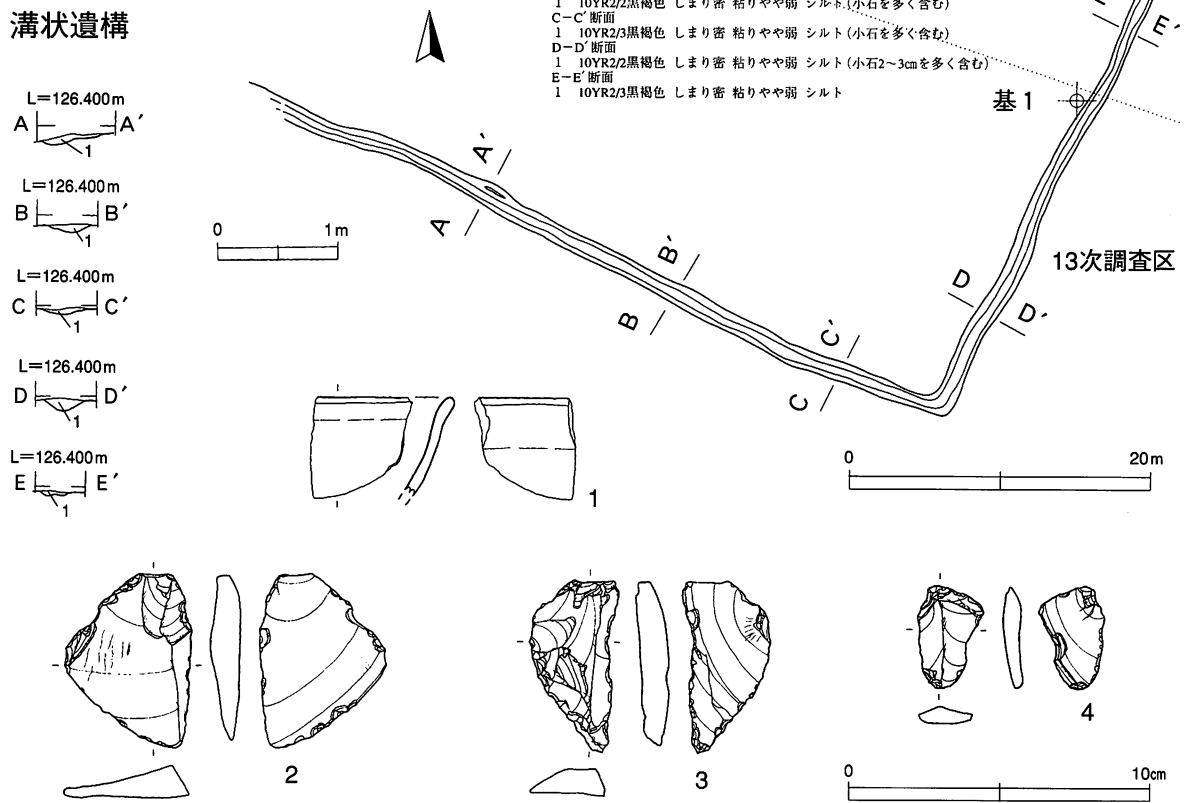


第 1 図 小幅遺跡第14次調査遺構配置図

豎穴状遺構



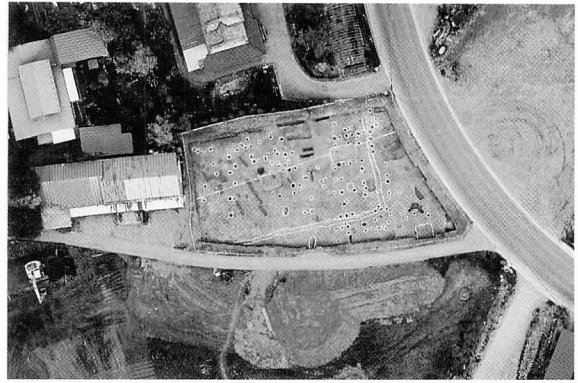
溝状遺構



第2図 小幅遺跡第14次調査豎穴状遺構・溝状遺構・出土遺物



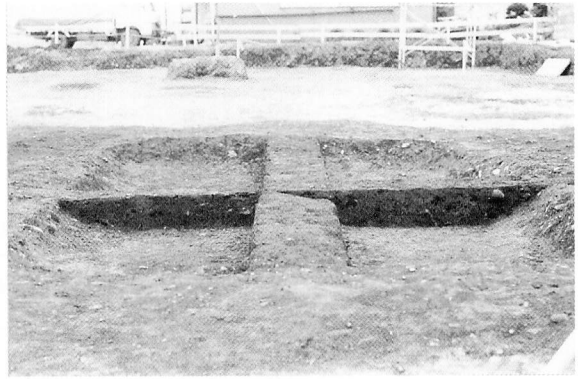
遺跡遠景（南から）



調査区全景



RE042 平面



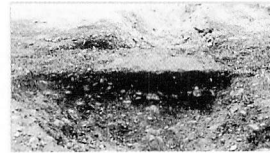
RE042 断面



RG135（東から）



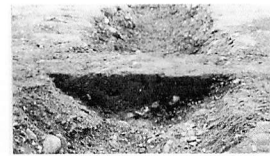
RG135（南から）



B-B'



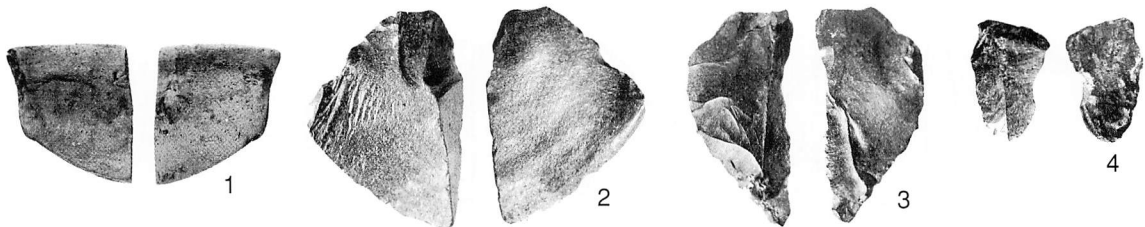
C-C'



D-D'



E-E'



S=1/2

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター職員

所 長	佐 藤 基		
副 所 長	伊 藤 直 司		
[管理課]			
課 長	川 浪 清 徳	嘱 託	藤 島 恵 子
主 査	立 花 多加志	〃	新 田 トヨ
主 事	日 影 睦 夫	〃	佐々木 光 重
[調査第一課]		[調査第二課]	
課 長	小 田 野 哲 憲	課 長	高 橋 與 右衛門
課 長 補 佐	佐 々 木 清 文	課 長 補 佐	中 川 重 紀
主任文化財		主任文化財	
専門調査員	酒 井 宗 孝	専門調査員	高 橋 義 介
〃	小 山 内 透	文化財	
文化財		専門調査員	古 館 貞 身
専門調査員	中 田 迪	〃	阿 部 眞 澄
〃	吉 田 充	〃	松 尾 芳 幸
〃	鎌 田 勉	〃	小 原 眞 一
〃	小笠原 健一郎	〃	工 藤 徹
〃	鳥 居 達 人	〃	前 田 稔
〃	濱 田 宏	〃	金 子 佐知子
〃	佐々木 進 悦	〃	岩 渕 計
〃	安 藤 由紀夫	〃	早 坂 悟
〃	木戸口 俊 子	〃	佐々木 務
〃	小野寺 正 之	〃	晴 山 雅 光
〃	阿 部 勝 則	〃	星 雅 之
〃	千 葉 正 彦	〃	佐々木 琢
〃	羽 柴 直 人	〃	杉 沢 昭太郎
〃	高 木 晃	〃	溜 浩二郎
〃	佐 藤 淳 一	〃	北 村 忠 昭
〃	菅 原 靖 男	〃	金 子 昭 彦
〃	半 澤 武 彦	期限付	
〃	朝 倉 雄 大	専門 職員	鈴 木 聡
〃	菊 池 貴 広	〃	平 澤 里 香
〃	村 上 拓	〃	布 谷 義 彦
〃	本 多 準一郎	〃	山 口 俊 規
〃	中 村 直 美	〃	熊 谷 佳 恵
〃	丸 山 浩 治	〃	吉 田 里 和
期限付		〃	北 田 勲
専門 職員	佐 藤 綾 子	〃	吉 川 徹
〃	平 めぐみ		
〃	藤 原 賢 徳		
〃	江 藤 敦		
〃	小 林 弘 卓		
〃	小 原 広 幸		

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第340集

岩手県埋蔵文化財発掘調査略報

(平成11年度分)

印刷 平成12年 3 月19日

発行 平成12年 3 月24日

発行 (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地

TEL (019) 638-9001

印刷 三陽印刷株式会社

〒020-0811 盛岡市川目町23-1 盛岡中央工業団地

TEL 019 (651) 1321

FAX 019 (651) 1348